第三種郵便物認可
毎月一回五日發行

女學世界

第五巻第五號



口繪



女學世界 第五巻第五號 目次

滋養強壯と次亞燐

次亞燐は世界無比の滋養新藥なり常に服用せば血を增し肉を肥し食物の消化を補け血色を能くし身體を强健ならしむ本劑は肺病、肋膜、胃病、心臟、神經、喘息、たんせき脚氣病其他貧血衰弱症に特効あり尙ほ產前產後の肥立は勿論病後等の補血に缺くべからざる新藥にて牛乳に優る數十倍の効ありて飮み安き藥劑なり

●大瓶五週金壹円廿錢●中瓶二週半金七十錢●小瓶壹週金四十錢
◎(小包送料)●大二十錢●中十五錢●小十錢





波ゝ　伯部金洲筆

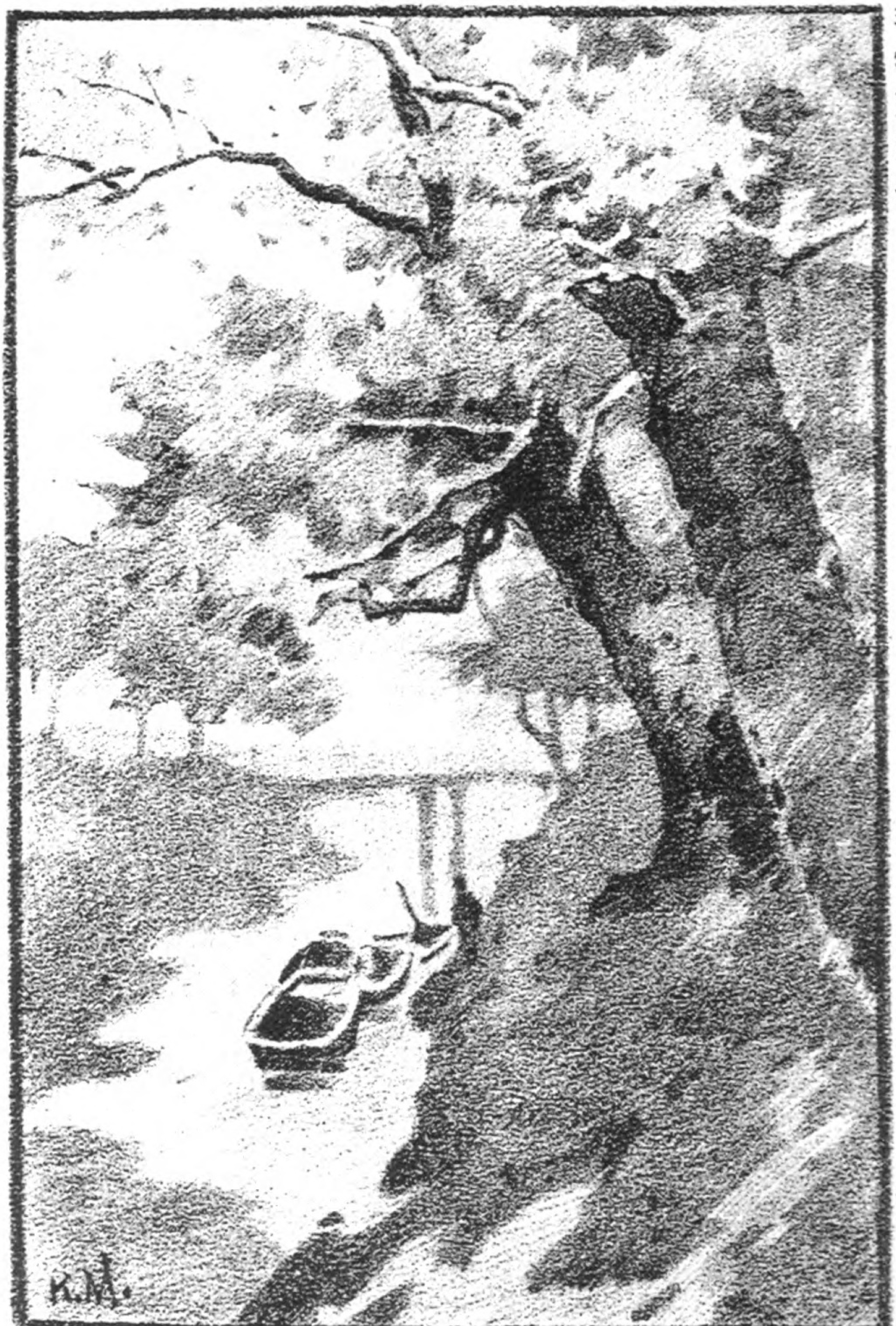
春の田舎



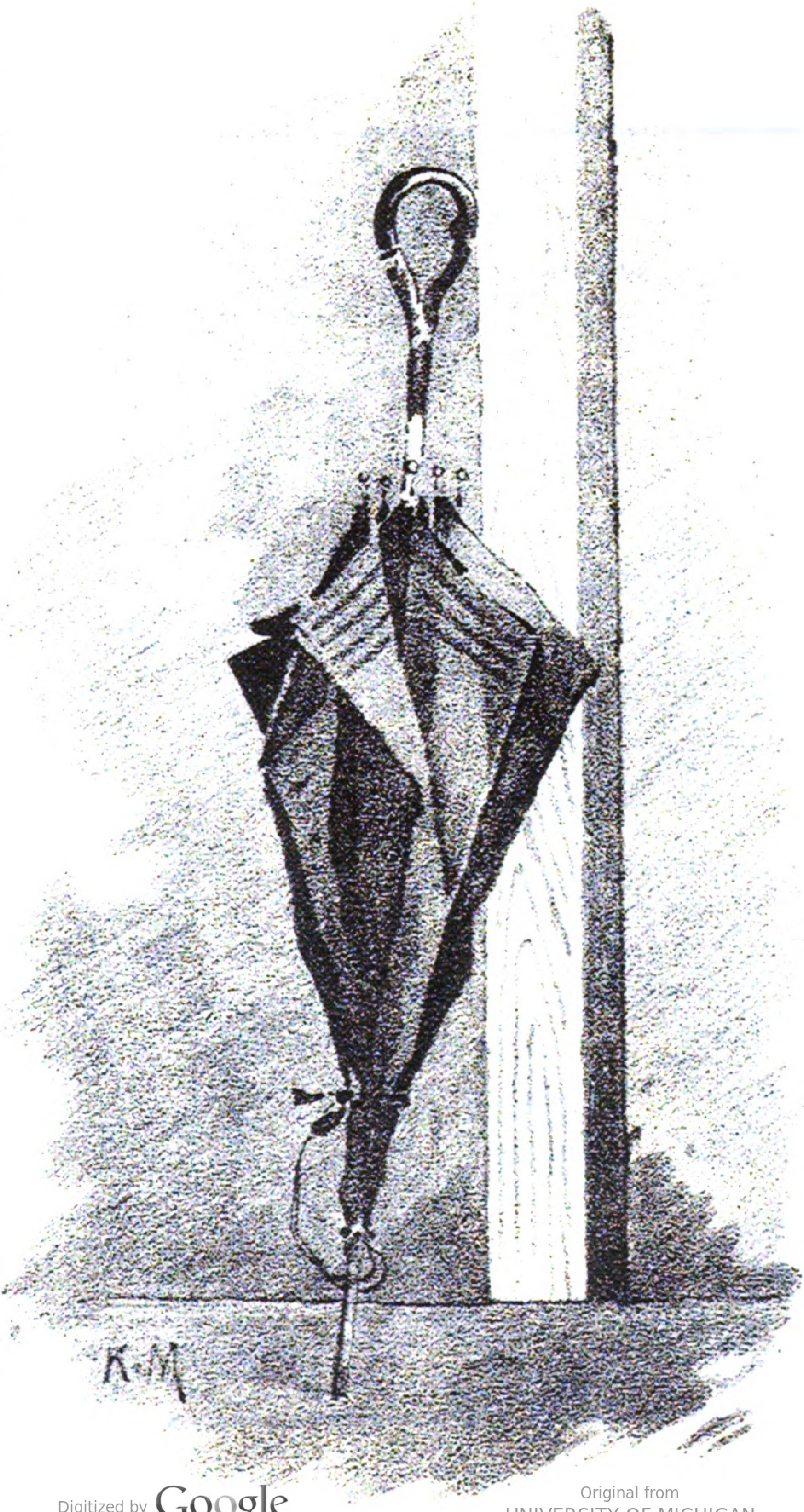
三宅克己筆

櫻花

三宅克己筆



三宅克己筆



誕生會

跡見花蹊女史筆

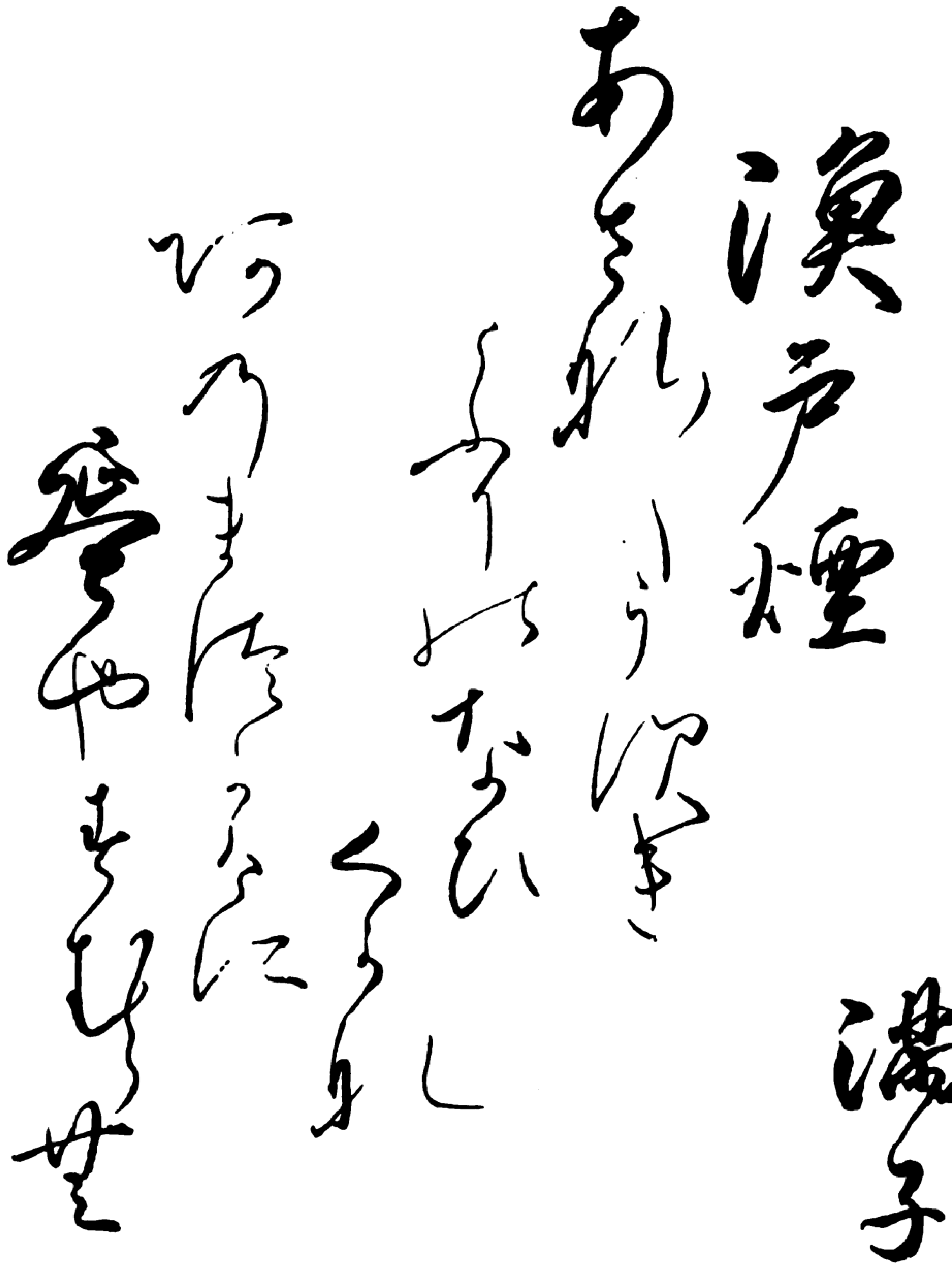


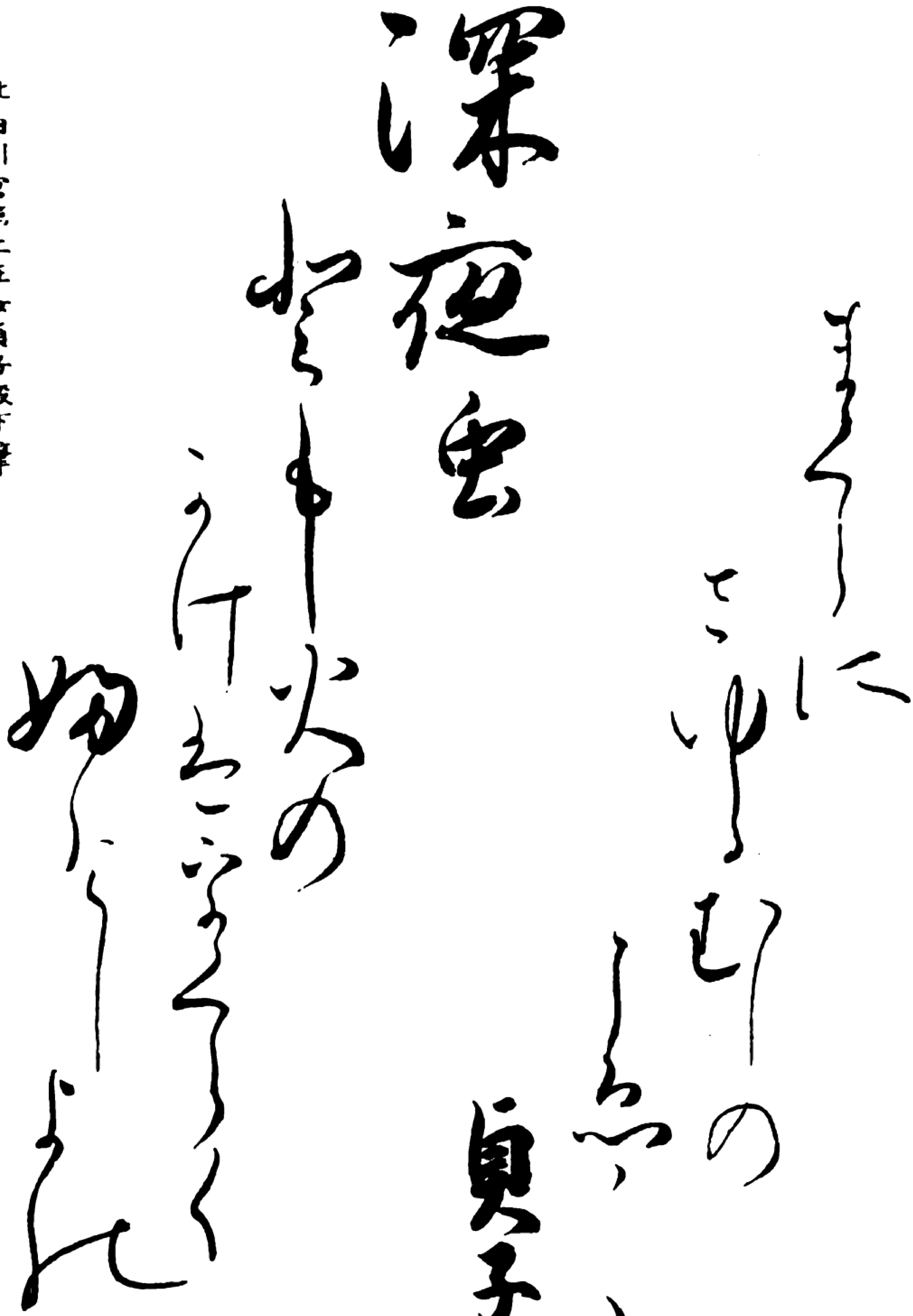
つゝじ花



跡見花蹊女史筆

北白川宮第一王女満子殿下筆





北白川宮第二王女貞子殿下筆

戰捷紀念 閨秀文壇

五十萬の皇軍奉天附近敵の根據を包圍して殆ど之を全滅せしむ實に千古の快事なり、日本國民たるもの此の大捷を祝賀せずして可ならんや、此の勝軍を謳歌せずして可ならんや、乃ち閨秀の才華煥發してこゝに萬朶の錦を織り成すもの豈偶然ならんや。

四月十五日發行

洋裝美本紙數二百餘頁
正價金廿錢　郵税金貳錢

女學世界 第五卷第六號 定期增刊

目次概要

軍事小說　五種
家庭小說　五種
和歌　五百首
俳句　二百句
新體詩　二十首
美文　二十種
狂句　五十首
川柳　三十句
消息文　二十首
短文　三十首

附錄

クロパトキンの脱走　丹下時子
產屋日記　與謝野晶子
浮世　鹽井禰子
櫻文學　×××
武士道十八世紀　藤迺舍女史
少女日記　佐藤露英
朝月夜　田中夕風
青年士官　琴伴女史
大和メグリ　丹齊女史
嫁入前　星の娘

發兌元　東京本町　博文館

（甲の二）

文藝倶樂部 第拾壹卷第六號 定期増刊

明治俳句風流陣



◉表紙——山中古洞畫伯筆
◉木版口繪——武内桂舟畫伯筆

洋裝大判美本
正價貳拾五錢
郵税貳錢五厘



明治俳句の隆昌を企圖せんとて**文藝倶樂部**が聊か**五百金**の賞を懸けて、江湖の俳人より募集せる俳句は、今は既に當代著名の宗匠諸氏に依りて其選定を終り、來る**四月十五日**の**定期増刊**に「**明治俳句風流陣**」の名を以て、目覺むるばかりの盛裝を凝らして世に現はれんとす。何人が果して**入選**の月桂冠を飾らるゝの榮譽を擔ふべき、尚本書の**附錄**として明治の俳人**故十千萬堂紅葉氏**の「**句集拾遺**」を掲載するのみか**鼇頭**には文藝倶樂部編輯局新撰の「俳人必携**明治歳時記**」を始めとして、未だ世に公けにせられざる俳道の**珍籍奇書**を網羅し加之全巻を飾るに各宗匠の**肖像書齋及び眞筆**を寫眞版として挿入す。苟も明治の俳を談ずるものは、須く一本を坐右に備ふべき也。發刊の日を待ちて、賣切れざる内、購讀の榮を賜はらんことを。肅白。

四月十五日發行

(甲の三)

發兌元 東京市日本橋本町 **博文館**

新發明

おこゑのよいくすり

びおん錠

將校軍人
敎師　十錢
僧侶　廿錢
演舌家　五十錢
音曲家
謠曲家　壹圓
定價

右は從來內藤家の製劑に有之所今回弊店に讓受候間猶引續御用命給り度此段奉希望候
定價廿錢以上のものへは引繼御披露のため極めて美麗なる丸藥及楊枝入を封入進呈仕度各地有名藥店に差出し有之候得共若し品切の場合には直接御註文被下度全國は無遞送料にて御郵送申上候

東京日本橋區兩國米澤町二丁目一番地

美音錠發賣所　稀命丸本舖　萬珠堂藥店

吉田安五郎

●女醫學生募集●

●前期生百名●後期生五十名

來ル五月一日ヨリ新學期ヲ開始シ入學ヲ許ス志望ノ姉妹ハ四月廿日迄ニ入學ノ手續ヲナス可シ

（規則ハ郵券參錢ヲ要ス）

東京市麴町區飯田町四丁目九番地

東京女醫學校事務所

戰勝國の　才媛淑女　絶好伴侶

第三號より每號津田梅子河井道子女史の英文揭載

每號名家擔任選評

▲第四號　四月一日發兌▼

名家玉稿益豐富、懸賞詞文滿載

三宅の水彩畫寫眞口繪挿入

▲本誌は號を重ぬる每に內容刷新、價格亦無類の廉價

▲好評▼

女子文壇

▲第二號　發行忽賣切れ　增刷出來

▲定價▼　壹冊拾錢○六冊前金五拾七錢○十二冊前金壹圓八錢○

郵送料壹冊壹錢郵券壹割增

▲第壹號賣切●第二號殘本僅少

發行所

東京市京橋區大鋸町十一番地

女子文壇社

電話本局六〇七番

賣捌所全國到處にあり

最寄無くば本社へ申込

（甲の四）

(甲の五)

寫眞畫報臨時增刊

陸海敵軍寫眞帖

全一冊洋裝
大判美本
正價廿錢
郵稅貳錢

（甲の六）

四月一日發行

征露戰役起りて以來未だ敵軍の寫眞にして、我國に傳はれるものなし。陸に海に、滿洲に、沿海洲に、我が軍に對して頑强に抵抗し、時としては彼我兩軍其陣頭に會見し、手を握り杯を擧げて數時間の談笑を試むが如き、或は數十萬の大軍を放ちて數晝夜の激戰を續くるが如き、流石に敵も我が軍の相手として不足なき勇氣を示すもの多し。此等敵軍の寫眞は最も珍とすべし。蓋し我が同胞は、日夕之を目擊するも、敵は容易に之を視る機會無ればなり。我館近來此等の敵に屬する寫眞數百枚を得たり。乃ち其の粹を拔きて特に此編を爲す。旅順、ダルニー、營口、遼陽、奉天、鐵嶺、浦潮須德、ハバロフカ、ハルビン、バイガル湖邊の敵軍と、目今擾亂中なる露本國の首都彼得堡の光景より陸海軍の將官、士卒、土民、風俗に至るまで、一百餘種五十頁の寫眞版と爲し、本文には、露軍の內情、本國の動亂、宮廷內の奇現象、國民風俗の暗黑面など彼等が連戰連敗する原因は、詳委曲盡して、而かも之を叙するに婉麗なる筆を以てす。眞に天下無類の絕好寫眞帖たり。

- ●旅順降伏紀念帖　正價貳拾錢　郵稅貳錢
- ●征露第一軍寫眞帖　正價貳拾錢　郵稅貳錢
- ●征露第二軍寫眞帖　正價貳拾錢　郵稅貳錢
- ●遼陽大決戰　正價貳拾錢　郵稅貳錢
- ●遼陽占領紀念寫眞帖　正價貳拾錢　郵稅貳錢
- ●日露戰役紀念寫眞帖　正價壹圓廿錢　小包送料五錢

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

寫眞畫報
臨時增刊

旅順現狀寫眞帖

全一冊洋裝
本大判美
正價貳拾錢
郵稅貳錢

十年以前一たび露國に騙取せられたる旅順口は、客春開戰以來、包圍十閱月、敵將力屈して降を乞ひ、今や復び帝國の占有に歸せり、國民十歲臥薪嘗膽の効空しからず、幾萬の貔貅が血を瀝ぎ骨を曝したるの驗此に於てか徒爾に非らず、ダルニーは大連の舊稱に復し、旅順の街衢は大山乃木等の新名を附せられ、遼東の天地春風舊に依りて、行政撫恤の典制亦漸く其緒に就けり。今や其攻戰陷沒の顚末より、現下の狀況に至る迄秩然編次して一大紀念帖となせる者本編是れなり、寫眞材料の新奇にして豐富なる、記事の警拔にして精練なる、愈よ出て愈よ妙なるを知了し給へ。

四月二十日發行

(甲の七)

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

二大法典豫約廣告

（第十七版）

改正増補 帝國六法全書

●總革特製定價壹圓廿五錢郵稅拾四錢●洋布上製定價壹圓郵稅拾貳錢

全一冊

洋裝袖珍美本
紙數千八百餘頁
全部新規組替

豫約法

四月卅日迄の申込に限り

總革包表紙 特製金九拾五錢 帝國法典と合せ御註文特價 金壹圓七拾錢

總クロース 上製金七拾五錢 帝國法典と合せ御註文特價 金壹圓五拾錢

外要送料

初刊以來非常の好評を博したる本書は今や刪補改正を加へて第十七版を發行するに至れり、其載する所の者は、憲法々例裁判所構成法、民法、商法、民事訴訟法、刑法、刑事訴訟法、監獄則の九大法律と、之れに附屬の法規は、法律と訓令若くは告示に論なく、又内地に行はるゝものと臺灣に限らるゝ特則とを問はず、悉皆之れを網羅したり其數無慮數百、總紙數壹千八百餘頁に及べり、其内容の豐富なる知るべきなり權利の擁護に忠實なるの士は、座右に一本を備ふるを怠るべからざるなり、今回前記の豫約方法に依り發賣致候間、期限中至急御申込あらんことを。

増訂 帝國法典

全一冊袖珍總クロース上製
帝國六法全書同型千五百頁
正價壹圓郵稅拾貳錢

本書、類を分つこと十有三、曰く帝國議會、曰く地方制度、曰く租稅、曰く土地及水面、森林及原野、道路渡津及橋梁、砂防、水利及水道、河川、開港、曰く通信、曰く勸業、曰く教育、感化、年號及曆時、曰く貨幣度量衡、曰く會計、曰く訴願及行政訴訟法、曰く警察、曰く軍事、而して大は詔勅法律より、小は訓令告示に至るまで、法令を輯むること無慮一千に及び、帝國六法全書と併せて法令書中の双璧たり。

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

（甲の八）

獨逸皇帝と其皇后





黄禍論の主唱者

（記事參照）

千家男爵の家庭

當家は天照太神より出で天穗日命八十一世の孫にして、代々出雲國造たり



男爵四女勇子　六女義子　長女知子　夫人俊子　次女信子　五女照子　三女廣子

（記事參照）

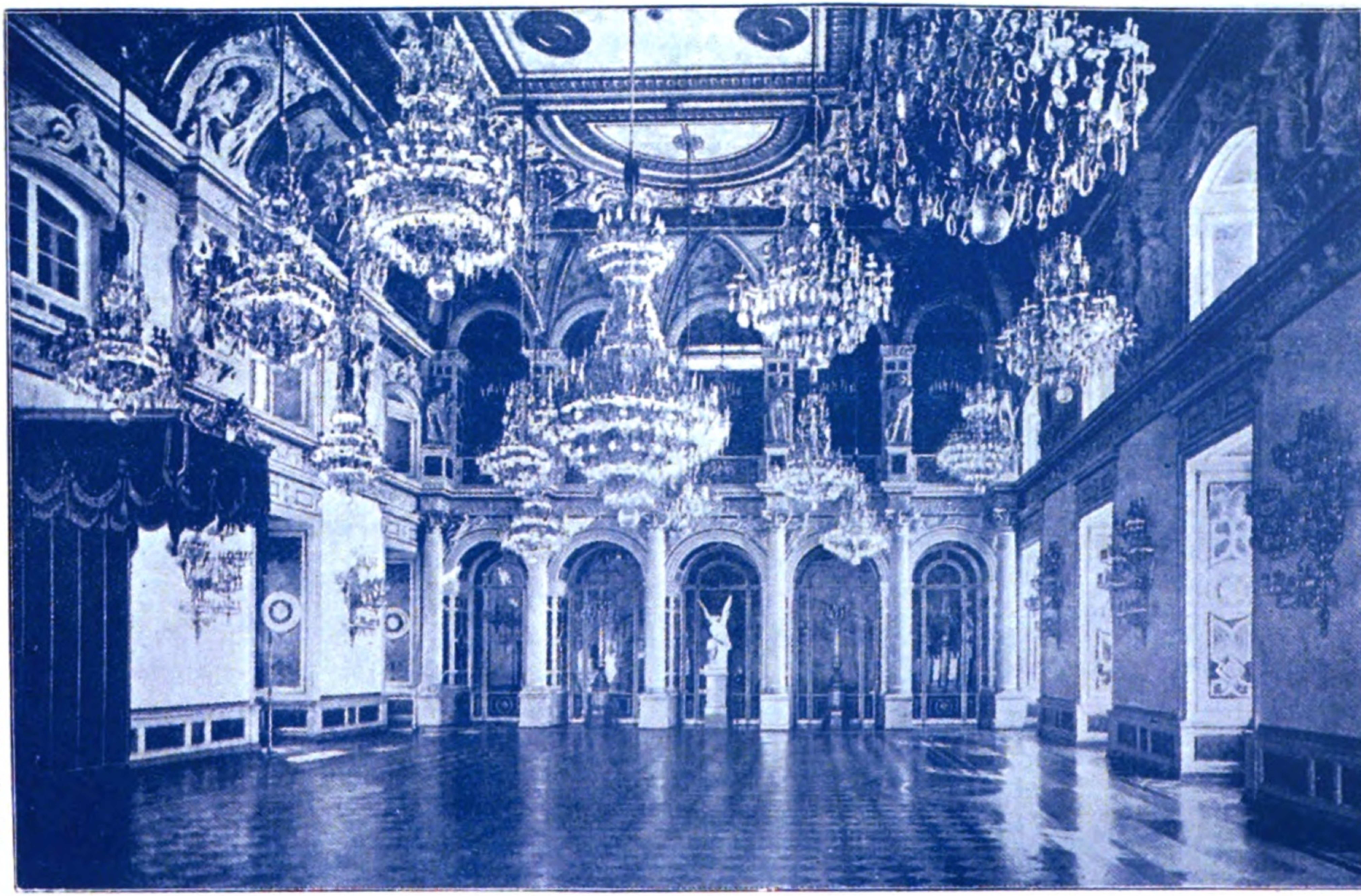
松平直亮伯の家庭

(舊松江藩主)



直亮伯妹君　鑑子　次女　益子　長女　貞子　夫人　充子　令息　直國　伯主人

獨逸帝宮殿の内部



（記事參照）

獨逸帝の家庭



（記事參照）

ジョンソン嬢と其家族



（記事參照）

受驗問答叢書

(一)新撰日本地理問答　上村貞子君
(二)新撰日本歴史問答　宮田　修君
(三)新撰世界地理問答　武田櫻桃君
(四)新撰東洋歴史問答　松原岩五郎君
(五)新撰西洋歴史問答　長谷川誠也君
(六)新撰國文問答　鹽野男雄君
(七)新撰漢文問答　太田才次郎君

(八)新撰算術問答　竹貫登代多君
(九)新撰代數問答　竹貫登代多君
(十)新撰幾何問答　竹貫登代多君
(十一)新撰化學問答　武田櫻桃君
(十二)新撰物理問答　上村貞子君
(十三)新撰動植物學問答　守崎留吉君
(十四)新撰地文天文問答　木村定次郎君

●全部卅六冊
洋裝袖珍紙皮
金字入上製
毎月一回發行

第貳拾九號

新撰衛生生理問答

醫學士　石原喜久太郎君閲
醫學得業士　首藤　環君編

全壹冊　洋裝袖珍　上製美本
正價　金二十錢　郵稅　四錢

衛生と生理とは人生の双翼にして之を研鑽至窮するは目下學界の急務に屬す、本書衛生の部に於ては空氣土地家屋人躰發達の各章に分ち生理の部にて血液解剖等の生理主要の問題を精密に列擧し懇篤に之が解答を施したるを以て受驗者に多大の便を與へたり

(十五)新撰法制經濟問答　中村正道君
(十六)新撰文官普通及裁判所書記試驗問答　小野　拓君
(十七)新撰倫理教育問答　永島藤一郎君
(十八)新撰鑛物地質問答　守崎留吉君
(十九)新撰心理論理問答　熊谷鹿之助君
(二十)新撰和英文典問答　上村貞子君
(廿一)新撰農業要項問答　志岐守二君

(廿二)新撰英語會話作文問答　森　奐文君
(廿三)明治三十六年文官高等試驗答案集　相澤新八君
(廿四)新撰商業要項問答　濱田四郎君
(廿五)新撰獨逸文典問答　藤井　寵君
(廿六、七)新撰工業要項問答　加野友次郎君
(廿八)新撰作文問答　四村直次君

正價
●壹冊金廿錢
●十冊壹圓八拾錢
●廿冊金參圓五拾錢
●全部卅六冊五圓五拾錢
郵稅
壹冊四錢

(乙の三)

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

文學博士 井上哲次郞君　文學士 有馬祐政君共編

武士道叢書

全部三册洋裝大判
紙數約壹千五百頁
正價壹圓五拾錢
小包送料貳拾錢

（乙の四）

上卷目次

價五拾錢郵稅拾貳錢

四月上旬發行

武士道は我邦の精髓なり、武士道の盛衰は直ちに我が國運の隆替に關す、古人曰く、武は矛戟にあらず勉めて忠孝節義の膽を練ると、忠孝節義の四字、即ち武士道の要訣にして、今回征露の役、亦我が武士道の狂ぐべからざるが爲に起り、開戰以來の連勝、亦將士の武士道を重んずるが爲に之を得たり將來平和克復の後に至るも、愈よ益々武士道に待つ所多きは知者を待たずして之を知るべし、古來武士道を重んずるの書、世に少からずと雖も、斷篇零冊にして、未だ集めて大成せるものなきは、一大缺點と謂はざるべからず、井上有馬兩先生玆に見るあり、幽を闡き秘を搜りて良書數十篇を得、校訂して三卷と爲し、以て世に問ふ所あらんとす、國家に志あるの諸士、必らず一讀せざるべからざるの寳冊なり。

發兌元　東京市日本橋區本町　博文館

京城婦人會



(記事參照)

女學生活人畫

（渡邊裁縫女學校に於ける）



赤染衛門（匡衡　山本いね子　赤染衛門　林うた子）



大塔宮（護良親王　山本よね子　南の方　山本いれ子　淵邊伊賀守　後藤藤代）

（丙の一）

太陽臨時增刊 第拾壹卷第六號 四月廿日發行

（丙の二）

昨年末より本年の初に渉りて開かれたる第二拾一帝國議會は、法令の制定に於ても亦頗る多忙なる議會なりし、之を大にしては諸種税法の新定改正あり、鑛業條例、實用新案法等一々摟指に遑あらず、其影響を受けて附屬法規に變更を及ぼせるもの、及時局の必需に伴ふて發布せられたるものを算ふるときは壹百有餘の多きに及ぶを見る。皆日常吾人に關係ある法令にして國民の等閑に附す事を得ざるものに屬す。本書は、**此等須知の諸法規**を類集せるものにして、**昨三拾七年下半期の初**に起り、本書發刊の僅々數日前迄に發布せられたるものは皆其採錄を怠らざる所なり。分類、例によりて整然、爲めに人は搜出に苦まず校正極めて嚴密、坊間流布の粗笨極まるものとは大に其選を異にす。而して**附錄**には**第二十一帝國議會史**あり、流暢簡潔の筆を以て多忙なりし議會の經過を說くこと到れり盡せり。法治國民は座右一本を缺くべからざるなり。刊成るの後賑々數購求あらんことを望む。

太陽臨時增刊 新法令

全一册洋裝大判
紙數二百五十餘頁
正價參拾錢
郵税參錢

發兌元 東京市日本橋區本町 博文館

農學博士 稻垣乙丙先生新著

植物地帶圖（着色石版刷）四枚挿入

全壹冊洋裝大判
金文字入上製
紙數五百五拾頁
正價壹圓五拾錢
小包料拾五錢

農藝物理 氣象學

氣象學は實に人生に緊要なるの一科學にして何種の業務に從ふも之れが大要を學ばざるべからず就中農業は其家畜作物の生產上に於て甚しく天然の支配を受くるものにして卽ち太陽の光熱空氣の成分降水、風等の氣象元素の單獨若くは綜合より及ぼすの制裁を受けて、極めて有力なる効果を致せり古來農業の要素としては土地と勞力と資本との三者に待てり、然るに吾土地の要素中には土壤の外之に伴へる一切の天然を包括するものにして其天地の主なるものは土壤よりも寧ろ光熱空氣水濕等にありとす、故に天然氣象の影響は至大至强にして其關係する所は此點より觀ても甚だ重要なりといふべきなり稻垣博士斯學を硏究し此天地を利用して農業生產に遺算なからしめん爲め本書を著述せらる蓋し農藝氣象學の著書としては空前の要冊なり、農業に從事するもの須らく此重要の科學を學習せざるべからず。（四月上旬發行）

農學士佐々木祐太郎君著 **氣候及土壤論**〔全一冊洋裝〕 上製五十五錢 郵稅十錢 並製四十錢 郵稅八錢

理學士岡田武松君著 **近世氣象學**〔全一冊洋裝〕 上製五十五錢 郵稅十錢 並製四十錢 郵稅八錢

（丙の三）

發兌元 東京日本橋區本町 博文館

文學博士 柿崎正治君編
文學士 齋藤信策君輯

樗牛全集 第二巻 文藝及史傳

全壹冊洋裝總クロース金文字及金模様入裝幀△著者少壯時代肖像筆蹟寫眞入總紙數約一千餘頁
正價金壹圓五十錢小包料廿錢

故文學博士高山樗牛君著

文藝時評

文學と人生、近松巣林子

第一期（明治二十八年九月より同廿九年九月迄）

運命と悲劇、歴史的精神、研究の道念と觀念、詩人と模倣と天然、文學と美術、日本西洋兩畫風の折衷、文化の開聯、天才論、叙事詩と叙情詩、何故に叙事詩は出でざるか、戯曲に於ける幽玄、退壇に臨みて吾等の抱懷を白す、

第二期（雜論）

文學會漫評、青年文人の厭世觀、武島羽衣の「小夜砧」を評す、演劇界の風潮と劇評家の責任、美術と道德、「文學界」の諸君子に寄する書、敢て日本美術史の編纂を促す、批評眼、明治二十八年の文學界、少壯漢學者に告ぐ、宗教小說、裏面の觀察とは何ぞや、女性作家に望む、鑑賞家と國民、時好と批評家、春の家が「桐一葉」を讀みて、寫生と寫意、想と形、大塚文學士を送る、今日の新体詩家を警醒す、畫識一策、美學史及美術史、一葉女史の「たけくらべ」を讀みて、俳句及狂詩、俳句と符號俳句、鑑定家と批評家、鷗外に答ふ、一葉女史の「われから」、德富蘇峰君を送る、市川新藏、今戸心中と情死、能樂會、能樂の性質、脚本の批評法、田山花袋の「わすれ水」

第二期（明治三十年六月より三十三年七月迄）

我國現今の文學界に於ける批評家の本務、明治の小說、所謂社會小說を論ず、支那文學の價値、春の家主人の牧方を評す、坪内逍遙が「史劇に就ての疑」を讀む、史劇に關して再び逍遙に答ふ、小說革新の時機、（非國民的小說を難ず）、詩的の兩面、其利弊、カーライル氏の英雄論の翻譯に就きて、ワルト、ホイツトマンを論ず、ホイツトマン（再び）、偉大詩人とは何ぞや、文明の裏面、時代精神と大文學、友人某に與へて昨今の文壇を論ずるの書、土井晩翠に與へて當今の文壇を論ずるの書

第二期（雜論）

齋藤綠雨の色道論を讀む、泉鏡花に與ふ、「先秦文學」を讀む、藤田劍峰を送る、文學に對する根本的誤謬、現今美術家の精神的教育、美術家の絕好題目、歴史を題目とする美術、佛像陳列の可否如何、閱歴と空想、小說中に現はれたる現代の女性、德富蘇峰、市川新藏を悼む、少年演劇に警告す、朧膽鯨の末路、柳浪の「畜生腹」を讀む、晩翠の詩、今の滑稽文學、最も悲しき聲、詩人唱はず、老人時代、作家自衞の法、實在と空想、詩書の誘惑、新聞記者の資格、ビヨルフンとゾラ、疑問、たそがれの辭、一葉舟を讀みて、「國民の友」を惜む、滑稽小說の作者に告ぐ、自己の修養、漢文を書き換へよ、西郷南洲の銅像を評す、民族傳說の蒐集、新建築と美術、評家及作家としての不知庵、藝術の尚古主義、詩人と批評家、木村鷹太郎君に與ふ（富士新聞の發刊に際して）、本邦文章の問題、我國演劇の前途に就て、明治卅二年に於ける小說界の傾向を論ず、漣山人の日本お伽噺、言文一致の標準、自國の作を讀まざる風、小說の意義、少年の文學熱、煩瑣學風、煩瑣學風と文學者、人名辭書中の文學者、人の出處進退、學者と文章、詹々錄（一）（二）、無題錄（一）（二）（三）（四）

第三期（明治三十四年七月より卅五年一月迄）

文明批評家としての文學者（本邦文壇の側面觀）、姉崎嘲風に與ふる書、作文論、現代文章私見、嗚呼風俗改革、笹川臨風が「奈良朝史」の首に書す、「元祿時勢粧」を讀む、元祿時代の側面觀、土井晩翠を送る、大橋乙羽を悼む、美術の保護者、將來美術界の一問題・留學生諸君を送る、無題錄、三十四年文藝界、文藝雜誌、藝苑鎖談、裝飾と日本美術、雜誌

發兌元 東京本町 博文館

（丙の三）

醫學博士井上通泰先生監修

家庭衛生叢書

本叢書講話承諾諸先生

醫學博士 入澤達吉先生
醫學士 石原久先生
醫學博士 土肥慶藏先生
醫學博士 緒方正規先生
醫學博士 岡田和一郎先生
醫學博士 金杉英五郎先生
醫學博士 片山國嘉先生
醫學士 賀古鶴所先生
醫學博士 賀古桃次先生
醫學博士 田代義德先生
醫學博士 長與稱吉先生
醫學博士 中濱東一郎先生
醫學博士 井上通泰先生
醫學博士 井上善次郎先生
醫學博士 吳秀三先生
ドクトル 富士川游先生
醫學博士 近藤次繁先生
醫學博士 淺川範彦先生
醫學博士 青山胤通先生
醫學博士 朝倉文三先生
醫學博士 佐々木政吉先生
醫學博士 木下正中先生
醫學博士 桐淵鏡次先生
醫學博士 北島太一先生
醫學博士 北里柴三郎先生
醫學博士 三浦守治先生
醫學博士 三輪信太郎先生
醫學士 宮本叔先生
醫學博士 弘田長先生
醫學博士 森林太郎先生

第壹編 既刊

口繪 北里、長與、金杉、土肥の四博士（肖像）

傳染病の話……北里博士
胃の攝生法……長與博士
眼科衛生談（第一）井上博士
血族結婚と聾啞との關係……金杉博士
淋疾と家庭……土肥博士
患者を生じたる時の注意（第一欠）

第貳編 既刊

口繪 宮本學士、木下博士、（肖像）

膓窒扶斯に就て…宮本學士
婦人の衛生一般…木下博士
婦人及小兒の眼の衛生……桐淵博士
眼科衛生談……井上博士
雜錄……七項

第參編 既刊

口繪 三輪博士、井上博士（肖像）

室內空氣に就て…緒方正規先生
眼科衛生談……井上通泰先生
小兒科一斑……三輪信太郎先生
小兒の衛生に就て……弘田長先生
雜錄……六項

第四編

口繪 三輪博士、三島博士の肖像

●膓胃の話 井上博士
●耳の攝生 岡田博士
●乳兒の衛生に就て 緒方博士
●狐憑とヒステリーとの關係 吳博士
●眼鏡の話 井上博士

雜錄 一大根の「ヂアスターゼ」●鷄卵の煮沸法●コンデンスミルク●胃病の豫防法補遺●其他數件

三月中旬發行

毎月一回發行
全部六冊洋裝菊版
正價全一冊貳拾錢
全部壹圓拾錢
郵稅一冊各六錢宛

發兌元 東京日本橋區本町 博文館

（丙の六）

東京外國語學校敎授　平井金三先生
東京早稻田大學講師　平井廣五郎先生　共編

大英文典　前置詞

洋裝大判美本

▲上卷（製本既成）　正價壹圓貳拾錢　郵稅拾錢

英文法書の世に行はるゝ者其幾種なるを知らず、獨り**獨逸人メッツ子ル**著の其精微を剔り其蘊奧を究め、材料の豐富なる考證の該博なる固より**古今獨步**と稱す、惜い哉獨逸文と英譯と絕版年已に久しく、今や之を江湖に求むべからず、是に於て本書の著者この**寶典**の終に埋沒せんことを憂へ、夙に之を公にするに志あり、乃ち其英獨兩文を對照して之を**邦文に譯し**更に古今百家の說を參酌輯集し、拮据年を經て**稿遂に一る**原書已に千六百頁三卷を重さぬ、本書又將に**數千頁**に及ばんとす、乃ち購讀者の便を圖て逐次に之を刊行せんとす希くは英文學を解剖する學者の爲めに**X光線**たらんことを

發賣元　東京日本橋區本町　**博文館**　東京神田表神保町　**東京堂**

神戸高等商業學校敎授　中川靜君

書翰文研究

全一冊洋裝袖珍三六版四百八十頁高尙頗美本

▲正價金六拾五錢　郵稅八錢

◎國民新聞評　神戸高等商業學校敎授たる著者の多年苦心の作にて博く古今の書籍を參考し典據すべき作例を收め各項について詳明なる解說親切なる注意を加へたり書翰文研究としては曾て見る能はざりし絕好の良著にして今日禮法壞敗し書翰文に恒例亡失したる過去の時代に於て據る處を示さんと試みたる著者の功や大なりといふべく後進者を惠む甚だ淺からざるべし

著者の書翰文に對する意見に曰く「書翰は對話の代用なり故に慣用熟語を用ふるを便とす」「書翰は俗用の文なり難解の不便あるべからず」「書翰は今日今人の用を達する文章なり古體を避くべし」「書翰は口語調に據るべきこと歷史の證する所也各自の工夫を要す」「書翰は特定の受信者に寄する文章なれば禮法存せざるべからず」「書翰のあるものは權利關係の事項を包含すかゝる場合には筆端を愼むべく又現行法規に就て顧る所なかるべからず」凡そ此の如し次大要は第一編總論に書翰文の研究、起草者の注意、文體を論じ、德富蘇峯氏の書翰と題する一編を揭げ、第二編變遷に、王朝時代、武家時代、德川時代、明治時代を詳叙し、近古名家の書翰六編を附し、第三編書翰の各部及特殊用語の條に、構造、書翰紙書式書體、封筒書式、稱呼用語、敬學用の接尾語、特殊語法及用字を載せ尙漢文尺牘十二編あり、第四編各部細說の條に前文、本文、末文、日附、發信者、受信者名、副文、葉書、こゝに陣中書翰五種を挿み、第五編記載事項種類の條に慶賀、慰安、吊悔、遊興、旅行、贈與、推薦、照會、要請、貸借、報告、公用文、こゝに凶概入封筒例あり、第六編叢談の條に、郵便制度、整理、電報文等、附錄に郵便電信法規及書翰文敎授に關する私見一斑あり

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　**博文館**

（丙の七）

片岡海軍中將
竹内日進艦長 題字

巖谷小波君序文

海軍主計中監窪田重弍君著

四月中旬發行

日露戰役紀念 彈片

全壹册

洋裝總クロース
三六版約五百頁
正價參拾五錢
郵稅六錢

目次

●開戰前後の追懷

●出征記

●短篇小說

▲石見櫻 ▲鳥海艦長
▲美人俠 ▲脫軍
▲花橋 ▲從僕物語

●雜文

▲ホブマン少佐 ▲今日の水戶武士
▲鐵火漫言 ▲軍事と觀戰船
▲海戰地雜談 ▲魯國海軍の眞相

窪田中監、身軍籍に在つて而も文藻に富む、先に日進艦主計長として、砲烟彈雨の間に往來するや、公務の餘暇、筆を呵して戰況を記するもの、細大漏らさず、縱橫、自在、尋常從軍記者輩の到底學び難き所。若し夫れ卷尾に附せる小說、脚本、短篇に至つては、悉く事實を材とし、經歷を資とせるもの、又以て白面文士の遠く及ばざる所とす。嗚呼此の彈片一部！啻に空前の大戰爭より產まれたる、未曾有の好紀念たるのみならず、眞個戰爭文學中の萃の萃たる物ならずして何ぞ。

江見水蔭君著

軍事小說 武裝の卷

全一册　正價貳拾五錢　郵稅六錢

軍事小說家として有名なる江見水蔭氏が獨特の快筆を揮つて以て戰爭の表裏を描き得意の短篇小說を以て軍國の出來事を詩想化して劍と筆とを一致せしめ文字の力を以て露國退治を企てたる近時稀に見るの一大雄篇なり。

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

（丙の八）



女學世界

第五巻第五號

(四月五日發行)

媾和説に題す

露國より唱へ始めし媾和説は恰も夜の盜賊のごとし、宵の中は忍び足にてこそこそ然たり、深夜に及び人の寢息を窺ひガタ／＼然たり、夜あけて後これを見れば座敷の眞ん中土足縱横汚物狼藉而して家の重寶悉く奪ひ去らる、眉に唾せよ露國の媾和説！

戰爭の前途は永遠なり

クロパトキン大將の報告に曰く、予は包圍せられたりと、同日滿洲軍總司令部の報告に曰く、敵の損害約一十萬、この報一たび世に傳はるや世界列國の人心愕然として、宛ながら目前に雷の落ちたるが如き感をなせり、敵は奉天附近に於て殆んど全滅せられたり、日本軍の勇武は將さに千秋の史上に燦然たらんとす。露軍は最早戰鬪の餘力なし。是に於て露國は媾和を申込むべし。兩國の平和は期せずして待つべしと、噫是れ大なる謬見といふべし。抑も露國は世界第一の武强國なり。この武强を以て居る大國が平素極東の一微弱として侮りたる小國の爲めに大汚辱を蒙りつゝ何の面目ありて世界列國に對せん。曾て大ナポレオンを敗りて歐洲に覇を稱して以來、亞細亞を呑み土耳其を敗り、英佛聯合の大軍を引受けて猶半ケ年を支へし程の頑强なる覇者が一朝この汚辱を蒙る。何ぞをめ〳〵降服の態度に出でんや、彼れ必らず、此の失敗を回復せんとして戰意を增長せしめんこと必せり。されば彼れ奉天に二十萬を失はば更らに三十萬を繰り出して哈爾賓に據るべし。哈爾賓に於て三十萬を失はゞ更らに又五十萬を出して貝加爾を保つべし。貝加爾陷れば又增兵して更らに烏剌爾に據るべし。增兵又增兵、最后の一兵を剩すまで彼れ戰意を繼續して以て其面目を維持せん事必せり。故に此の戰爭は前途容易に收まるべくもあらずして日本軍の勇武は是より將さに西比利亞の曠野に向つて大なる發展を見るべし。千古の快事ならずや

時論

男女兩性の比較

元田作之進

▲比較の困難、男女の兩性を比較するに當り、第一に困難を感ずるは、相互の判斷に公平を欠くの恐あることなり、男女は其性理に於て區別ある如く、心理に於ても區別あり、性理上の區別は觀察もなし易く、且つ醫學の證明も充分なれども、心理上の區別に於ては未だ確實に之を證明するに至らす男性が男性を研究し、女性が女性を研究するものならば、差したる誤謬もなかるべしと雖ども、其反對の性を知らんと欲するに至りては、未だ充分の手段を有せざるなり、男性は自ら嘗て女性たりし經驗なく女性は又た男性たりし經驗なし、故に男性は日常女性の心情を解釋せざるやも計り難く、女性も亦た平生男性の本體を誤認せるやも知れず、今男女兩性を比較せんとするに當り、論者にして男なれば女を誤り女なれば男を誤り、正當なる比較表を造くる能はざるの困難あり、此困難は動物心理學者が動物の心理を研究し、兒童心理學者が兒童の心理を研究するの困難なると殆んど同一なりと思はる。

▲心理作用と性理作用、男女兩性を比較するの困難なることは前に述べたるが如しと雖ども、之を以て全く不可能の事なりとは云ふべからず、心理的現象は多く性理的動作となりて、人の耳目に觸るゝものなるを以て、外部の動作によりて内部の性質を推察することを

得べく、即ち男は女の言語姿勢等によりて其女の性質を判斷し、女も亦た同樣の手段によりて男の性質を測知し得べきなり、凡て心理に關する研究は此種の推理法に基くもの多し。

▲人生の興味　殊に男女は相互に興味を有し、男性はあらゆる手段を盡して女性を解釋せんことを熱望すると共に、己れ亦た女性に解釋せられんことを熱望す、女性の男性に於けるも亦た斯の如し、人生は此興味によりて多くの實驗を有し、小說、詩歌、傳記の類は此種の經驗談を以て其大部分を占めたるものと云ふて可なり、故に自己一人の觀察のみを以て標準とせず、古今人世の經驗に徵して男女兩性の比較を論究せば、先づ當らずと雖ども、遠からざることを得べきか。

▲男女兩性の相違、此れよりして、兩性に相違せる點ありと認むる所のものを列擧すべし。

(一)男性には理の人多く、女性には情の人多し、是れ一般に認むる所なるが如し、世には道理に富める女、涙に脆き男なきに非らずと雖ども、是れは寧ろ例外と云ふべく、概して言へば、古來新勢力を發見し、新器械を發明する等は殆んど男性の領分に屬し、慈善事業に從事し、温き家庭を造る等は多く女性に待たざるべからず

(二)男性は概して義に傾き、女性は概して愛に傾く、古來の歷史に徵するに正義の爲めに愛情を犧牲にするは男子に多く、愛情の爲めに正義を破るは婦人に多きが如し一家の中に於ても父を嚴父と稱し、母を慈母と稱す、殊に我國に於て此傾向あるを見る。

(三)男性は快活にして女性は温順なり、故に男性は外交に長し、女性は内治に適す。

(四)男性は分拆的にして女性は總合的なり學校に於て男女兩性の成蹟に徵するに、男生徒は比較的に科學に關したるものに良好にして、女生徒は概して文學に關したるものを好む、科學は分拆的の學問にして文學は總合的の學問なり。

(五)男性は創始的にして女性は模倣的なり、例せば一の外國語を研究するに當り、男性は文典に長し、女性は會話に長す、男性は自ら事物を創始するの才あり、女性は既に存在せる事物を模倣するに巧なり、女性に音樂家の多きは其性質に於て模倣的のものなればなり。

(六)男性の觀察は粗大にして女性の觀察は緻密なり、男性は事物の大要を觀取するに留まれども、女性は其位置、形狀色彩等の細末を觀察す、啻に觀察するのみならず、又能く之を記臆す。

(七)男性は興味多岐に涉るも、女性は或る一事に集中す、故に大局を見て多面の事務を整理するは男の手腕に屬す、心を一事に傾注して之を完成するは女の長所なり。

(八)男性は發動的にして女性は受動的なり、是れ動物の通性にして、凡ての進化論者の論證する所なり、人間の社交に於て多く此現象を見る。

(九)男性は放散にして女性は執拗なり、故に忘恩の惡德は男性に多く、怨仇の念は女性に多し。

(十)男性は寧ろ放任主義を守り、女性は頗る批評的なり、男性は觀察力の鈍き丈け其れ丈け、批評眼も鈍し女性は全くこれに反對の傾向を有す、右は一般に就て述べたるのみなれども世間まゝ男性にして女性の性情に富むものもあらん、女性にして男性的の性僻を有するものもあらん。されど男女に就て多數の性質を對比すれは如上の如し。

▲理想の男女性　男女の兩性既に心理的に區別ありとすれば其區別は永遠に繼續すべきものなるや、即ち男性は何時までも男性の性質を有し、女性は何時までも女性の特質を失はざるべきか、或は兩性の心が各々進步して理想の極點に達したる場合には相一致すべきや、是れ一の問題として攻究すべき價値ありと信す、惟ふに、心理と性理とは密着の關係を有するものなれば、性理上男女の區別の繼續する以上は、心理上の區別も矢張繼

續すべきものと見て可なるべし、彼等の心理的進歩は其特性の進歩にして、男性は男性としての特性を完成し女性は女性としての特性を完成すべし男は決して女らしくならず女は決して男らしくならず各其天賦の美を完ふすべきなり。

▲兩性相互の勢力　理想の男性を造り、又た理想の女性を造るには相互の勢力を待たざるべからず、詳言せば男性は女性に交り其感化を受けて以て其男性たるの特性を完ふすべく、女性も亦た男性の勢力を待て始めて女性たるの美を發揚し得らるべきなり、社會に於ける男女の交際は啻に相互に快樂を與ふるのみならず、又た相互に感化を與ふるの機會にして、精神の發育に大なる關係を有するものなり、男性は婦人の前に於て理想の紳士たらんことを務め、女性は男子の前に於て理想の淑女たらんことを務む、是れ自然の性情なり、婦人に交際せざる男子には變人多く、男子に交際せざる婦人にも又變人多し、世界若し男のみの世界ならば、隨分殺風景の世界なるべく、世界若し女のみの世界ならば亦隨分無味乾燥なる世界なるべし、神が人を男女に造り給へるは蓋し深き聖意の存するあらんと信ず。

戰爭と平和

帝國殖民學校教授法學士　石黒定美

國の文野に就て見ると、一體に野蠻人は戰爭を好み、之に反して文明人は及ぶ限り平和を樂しむものである又た同じ國でも未開時代には戰爭が頻繁で、追々と文明が進むに伴れて益々平和的傾向を生ずるのである、其

故今日國際政治の本義は、列國間の平和を保つに在るのだ、國と國とが同盟條約を結ぶのも矢張平和の爲である、又た列國が軍備の整頓を競爭し、擴張に次ぐに擴張を以てして、其の前には何物も犠牲に供すると云ふのが、現今文明國の狀態であるが、是も畢竟平和を維持するの策に外ならぬのである、即ち今日の平和は所謂武裝的平和で在つて、各國の武裝の餘りに嚴しい爲め、戰爭の結果を怖れて、僅かに平和が維持されて居ると云ふ有樣である、然るに人類が一般に平和を希望するのは、之を以て人類の幸福を增進する唯一の道であると心得て居るからであるけれども、其の平和が眞に外面丈の平和で內心は決して平和ではない、乃ち今日の樣な武裝的平和主義と年々歲々財政の膨脹の爲め、根本的に社會の幸福を破壞し去つて了ふのである、各國民の有形無形の能力及勞働資產の大部分は自然の途に用ゐられないで却て不生產的な方面へ使はれるのである、例を擧げて見ると、粒々辛苦汗水たらして漸く儲け得た金は、政府の手で一處に集めて、怖るべき一個の破壞的勢力を購ふ爲め費されて仕舞ふのである、つまり軍備には國民の膏血が附いて廻るのである、是れ決して眞の平和眞の幸福ではない、於是、軍備制限問題や、戰爭廢止問題が起るのである。

偖て文明人種は平和を好むこと以上の如くであるが、平和も今日の樣な病的平和では餘り有難くない、寧ろ迷惑である、併し此の平和時代に斯樣に武裝をすると云ふのも、つまりは戰爭を豫想しての前提に過ぎないのであるから、茲に戰爭の本質さへ定れば、其の前提たる武裝問題は自ら氷解される、そこで一歩進めて戰爭其物を考へると、戰爭は何よりも怖しい、劍光ひらめき、大砲とゞろき、山裂け谷鳴り、血は流れて河を成し屍は積んで山を成す悲絶慘絶の光景は、軍談師の講釋を聞いた許でも永く吾々の記臆から其の恐怖を取り去ることが出來ない位である。そこで東西古今、歷代の聖人賢人達が早くから國際間の平和を望み、廢戰の理想を抱いて、色々と其方法を考へて、皆な銃劍を溶かして鍬に代へ、軍旗を捲いて裝飾品とする樣な時代の來ること

を夢に觀て居たのも、亦た已むを得ぬ次第である。

併し翻て考へると、天下に戰爭がなくては、國家はない筈である、吾々が毎日見聞する所の國家は總て戰爭に因て起つたものである、又た國家が兵力で以て人民を保護するは、國家今日に於ける唯一の任務である、歴史の繼續せらるゝ限り、數多の國家が並び立てある限り戰爭は何時までも實驗臺に上るのである、永久平和の崇拜者は思想上の誤謬病に罹りつゝあるもので、彼等論者は國家を全く獨立せしむるからでなければ世界的國家を夢想しつゝあるのである。

國家はその本性が既に主權的であるから、各國家の上に權威を有する法廷が成立しない以上、戰爭は未來永劫人類の世界から放棄することが出來ぬ、又た縱令國家の間に爭議が起つた時、其が戰爭とまでならずに、一時之を調停し、双方を親睦せしむるの方法が有つても、決して眞實な、絕體的の親善を回復せしむるものではない、唯だ一時その本意に反した和睦に過ぎぬのであるから、後に至つて再び平和を攪亂する虞がある、其位なら寧ろ初めから戰爭をして十分にその憤怨を洩らして以て相互の干係を確立せしむる方が良い、世人は英國人を以て他國人よりも一層平和的傾向があるやうに信じて居るけれども、其實英國は毎年世界の何處にか戰爭をしてゐる、人類文化の大進歩は武器を以て野蠻と不道理の抵抗を征服するに依つて實現せらるゝものだから戰爭は實に國家の要求を確固ならしむる最良の手段と成てゐる、で、積極的の理由を申すと、元來非戰論者や廢兵論者は單に戰爭の弊害ばかりを見て、少しも戰爭より來る利益を認めない風がある、成程戰爭が多くの勞力と費用とをかけて互に殺傷し合ひ、殘害を加へて、縱令一時でも破壞的暴力を逞うするは非常に惡いが、其の半面に於ては常に幾多の福利を齎らし來ることを忘れてはならぬ、彼の刺毬の裡に甘味の栗實を包んで置くは、自然の進化であるが、鐵衣の下に無限無量の福利を馴致するものは實に戰爭である、西人の言に戰爭を

以て國家の嚴師だと云た者が在るが、眞に事實を穿つた言葉である、何故ならば何處の國民でも先づ此の戰爭の訓練を經なければ、起つて大に威を張ることが出來ぬ、而も如何な强國でも未だ曾て此の原則に洩れたものはない、又た彼の諸藝術、科學、文學、農工商業の隆盛になるも皆な戰爭の刺激競爭の結果に出たことは歷史の能く證明する所である。

まづ上古の希臘、中世の伊太利に見ても、近くは英吉利獨逸及び西班牙の如きを見ても、皆な立派に證明される希臘雅典のペリクリス時代、獨逸のダンテ、英吉利のエリサベス時代の文學隆盛はいづれも戰爭の賜物である。

其から吾々が日常の業務を執るに必要な秩序、堅忍、剛毅將た高尙と云ふ樣な素質は、矢張り戰爭と云ふ嚴師の訓練を經て更に一層確實と成るものである。

而して又た外より壓迫を受けて國家の危急に頻する時或は物質的繁榮の極社會の腐敗に傾いた時に當つて、戰爭と云ふ愛國的興奮劑を投じると、能く此の禍根を除き去ることが出來るが故に昔から幾多の哲學者の口に世界的平和主義を絕叫してゐるものでも、他の一面では其の國民を激勵する功德を認め、戰爭は實に是れ上帝の愛孃なりの語を致したものである、伊太利のマキアベリーは戰爭を以て國君唯一の學業なりと謂ひ、英のロード、ベーコンは國民を導いて其の戰捷に適應せしむるが、政府の任務だと云つて居る、今兩者の意のある所を計るに、即ち地球を管領するものは夫れ唯だ强大なる實力である、强きものは起り、弱きものは滅ぶと、而して國民を此の目的に向つて訓練せざる可からずと言ふのである。

其他猶ほ細い利益を擧げると幾らもあるが、大敵前に迫つて國家の運命に關する樣な場合には、國內擧つて社會的階級的の反目を捨て、黨派的憎惡を去り、個人の私欲を忘れ、國家の一員たることを悟り、社會全體の

福祉の前には一個人の生命や財産は虚無であることが證明され、國家と云ふ大觀念の下には、小人は亡び、靈と肉は分たれ同胞は互に先を爭ふて其の犠牲とならんことを欲し、協力一致の實を擧げるのである、是等を思ふと戰爭の功德も亦た偉大なるものである。

つれ〳〵草

小川直子

あはれ我教子たちよ、今日は五月雨の雲間も見えず、降り暮してつれ〳〵なれば、木の芽煮てだに、鬱々しさをも慰めはや、爰に來給へといひければ、少女らはいと嬉しげにつどひ來て、程もなき窓の中に打寄り、まろらかに並み居つゝ何くれとかたらふ程に、一人が師の君よ何にまれわらはどもの誡となるべき一言を聞せ給へと乞ひけるまゝに、さば友の交りにつきては友をえらぶにありといふ事をいさゝか語らむとていひけらく凡友の交りにつきては、いにしへより世々の聖だちを始として人々のあげつらひ來つゝ教へしこともまたあれば今更にいはずともありなむ、されどいにしへの奥まりたる世の中とはことにて今の世は交り廣く我國の中はさらにもいはず、外國人にも廣く交はる習ひなれば、殊更交らふ道には深く心を止むべきわざなめり、そも〳〵女子たる者此世に生れいでゝは、三從の道有てこれに從ふべければ幼き程はかぞいろの君が萬に心を盡して、孟母三遷の教などをも鑑として、善きが上にも善き友をえらびて交はらしめ給へば、其導き給ふがまに〳〵從ひて其友と親しみあひ、萬の藝能をも磨きつゝ勵みなば、大なる過もあらじを、やゝ生ひたちて後は、やうやう友どちも多くなり、學びの道の友などいふもさらにて、此頃は何くれのつどひどもさま〳〵ありて、其つどひには國のために大なる慈善のわざをも起すあり、道のため神道よ佛道よ、儒道よと尊き道を弘めむとて企

つるもあり、又は我國神代よりの道なれば心靜に敷島の道をこそとてみやびなるつどひもあり、中には女はなよびたる方こそあらまほしけれとて、糸竹のしらべに心を寄するもあり、猶今めかしき方をとて、西洋風なる音樂の集ひなどくさ〴〵有て數ふるに暇あらず、これら皆なよき思ひたちにて、東に導き西に誘ひて其道々のわざどもを弘めむ勸めむとての、事にしあれば、これに入たらむは素よりよき事也、其道に立ち入らむとならば、先づ其企つる人は誰ぞ長たるは如何なる人ぞ、これにかゝづらふ人々平素の行ひは如何など能く〳〵尋ね問ひ聞き正して後心を寄するぞよかるべし曾子曰く君子は文をもて友を會し友をもて仁を輔くと、又いにしへより其人を知らむと思はゞ其友を見よともあるぞかし、ゆめ〳〵あしき人を友となし給ひぞ仁を輔けむとする道なるを、若々あしざまなる人に交りて日を積み月を重ね年をわたりなば我知らずあらぬ方に導かれて、迷ひ行ものぞかし、家語に曰く不善の人と居るは鮑魚の肆に入り、久しうして其臭を聞かざるがごとしと、これにつけて思ひいでたる或人の歌に、

　みなれ棹さして思へば人こゝろくだるはやすき宇治の柴舟

といふがあり、實に人の心は萬にそみ易きものなれば、見るもの聞く物につけて千々に移り行習ひなるが、善き方へうつろふは遲々としていちじるしき印も見えぬを、あしき方にそみ行事は早くして坂路を下る車の輪のごとくに轉々やまざる也、女はまして淺はかなる心の人多ければつれ〳〵草にも

　女の性は皆ひがめり、人我の相深く貪欲甚しく、物の理を知らず、たゞ迷ひの方には心も早く移り詞もたくみに苦しからぬ事をも問ふ時はいはず、用意あるかと見れば又淺間敷事をも問はずがたりに言ひ出す、深くたばかり、飾れる事は男の智惠にも増りたるかと思へば、其事跡よりあらはるゝをしらず、すなほならずして拙きものは女なり

といへり、斯くすなほならぬ女の中より善き人をえらばむ事こそ難きわざなめれ、かのわざをぎなどを見れば惡人は惡人と面に惡をあらはし、聲も姿も恐しく、岩藤は岩藤の本性を現し、善人は善人の容貌にて尾上は尾上のなよやかなる心中を面にあらはし居て善惡のけぢめいちじるければ、見分る事もかたかる間敷わざにしあれど、おしなべたる現世の人は、さにあらず、面は菩薩のごとく笑みを含みて、しほらしく物言ひなつかしく見ゆる人にて心の中は夜叉に似て恐しく、あるは蘭の容あれども心は棘のごときあり、かゝる女子にて時に逢ひ所を得る時はあらぬしりうごとなどいひ入るゝ事萬に巧なり、さるからにこれを聞く人如何なる豪邁のますら男、あるは如何なる賢婦なりとも虚言よ僞とはいかでか知らん、さる僞とは夢にも知らず、遂に其言を信じて咎なき人を罪なふたぐひなきにしもあらずかし、いにしへよりさる例多かり唐土にては晉の獻公驪姬、我國にては鳥羽帝の得子、豐太閤の淀君など皆口のなめらかなる事蜜をそゝぐがごとく、腹中の恐ろしき事劒のごとしともいはまほしきさまなめり、さるからに遂に世の亂をもひき起せるにあらずや、されど此人々も世に在りし程はかゝる人とも誰かは知らん、十に八九迄は皆善き人かな才智ありて賴母敷人なりとか、又はしほらしくてくみし易き人なりとかいひつゝもてはやしたりけむ、さればこそ聖帝とあふがれ給ひしも、賢王、名公とたゝへられし君だちも其言に迷ひて用ゐ給ひけんかし、後の世に至りてこそ善きはよくあしきはあしともあきらかに知られたれ、ある人のうたに

文みればむかしの事は限なくて中々今の世こそしられね

とよめるもあり、燈臺もと暗しとかいふ諺も有にあらずや、兎にも角にも人のよしあしを明かに辨へむは難きわざにこそ、されば浸潤之譖、膚受之愬も行はるゝ例少なからず、これを辨へむには先づ我が心あきらかならでは叶ふまじき事になむ、されば少女達も明暮勵みて大學にいふ明德をあきらかにしてあしざまなる人には交はらずあしざまなる人をば容れ給ふなよ、いざ〳〵我も諸共に明德をあきらかにする工夫を勵まむといひけるに、時計の針のめぐり〳〵てはや黃昏になりにければ、けふはこれにてと止めぬ。

女子體育の奬勵

華族銀行頭取　園田孝吉

私は我國女子の狀態を見て聊か希望を述べたい事があります、それは外でもありませぬ、泰西の女子に比較して色々優る點もありましやうが、又一方に於ては大に劣つて居る所もあります、長所は暫く措き、短所を擧げて見れば、氣象の快活ならざること及び身體の健全ならざることであります。

日本古來の習慣として、室內に蟄居し多くの人に接せざるを以て淑德の婦人として貴んで來ましたから、自然快活なる氣象と健全なる身體を得ることが出來ませんでしたらうが、是からの婦人は今迄のやうな、優柔因循なる氣象と、羸弱なる身體ではなりませぬ、其本人はどうでもよいとして、國家將來の上から見ますれば、大に憂ふべき事であります。

快活なる氣象と強健なる身體を得るには、是非とも體育其者を大に奬勵せねばなりません、殊に戶外の運動を盛んにしたいものです、戶外の運動とは、テニス、旅行などで、又乘馬やボートなども至極よろしく、其外風儀を亂さゝる運動ならば何んでもよいと思はれます。

毎度英國の事を申すやうですが同國の婦人は學校生活の塲合のみならず、學校を出でゝ後も男子と殆んど變りなく、種々の運動に思を凝らして居ります、それゆゑ氣象の快活なる身體の强健なることは、男子と擇ぶ所なく、到底我國の婦人などの較べものにはなりませぬ、苟も婦人にして戶外運動を盛んに行ふやうになつたならば、我日本女子の氣象及び體軀には一大革新を來すでありましやう。

併し此の運動を盛んにすれば勢ひ所謂御轉婆に傾き易い故、一方に於ては運動の盛んなると同時に、精神上の

敎育に努めねばなりませぬ、若しも運動のみを奬勵して精神敎育を努めねば、時に恐るべき弊害を釀し易いのであります、其の精神を敎育して淑女たる本領を全ふせしむるには、如何にすべきやと云ふに、學校敎育も大事であるが、主として家庭敎育に待たねばなりませぬ、西洋では宗敎を精神敎育の主たるもの丶一として居りますが、我日本人には宗敎を以て其目的を達することは容易ではありませぬ、今日耶蘇敎に身を委ぬる婦人の間にも、いかゞはしき風評を耳にすることが多く、要するに家庭其者が最も大切であります、如何に學校で立派な修身を聞かされても、家庭に於て淫風吹き荒さんで居つては、少しも役には立ちませぬ、若し家庭が嚴肅であつたならば、學校に於て敎へられる敎師の訓言も、深く腦裡に刻まれて忘れざるのみならず、之を實行するに努めます、日本の如き妾があつたりするやうな家庭では、到底完全なる家庭敎育は望むことが出來ませぬ

父兄たる者は宜しく子女の敎育に深く心を用ひられたいものです。

日本では女子が深窓の内に育ち容易に戶外に出ざるを以て、其人を貴いやうに誤解して居るが、これは眞に蠻風の極で野蠻國ほどその風習が甚だしく、彼の支那や朝鮮の如き所は最も其弊が多い、從て其の怯弱にして不活潑なる婦人より生まるゝ子供も、亦た不活潑にして怯弱である、今日の如き憐れ果なき兩國の末路を來すも決して怪むに足りませぬ。

　私の故郷邊では柳腰と唱へて腰の細そりとして、丈の短かき、風にも倒るゝかと思はるゝばかりの婦人を、美人として褒め稱へ、我れも之を以て人に誇れば、人も亦た我が細腰を羨んでをる、殊に顏形が揃うて居れば首から下は、少さくつても曲つてゐても、彼れは佳人なり、傾國の別嬪なりとして居つたが誤まれるにも程があります。眞の美人と稱するものは、身體の全部が充分に完全に發育して申分なき者を云ふべきもので生理上腰部は太く、乳房は大きなものを、宜しとすれば、その部分、いやが上にも大なるを喜ぶべきことであります

全體腰の大なるものは總て強い、彼の相撲取の如きも強いものは大抵腰部が太く、牛馬の如きものもさうであります、苟も發達すべき所が充分に發達して居る眞正の美人の子ならんか、其胎内より生まるゝ子供は必ずや壯健である、怯弱なる婦人の胎内よりは强健なる子供の產れる道理がない、十ヶ月と云ふ長日月の間胎内に宿り居るものであるから、どうしても强健なる胎内に居らぬと、子供は立派なる發育を遂げやう筈はない。惰弱なる身體より生まるゝ子供は、又惰弱とすれば、一國の上より見てどうしても、婦人の體育を圖らねばなりませぬ、女子體育が盛んでない以上は、日本國民の完全なる身體を發達せしめることが出來ぬ、さすれば洵に嘆はしき次第で、健全なる身體には勇壯なる氣象がやどると云ふは、啻に個人としてのみならず、國民全體の健康に關するのであります、是れはたゞに武力の上のみならず、農商工業の上に於ても將た學問上に於ても總て世界と格鬪する上に必要缺く可らざるものである。

殊に如何に社會が進むも、如何に國際法が發達するも、人間に慾望の存在する限りは、國と國との間に於て戰爭の存在は免かれぬ事實である、然る上は是非とも一國の運命を永續する上に於て、武力の旺盛を圖らねばなりませぬ、武力の旺盛はたゞ、氣象のみでは行かぬ、否な其の氣象もやはり身體の强弱によりて、左右せらるるものであるから、是非とも强健なる體軀の國民を要する故に其の國民の本源たる婦女子其者の强健を第一着とせねばなりませぬ、希くは體育に充分努められ、健全なる體軀を得て、天晴勇壯なる健兒を擧げられたいものです、さすれば我國は益す强國となつて、東洋の覇權を握るのみならず、終には宇内を壓するに至るでありましやう。此の國運の旺盛を致すも致さゞるも、皆な婦女子諸君の方寸にありと云ふも過言ではありませぬ、則ち諸君の健否は國家の盛衰に關するのであるから、今迄の舊慣を一掃して、日常體育に努め立派なる身體を造り、眞個に美人とならるゝことを希望致します。併し之が爲め御轉婆娘となり果てゝ、世の笑を買ふやうな事ではなりませぬ、淑德と品性とは何れの世何れの所でも、婦女子の生命にして又肯綮なることを忘れてはなりませぬ。

THE "JOGAKU SEKAI" ENGLISH COLUMNS

Conducted by ISOH YAMAGATA.

THE WORLD'S RICHEST WOMAN.

Undonbtedly the richest woman in the world is Fraulein Bertha Krupp, who inherited the big Krupp Iron Works at Essen, Germany. This young lady is the owner of most of the capital stock of the Krupp Company, which is $ 40,000,000. Recently the company declared a dividend of 6 per cent, the total seem thus distributed being $ 2,400, 000, nearly all of which went to the Fraulein herself. She is stated to be a sensible business woman, who knows how to take care of her riches and to use them to better advantage than in mere ostentation and pomp. She is accomplished and benevolent, and is said to be in high favour with the Emperor and Empress of Germany. She gives personal attention to her great properties and her extensive business, and she is keenly interested in the welfare of the thousands of workingmen in her employ.

* * *

A WASHERWOMAN'S SAVINGS.

Speaking of riches, many men, and women, too, think that in order to grow rich they must earh large sums. But the examples of a large

女學世界英文欄

山縣五十雄

世界第一の金滿婦人

疑ひもなく世界第一の金滿婦人は獨逸國エッセンにあるクルップ大鐵工場を受け繼いだベルタ、クルップ孃であります，此若き婦人は四千萬弗の資金を有するクルップ會社の大株主でありますが，近頃同會社は六分の配當をしました，それで分配された總金額は二百四十萬弗でありますが，其殆ど總ては同孃の手に歸しました．孃は商業の才ありて，如何に其財產を守るべきや又之を無益の飾りや奢りに用ひずしてよく利用すべきかを心得て居るそうで，諸藝に秀で慈善心深く，獨逸帝及び皇后の厚き眷顧を受けて居るといふ．孃は自ら其大財產と大事業とを處理し，其使用する數千の職工の幸福を計るに銳意熱心であります．

註　Fraulein 獨逸語の Miss なり—Iron works 鐵工場—capital stock 資本株—dividend 配當—ostentation 外見—accomplished 諸藝に達する—give personal attention 自ら處置する—keenly interested 熱心に配慮す．

* * *

洗濯婆さんの貯金

富のことをいふにつけ，多くの男子，又婦人も金持になるには大金を得ねばならぬと思つて居ります．然し多數の金滿なる男子及び

number of rich men and women show that they have grown wealthy because of the habit of saving small amounts. According to an American paper, an Irish washer-woman, who died in Hartford, Connecticut, recently, left an estate valued at six thousand dollars, which she had saved from her earnings over the wash-tub. She bequeathed it to her relatives in Ireland. There are probably many men and women, who earn three times what she did, who would find it difficult to raise six hundred yen, to say nothing of six thousand dollars, on their savings.

婦人の例は僅かな金を貯蓄する習慣の爲めに金持になつた事を示して居る.米國の一新聞に據れば,近頃カンネクチカツト州ハートフオード市に於て死去した愛爾蘭生れの一人の洗濯婆さんは洗濯盥で取つた金を貯蓄して,六千弗の價のある財産を遺したといふことであります.之を此婦人は愛爾蘭に居る親族へ遺しました.思ふに此婦人が取つた金の三倍も取りながら六千弗は愚か,六百圓も其貯金から都合の出來かねる男子や婦人が多くありませう.

註 Speaking of riches 富のことをいふにつけ—have grown wealthy because of の爲めに金持ちになつた—habit 習慣—saving small amounts 僅かな金を貯へる—valued at 價のある—bequeathed 遺した—earn three time what she did 彼女が取つた金の三倍も取る—to say nothing of six thousand dolars 六千弗はいふ迄もなく.

* * *

A POLISH LADY NOVELIST.

One of the greatest women writers living in Europe is Eliza Orzesko, a native of Poland. Energetic, deeply sympathetic, warmly enthusiastic, she has spent forty years of her life in the endeavour to spur her oppressed compatriots on to work and struggle for their country and for themselves. Her own life-story is a romance in itself. As is the case with most of the champions of liberty in Poland, she belonged to a noble family. Her childhood and early youth were filled with happiness.

ポ|ランドの閨秀小說家

現に生存せる歐洲第一流の閨秀作家の一人はポーランド國の人エリザオルゼスコ女史であります.女史は精力の强い,同情の深い,熱心な人で,其生涯四十年の間を國の爲め又自巳の爲め進んで力を盡すべく,壓制の下に苦める同國人を皷舞奬勵するに費しました.此婦人自身の生涯の話はそれだけで既に小說で,ポーランド國の自由の戰士の多くと同じく,元は貴族の家より出で,幼年幷に青春の時代には幸福で滿たされて居ました.家は富み,高等敎育は受け,十六歲の時結婚して,親愛なる親族

She was rich, highly educated, a happy wife at sixteen, and had many dear relatives and friends. But in that terrible year for Poland —1863—when the Poles attempted an unsuccessful rebellion against Russia, all these joys were ended. Her husband was banished to Siberia, their wealth was confiscated, and her relatives and friends were exiled, killed, or forced to flee. "Forsaken, ruined, sunk in sorrow," she says, "I began to write."

や友人が多くありましたが，ポーランドにとりて彼の惧るしき年，即ち同國人が露國に逆ひて叛を起して成らざりし一千八百六十三年に，總て此等の喜びは終りを告げ，夫はサイベリアに流され，其富は沒收され，其親族友人は或は流され，或は殺され，又は他國へ逃走しました．女史の言にいはく"世には捨てられ，家は衰へ，悲みの中に沈みて妾は初めて筆を執りたり"と．

註 Energetic 精力の强い—to spur her oppressed compatriots on 其壓制されて居る同國人を鼓舞する爲め—life-story 一生の話—as is the case と同じく—champions of liberty 自由を回復せんとて戰ふ志士—rebellion 叛亂—banished 流さる—confiscated 沒收さる—forsaken 見捨てらる．

* * *

A GIRL'S HEROISM.

The following inspiring story is reproduced from an English paper :—

A girl stood one day in the waitingroom of an office in London. She had come in auswer to an advertisemnt, to apply for a secretary's post, and was awaiting her inspection. She needed the position and she waited anriously.

Presently she was called into tha office and the interview was satisfactory, but she was asked to wait, as there was anothar applicant for the post to be interviewed. She went into an adjoining room, and

少女の義勇

下に揭ぐる感ずべき話は英國の一新聞から轉載するのであります．

或日一人の少女は倫敦の或事務所の待合室に立つて居りました．此少女は廣告に應じて書記の位置を求むる爲めに來たので，今試驗を待つて居るのでありますが，其位置に就く必要があるので心配に待つて居ました．

間もなく少女は事務所へ呼び入れられましたが會見は滿足でありました．然し尙一人其位置を求めて居る志願者があるので，これに會ふ間待つやうにといはれました．それで少女は次ぎの室へ行きましたが，開いてある戶から，一人の小柄な顏色の惡い婦人が質間に

through the open door she saw a small, pale woman, nervously answering the questions put to her, and could hear the pitiful story of her husband's death, the small children dependent upon her, and her need of work.

The woman was told, however, that her services could not be accepted, as another person had already applied, and had just received a promise of the position.

At this point the girl listening in the next room was filled with joy as she realized that she was the accepted person. The next moment she saw despair written on the face of the widow, and perceived suddenly what this failure meant to her.

"I can't do it; I can't take it from her," she murmured, and without stopping a moment to consider she walked quickly back to the other room, and said quietly to the employer, "I wish to tell you that, on consideration, I find the position you offer would not suit me. Good morning," and she left the office without another word.

おそるおそる答ふるを見，又其婦人の夫が死んで小さな子供が幾人もあつて母親を賴みにして居る事や，仕事が必要である事等の憐れな話を聞くことが出來ました.

然し其婦人は旣に應募の志願者があつて，今しも其位置を與ふるとの約束をしたから，採用する事は出來ぬといはれました.

こゝに至り次ぎの室に耳を傾けて聞いて居た少女は，自分が採用されるのであることを知つて喜び勇みましたが，すぐ又其寡婦の顏に失望が現はれたのを見て，忽ち此失敗は其婦人にとりて如何に辛いかといふことが分りました.

少女は口の中で"妾はそれをすることは出來ない. 彼の人の位置を取ることは出來ない"とつぶやいて，少しも思案することなく，他の室へ急ぎ行き，靜かに雇主に向ひていふやう"よく考へて見ますれば貴君の與へて下さいます位置は私は向きませぬから御斷りをしたいと思ひます. さやうなら"少女は他に何も曰はずに事務所を立去りました.

註 Inspiring 感すべき—reproduced 轉載する—waiting-room 待合室—in auswer to on advertisement 廣告に應じて—to appy for 求むる爲めに—a secretary's post 書記の位置—inspection 試驗—interview 會見—applicant 志願者—dependent upon 賴る—her service could not be accept 彼女の勤務は採用することが出來ぬ—realized 知た—despair written on the face 失望顏に現はれる—what this faiiure meant to her 此失敗(位置を得られぬ事)が彼女にとりては何の樣な事を意味するか—on consideration 考へて見れば.

落花有情

大町桂月

某令孃に與ふ

家内より承り候へば、御身は、此頃文壇に評判よき某に思召有之、小生に取りもつてくれよとの意をほのめかされ候由、さては、御身も某の才筆にござつたるにや。さるにても、當世のハイカラ式に、直接談判と出掛け給はざりしは、殊勝なる事と存じ候。一時はいやな思なさるゝかも存せず候へども、小生に御相談ありしは、つまりは、御身の仕合に候。西洋人の語に汝若し愛讀する書あらば、決して其作者に逢こと莫れと、戒めたる事有之候ふが、實に尤千萬の事と存候。元來文筆は、よく人を動かすものにて、殊に文學を好む少女達は、なほ更動かされ、見ぬ戀にあこがれて、定めし、やさしき御方なるべし。幸福なる家庭が作らるべしなど思ふもの多けれど、それが大に考へ物也。直言致し候へば、文學其物は、尊きものに候へども、文學者は、男子中の屑に候。古今東西、數多き文學者の中には、人物らしい人も全く無しとは申さず。されど、今の世、軍人社會、政治社會、實業社會には、男らしい人も、人物らしい人も有之候へども、文學者は見渡した處、ろくな人は、ひとりも居り申さず。御前樣の思召のある某の如きも、筆の上こそは、立派なれ、實際は、下劣なる男に候。小生はよくその人となりをも、その品行をも承知いたし居り候ふが、人身攻擊するやうに聞えては面白からず候間、精しくは申さず、唯御前樣の爲めを思うて、御斷念あるべしと一言だけ申上候。小生のやうな虫も殺さぬお人好がこのやうなとを申すは、よく／＼の事と御推察願上候。元來、未だ其人を識らずして、文のみを見て、直に其人を戀慕するといふことは、けいそつ極まることに候。小生の如き、二十年も文筆に從事するものにありては、文を見て、其人を判するといふことも出來候へ

ども、失禮ながら、お前樣の年輩にありては、それは不可能の事と存じ候。むづかしさうなこと言へば、頭のよき人、知つたさうなこと言へば、博學多識、やさしげなことを言へば、人情のあつい人、ふざけたこと言へば眞面目ならぬ人、えらさうなこと言へば、えらい人と思ふやうな淺薄なる鑑識を以つて、人を判ずるは、年少者の常に候。それを以て、讀書のみに用ゐ居れば、まちがつて居るにしろ、さまで害はなけれど、結婚問題に應用すれば、危險きはまることに候。以後、文によりて、その人にほれるといふことは、斷乎として、おやめになるやうに御忠告申上候。

文學が好き故、文學者の妻になつたら、さぞ面白からうとは、經驗のなき年少者の、よく想像する所に候へども、それも間違に候。二月や三月やは、その想像通りに、面白きこともあるべけれど、起きても文學、寢ても文學にて、家庭が治まるものにあらず、夫も執筆、妻も執筆、小兒が泣いた、あなた見て下され、いや、お前見てやれといふやうになりては、家庭は、實に亂脈に候。同姓相はじき、異姓相引く作用は、電氣にのみあらはるゝものにあらず。夫婦の間にもあらはるゝことに候。

お前樣の事なれば、清貧に安んずるは、わけも無きことに候ふべければ、その點のみは、文學者の妻たるに適し候へども、御母上樣事、一生貧乏所帶をふりまはされたるとなれば、せめて、娘は、少しは、らくな處へやりたしと思はるゝなるべし。小生固より世俗的に金に嫁せよとは申さず。されど、生活問題は、何人も一考せざるべからざることに候。自分一身は、どうにも、あきらめが付き候へども、男の子が出來た、高等の教育を施す學資なし。女の子が出來た、貧乏で、もらひ手なしといふやうな境遇には、御身をあはせたくなきが故に候。

聖人君子では、文學者になれず、英雄豪傑でも文學者にはなれず、文學者といふものは、槪して、神經質の小つぽつけな人に候。神經質故、小さなことにも氣がつきて、詩文が面白く出來候ふが、一方に磊落を解す

る程な文學者ならよけれど、十中八九は、神經質一方痴情一方にて、わけがわからず、從つて品性いやしくまことに、箸にも、棒にもかゝらぬ人達に候。小生の妻なども、あゝ〱、文學者の妻にはなるものでなしと、日常こぼし居り候。殷鑑、眼前にあり。小生の妻の不平をきゝて、御參考になさるべく候。

殊に文學者などいふものは、神經質の上に、空想がつよきものに候へば、婦人に對する目も肥え、慾望も大に候。自分は、男子中の屑のくせに、妻をめとらば陰麗華を得べしと、胸中常に理想の美人を描き居り候へば、ちよつとや、そこらの美人では滿足いたさず。當年の山内容堂公のやうに、女もとより缺かず、われ必ず醜美を問はず、洒落を以て要となすとさばけたものは無之、所帶もちがよければ、よし、小兒の敎育が出來ればよしと、分別あるものも無之、自分不相當に欲張り候故、その結果は、言はずと知れたる失戀、われは煩悶せりなどいふ、下らぬ愚痴をこぼして、それで詩と云はれ、身が立てらるゝとは、不思議な世の中に候。お前樣を醜女と申すではなけれど、文學者は、つまり、さかり猫を追ひまはす狂ひ猫のやうなものに候へば、この點も、御一考なさるべく候。

砂の中にも金あり。文學者の中にも、時には立派な人なしとは、限らず。それに當つた人は、世に所謂拾ひものに候。小生は、たゞ一般の文學者の事情を申上げて、御身のみならず、文學熱にうかさるゝ少女達を戒めたき考に候。もとより、たゞ御參考に申上ぐるまで也。たゞ、小生に好意ある限りは、某の妻にとの御思召は、堅くおとめ申候。

某未亡人に與ふ

義雄樣戰死なされてより、殆んど一年になり申候。まことに月日のたつは、早きものに候。義樹樣事、この度、最優等の成績を以て、尋常科を卒業なされ候由親御樣の御身には、さこそと、よそながら嬉しう存申候。三十になるやならずに、後家になられしは、人生の大不幸とは申すものゝ、斯る良き御子持たるゝ御

身の上、行く先に、一大光明あること〻存申候。この頃、世間では、後家再嫁論などいふことが、やかましくなり、義雄様の朋友中にも、お前様に御再婚あるやう、小生よりお勸め申すやうにと、忠告してくれるもの有之候間、その好意だけを御知らせ申上候。かねて、小生の意見をも申上候。

小生は、再嫁の事に關しては、硬派にもあらず、また軟派にもあらず。その人の境遇次第にて、どうでもよしと存候。年若くして、子の無き人や、獨身にて家計を立つることの出來ぬ人などには、むしろ再嫁する方を勸め申候。されど、お前様事、お年は、まだ若けれども、當年十一歳になら〻義樹様を始めとし八歳の御男子、六歳の娘御もたる〻上に、家計もゆたかなる方に候へば、後家を立てらる〻が、御得策かと存せられ候。亡き義雄様とは、兄弟も啻ならぬほどに入懇に候ひしかど、これは、必ずしも、義雄様の爲めにのみは申さず。お前様の爲めを思うて申上候。或は例の老人の冷かなる說法と御聞取りになるやも計られず候へども、生者必滅、會者定離の世の中、三十にて夫に死別る〻が不幸ならば、六七十にて死別る〻も矢張り不幸にて、人の欲には限なきものなるが、あきらめやうにて、十年つれ添ふも、四五十年つれ添ふもつまりは同じ事に候。小生とても、二十歳の後家は立てられても、三十歳の後家は立てられずといふ諺の意味がわからぬほどに野暮な男には候はず。されど、色即是空、臭骸相抱いて樂むは、畢竟するに、人間一場の夢に候。世に色を好まざる人は無之候へども、飲食の如く、缺くべからざるものにはあらず。酒や烟草と同じく、思ひ切つて廢すれば、廢せらる〻ものに候。御承知にも候はむが、小生事、四十歳の男盛りに、妻を失ひてより、後妻をめとらず、妾を置かず、茶屋遊びも致さず、正しく空房を守りしこと、茲に二十六年に及び申候。たゞ嫁をかはいがれば、何のかのと人に蔭口言はる〻とだけが、苦しく候ひき。その點は、お前様も同じ事にて、小生の如き老人が折々參上しても、人は何とも言はざるべけれど、これが今少し若き

男ならば、世間では、疑心暗鬼を生じて、とんでも無き噂いたすものに候。既にこの頃、ちらと耳にしたると有之候へども、お前樣を確信致居候へば、大に腹が立ちて、あべこべになじりつめてやり申候。然し瓜田に履の譬も有之候へば、用心の上にも、用心し給はむと、念の爲めに申上候。今でこそ少しは御不自由も有之べけれど、御子樣達が成業せられたらむ曉には、却つて幸福なりしと思はるべしと、小生の經驗に徵して、御推察申上候。

今ひとつ申しあげたきは、御子樣の敎育の事に候。とかく、女親は、子をあまやかしすぐるの弊有之候ふが、賢明なる御前樣の事に候へば、そのやうな心配も毛頭も無之事と存じ候。されど、男親がありても、なほ可愛い子に旅させよとの意にもとづきて、他家へあづける人も有之候。義樹樣が中學に入らるゝやうにもなりて、もしさる思召も有之候はゞ、適當なる處をさがし申すべく候。倅でよろしく候はゞ、幸ひ、敎育に從事いたし居る身に候へば、御引受致させ申すべく候。とかく年とると、餘計な老婆心を起すものにて、或は御氣にさはるやうな節も有之べけれど、心ばかりは、何卒御賢察有之たく候。庭前の櫻、今が盛りに候次の日曜、御暇に候はゞ、御子樣達御同伴にて御來車の程待上候。

再婚說

此頃は頻りに軍人の未亡人再婚論が各新聞に雜誌にのりますがいくら智慕のある方でも男は女の深心は知りませんから私が諸女さんに代つて申しませう、兎に角子供の在る人は出來る限り（他にかせぎに出しても）再婚はせぬがよいと思ひます、なぜと申せば子供の身に何程財產があつても、實の母親は在り乍ら合ふ事の出來ぬ程、不幸な者はあるまいと考へます、そんならば子供の無い人は再婚するがよいかと申しますと、大低は再婚するのがよいと思ひますけれども、たつた一人の男の子に戰死された上に、嫁に再婚されたら殘る老の身はどうなるでせう、こんな時は再婚せずに出來るだけ老の身を慰むるが貞女だと考へます、私の二人の妹の夫が出征して居りますから、若し戰死しましたら右の樣にすゝめるつもりですよいかがでせう。（某女）

社交

社交界の先達 千家男爵夫人

婦人記者

夫人俊子は子爵伏原宣足氏の妹にして嘉永四年十月の出生なり明治十年を以て今の東京府知事男爵千家尊福氏に嫁す、人と爲り忠實寛和善く家政を整理し子女を訓育するの傍ら篤志看護婦會の副會長、報國婦人會の幹事、愛國婦人會理事、軍人遺族援護會の會頭を始め公共事業に盡瘁し婦人社會具瞻の標的たり。

戰雲一たび極東の天地に漲つてより、滿身の精力を國家に貢獻せられつゝある貴婦人尠からぬ中に、錚々の聞えある千家男爵夫人は、記者が每々訪問して面晤を得るの機會少く、偶々面晤を得ても緩々御話を承るとの出來なかつた方で御座います。三月四日は篠つく雨に風さへ交つた空でしたが、御約束下すつた午前、烟霧で包まれたやうな芝公園切通しの杉木立の間を、赤裏外套の小學生徒や柿色合羽の女學生が三々五々往違ふ樣など面白く感じつゝ、坂道を少し上つて官舍の御門を潜れば、杉、檜の亭々たる中央に刈込松を繞らしたる楕圓形の池あり、巍然たる赤色西洋館の石階を登つて御玄關に伺ひ、廊下を越えて應接室に導かれたので、書生さんはストーブへ石炭を投げ込み、綠色天鵞絨の椅子をすゝめて立ち去りました。此應接室はコテ／＼飾り物など置かれない方ですが、京燒なる鼓腹の狸、國旗を打ち振つて萬歲を唱ふる童の置物など目を引くに足り、白茶地に栗色唐草の摸樣ある窓掛はレースと反映して美しく、窓硝子に無遠慮な點滴を試むる雨滴をも興深く感じつゝある折柄、夫人は出で來

られましたが、細かい米澤飛白の小袖に對の御羽織、栗色綸子の襦袢の襟を僅かに現はされ、前髪の程よく膨らんだ束髪は、透徹る色白の御顔に配合好く、濃い眉毛と重瞼の張りある眦と、締つた口元は限りなき愛嬌を湛へ、大々として御體格は威厳自ら備り、優しい京言葉の中に快活な調子を交へられ、客をして慈母に接する如き想ひあらしむるのは夫人の天資が吸引力に富んで居られるからでせう。夫人は豊腴とした御手先を重ねて御挨拶なされ、左の通り話されました。

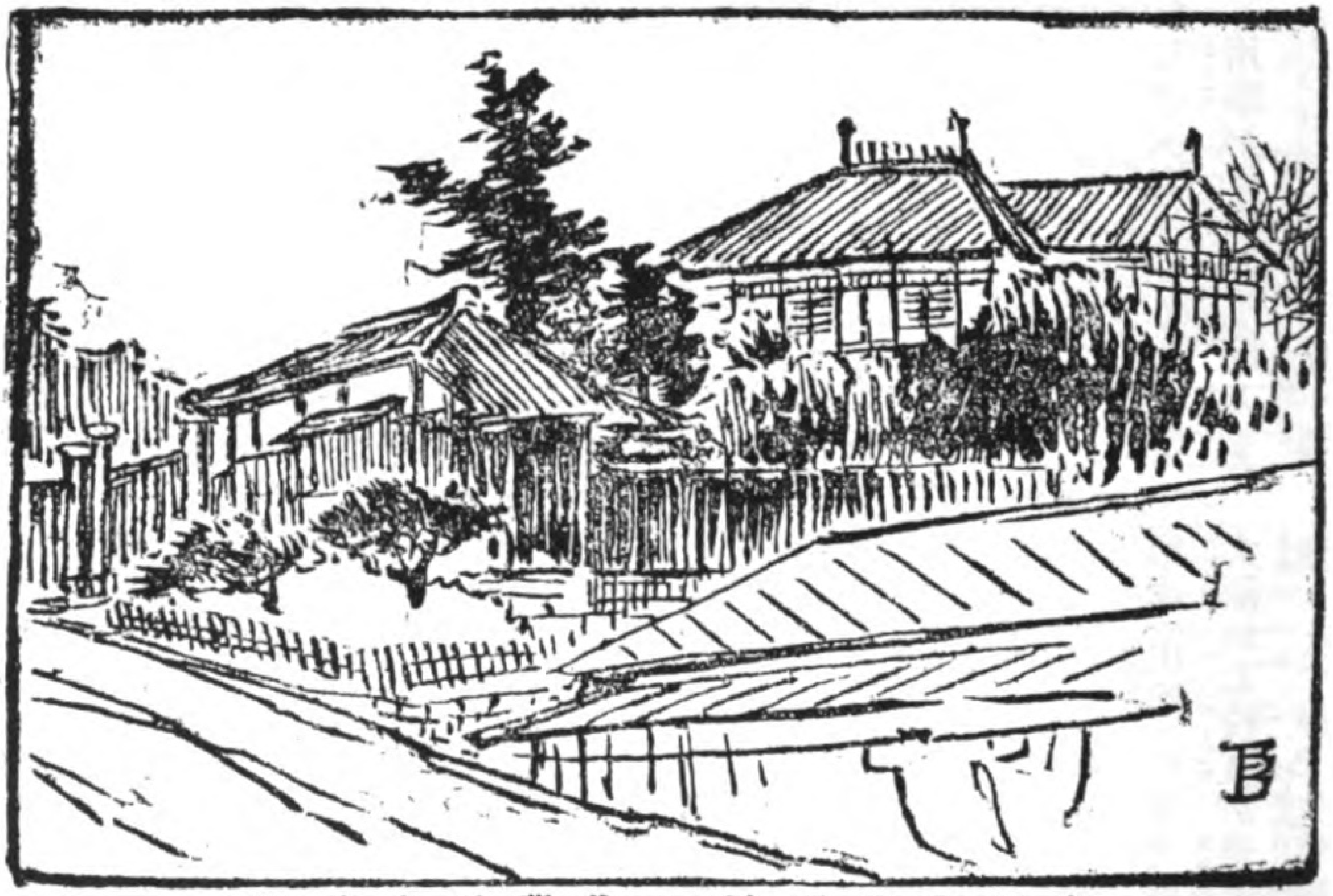
▲外出多し

今日も赤十字へ出ます筈のところ、家内中風引で揃ろなく缺席致しました。ハイ傷病兵の出迎は鍋島様が御差支の際出ますので……、愛國婦人會も一ヶ月に二度ですから、成るべく出勤致す積りで御坐いまして……イエ何の御役にも立ちませんが、此際に出來るだけはと存じますので、大抵日々外出ばかり致して居ります。私が不在ですと、矢張り家内の用事が後れ勝ちですから、在宅の時は先へ立つて解物など致して洗濯させるやう指揮が却々忙しう御坐います。併し御陰で身體は大層壯健になりました。

▲軍人遺族授産會

授産會も皆様の御骨折で漸く此頃好い都合になりましたが、最初は却々骨が折れまして……、イエ基本金は少しも無しで、ホンの發起人の方々の御盡力を願つて企てましたので、充分な事は出來ません。それに軍人の家族も仕事に叄るのを餘り好まぬのが多く、此方から頼んで來て貰ふやうな次第でした。矢張り慰問會や何かゝら扶助金があるので、安心して居る所もあるからでせう、併し夫が戰地で働いて居るのに、家内が安閑と遊んで居ては濟まぬと云ふとも、漸々解つて叄つたと見えて、近頃は大きに勵むやうになりました。仕事は兵士のシャツとヅボン下の裁縫で、毎日食事を致させ一着三錢の賃金と致してありますが、善く稼ぐ者は一個月九圓位取ります、中にも昨年の夏此會が始まつてから、大分貯金して居る者があります。稼いだ金は戰地の夫へ送つたりして、却々感心な婦人が御坐い

ますよ。此裁縫は初めに職人を雇つて習はせたのですが、よく／＼仕事の出來ぬ者は、洗濯の方を致させます。これは皆兵士のシャツやヅボン下を大釜で煮て洗ふのです。ハイ子供は多勢連れて參りますから、子供の守を別に置いてあり、教師も雇ふてありますので、心配なく皆んな仕事を勵んで居ります、先達て軍人援護會から一千圓贈られました位なので、私は何卒此會を戰爭後も續かせたいと存じて贊成の御方を澤山得やうと賴み歩いて居ります。會は唯今赤坂檜町十番地に置いて御坐います。



兒玉大將邸（市ヶ谷藥王寺前町）

▲御子達

子供は多勢で十人御坐います。長女は七年前、山口の毛利へ緣付きまして孫も二人出來ました私と此娘共は別に滋養食も致しませんけれど、皆な丈夫で、毛利へ參つた娘など、一度も患らつた事なく、醫者泣せだと言はれて居るさうです。

夫人の御實子は令孃四人で、他の四男二女は御脇腹であるとは承つて居りますが、夫人は兩者の間に少しも隔てを置かれぬのみか、令息の教育に尤も力を盡されつゝあるは誰でも感服する所で御坐います。當年六歲の令孃が、御脇腹の出なるに拘らず、夫人に

附き纏ふのを見ても、夫人の隔てを置かれずに愛育せらるゝ事が判ります。

▲御兩親の嚴正

私の兩親は實に嚴しい人達でした、父は習字の嚴ましいのが評判で、今でも議員(貴族院)さん達の中に、『貴女の御父樣には幾度も打たれました』と仰しやる方が御座いますよ。母親も却々紀律が正しう御座いまして、毎朝八時までに自分の化粧を全然濟ませ、子供にも化粧を整然とさせて、裁縫に坐り、一室隔てた座敷に子供の机を並べて、讀み書きを習はせ、其監督をしながら針仕事を致しました。昔の女は讀書と申しても四書五經や女大學位で、唯今の若い方のやうに行屆いた教育を受けなかつたのですから、御耻かしいので御座います。

▲旅行

何處へも參りませんよ、授産會などへ出ましても、半日も留守に致しますと、少しも用事が捗取つて居りませんから、ツイ旅行などに出ますのが臆劫で、一昨年郷家の親が病氣で據ろなく郷國まで行つて參りましたが其他は餘り出掛けたとは御座いません。ハイ靜岡には一年居りましたが、淺間樣の丁度後で寂しう御座いましたから、此家のやうに御人も入らつしやらず、靜かで暇が御座いました。埼玉に居ました時は、縣廳と宅と直くつ付いて居ましたから、本當に毎日〳〵御客ばかりで困りました。

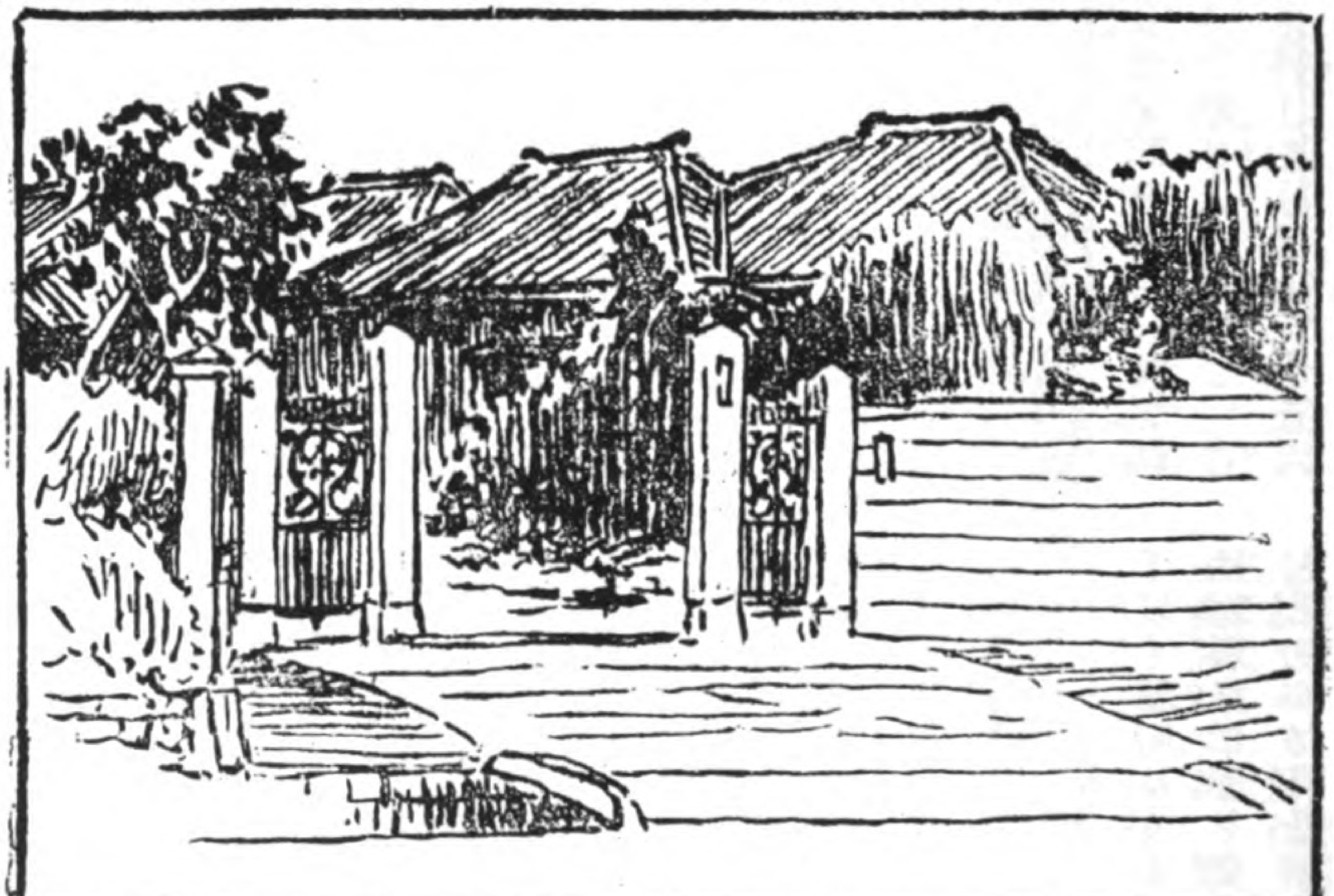
▲和歌

和歌は一番好きですが、家の事にばかり拘けて、トント出來ませんが、用をしながら樂むには極宜しう御座います。ハイ大抵主人に添删して貰ひますので、斯道の大家に見て戴くとは餘り御座いません。書は主人が極好きで、方々から頼まれますが、忙しい間隙を見計らつて、チョイ〳〵認めるので御座います。

▲演劇

郷國(出雲)にも可なりの芝居小屋がありまして、よく大阪から役者が參りました。東京では慈善芝居だけに參りますが、先年歌舞伎座で保育會の慈善芝居を見ま

した。其時の狂言は政岡の飯焚場でして、政岡が御飯を焚く間に千松と鶴喜代が雙六をして遊ぶ所を見せましたが、チヨツト新工夫で御坐いましたよ。一番仕舞の幕は保育會の狂言で、其筋は、板垣の奥樣が四人の子を引取り、佐竹さんが其子供を鎌倉へ連れ行き丹精して育て上げ、四人が監獄から出る時渡して遣ると云ふので御坐いました。あれは何でも板垣さんが芝翫の處へ入らしつて御頼みになつたので、僅かの給金で勤めたと申すことです。西洋芝居は幕の明くのが少しも分りませんよ或時幕の間に運動場へ出て居



黒木大將邸

りましたら一人の奥さんが幕の明いて居ることを知らして下すつた位で、拍子木を打たないのですから變で御坐いますよ、ハイ鳴物は一切入りません。時々樂隊がチヨツト入るだけですが如何も間が拔けて居ります芝居は鳴物で引立つのですネエ、鳴物が好いんですネエ。

▲能

能も上品な物ですネエ、郷里の父が大層能好きでして私が子供の折は善く拉れて行つて見せて呉れました父は能の皷を善く打つた者です。

▲植物

植木類は一體好きですけれども子供がいぢりましてネエ。ハイ

若香園へは善く參つて見ます、郷里の祖父は蘭が好きで澤山育てゝ居りました。

▲衣服道具類

古い衣服道具類は、皆んな郷國へ置いて御座いまして旅へは一切持つて參りません。錦繪や草雙紙の古い物も郷國には澤山御座います。宅にも少しはありましたが、子供が隨分破つて散り〳〵になりました。彼樣いふ物は昔しのが宜う御座いますチエ。色でも紙でも當節のとは違ひます。畫は何によらず、大好きですから畫が出來たら嘸樂みだらうと始終左樣思つて居りますよ。

記者は以前拜借した愛國婦人會總會の折の寫眞の事から、御家族御一同の寫眞を拜借致したいと願ひましたところ、夫人は令嬢方と御一緒に撮影されたる御秘藏の寫眞を貸して下さいました。此時最早正午に近う御座いましたので、長坐を詫び惜しいお別れを致したので御座います。

家庭教育家ジョンソン孃

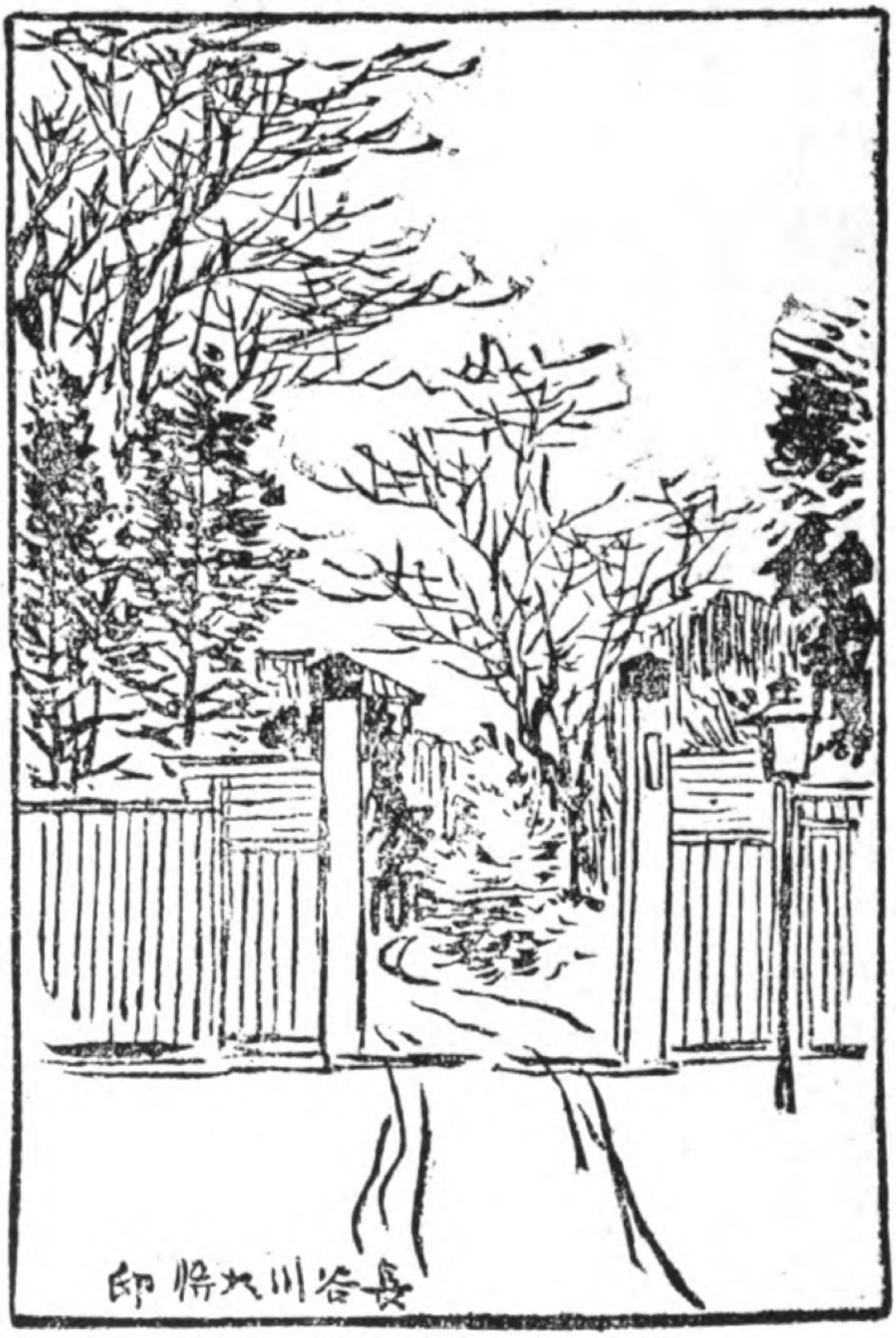
婦人記者

ジョンソン女史は合衆國インヂアナ州の人で、本年四十五歳であるが、明治十九年二十六歳の時布敎の目的を以て我國へ渡來され、爾來秋田に山形に東京に不幸なる女兒を保育し敎導せらるゝと前後二十五人に及んだので、其中には乳兒もあり、遺傳病のあるのもあり性質の拗けたのもあつたのですが、女史は如何な者でも一度懷に入れた者は決して突き離すとなく、衞生に敎育に心身を勞して磨き上げつゝある熱心誠實なる事業を感歎せぬ者は御座いません。記者は今茲三月六日女史を千駄木の寓居に訪ひ女兒保育の實況を目撃し、直話を聽きましたから、かい摘んで紹介致します。

▲寓居

千駄木林町に立木を繞らしたる一構、咲き誇つた白梅は霜解路に影を交へて居る幽靜な住居に、ジョンソンと記された門燈を認め、くゞり門を入つて植込の中を

縫ひ飛石を渉り格子戸に呼鈴を押しましたが、十五六歳の少婢出迎へてカキ金を外して招じ入れたので、名刺を差出し案内を請ひましたところ、肥滿な女史は溢るゝばかりの笑顔を以て出迎へ、記者を八疊の客間へ導かれました、客間は正面一間の床の間に紅葉の一軸を掛け、四方の小壁にはイエスの像を始め、各種の宗敎畫、不忍辨天の水彩畫等を掲げ、最も多いのは知人及び育て上げられた孤女の寫眞でした。絨緞は椽側まで敷き通されて、暖室爐も此椽に設けられ、窓掛は白地に御納戸色の杜若の中形ある縮で、質素なるも雅致を損せぬものと存じました。此客間の外に八疊の食堂兼敎室、六疊と四疊半の寢室、及び割烹室だけで、左して手廣くはないのですが、幼い女兒五人と少し年取つた女兒五人を世話するのに、一人の少婢のみで用を辨じ、塵一つ見えないのは全く紀律の正しいのと、働きに無駄がないのとに因る事と存じました。女史は安樂椅子をギチ〳〵動かしながら、極手輕い調子で記者の問に答へられたのです。



（早稲田南町）

▲朝の敎育

小さいのは十二歳が二人、九歳と八歳と七歳です。每朝私は五時十五分に起き、此室で身體を拭ひ、六時

にお孃さん（女史は子供を呼ぶにすべてお孃さんと敬稱されて居ります）を呼びます。大きい女兒達は八時に寢かして五時に起し、十二歳以下のは七時（夏は八時に寢かして六時に起しますが、睡眠の時間は充分ですから、朝は早くから皆目を覺して呼ばれるのを待つて居る位です、此室へ呼んで衣服を着換へさせ、襪を穿かせ、顏と手を洗はせ、口を漱がせ、髮を掻かせる間を合せて二十分と定めてあるので、最初はチョット間に合ひ兼ねましたが、近頃は全然慣れて整然と出來ますので、如何ほど後れても三十分より後れる者はありません。楊子、コップ、手拭、鼻拭、櫛などは、嚴重にしませんと、遺傳の病氣を他へ傳染す恐れがありますから、各自の所持品に一々其名前を記し、コップ代用の湯呑は各自形狀や彩色を異へて與へるのですが私が少し守らないと、直に紀律が亂れて、今朝は楊子が折れたから誰さんのを借りたと云ふやうな事をして困ります。室はストーブを焚いて煖め置き顏と手は湯婆の湯で洗はせ、口嗽は煮沸して脱脂綿で漉したのを用はせます、口嗽だけは是位清潔に致さないと齒を惡く致しますから……。何の雜作も無いやうですが、生れ立ちから不紀律に育つた子供が多いので、規則に慣すのが却々難かしう御坐いました。

顏洗ひの臺は、長火鉢ほどの大きさで、蓋を取ると石炭や薪が入つて居るのですが、布を覆へば集會の卓ともなるので、變化自在便利調法なものです。

▲食事と聖書

六時三十分から七時までを朝食の時間と定めてあります。食事の時間はゆつくり與へ、愉快に食べさせまするので、其間には決して小言を申しません。是れは餘程注意しませんと、衛生上非常に害がありますから、惡い感じを起させぬ樣に致すのです。小さいお孃さんは駒本小學校へ通はせますので、此處から七八丁もありますが、晝飯は宅へ食べに歸らせます、これは辨當だと滋養が足らぬと存じますから……。朝食が濟むと祈禱を致させ、聖書を一章づゝ講義して聽かせます。

▲便通の習慣

失禮な御話しですが、朝食後に必ず大便の通ずる習慣を附けますので、他の時に雪隠に參るやうな事はありません。大便を催さないお孃さんも厠へ永く置けば通じがあるやうになりますので、初めの内は「先生如何しても通じません」と言ひますけれども、二十分間も厠に居らせますと、必ず通ずるもので、漸々慣らすと定めた時刻に容易く便通があるので御坐います。夜分床へ入つてから、小便に起きるのも習慣なので、病氣でさへ無くば起きないものです、それで子供の中に小便に起きる者があると、其子供の夜食は飲物を多く與へぬやうに致します。

ウロンソン女史の平生



併し便器はチヤンと備へて置き、若し小便に起きる者があつても厠へは遣りません、宅の厠は外にありますので、寒い時分急に外の冷い空氣に當ると、屹度風を引くから外へ出さぬのです、日本の方は内厠に慣れて何とも思はぬやうですが、夜分締切つた家の内厠に入ると、肺の爲めに極惡う御座います。西洋では大小便の不紀律なのは大層耻辱と致して御座いますが、先達て一人の男の子を横濱へ連れて參る際、新橋停車場で發車の間際に先生便所、横濱へ着くと又先生便所西洋料理へ入ると又便所……、實に閉口致しました。或婦人の如きは、汽車

の中で「先生私は昨晩冷えて五度も小便に起きました」と側に男の人多勢居るにも搆はず、平氣で言ひましたので、本當に困つたです、西洋では赤子が漸と座る頃になると、椅子の中央へ孔をあけて赤子に腰掛けさせ、紐で身體を椅子へ縛り付けて、其下へ便器を置き、母親は側で「ベビー、ウーン〳〵」と敎えますが、自然便通の呼吸を覺えて、定時に致すやうになります。

▲寢衣、夜具

冬は綿フランネル、夏は浴衣地で圖の如き寢衣を拵えて着せますが、夏は手と足の筒先をシッカリ括つて蚤の入るのと寢冷を防ぎ、後の腰の所に釦を付け大小便の時の用意をして居ります、爾うして各自のを間違へぬやうに、異つた色の布で作つて置きますが、此寢衣は毎朝自分で乾させ、蒲團は下婢に乾させます、子供五人の寢床は、寢臺へ大きな掛蒲團を備へ、あとさし合つて寢かしますから、冷える心配はありません、併し子供はよく轉げ出すものですから、毎晩三度ぐらゐ私が起きて見廻るのです。

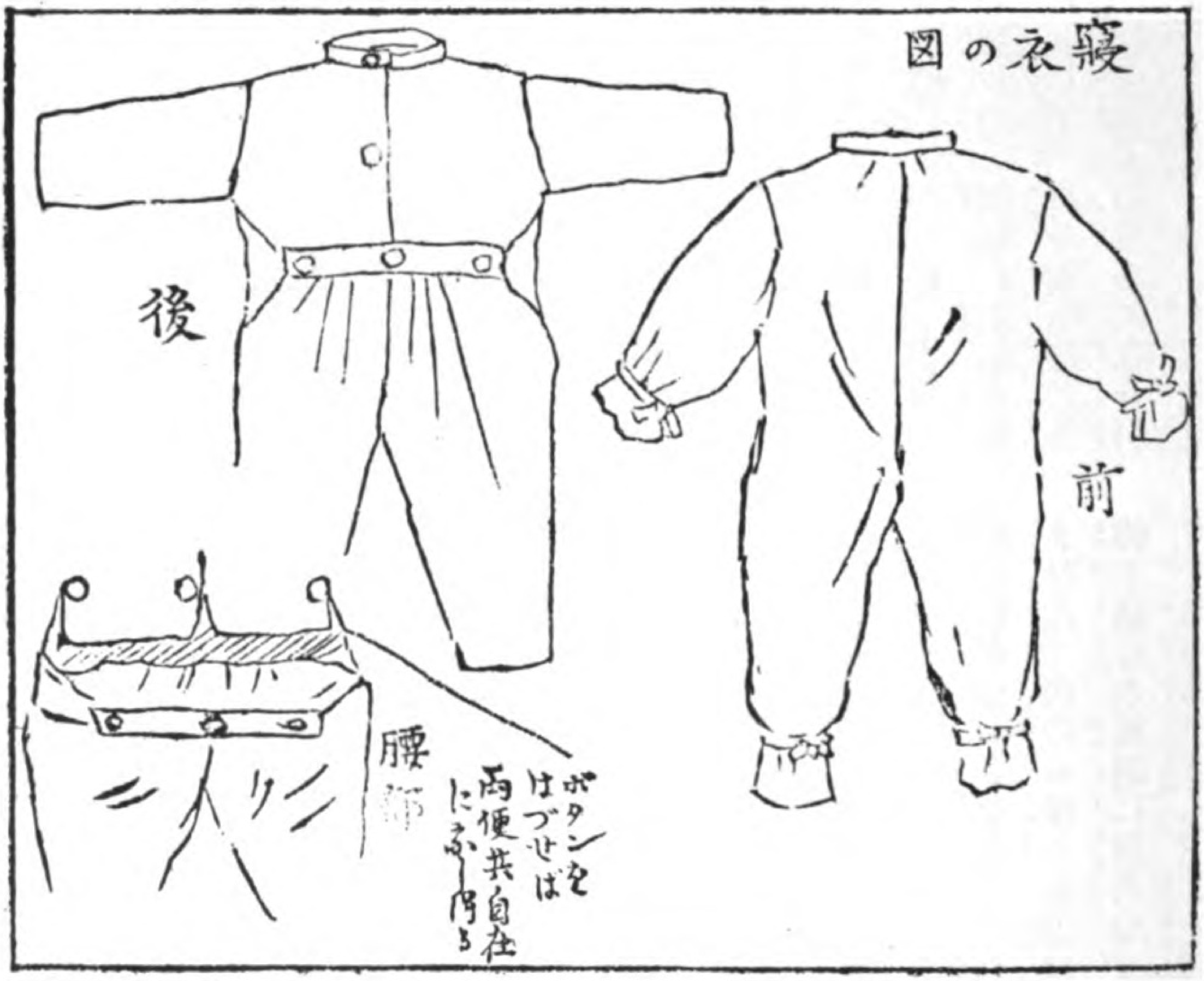
▲子供の受持

各自に相應の用事を受け持せて置きますので、朝は入口や庭を掃く者、ランプやストーブの始末する者など手分けして働きますから、僅かの時間で全然片付きます。これを慣らすには、最初一人にはランプ掃除ばかり、一人には庭掃除ばかりと云ふ風に、一仕事がよく出來得るまで毎日勉めさせ、熟練してから一人に二種以上の仕事を兼ねさせるともあります、子供も五歲になれば敎へやうで用事が出來るもので、私友人の家では、五歲と七歲の子供がストーブへ炭を入れたり湯を沸したりしますから、母親は自由に仕事を執つて居ります。私の處でも五人の孤女に各自用をさせますから少婢一人で事が足り、一週に料理會、編物會、婦人會などある上に、私が外の用向に出掛けましても、少しも不自由や混雜なく出來るので御座います。

▲金時計

私が山形に居た時、親子三人生活の貧民があつて、一日に僅か三錢の所得ですから、魚の腸など拾つて

食べて居る位でした、其家の幼女を私が引取りましたが、頭に一ぱいの虱でしたから、坊主に致し湯に入らせたところ、生れて以來覺えのない事をされたのを大層怨んで、私を殺さうとまで思つたさうです。其女子は却却惡い癖が直りませんで或時私の不在に、卓上に在つた金時計の硝子を毀して知らぬ顔して居りました。スルト他の子供達が非常に怒つて、先生の不在に出來た事は私共が迷惑する、先生の部屋へ入つて居たのは其子ばかりで、其兒の惡戯に違ひない、今に先生が歸られたら殺されると言つたので、其幼女大層恐怖し、私の歸宅した時には、兩眼を泣き腫して慄へて居ました所が私は『此時計の毀れたのは何でもない』と言つたものですから、子供ながらに案外と思つたらしく、私の顔を不思議さうに見詰めて居ました。ソコで私は其兒を膝に抱き上げ、『此時計は直になほるが、私は汝の惡戯と僞のなほらぬのを悲しみます、過失があつたら明白詫びなさい



僞り隱せば他の子等にも迷惑させ、汝も神樣の咎を受くることを私は歎きます。若しも此金時計の過失に懲りて改めたなら、此金時計の毀れたのは却て幸であります」と、泣いて教へましたところ、子供ながら非常に感じたと見えて、其後見違へるやうに善良になりました。總て子供達が何を毀しても、直ぐに持つて來て明白に申しさへすれば、私は決して叱つたことは無いので、僞りは他人を害するものと懇々教えて置きます。

▲二歲より育てし女兒

唯今此家に居る九歲の子は、二歲の時から私が養ひましたが、小さい子は又樂みなものですから、何處へ參るにも拉れて步き、食堂の中でも膝に抱いて居りました、其子は肺炎に二度も罹つたのですが、危い生命を取り留め、今では壯健になつて體格も却々好う御座います、其子は以前時候が少し暖かいと無暗に衣服を脫いだり、夜中に夜具を剝いだりして、風を引き終に肺炎に罹つたことがあつたので、私は其子の爲めに夜分何度も起きて蒲團を掛けて遣り、或は膝に抱き上げて亂暴に衣服を脫ぐことを戒め「汝の實母は肺病で死んだのだから、汝は何卒身體を壯健にするやうに氣を付けて下さい」と、何度も淚を溢して言ひ聽かせましたところ、次第に自分で氣を付ける樣になつたのです。

▲徐々と改善を計る

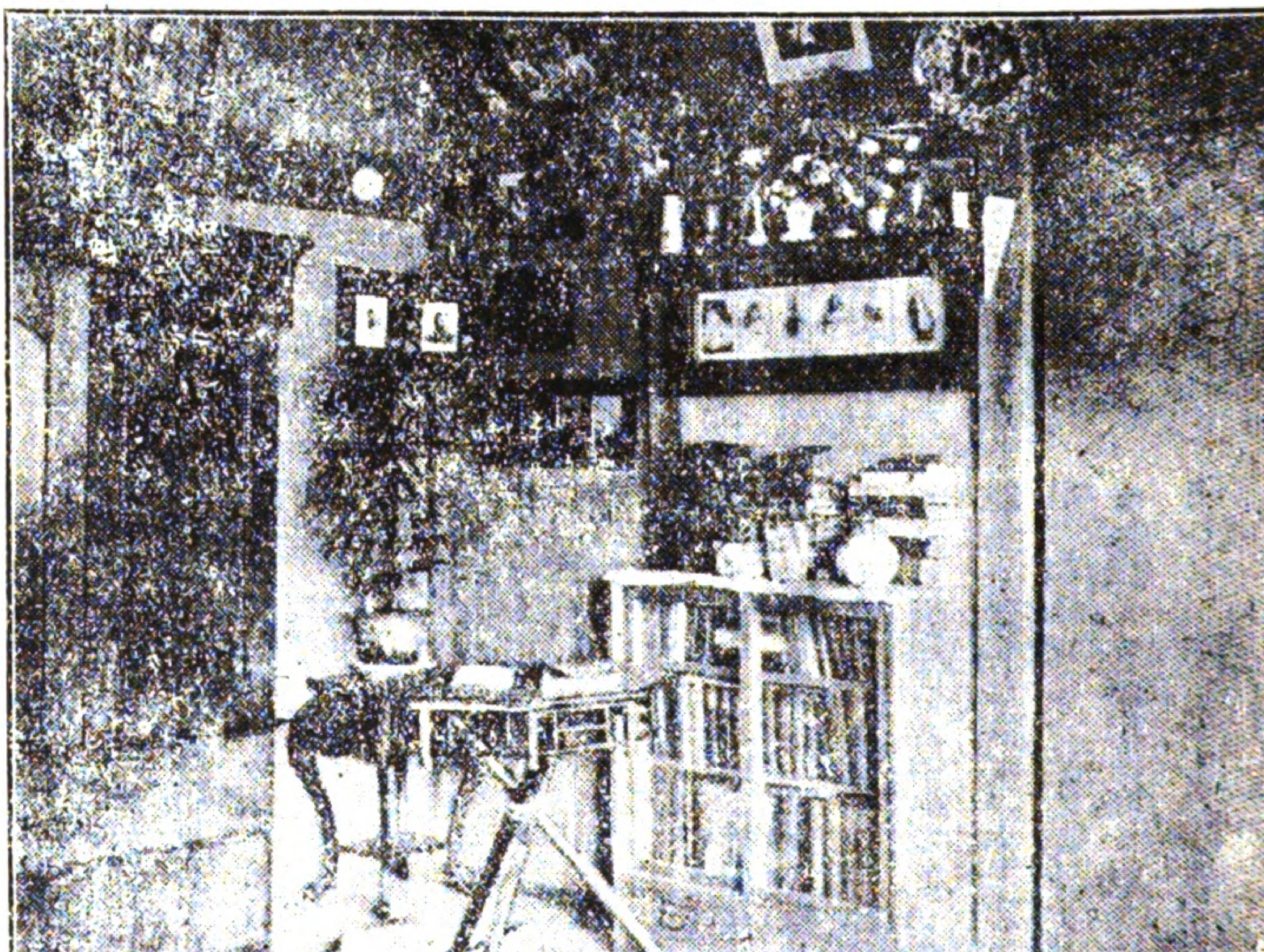
何に致せ、貧民の子や孤兒は兎角ねぢけた惡習が附いて居るものですから、急に懲らし直さうとしても、害があるばかりで効は少いのです。それゆゑ私は徐々と少しづゝ直して居るので、強く叱るよりも眞實の愛を注いで道を聞かせる方が、子供の心に深く泌みると思ひます。唯今一番日の淺い七歲の子は、母親が下等の女であつた爲めに、猥褻の言を平氣で喋言つたりするのみならず、私の言ふことを少しも用ゐませんが、追々他を見習うて直ることと信じます、一體孤兒などは唯精神の改善ばかりでなく、身體も改良させなければなりません。内のお孃さん達は食物其他の事に於て、不規律不攝生の境遇に育ちつゝあつた者ですから、腸胃病や皮膚病等が多く、其他脚氣とか僂麻窒斯とか氣管病

とか、種々の病源を持つて來ますから、此世話が一通りでなく、中には頭髮に虱を生す子もあるので、私が始終梳いて遣らねばなりません、私は總てのお嬢さん達の爲めに、食物衣服、其他衛生上に能く〳〵注意して居りますから、追々身體が良くなるやうで御座います。昨年の夏はお嬢さん(孤女)悉皆を引き連れて鹽原へ參りました。

▲小遣錢の注意

お嬢さん達には一週間

ウロンソン女史の書齋



に五錢から十錢までの小費を遣るのです。而して物を買ふには屹度私に斷らせ、惡い物ならば私が止めますが如何しても聞き入れないのは放任つて勝手に買はせて見ます、而して二三度自分で買つて懲りた者は、自然自分で勝手に買はぬ様になります。

▲成長したる女兒

大きいのは、音樂學校や職業學校など各々適當の學校に通はせて置きますが、中には志願して看護婦と爲り

永樂病院に勸めて居るのもあります。昨年提灯行列で怪我人のあつた際は、善く働いたので御褒美を戴きました。私は明治十九年から今日までに二度歸國しましたが、其時は友人の處へ預けたり、其兒の親類へ預けたり致したのです。私が歸國して居る時に、以前世話をしたお六と云ふ婦人が遙々私の處へ手紙を寄越し『私は先生も御承知の某氏と結婚したいと思ひますが、若し先生が日本へ御歸りの上が宜いと思召すならば、何年でも待つて居ます』と書いてありましたので、私はそれ程までに自分を信じて吳れるかと思ひ、實に嬉しう御坐いました。それで私は『某氏は信仰も確かで貴女とは好配偶だと信じます、互に眞誠の愛さへあれば、直樣結婚して共々に神樣の爲めに働いて下さい』と返事しました。此兩人は今幸福な家庭を作つて居るので、時々宅へ尋ねて吳れます。今宅に居る孤女さん達は、皆堅い信者で、私が總てを打任せても安心ですから、會計は私の留守中は任せて置きますが、料理から幼女の世話裁縫など、忠實に致して居ります。

▲幼兒の克己心

西洋では生れて一個月の間に全然正しい紀律の習慣を付けて了ひます。毎度よく出る話ですが、彼地では赤子の泣く度に乳を與へるとは決してありません。私の知人が日本で產をして三日目の事ですが、哺乳の時刻が來たから赤子を寄越せと看護婦に言ひました處、看護婦は次の室で何かして居てハイと言つたまゝ參りませんので、二度三度呼びましたが尙參りません、それから赤子は終に泣き出しました、此時看護婦は駈けて來て赤子を母親に渡しましたが、泣き止まぬ內は乳を與へぬと申したので看護婦は驚き感じたのです。泣かぬ時に乳を與へて、泣く時に與へぬとの日本と異るのに感じたさうです。西洋は赤兒に乳を與へながら眠らせるとは致しませんので、時刻々々に乳を與へて置き就寢時刻になれば、赤子が目を開いて居ても寢床へ入れ、燈を消して一人臥させて置きます。初めは泣いても放任つて置くと終に眠つて了ひ、漸々これが習慣となつて、おとなしく獨りで眠ります。總て子供は依賴

する人が居ると泣くものですが、大人でも矢張り其傾向があります。私自身が確に其一例になつたことがあるので、昨年信州へ旅行中、二人曳の車で淺間の噴火坑見物に參りましたが、歸りに一人の車夫が空車を曳いて逃げて了ひました、其時は最早薄暮ではあるし、それ迄に五里も歩いて疲れて居る足ではあるし、私は木の根へ腰を掛け蚊蚋に螫されながら泣き出しましたけれども後に殘つた車夫が『逃げた車夫は狂氣であるから、迚も車を持つて迎えに參りますまい、貴女は如何しても此處から宿屋までお歩きなさる外に仕方が御坐いません』と申しますので、私も據ろ無く夕方から四五里の山路を歩いて宿屋へ歸りました。私後で考へますに、彼の時後の車夫が居なければ、私は泣かずに歩いたのです、子供の心もこれと同じものですから道路で倒びましても、人が側に居なければ默つて獨り起き上り、親か知人が居て慰めるとワー〳〵泣き出します。

▲女兒の祈禱

お嬢さん達は小學校から歸ると、復習や靴足袋の繕ひを致し、聖書の暗誦も能く勵んで居ります、子供は却却記臆の好いものです。

女史は斯く話されつゝ、次の室から五人の女兒を呼び、膝近く列ばせて、默示錄何章、約翰傳何章、路加傳何章と云ふ風に、聖書各編の章數を言はしめ、次にソロモンの箴言第三十一章の第十節より第三十一節まで暗誦せしめられました。而して女史は極めて誠實な調子で——

これは昨年のクリスマスに暗誦させたのです。夫に對する婦人の心得に極めて味ある詞だと存じます。此中三人は望んで洗禮を受けましたので、あと二人も頻りに望んで居ります、けれども今少し道を聞かせてからと存じて未だ許しません。或人が赤兒に洗禮を與へて呉れと牧師に迫りました時、牧師は赤兒を抱き上げてベビー悔い改めましたかと申しても、赤兒は唯だニコニコ笑ふばかりでした、牧師は『此通り解らぬ者には洗禮を與へられません』と斷つたと云ふ話があります

東西も辨へぬ子は何も悔い改めるヿは無いのですから赤兒の洗禮は全く無益で御坐いませう。宅の子供等は毎夜祈禱の時に私の身の上を祈つて呉れまして、國元に居まする私の兄の病氣中は其平癒せんヿを祈つて呉れました。私のやうな不肖な者をも、斯くまで愛して呉れますかと存ずると、實に嬉し淚が溢れます。

女史は此處まで話されたが、傍なる一幼女を抱き締め、其愛らしい頰に接吻しつゝ、聲を顫はして兩眼に淚を浮べられました、女史の此熱誠に記者は深く感激しましたので、茫然として暫く記臆力を麻痺されたのですが、朧氣に記臆し居るのは、一女兒が醫師の處から歸つて參つた時、女史は菓子皿の「最中」を與へつゝ、「間食はさせないのですが、此兒は此頃口中が火ぶくれの樣に爛れて、ロク／＼御飯も食べず、可哀相ですから……」と辯解されました。又學校から歸宅した子供の顏色を一々熟視して、其健康を確められました。軈て孤女達は女史の命によつて各自秘藏の人形を持出して記者に見せましたが、女史は樂しげに之を眺めつゝ、此人形は鄕國の友人から送つて呉れました。今子供の穿いて居る靴も、矢張り其時送つて呉れましたので、其時は皆嬉しがつて、一夜靴を穿いた儘寢床へ入りました、、、。

靄然たる和氣は此一室に溢るゝばかり、メレンスの筒袖被布に蝦茶袴の一群は女史を取卷いて樂み、樂む中にも一進一退自ら禮節あつて、一見良家の貴孃として恥かしからぬ風采を備へて居るのです。而して女史は人に對して「宅の御孃さん達が」と云ふ調子で話し、彼等の自重心を養ひ品格を高めるヿに一方ならぬ注意を拂つて居らるゝのであります。

女敎師と結婚

〜女敎師と結婚　最近刊行の女子高等師範學校一覽に依れば同校にて去る明治十二年二月小學師範科に始めて卒業生を出してより昨年迄の卒業生は總て九百二十七名にして其内結婚したる者は四百五名あり之を各科に內譯すれば左の如し

	卒業生數	結婚者數
高等師範科	四百二十人	百七十五人
選科	十七人	四人
專修科	百十二人	十六人
地歷專修科	五十九人	二人
保姆實習科	三十三人	十一人
小學師範科	二百八十七人	百九十七人
計	九百二十七人	四百五人

文學者の家庭

姉崎嘲風氏

村田光子

▲その住居

月やあらぬと、嘲ちたる、風流は、知るやうもないが、下げ髪に、筒袖姿の、幼い時分、梢に笑ふ、春の花見や、桔梗萩、女郎花、戰ぐ、薄の、秋景色、夕風の、涼しさに迷ひ出て、友達と、蝶を追ひに來たは此處。あゝ氷川田甫、御殿坂、——聞くさへも、懐しいので、其方、此方と、見廻して、歩を運んだが、桑滄の變とでも、云ひませうか、今は昔と違つて家つゞきとなり、淋しさうに、見えた、先生の邸の邊りも、餘り、閑靜でないやうになつた。

盲唖學校の、二三軒、手前に、「あねざき」と、柔い、雅な字の、瓦斯の、ある所が、即ち、先生の、お住居。

門を、這入ると、兩側には、綠の木の、青木、春を、喜び顔に、人を迎へてゐる。

玄關の、硝子戸には、面會日が、白紙に書いて、張つてある——火曜日と、木曜日の、午後二時から、四時迄として。

二歳斗りの、可愛らしい、令息を、抱かれて、出て來られたのは、先生の、母堂であらう?。如何にも、品格のある、言葉の端に、上方訛が、知られる、切下げの、立派な、老夫人であつた。

案内に、連れて、廊下を廻り二階の、書齋に通つた。

▲その書齋

部屋の廣さは、四疊半、次にも、同じ、間が、あるらしく。一間の、床には、宗學の書いた、石摺りの、懸物。前の、端には、時代唐本の、五六册、重れたのが、所を占めて、右の方の、違ひ棚から、床には、洋書が、積つとはなく、積み置かれて、床柱と、立ち並んだ、棚には、ベツクリンの、波の音の、寫眞が、金縁の額となつて、なか〳〵に、人の眼を、引くのであつた。

見下せば、庭の常磐木の間に、石燈籠、二つ、椽は、美しく綻びて、此方迄は、來ないが、下の座敷には、香を送つて居るらしい。待つ間程なく、先生は、上つて來られた。

▲その風采

理想の人と、女學生間に、評判さるゝ先生——、抑も何んな、方であらうと、凝然と、見上げた。

大學の花と、稱へられるのも、其筈——、眉は秀でて、麗はしく、高過ぎる迄に、つんとした鼻、八の字の髭は手を入れれど、自然の儘の、美しさ、眼は、餘り、愛嬌のない、一体に、優しいと、云ふ所は、見えぬ、凛として、所謂、男らしい、風采なので、丈は、並よりも、高く、肉は中肉で——、何う見ても、外交官——、式部官——、ペリーの交際社會に、活動しさうな態度である。

御話振は、巧みで、人を外らさぬ所、學者には、少と、珍らしい方、〝どうも、會、會、つて、方々へ、引き出されて、困つて終ひます。……〟、此間なども、殖民教會などゝ云ふ、派の違つた所から、是非にと、頼まれるのですもの。是れを、以ても、社會に、歡迎されて、御忙しく入ら

つしやる事が、分明る。御話は音樂の事に及び。

▲日本の樂器

で、婦人が學んで良いと、思ふのは、笛です……、然し、尺八は、吹いて居る、容子が、外見の、惡い物ですから、不可ませんが……、横笛は、至極良いと、思ひますれ……、琴も宜いけれど、琴を、調べて居る形よりも、笛を吹いてる形の方が、良ござんすかられ。

▲ヴァイオリン

なども、伊太利邊で、上手な人が、調ると、樂器を、持つて居るやうには、見えず、身體に、良くついて、終つて丸で、人と、樂器と、同じもの丶やうに、一つになつて、終ひますかられ……。日本などで、學生などが、調べると、別々になつて、厭や厭やさうに、ヴァイオリンを持つて居るやうに、見えて、格構が、惡いものですから、遊び、習ふのが、厭やのやうな、氣がして、琴などの方が、流行するのでせう。

▲その衣服

邊幅を飾つて得々たる紳士も多いに、先生に至つては、少しも、そんな風はない、羽織と上着は、黄色つぽい、秩父銘仙で、下着は、藍の双子の、年寄のやうな極く地味なので、時々鼠縮緬の繻絆の袖が、白い手首に溢れ出づるのでしたが、洋服にでも、なされたなら、配合が良からうにと思はる丶のでした。

▲その嗜好

學生時代には、隨分、種々の遊戯を、試りましたが……、例の無器用ですから、上手になれないので、面白くなくなつて、止めて、終ひました、然し、弓は、大好ですが、此頃ぢやあ、唯、散歩をする位のものです。それに、旅行も、好ですが、歸朝つて、來てからは、出かけません、此度は、一つ、山陰道の方に、行きたいと、思つて居ります。

先生は、畫を好まれるらしく、西洋の、名畫の寫眞を澤山、集めて居られるやうに御見受した。

▲その家族

先生の御家族は先生と夫人。母堂に令息に下女二人の六人暮で、至極清楚な家庭である。獨寫眞版は先生がライプチッヒに於て寫されしものにて、傍の少女は其師の令孃だそうです。

大町桂月氏

▲その住居

春とは、名ばかりの田舍道。颯々と、用捨もなく、吹き卷くる、風は、木枯のやうに、面を、打つて、前髮は恐さに、振へ、冬の命とも、思ふ、用捨さへも、折々、飛されさうに成るのでした。やがては、蝶の、宿ともなる、菜畑の間に、ちらり、ほらりと、建物が見えて、此方に、少さな杉の森あり、彼方に、梅花の、半開あり、桃や櫻は、時節待顏、晩春の眺めは、さぞと、思ひなされる中を、足に任せて、右に、左に、屈つたり、曲つたりしたが、目指す、家のそれらしいもない。さりとて、聞く程の家もなく、困つて居ると、後から四十斗りの、御高祖頭巾、が、足早に、來たので、これ幸ひと、待ち搆へて、聞いてみると、あやにくに、「大町さん――、さう、聞いた名ですが……、一寸、どうも……、彼處で、お聞きなさい。」と、菜洗ひに、餘念のな

い、百性を、指したので、誰もそこ〳〵、其處へ行つて、尋ねると、其通りを、眞直、行けば、直きに大きな門がある。と、云ふので、先づ眞かつたと、胸撫で下して、敎へて吳れた門の前に立ちましたが、古い古い、由來の、有りさうな、瓦門は、閉ぢた儘、押して〳〵も開きさうともしない、呼び鈴でもと、探したが、それもありませぬ、折角、尋ね當てたのに、殘念なと、今度は、門の、右手の、弓形りの、生垣に沿つて、凡そ、二十間も、進むと、左手の細い路次の門に、「大町通用門」と、札が掛つて居ります。路次の、右には、見上る許の、綠竹が、猗々として繁り、がさ〳〵と、風の聲を、傳へて居る突き當りの、一寸とした、潜り門を、這入つて、左の方に、七八間、行くと、又、少さな、枝折門が、あつて、其處には、生新らしい木札に、「大町芳衛」と、先生のお名前、飾もなければ、飾りもなく、書かれてあろには、そゞろに、敬慕の情を、起しました。



姉崎嘲風氏

此方へと、導かれる儘に、茶の間らしい所や、夫人の、居間らしい所を、一曲りして、一間幅の、廊下から、二三段の階段を、上ると、中二階、これが、先生の、書齋でありました。

▲その書齋

先生は、物事に、關はぬ方と、見えて、次の間の、三疊には、古今の本が、秋の落葉の、それよりも、堆く、殆ど、室の半分餘を、塡めて、（無論、疊へ、直接に、積み重ねてあるのです）六疊の書齋は、二脚の机の外、他は、皆な、書籍で一杯、床の上にあつては、挿花の代用ともなり、机の上に在つては文鎮の兼用ともなり、其方の隅、此方の端、何處と云はず、縱横十文字に算を亂して、

硯箱の蓋、其儘——。如何にも、學者の書齋——。書生氣失ぬ、先生が忍ばれて、懐しう感ぜられました。
私などが、黙か、手を出しまして、ひよつと、見えなくなる物でも、御座いましてはと、存じますので、何時迄も、掃除をしやうと、申ます迄は、散かし、放第に、致して、置くもので、御座いますから、人様が、被入いましても、本に、お耻しくつて。」と、夫人は、微笑まれた。「大町へ、行つては、何を御馳走されても、甘味ない、何時でも、塵の中だから。」とは、先生の、叔母君の、言葉ださうな。

▲その庭

御庭の廣いと云ふことは、兼れて、人からも、聞いて居りましたが、今更らに、其廣大な景色を拜見しては一驚を、喫しました。
廣いと云ふも、其筈、庭斗りが、三萬坪！。梅と、松は、徳川三代將軍、家光の乳母、春日局の、手植である由——。春窓の額に、鳳來山人の、筆で、蜀江園の記と、題して、此事が記してあります。
其梅には今しも鶯が訪れて、法華經とこそ、謡はれど、床しい聲を人の耳に傳へて居ります。
其より私は、何處からとはなく、送られる清香を便りに、芝生を過つて、四方、梅林で、圍まれて居る、芝山に、上りました——。見渡せば、廣い畑の、間に、清く、清く、流れる小川——、茅屋根の間から、僅に、見える、水車——、懐しい、雲の、芙蓉峯は、遙かに、朦朧と、煙の間に望まれる、絶景には、我を忘れて恍惚と眺め入つたのであります。
かくて再び庭に下ると、千年變らぬ、常綠の松は、穣々と、盤井を渡いで、待ちに待つ、櫻花の、幾百株、春の眺めは、此處にと、云ひたげであります。

此の廣い、庭、此の佳い眺を占めた先生は、著述に飽きた時、讀書に疲れた折々、筆を、捨て、本を、投げて、此の苑内を散歩されるとの、事でありまず、又夏の夜は、令息達と、共に、ランプ片手に、樹々の、稍の、蟬を、驚かし或は、螢を生擒つて、籠に、入れて遊ばることもある相です。
私の伺つた時は表門の、正面の所に、茲の、散さつた、雪達磨が、丁度客を迎へる樣な形で坐つて居りました……、片目の炭は、抜けて、終つて、唯、雪の日の、名殘を、止めて居る——。是れは、多分雪の日の御手すさびに、令息を、相手に、遊ばした事でありませう。
私は初めて先生に御目に懸りましたが、想像は大分違つて、横から、見ても、縦から、見ても、高潔な、學者肌——、やゝ痩形ではあるが、涼しい眼、高い、鼻、凛と、引き締つた、口元丈は、殊で、一體に優形な、美男子、學生時代は、恐らく、赤門の、花で、あつたでせう！。御歳は明治の年數と、同じとか。其にしては御若い事。
桐の、火鉢を、進められて、僕が、構はないものだから、此の通り、烟草の、灰を、四方に、叩き散らすので、何時も、汚れて、居るのです……。僕は、良い物を、買はない、買はふとも、思はないのです、良い品物を、持つて居ると、惜しいと、云ふ心が、出ますからね」と、愉快氣に、云はれた。又、「良く、世間では、始めて、行つた、時には、大變に、馳走をして、段々と、悪くする家が、有りますが、僕は、それは、大嫌ひなので、始めも馳走を、しないかはりに、何時でも、同じに、するのです。」と、少しも飾りのない、淸い、美しい、調子で仰有いました。

▲その衣服

文學士の、中でも、其名錚々たる、先生であるから、と、自分の、野卑

な者へで極めて行つたが先生を見て思はず尊敬の念を起したのは其の御身餘――着物は紬の質粗なのに羽織は木綿の縞の充分這入つたので飾らぬ内にも自らなる光は見えるので御在ました。夫人も、餘り飾はれぬ方と見えて、矢張り紬の質粗なお召物、御令息達はどなたも厭味の無い、男々しい紺絣、令孃メリンス友禪の可愛らしい御姿、御睦まじく廣い庭を散歩ておいでゝした。

▲細君の資格について

僕は、家庭に夫婦喧嘩と甘つたれる事が必要だと、云ふんですよそれについて、可笑しい話がありましたー、戸塚村の親戚で此間、不幸があつたので、僕も、二晩斗り夜伽に行つたのですが、女學生も二三人來て居て、此の話が、始まつたんですよ。それで僕が、夫婦喧嘩をしなくつちやあ、不可ないと、斯う云つたのを、同席に居た、某少將は、夫婦喧嘩をしちや不可ないと、聞いて贊成したので、大笑になりましたが、夫婦喧嘩と甘つたれとは、隨分面白い條件でせう。鈴木秋子女史の、「かたゝがへ」は、眞く此邊の消息を穿つてありますよ。

▲その家庭

御子樣は、令息三人に、令孃一人。夫人は、櫻井文學士の、令妹で、態度の高尚な、少し沈んだ方の、まりとて、元氣も仲々有る面白い方で、「此家は、芝居の鑒棧敷で、世間の事は少しも知れないので、御座いますよ。」との御言葉は紅塵の眞中に、出張致つて名譽とか、流行とかにわい〳〵と、騒ぎたい婦人の多い世に、淋しさを何とも思はれず、超然として月を友とし、花を友として居られる、夫人の御風流は、私共の敬慕申上る所であります。令息二人は、淀橋の、小學校に通つて居られますが、丁度學校が終つて歸られたので、常の儀容齋の次の間に正しく、座られて、先生を仰いで「只今」と、兩手を突かれたのは、流石に夫人の教訓が忍ばれて、何時までも御側に侍して居たい樣に思はれました。

△妙齡風俗

東都三春の風俗は如何まづ學校通ひの令孃妾の十五六よりして傚へんと上衣には寶珠御召の河骨に觀世崩しの水を御召納戸地へ織出し、下衣は紋御召の葡萄地紐子絣、襦袢しは紅掛鼠縮緬、帶は厚板の滿棉色に、有職もやう、襦袢は紅地絞りの綸羽縫なり、髮は花月卷に例のりボン、さて又その束髮を避けて品よき島田髷の二十四五の御婦人には、上衣は利子鼠の絲地御召に江戸褄模樣、刺繍の松に鳶、下衣も同じ二枚重ねに、襦袢しは御召鼠の織り色、長襦袢は紋羽二重の地文に、光琳の水を織出し其處へ寫生の蝶を友禪に飛ばせたるもの、帶は綴錦の厚板、鶯茶地共色の牡丹唐草を織り出せし上に、古代更紗を色糸で粒縫ひに縫ひ取らせしもの、扨また、髮の上に幅廣のりボンを蝶結びにそよ吹かせたる例の不如歸の芝祝式、なみ子形に氣取つた十一二の少女には、上衣は瑠璃紺地の友禪縮緬露草に四季の草花を色よく配りたるもの、下衣は同じく鼠色地に丸紋散しの光琳の草花模様しは櫻鼠、帶は魚々子錦の薄牡丹地、縣散らしのいろ〳〵、襯骨の紫染めの赤と、松葉色の配合なる山水花鳥に、美術の粹を集めたるもの等まづ流行の模様なり。

雲雀

舊暦でいへば彌生の好季節、一年中尤も人の心の長閑なる時なり、野邊は一面若草萌え出て、天然の青毛氈を敷きつめしごとく、都大路は梅、櫻、桃、李の花のいろ〳〵に人の心も醉へるがごとし樹々の梢は若芽を吹き出して柳の枝も烟れるやうに、山々の雪も鹿の子斑になりて見ゆれば遠山には春霞たなびきそめ、菫や蒲公英、其他名も知らぬ春の草花が路傍に日傘の行列を作れば、心地よき風一種得ならぬ香りを吹き送りて自然に人の心を浮き立たす、この春景色、折柄打開けた山の裾野や段々畑の畦に初雲雀の鳴き聲、あゝ懐かしかつたと老も若きもとも〴〵にこの長閑なる春の日和の麗かさを喜び迎へるならん。實にや雲雀は春の女神、此君ありてこそ春の日和もいと麗婉なれ。

さて雲雀は春の始めの頃より鳴き立ちて天高く飛び上るゆゑ田舎の子供等はよく知れるが、この鳥は四五月頃麥畑に巣を營み、雛を育つるものなれば、初夏の頃麥を刈る時は往々其の雛を捕ふる事あり、雲雀の羽毛は大抵背の處は茶褐色にて數多の斑あり、されど夏になれば茶色の部分は多く磨れ耗りて黑色の部分の顯はるゝものなり、古來雲雀の名所と唱へられたるは武藏野、吉野山、上野美豆野、比叡山など、又雲雀の巣を營むは毎年四月頃草中の地に茶碗の大さ程の穴を深く穿ち周圍に草藁を入れ其内に細き草の根を幾株となく集めて之に鳥の毛髮の類を重ねて總て三重に作り、其内にて卵を生む、通例四個其の大さは蓬萊豆ほどの物にて可愛らしく且つうるはし。

雲雀の肉は柔かくして甘く、料理としてよき品なり、吸物、膾、燒鳥いろ〳〵ありて高貴の方の深く賞翫されたるものなり。

春の小鳥飼

禽語鳥語とて鳥の音は天地間にうるはしき物の一つとして數へらる、青帝駕を枉げて春の天地はゆくりなくもこゝに紫紅の幕を懸け亘しぬ、妙なる鳥語この間に音づれて人の心をのどかならしめぬ。

小禽は實に春の心なり。これを飼養して朝夕愛翫する又家庭の娯樂の一ならずや。

小鳥の飼ひやうには三種あり、即ち囀づる聲を愛するものと、毛色のうるはしきを喜ぶものとの區別あり、まづ聲を樂しむ鳥は餘に優るものなきもこの鳥は飼養法に熟練を要するもの故一寸困難なり、又羽毛を愛するにはキンカ鳥、文鳥、カナリヤ等にて巣引せしもの多し。

小鳥の巣に入るは多く春秋の彼岸にて、今がその時期なり。まづ巣引せんと欲せば彼岸に入らぬ前雌雄の小鳥を鳥屋より買ひ來り籠に入れ置くべし、巣引鳥の餌は水と粟との外にボレー(牡蠣粉)を與ふるものにて、こは卵及び糞のつまりを防ぐ爲めなるが、小鳥は又好んで食するものなり、また其の巣は豫め藁にて作りたる丸きものを籠の中へ入れ置けば小鳥は其内へ程よく巣を作り、それへ卵を産みてこれを暖めつゝ孵化せしむるものなり、但し小鳥の卵を産みたる後は成可く靜かにして置くをよしとす、又猫鼠などの害に遭はぬ樣注意すべし。

キンカ鳥は極めて美しき鳥にて籠の内にての運動も頗る活溌なるが、體の小なるにも關らず、割合に健かなり、但し此の鳥は雄鳥が籠の中にて激しく運動する爲め雌を巣の外へ逐ひ出して孵化を妨ぐる事あれば注意すべし。

カナリヤは菜種を好むものなれば常に之を與ふべし。又ジヤガタラといへるは四十雀の一種にて胸部に蛇腹の如き點あり、ヘキ鳥は年を經るに從ひて、頭部純白となり嘴は碧色を帶ぶ、鸚哥は小鳥中まづ大なる方にて美麗の點よりいへばこれに過ぎたるはなし種類は殆んど數へ盡されざる程多くあり、就中赤背のいんこは美中の美とも稱すべし。

人事暦

四月

休日
日曜日——二日、九日、十六日、廿三日、三十日。
祭日——三日神武天皇祭

▲一日(舊暦二月廿七日かのえうま)——大和祭、▲三日——神武天皇祭、新學年度授業開始、學校は進級生及新入生を以て充たさる、▲七日——舊暦三月三日汐干狩の好氣節、▲八日——灌佛會、佛祖釋迦の誕生日とて諸寺院勤行、祭典多し、▲十五日——此日より十月十五日まで銃獵を禁せらる、▲十九日——滿月、午後十時三十八分、▲二十四日——露獨佛の三國同盟して我に遼東還附を迫りたるは、明治二十八年の本月本日なり、▲二十五日——本日より五月四日まで冑人形、大刀幟等の市立つ、東京にては十軒店最も賑ふ、男兒ある家にては鯉の吹流しを立て座敷を武裝して端午節句の至るを待つ、家庭至樂の時。

季節——五日より「清明」、廿一日より「穀雨」。氣温漸く人の肌に心地よく、春風駘蕩、百花爛漫、遊歩の好季節、見渡せば柳櫻をこきまぜて都ぞ春の錦なりけるの觀あり、花見の衣裳は二枚重に袷羽織と云ふ所最も適す。

農事——農家は漸く繁劇を加へ來る、茶、玉蜀黍、麻、牛蒡、落花生等の播種、里芋、甘藷、蒟蒻、葱、漆等の植付、根分け、麥の中耕、豌豆、蠶豆の肥培、高菜、芥菜の收穫、陸稻の種蒔、苗床の手入、蠶兒の掃立等仲々にいそがし。

遊覽——花笑ひ鳥歌ふの好氣節なれば、輕風に袖を吹かれて遊ぶ者至る所に賑ふ、桃見には東京なれば靖國神社か上野か中野、越谷。大阪なれば桃谷を佳とし、花見によきは上野、向島、小金井。京都の三室、嵐山、大和の吉野。汐干狩は州崎、芝浦。大阪天保山沖、住吉浦、堺浦などが最も面白く、陽氣快發の此の折、所として可ならざるなければ己がむき〳〵心々に遊ぶべし。

食品——鯛の刺身、めばる、ひらめの煮付、鰻の蒲燒、木の芽田樂、わらび汁、莢豌豆、筍めし。

女子と化粧

武田藍涯

私は元來女子は盛んに化粧を爲すべし。決して遠慮すべからずといふ持論である。老婆も年増も娘も其相應に飾るべしと勸告したい。近き以前までは女子が家を出づる時は。萬金丹と能勢の黒札と懷中鏡は必ず離さなかつた。萬金丹は急病に具へるため。能勢の黒札は狐に魅されぬがため。懷中鏡は常に己が形振を正しくせんがためである。之は言はでも知れたことである。其頃には嫁入しては。素顔を夫に見するを恥としたものであつて。今の時勢とても同じこと。女は何時でも鏡に向つて己が容貌に注意することの出來る樣心掛が大切であらう。(尤も自惚鏡はお爲にならぬこと丶御承知あれ)私は化粧のことは男子にも勸めたい位である。彼の蓬頭亂髮垢顔敝衣。短き皺くちや袴を着け。泥塗れなる俎大の下駄を穿き。犬殺しの持ちそうな如何にも太きステッキを振舞はし。得々として大道を横行濶歩する徒のやうでも困るではないか。歐米へ行きて見よ。旋毛の毛が立て居てさへ交際社會へ出られぬ位である。故に男子と雖ども平素能く髪を理め衣服を整へ。殊に婦人に接する時などは一點の塵をも衣服に留めないやうに注意する。之はめかすとか氣取るとか云ふにあらず。威儀を正しくするので。男子が爲すべき化粧である。取りも直さず人に對しての禮儀である。滿洲に於ける決死の我が將士が戰陣に臨む時。髯を剃り襯衣を更へ。香水の薫り馥郁として殊更に華やかに裝ひしは。果して何の意ぞ。無論死花を咲せんがためである。生死の際にも此の覺悟のあるは誠に感心なことで。此人の平生が思ひ偲ばれます。斯く申せばとて。拙者は今の所謂ハイカラ者流。髪の毛を故意と長くし。揉上の毛を思ひ切つて短くし。宛然鍋を冠りたるが如く。襟の高さ五インチと云ふを無理に着けて頤を衝上げ。一向差支への無き眼に强て金縁の眼鏡を掛け。洋袴といへば職人が股引みた樣なものを究屈に

穿き。土龍の如き足を極めて細き靴にて苦しめ。一町先きまで香水を薫らせ。自轉車と寫眞器を古武士の大小鎗の如く大切がるが如きへろ〳〵漢を稱揚する者では無い。之丈は判然と茲にお斷り置きたいのである。」男子にても謹みある者は容貌風采に氣を附ける。外交官の如きは猶更である。會社銀行の如きも。其顏附の甚だ醜き者や。其身形の奇態な人物は傭はぬ風である。だから三井銀行や三菱銀行其他の會社等へ行きても。樣子の善き嫌味氣の少き「ハイカラ」が事務を執つて居るではないか。男子にして猶且然り况んや婦人をやだ。貴女諸君よ。飽までもお洒落なさい。何所までもお作りなさい。斯く申すと贅澤な人に奢を勸め。燃る火に油を注ぐに似たれども。決してそうでない。拙者は女學生に向つて右手に書物左手に鏡を持ち玉へといふ程の極端論者でも無い。私は今更何も釋迦や孔子や基督に馬鹿を言ふなと叱り飛ばされたくもなく。又矯風會員に疾視れたくもなし。拙者は唯私の意見として。女子は洒落、化粧をするが當然であるといふことを述ぶるまでのことである。女子の化粧を以て罪の如く云ひなす者は。共に人情哲學を論ずるに足らぬ者である。抑々人に男女の兩性があつて。此の二性相慕ふは神が賦與したる微妙なる情であることはアダム、イヴの樣子でも分つて居るでは無いか。春女秋士之あるが故に此世が面白くなるのである。花も果もある浮世となるのである。「物のあはれは之よりぞ知る」と歌はれたも實に此邊を述べたものであらうか。女は己を愛する者の爲めに形づくるとは。女子の心情天眞爛熳たる所を言ひ顯はしたるものであらう。男も女を喜ばせたい。女は無論男を喜ばせたいのである。此微妙なる相戀の情は終に男女の容貌體質を美的に發達せしむることになる。之は惟り人類歷史に於てのみでは無い。禽獸も亦此の進化の理法に外ならぬと云ふことである。雉子の雌は戀情の能く其雄をして孔雀とならしめたとは。ダルウインの主張する所ならずや。此の天與の情を滿足せしめんには。男も風丰を裝はざるべからず。女も容色を飾らねばならぬ。玉も磨かざれば光

を放たず。人も磨かざれば艶なかるべし。其容貌を美にし。其衣服を美にし。其の住宅を麗かにするは決して罪では無い。今の青年男女は。其の容貌に於て。其知識に於て。悉くと言ふを得ざるも。大概は其の父母に優つて居る。衣服飲食家居平生の事凡て其祖先に立越へて居る。之は社會人類の進歩發達につれたる結果である。之を以て妄りに驕奢なり不經濟なりと攻撃する譯には行まい。拙者は寧ろ祝すべきであると思ふ。蓋し先祖達も草葉の陰で苦情も申すまい。

扨、洒落ることは宜しい。化粧することも亦可なりとした所で。如何に洒落るべきや。如何に化粧すべきや。



之は貴女諸君の御一考を煩はしたい所である。今の諸君のお化粧の仕方は外國なら露西亞風とでもいふべきか如何にも瀟洒とした所が乏しい。顔のこしらへなら。衣裳の嫃嬫なら。大凡は西京の奇麗一點張を眞似るが故に。口紅を濃く附け。白粉を厚く塗り。紅や紫にて其身を飾る。頓とお祭の馬同様である。中古の江戸の女は餘り紅粉を施さず。玉川の水に洒せし雪の肌。磨き上げるのを以て誇つた者である。去れば其頃の洒落女は入浴には手拭、垢擦、洗粉、糠袋、朴炭、輕石、バッチリ、白粉、絲瓜の水、蛇の脫殼、鶯の糞。まだあるべしと雖能くは覺へず。兎に角マア是等の七道具以上を取揃へて。一心不亂に

磨立てるのであるから奇麗にもなる筈である。黑いは黑いで磨ぎ上げれば艶が出る。白いのも亦同じこと。樂燒を愛する者あり。淸水燒を好む者あり。神代杉も結構なれば。檜の節無しも亦美事である。朱塗、靑漆、溜塗と皆悉く塗倒して仕舞つては。良材の本質は全く消へ失せるでは無いか。人間の容色も矢張り其通り。各々天然の美質を具へて居る。其を之れ考へずして。無闇矢鱈にこて〴〵塗りの厚化粧では丸で俳優の扮裝と異る點が無い。其では御本人は既に無くなつて居るのである。之は決して化粧の主意ではあるまい。要するに化粧は人間天稟の美質を發揮するがためである。殊に拙者の不愉快に感ずるのは。化粧の法を間違へた結果。堅氣の阿孃樣と藝者輩と殆んど見分が附かない程になつたことである。貴女が藝妓を眞似るのか。藝妓が貴女に倣ふのか。如何にも玉石混淆である。中には四十と云ふ聲の掛つた小皺の寄つた中婆さんが。世間構はず遠慮もなくはで〴〵しき身形をなさるには。只々モー閉口實に齒の根が動ぎそうである。老て益々飾り立てる支那流が或は理窟に叶うて居るかも知れないが。我邦では少しく控目にして貰ひたい貴女は貴女らしく飾るべし。藝者は藝者らしく飾るともどうとも勝手次第である。何れにしても此の曖昧たる風俗は甚だ以て面白くない。強く言へば一國の風敎にも關係するのである。

私は烏が鷺の眞似を爲すが如く。人を欺く樣なる拵へを嫌ふものである。夜間の美人晝間の醜婦、豐嗽して化の皮が剝れるなどは。實に滑稽の至では無いか。黑く生れたも巳が科では無い。白く生れたとて巳が働きでは無い。身長低ければ高き下駄を穿きて間に合せよ横太りして見惡くしと思はゞ。少しく衣服を長目に着て我慢すべし。疎しとて引眉毛をするの用もなく。髮毛少しとて黑油を塗り鬘を用ゆるにも及ばず。女子の此世に處する何も其樣に苦しむにも當らぬこと。もちつと氣樂にして欲しきものぞかし。下手に飾れば人に笑はれ犬に吠へられ。上手に裝へば粹人に賞めらる。女子は髮形を第一とすれば其の結ひ樣は其好に從ひて

己に似合しく丸むべし。衣服も亦其縞柄色合の配合を善くすべし。世間の人の形振を見よ。時の流行に氣を附けよ。餘り粋に失する勿れ。餘り野暮に偏する勿れ山の手の柄は上品なれども無意氣の誹を免かれず。下町の柄は意氣なれども或は野鄙の嫌なきか。此中庸を得て粋で高等で人柄でと云はるゝには可なり難しきことにて。是は皆各自常識の撰擇に任すの外は無い。男でも女でも餘り身形に凝り過ぎたがために却つて人の胡盧となることもあり。是等を名けて駄洒落、惡洒落、猫洒落と云ふ。入費を掛け辛苦窶して其で他人に哂はれる。こんな割に合ぬことは餘り多くはあるまいと思ふ。



或人は化粧とは「ばけよそほふ」と訓ずるからは。紅白粉をウンと施すべし。衣服は可成華やかにすべし。色黒き者は飽くまでも白く見せよ。四十恰好の中婆さんは二十以上の女盛に拵へよ。若し己が容貌を美にし且つ年よりも若やがしむる方法あらば。時と金と勞力とを惜む勿れとか成程之もどうやら一ト理窟の樣なれども。之が俳優とか藝人とかにて。常に見物人の眞中に立つ派手な稼業なれば兎も角もなれども。堅氣な素人而も貴女として世間に仰がれ社會を淸むる者は。己

が品格を高むるためには一歩退ひて萬事を控目にせざるべからず。甚しきは謗め易い。貴女が謹むべき點は是所であらうと思はれる。熟々化粧の意義を案ずるに、ばけよそほふと解するは少しく穩かならず。女は變化であるともいひ。外は菩薩にして内は夜叉だとも云ふ者あれど。之は何か惡い女に手を燒いた者の復讐心から出たのでもあらうか。左も無くば餘り殘酷な言分であるまいか。化粧の二字は決して是等の意味に關る者では無い。化の字之を變化、化物と訓ずる時は如何にも薄氣味の惡き文字なれども。化の字は進化、敎化、感化、文化、歸化等と熟語して改良進歩の意味である即ち Change for the better. の義である。必ずしも我にあらざる他の女性に化けるの意では無い眞實の我より惡く見誤られては損であるが。我より美く見誤られても得ではない。其眞價を見らるゝが仕合と云ふべきである。斯ういふたりとて。拙者を以て絶對的に紅、白粉、香油等を排斥する者と思ふべからず。拙者は只自然を蔽ひ隱す化粧よりは自然を磨き上げる化粧法を奬勵したいのである。化粧はけはひと云ひて。紅粧、粉粧、靚粧等の文字を用ゆるが。皆な紅、白粉を塗り着けるの意義である。去らば塗るも良しだか。あつさりと薄化粧をしたらば更らに善いではあるまいか。餘り向き出しも奥ゆかしくない。霞がくれの薄化粧、遠山の景色も茲に見飽ぬ風情があるのである。どうか此所に御注意を願ひたい其身體の部分細目に至つては今茲に述るを要せず、夫は御銘々の常識と趣味によりて勝手になさるべし。島田、丸髷、銀杏がへし、露西亞髷、英吉利卷、夜會なり厄介なり皆結構。横縞、縦縞、無地、小紋是も賛成。要は只己に釣合たる者を採用せよ努めて無趣味なる半間な姿を爲すなかれ。三十丸髷四十島田幾歳になりても容儀に氣を附けよ。嫁入前の阿孃も。夫ある婦人も。既に母親となつた人も。若くはお婆さんと呼ばるゝ方も。其身の裝ひは相當にせざるべからず。之無ければ婦人の本領。婦人の株は無いのである。

此頃或外國人の話に。私は歐米婦人のきす〲したる

男らしき女よりも。日本婦人のアノ婆娑たる風が如何にも優美で且つ高尚である。其「スタイル」は「リフインド」（即ち灰ぬけ）したものと思ふ。日本婦人こそ眞に女らしき女である。殊に亜米利加の婦人の高慢顔肩を怒らし風を切つて歩く其樣實に見られた者にあらず。中にはだいそれた棍棒を提げ勇ましく大道を濶歩する者さへあり。私は是等の人物に出逢ふ毎にいつも顔を背向けざることなしと。此人の讃辭悉く當にはならず。殊に私は三人の娘を有ち居れば。或は外交的お世辭を振り蒔いたるやも知れずと雖。然し日本婦人の風決して悪きにあらず。強て其の缺點を指摘せば。雛樣然としてチャンと坐り居るにはよけれども。芝生に出でゝテニスを試むるなどには如何にも不便不都合尠からず。之は何とか一工夫すべきである。彼の改良服寧ち改悪服でもあるまいが。アンナ物ではトテも蓬莱の仙女の玉體を纏ふに足るものでない。



貴女諸君 諸君は交際場裏の装飾である花である。或は利き役者である。諸君が加らざる宴會は殺風景にあらざれば淫猥である。諸君は宴會席上の臨監警察官である。諸君の職責も亦重い哉と云はねばならぬ諸君は出過ぎず澄さず。怖ず臆せず。或時は愛嬌を撒蒔くべし。或時は凜として近くべからざるが如くあれ男子に親しめ決して馴れしむ可らず。去ば其風姿も高尚にして野暮ならず。意氣に見へて人柄にせよ。（完）

衣食住の改良

高木醫學博士談

日本人の體格の薄弱不格好なる事に就て、根底より改良の意見を有せらるゝ高木博士に就て、其の持説の一端を聞く事を得たるを以て左に之を紹介せん。同博士は夙に日本婦人服裝の改良を唱へられたる先覺にして、其の論據は衛生上經濟上の二方面に亘りて頗る卓拔の説多く。其の説は多少今日社會生活上の事情に適せざる處ろあらんも、眼前の小利害を棄て百年の大計より打算して日本人の體格を改良せんと欲するには確かに有識の卓見といふべし。本篇は博士の談話を筆記したるもの故文の責は記者にあり。

御承知の通り今日我國は世界強大國の仲間入りをしたと同時に、今後は益々生存競爭を劇しくしなければならぬことになつた、其の競爭を劇しく遣つて、充分結果を見やうと云ふには何が一番必要であるかと云ふと、即ち體格である、然るに今日我國の有樣を見るに、悲しい事には、五千萬の同胞の體格は矮少にして薄弱、加ふるに短命である、之れに反して、歐米國民の體格は、偉大にして強壯、加ふるに長壽である。偉大強壯長壽の者と、矮少薄弱短命なものとが、競爭する其結果は如何であらう乎、歐米人の強いと云ふ、實例はいろ〳〵あるが、先づ普通外國の人は、日本人より強壯にして大きい、殊に其の女子は日本の女子よりも強い、即ち彼等は如何なる旅行に於ても男子の同伴の出來能はぬことはなく、又腦を使ふ上に於ても、人の前に立つて演説するにしても、又たは交際的に舞蹈をしても少しも弱つたと云ふ有樣を見せないのである、又汽車などに乘ると、外國人は男子は固より婦人とても、車の動搖く間にあつて、横になつて眠るなど丶云ふことは甚だ少ない、然るに我同胞はどうかと云ふと、僅かに、新橋から横濱迄位の短距離でも、動もすれば女子は勿論、男子に於いても、直ぐに穿物を脱いで、人の腰掛ける所に上り込で坐ります、坐るまではまだ宜しいが、今度は頭を横にしてフラ〳〵と居眠りを始める、外國の人は新橋で乘つて、横濱に至るまでの間位は、同伴でもあれば、始終壯快な話をして、左もなければ新聞雜誌でも讀みて眠氣を催すなど丶云ふことは絶體的にない、これが第一外國人の強壯である實證である。

一體日本人の體格の缺點は那邊にあるかといへば、胴部と脚部との比較を失つてゐる處ろにある。即ち上半身と下半身が同等に發育せんければならぬのが、實際不同がある、上身は長くして下身は短かい、是が即ち日本人の丈の低い所以である、若しも我が同胞の下半身を上半身丈けに成長せしむることを得れば、日本の兵隊は世界第一の兵隊になることは疑ひない、夫れゆゑ日本人を椅子に腰掛けさせて見ると、大抵高さは同じであるが、起立させて見ると大に違ふ、其違ふのは下半身の長さになるので、今此處に三十才以上の男子を多勢整列せしめると、頭の高低が著しくて、丈が一同揃はない、然るに、小學から中學と腰を掛けて學問させる樣にして、成長させた少年を集めて起たせると、丈が美事に揃ふ、先づ今日の處男生徒に在つては、高低が誠に尠ない、即ち高低の尠ないのは、上下半身が平等に發育して居る故である、又明治の教育と、明治

以前の教育とは、家庭に於ても、大いに異なる點がある、古來の教育と習慣とは四千五百萬の同胞の下半身の短き原因である。次に最も不具なる部位は、胸部であるが、尙ほ上部で云へば、頸の位置、次に脊柱の彎曲、胸部、脚の形即ち、腿から下の部分に在る、外國人の頸は脊柱に載つて居り、日本人の頸は脊柱上端の前部に掛つて居る觀がある、脊柱の脊部は曲つて後方に出て、胸部は扁平になつて居る、然るに歐人の脊柱は、殆んど眞直にて胸は膨隆して居る、それで歐米人の立つた姿は眞直であるが、日本人は脚が短かく且つ曲つて居つて、恰も猩々が立つた時の樣である、此の如く體格が惡くなつた原因は、衣食住の三つにあると思ふ、抑々人の體の發育は、運動と食物に最も關係して居ろ、食物其宜しきを得ても、運動が不足であれば、充分に身體は發達せず、食物が不足であれば、運動充分なるも、亦同じく充分に發育致しませぬ、先づ食物の事は措きまして、運動の一點に就て申せば、何れの部分でも運動をしなければ、充分に發育せぬ事は確かである、例を擧ぐれば、眼と云ふものは、生れながらにして、物を見ることの出來るものではない、之を遣ふが故に、自から諸物を辨別することが出來る樣になるのみならず、澤山遣へば又其の發育が充分であつて、人の眼が鋭くなる、好く人が、あの人が白痴氣た眼をして居ると云ひますが、眼を能く遣つて發育の充分なる人には決して斯樣な眼は無い、山間僻村の人は、自然閑靜な處に生活するが爲め、眼を遣ふことも少ないから眼眸が鈍い、之れに反して澤山遣つた眼は、活きて居つて、眼光炯々として人を射るなど、形容されて居る。



これは昔し話であるが古來の貴族及び豪族は、其生活上不知不識の間に主もに眼を遣ふことの習慣があつた、夫れは翫弄物の類を澤山に集め、物を見ることが辛うじて出來る時より、附添の人が多い丈け、種々のものを見せて、自然眼を遣はせる、其故に、眼丈けは充分に發育して、昔から貴族方の眼は何となく鋭い「眞に若樣方の眼は涼しい好い眼である」抔と申したのである、是れ即ち運動の結果で、眼丈けは比較的に發育したのである、之れに反して發育の甚だ不完全なるところがある、大概の人は御承知であらうが、眼球に筋肉が附屬して居る數は、六個で、上下内外に直筋が各々一個づゝあつて、自由に上下内外の運動をなし、別に上下斜筋と云ふ筋肉が在つて、遣へば遣ふ程、奇妙不思議に働くもの

となり、又口の周圍には筋肉が澤山あつて、遣へば、遣ふ程よく發育する、然るに昔の貴族華族は、成るべく口を遣はないやうにして、輕々しく辭を發せず、又口を開かずして諸事不足ないと云ふ有樣であつた、然るに吾々の小供等は、一つ菓子を貰ふにも容易では無い「阿母さんお腹が空きましたから何か頂戴」と申すと、「今に上げるからお大人しくして御出」と言はれて、それから暫時遊んで來て、又、「阿母さん、どうぞ頂戴」。「やかましいお温しくなさい」、「だつてお腹が空きましたものを」と云ふ樣な譯で、口數を澤山利かなければ、煎餅一つ貰ふことも出來ない、貴族方の小供は口數の少ない結果で、口の周圍の筋肉が能く發育しない故に、人の前に出て口を能くお利なさることが出來ない、從つて隨從者のはからいで、嘴がお强くて自分で口をお利きなさることが出來ないから、と云ふ樣な狀態で、殆んど無言で居られる樣なこと丶なるのである。

▲帶の弊害

日本の人の胸部を見ると、概して乳の下の處が凹んで居る、何故に斯る不具になるのであるかと云へば、衣服の裁縫方が宜しきを得ないためであつて、其欠點を擧ぐれば、小兒服の胸の裁縫方は、衣服を双方より合せて、脇の下をあけ、附紐を通すやうになつて居る、其の着せ方は、先づ始めに左袵を合せ、左の手で左の脇の下のところを一寸押へ、右の手を以て、右の前の右の乳の下にもつてきて、付紐をギユツと締める、又其上に帶を締めて、而して其帶や付紐を締める處は何處かと云ふと、左右の乳の下、即ち、第五、第六の肋骨の間を縛つて居る、斯ふ云ふ風に軟かなる筋骨を締め付けるから、日本人には立派な胸廓を持つて居るものは少ない、御承知の通り、小兒の胸は軟弱である、然るに彈力の無いもので、此の軟らかい胸部を縛りけるのは、丁度胸部に鐵の輪を嵌めたのと同じで、それがために俗に云ふ鳩胸になる、下の方はどうかといふに、胸を押へて居るから、横隔筋が段々下がつて腹部が前に膨れ出て、季肋の部分が突隆するから、六七才の小供を伴れて、こんなに胸が膨れて來ても差支はないかと、醫師の所へ來る方が幾らもある、是れは、二三才の時、帶で胸を緊く締めて居つた結果である。

夫れと同時に、胸部を堅く締めて、脊柱を屈曲して抱いて居るのであるから、どうしても脊骨が曲らなければならない理屈になる、是れは一つは褓母の注意の如何にもよるが、其關係するところの多くは、衣服の裁縫方にある、又帶を上の方に締めることは、全身の發育にも大害をなす今日多くの婦人方を見受るに、若い方が途方も無い高い所、即ち肋骨の上に帶を締めて居られる、これは大變に惡るいことである、併し婦人は胸の形狀が惡るくても構なことがある、夫れは何故かと云ふに、十五、十六才位になれば、乳房が大くなつて、醜形を隱して仕舞ふ、其れに衣服の上から見ると一寸分らぬ、一體日本人の身體は、裸體にしては、形が惡るくて、見られたものではない、之に反して外國人の身體は、裸體にして大いに見榮えがある、外國の人は服裝よりも身體の形を大切に言ふ、それで「あゝ立派な女だ」と云ふのは、何も顏が美麗しいといふのではなく、五體の筋肉が能く發育して居るのを見て立派な人と云ふのである、顏の美麗しいのは、「彼れは奇麗な人」と言ふだけである、立派と奇麗とは大いに違ひます。日本人は奇麗に出來て居る方で着物で身體を形造つてゐる、外國の人は、からだ其物を形造つて、衣服はからだに合

ふやうにする、日本人は、體格などには餘り頓着なく、只だ振袖か何か美しい着物を着せて、歩行くを見て、形が善いとか惡いとか云つて居る、一般の身體の形狀よりは、着物のことに重きを置くやうである、故に今後は之を改めて、どう云ふ形が裸體になつても、立派であるか丈人が見て立派と思ふであらうかといふ樣な考へを御持ちになりたい。

婦人方の着用さるゝ幅の廣い帶は、內臟を壓迫して宜しくない、日本の女子が幅の廣い立派な帶を締めるのは、なかく〳〵六かしくて、少し容貌を衰ふ人になると、帶を締めるのに、充分力のある男子が助けなければ、締められぬと云ふ有樣である、從つて非常に窮屈であつて、少し御馳走でも食べやうとしても、帶を以つて胃腸をしめられて居るから、思ふやうに食べられない、だからして婦人は立派な席などに出ると、少し充積んでナゼリ〳〵と食べると云ふ樣な次第である、其事が宜いか、惡るいかは一々云ふまでもなく、婦人自身で研究せられたら御分りになるでせう。

▲襷の弊害

經濟上から云つても、筒袖と、長袖とでは、大層違ふ、若し、長袖を廢して、筒袖に改むることが出來たならば、御頭樣の片袖を以て、双の筒袖を間に合はせることが出來る、一寸考へると些かの事のやうで有るが、決して些細の事ではない、國家の經濟に大なる關係を及ぼすのである、今我が日本國民は、四千五百萬ある、其人民の袖を各々一尺五寸宛詰めても、一億三千五百萬尺の違ひが起る、衣服の原料に、此の如き大差を生ずることは、つまり直接間接に國民の勞を徒費して居るのである、即ち此の角袖なるものは、其れ丈國の害になつて居ると云はなければならぬ、殊に角袖に伴ふて經濟上原料の上に於て、最も不經濟極まるものは、襷である、今四千五百萬の人口の中、其半ばが、假りに一本宛の襷を以つて居るとして、其原料は麻、綿、木綿等で作られて居る、全體の國民の襷を一所に聚めて見たらば、必ず山をなすことであらうと思ひます、猶之れを用ふるの時刻は如何、日本人は多く閑人で、時の費えをかまはぬ人種であるが、之れを一々細かく算出したならば、澤山の時間を空費して居ることであらう、此襷を持つに就ては、襷を取り外しするのも、矢張り夫れ丈けの物入りである、又人々が、笑ふのも、欠伸するのも、學問的に申せば恐く物品が消費されるのであります、夫れ故、襷を掛け外しするのも、時間の上、物品の上に、甚だ費えがあつて、誠に無益の事と言はなければならぬ。

次に襷は何處に置くか、これも一定の場所に置かなければならぬ、或は時に因つて、忘れて仕舞つて、彼方此方の隅を探し廻る時の費えも少くない、此等の點から云つても、日本國民の經濟に大なる障害をなすことは、中々容易ならぬことである、到底角袖の衣服なるものは、生存競爭の激しき、將來に適すべきものではない、彼の歐米の人はどうであるか、彼等は一條の襷を要さぬ、之れを掛けるの勞がない、無益の消費をなさぬ、又無益の時間を費さぬ、然るに我は自ら求めて面倒を買れて居る、即ち夫れ丈の費えが多いから、夫れ丈けの貧乏を來すのは當然でありませう。

又脚部の方になると、日本人の衣服は、双方から垂れるやうになつて居て、丁度一本脚を入れるやうになつて居る、どうしても此中に、二本の脚が這入らうとは、思はれない、若しも今より數千年の後、古代のことを地質學上より調査すると云ふ場合があつたならば、後世の人は之を何と思つて見るであらうか、御承知の如く今日でも、地中に埋れた古代のもので、石に化して原形を持續して居るものが往々あり、若しも日本今日の普通の衣服が地中に埋れて居つて、數千年の後、人が之れを掘出した時には、何と思ひませうか、上の方には兩方に袖があるが、下の方は一本になつて居る、之れを見ると誠に恐ろしい大きな手のある動物で、下の方は魚のやうなものであらうか、どちらにしても、脚が二本あらうと云ふ想像は下せない。

▲歩行の不便

鳥のやうな衣服が、運動を妨げることは明らかな事實である、即ち肋骨の運動を妨げるに因つて、肺臓の發育を害し、脚が一ツ所から二本出るから歩行くとが六かしい、故に狭く歩くには致しかたがない、見つとも無いけれ共、赤い布だの、或は白い布などを現はして歩行かなければならぬ事になる、ソレ故少し急がうと云ふには、歩行き出す前に先づ尻を端折り、サア往かうと云ふときには、脛から下は肉體をあらはに出して居る、運動の妨になるから斯うするのである、

古は、女子は内輪に歩るかなければならない、男子は外輪にしなければならぬと云つて、歩行方に二ツあツた、而して女子が、内輪に、小足に歩くのは、自然生れ付き、然るかの様に考へて居つたが、決してさうではない、此等は皆衣服の仕立方による事で、斯様な衣服を纏ふて居つて、脛が外に現れないやうに歩行かうとすれば、何うしても内輪に歩行かなければならないので、必ずしも女子のみならず、男子でも矢張り婦人と同じやうな歩行方になります、恰も日本服を纏うて歩くのは、兩脚に輪を嵌めて居るのと同じで、到底完全に、充分に歩行することは出來ない、然らば衣服は、どうなれば宜いかと云ふに、身體の自然の形に倣ふのが最も宜いに相違ない、運動に妨げなく、即ち人生に必要なる行動をなすに於て、差支のないやうな形に仕立て、着用するが宜い、故に胸部の裁縫を、なんとか工風して、コハゼ掛けなり、或は今日の儘でも宜しいから、小兒衣服の附紐を下の方にするなりして、兎に角胸部の運動に妨けないやうにし、袖は成るべく筒袖にして、運動を自由ならしめ、下肢の方は、今日普通用ひらるゝところの袴にするか、或は、袴にした處が、下が矢張り普通の服であつては、運動の邪魔になるから何とか工夫をしなければならぬ、西洋の人の服も、身の形に因つて造られたのであるが、矢張り弊は免れぬもので、コルセットを以て腹部を堅く締めると云ふ様なことが出來る、是れは人間の弱點で、誠に已むを得ないのである、形に因つて拵へても、自然に弊を生じて窮屈な衣服を着用するやうになるものがある、併し發育に妨げのあるものは、彼地の人は着ない、胸部はボタン掛けである上に、羅紗と云ふものは、彈力があつて伸びます、故に如何に堅く拵へてあつても、運動の餘地がある、處が日本の衣服はソレがない、故に彼と我と比較すると、どうしても我の方が劣つて居る、ボタン掛けの裁縫は、胸部、腹部を壓迫することはない、何れの點より見るも、彼と我と比較すれば、我が劣ると申すの外はない、既に劣つて

居る衣服を着し、彼と同じ地位に立ち、對等の交際をなし、對等の權利を維持することは、覺束ないといふ事である。

▲食物の不注意

次には食物である、食物は至つて大切なものである、處が我が同胞中には、食物の大切なることを心得て居ない人が澤山にあるやうに思はれる、一寸した譬へにも、土を食ひ、水を呑んでも遣り遂げるなどゝ云ひますが、是は全く虚言であつて、人の身體といふものは、決して左樣な無法なとの出來るものでは無い、人體は極めて精巧なものであつて、且つ其働きと云ふものは、實に靈妙不思議なる作用のあるものである。

譬へていへば、人體は時計の如きものである、時計は上等になれば成る丈け、込み入つた仕掛に成つて居る、又上等の時計になれば自然に運動するかと云ふに決して自然に運動はしない、矢張り人手に掛けなければ、運動を致しませぬ、人の身體は、自由自在に運動する點に於ては他の製造物と違ふが、併し自由自在に運動するには、原因が無ければならない、則ち或る物質があつて、それが身體の中に於て、働きをするので、極く〳〵精密に組み立てゝあるから、此の物を永く充分に維持するには、飲食物に依らなければならない、飲食物に依つて、その靈妙なる機械を維持して行くのである、で食物は人間の生活上甚はだ必要なものである、然るに彼れは贅澤、是れは嫌りだと云ふやうなことを云つて、食物には一向頓着しない人がある、世上に學理の進まなかつた以前には食物なんどはなんでも宜しいものゝやうに言つて居つた、今日も尚ほ同じ考へを持つて居るものが世の中には甚だ多い、是は實に嘆息の至りである、夫故こゝに食物と云ふことに就て一寸話して置かう。

先づ食物と云ふものは、自ら原則があつて、野菜、穀類、肉類等、皆悉く滋養分を含んで居る、是れを區別すれば即ち、含窒物、含炭物、水、鹽類の四つである、これだけのものを一定の原則に從つて、食用して居れば無病壯健に生存して行くことが出來る、併して其割合は大約、含窒物一、含炭物四、合せて五つのものを、各自の體量の百分の一を毎日食すれば宜しい、即ち十三貫目の人は一日に百三十匁の肉類、穀物、野菜（水分を除きたる）を食はねばならぬ。

然らば此割合に出來て居る品物が世間に有るかと云ふに、世界中捜しても、完全した食物はありませぬ、細かに申すと、米を分析しても、先に申した含窒物、含炭物、水、鹽類の四種に分れる、然るに米の中に在る營養分と、肉の中に在る營養分とは、其割合が違ひます、例之今百匁の米を食するとすれば、米百匁の中には、含窒物六匁、含炭物七十四匁ある、併し是れでは營養が足りぬから、米を二百匁食するとすれば、含窒物十二匁、含炭物百四十八匁になつて、是れは一定の原則に照らして含窒物の不足なること十八匁、含炭物の多きこと二十八匁になる、是れ迄米を常食とする日本人は、此の含窒物の不足をどうして居つたかと云ふに、大豆の類即ち、味噌汁其他の副食物などより補つて居た、米許りを食すれば、原則を外づれるからして、胃腸の病氣を起し、甚だしきは脚氣病を起します、脚氣と云ふものは、全く此理に因つて起る病氣である、故に此病は自分の注意次第で、豫防して行くことが出來ませう。

△住所

次は住所である、日本の家屋は大槪皆疊であつて、寝るにも坐るにも皆此所でするといふ風俗、それは甚だよろしくない、疊は塵埃の棲所である、試に疊を取つて御覧なさい、芥が一ぱいである、その芥は恐く病菌の媒介者である、疊の上に寝るのは恰も賊の忍んで居る上に寝るやうなものである。それからこの又疊といふものは元來何であるか、その原料に就て經濟的に考へたならば實に莫大な損耗である、まづ疊の原料とする藺を田に植ゑる事から考へると、一反歩に付六圓内外の苗を買つて植ゑ付け、之れに要する肥料は一反歩に、四十圓乃至五十圓である、而して藺が成長すれば田植前に刈り取つて乾して、其藺を三等に分け、上等は花蓆として外國へ輸出し、二三等を以つて備後などの表を織る、それには糸も要るし、其他種々の手間を經て、益々疊表を拵へ上るまでには、一枚に付五六十錢の費用が掛り、人の手間から云ふと、苗を植ゑ付け、刈り取り、之を乾かして織り上るまでの手間は容易なもので無い、實に一人で二圓、四千五百萬人で、九千萬圓の高額に上ります、之れに代ふるに他の物を造作すれば倍額の利を得ることになる、今假りに日本人民が百年の壽を保つとして、不自由でも、板張椅子、テーブルで生涯をする覺悟をしたら如何であらうか、取りも直さず、日本人は世界になくとも濟むものを殊更に用ひて、多額の損失を知らず識らずの間になしつゝ往くのである、こゝに一人に疊二枚と計算したのは假りに平均數として申したので、なか〳〵上流中流の處に行くと一人に二枚斗りのものではないが、九尺二間の裏店住ひや、或は田舎の農民などに成ると、疊三四枚の處に五六人住つて居ることから平均して一人に二枚としたのである、尙ほ聞く處によれば、維新前まで某府縣に於ては、百姓などで疊を敷いて居るものは無かつたといふにも拘らず、今日では疊を持たぬ百姓は無い位になつて來たと云ふことである、斯る有様で、國民が疊のために冗費を多くし、又た生命を縮めて居るのであるから、此問題は深く考へなければならぬ。

かく申すと反對者は、寒い時分に椅子テーブル斗りでどうするかといふ、しかし外國の樣な住居にせば、窓掛、椅子掛、暖爐等に金の要るやうであるが、一戸で年々僅々八圓宛疊に費やすのも、決して廉いことでは無い、又日本の家の建て方を堅固にし、戸、障子、襖、疊の間から風の這入らぬ樣にすれば、暖爐が無くても、左程寒いことはないのみならず、日本では家に在る時も、戸外に出る時も殆んど同じ衣服を纏うて居りますが、西洋では決して爾樣なことはない、日本でも家の建方を改めると、確かに綿入一枚は違ふ、そうするときは、衣服其他より出づる經濟の餘蓄は實に非常なもので、決して疊を廢したが爲めに不經濟を來たすと云ふことは無く、又夫れがために寒いと云ふ樣なことはない、斯くの如き次第故、四十年の間即ち、我が一代の間椅子テーブルで、疊を廢する時は、我日本帝國は世界第一の金満家になると云つても決して過言では無い、加之近世亞米利加などでは、一般に日本の花蓆が敷物として用ひらるゝやうになつた、絨壇は量目が重くて掃除がむつかしいから、漸く排斥せらるゝことゝなりたるは、日本の大なる幸福で、ために日本の花蓆が盛んに賣れゆきます、是なれば取拂ひ掃除することも手易く出來るので、將來我國重要の輸出品となるのですから、疊の製造を減じて花蓆を造れば、尠なからぬ利を得ることが出來ます。

又衛生上から言へば前述の如く、病毒の巣窟で疊の目及び其間には、一年中の塵芥が這入つて居る、此塵埃の中には黴菌が澤山ある、肺病、實扶垤里、赤痢、窒扶斯などの黴菌が、疊の目から侵み込んで、床の上に充滿して居る、斯樣な危險至極な疊を用ひるよりは之れを廢して板にするがよい、板の間であれば塵埃が假令這入つても、直ぐに掃き淨められる、啻に經濟の點のみならず、衛生上から見ても疊は遙かに廢して然るべきものであらう、

是れを煎じつめて見れば、體格の強壯は長壽に歸するのである、人は強壯にして力が強く、永い間働けば、其結果は幸福となるのであるから、今日に於て我國に最も必要なのは、體格を偉大にして強壯ならしめ、之れに長壽を授くるのであつて、此の結果を得んとするには、衣服、食物住家の總てをも改めなければならぬのである、衣食住の三者を改むる理由を明らかにして、之れを改めれば、自から我々の體格が丈夫になり長壽を保つことを得て、世界の人々と生存競爭をして、決して劣るやうなことは無い。

尤も如何によく働いても、肝腎な經濟の途が立たなければ、貧乏は免れない、假令ば茲に一家の世襲財產があつて、年々數千圓の收入があつても、一度整理の途を誤つたならば、財產は忽ち消滅して、一家浪々の止むを得ざるに立ち至る例は世の中に澤山ある、昔は贅澤の暮しをしたが、一朝零落して仕舞つたものはいくらもある、國家も亦其通りで、整理と云ふことに注意しなくては、縱ら何があつても役には立たない、國民が揃つて一國を整理しやうと云ふには、一身は勿論、先づ一家を整理するのが必要です、殊に吾が日本人種は、今や世界各國と生存競爭をしなければならぬ地位に立つて居るのであるから、何とかして我は少くとも彼等に優るの智識を養はなければ、我國家を安んずることは出來ないと思はればならぬ。

賢き女

誰れか賢き女を見出すことを得ん、その價は眞珠よりも尊とし、その夫の心は彼れを恃み、その產業は乏しからじ、彼れが存命の間は、その夫に善事をなして惡事を爲さず、彼は羊の毛と麻とを求め、喜びて手づから働き、商賈の舟の如く遠き國よりその糧を運び、夜の明けぬ先に起てその家人に糧を與へ、其婢女に日用の分を與ふ、田畝をはかりて之を買ひ、その手の操作をもて葡萄園を植へ、力をもて腰に帶し、その手を強くす、彼はその利潤の益あるを知る、その燈火は夜もすがらきえず、彼れ手を紡績車にのべ、その指に紡錘をとり、手を貧者にのべ、手を困苦者に舒ぶ、彼は家人の爲に雪を恐れず、そは家人皆紅の衣をきればなり、彼は己れの爲に美はしき褥子をつくり、細布と紫とをもてその衣とせり、その夫はその地の長老とゝもに邑の門に坐するによりて人に知らるゝなり、彼は細布の衣を製りてこれを賣り、帶を作りて商賈に與ふ、彼は筋力と尊貴とを衣とし、且つ彼の日を笑ふ、彼は口を開きて智慧をのぶ、仁愛の敎その舌にあり、かれはその家の事を鑒み怠惰の糧を食はず、その子等は起て彼を祝す、其の夫も彼を讃ていふ賢く事を爲す女子は多けれども汝はすべての女子に優れり、艶麗はいつはりなり、美色は呼吸のごとし、惟ヱホバを畏るゝ女は譽られん、其手の操の果をこれに與へ、その行爲によりてこれを邑の門にほめよ。（ソロモンの箴言第三十一章）

女學生の風俗

千古未曾有の大役に當り我多くの同胞は一身を犧牲として、幾多の困苦と戰ひ、陸海共に赫々たる武勳を輝しつゝある今日、如何なる風の吹き廻はしにや、近頃各專門學校の生徒を始め、中學生に至るまで兎角華奢柔弱なる風を好むの傾きあると同時に、或一部の女學生の品行甚だ亂れ、而して是等墮落せる男女學生間の交際には、隨分忌はしき行ひも少からざる由、男學生のことは暫く措き、單に女學生に就て見るに、世人が認めて女學生と爲すものゝ中には、往々如何はしき婦人も交り、殊に海老茶袴の流行は、如何なる階級の女子にも及ぼし居る故、其服裝のみを見て直ちに女學生と斷定するは、勿論大早計なれど、去ればとて多くの中の一二例にもせよ年若き學生の身に猥らなる事實ありとせば、我女子教育の爲め誠に忌はしき次第ならずや、近來女子教育は著しく發達して、何れの女學校にても戰爭の影響等は殆どなく、新たに學校の創設さるゝものさへ少からぬ際なれば、心ある者は常に深く戒めて、苟めにも邪道に踏み込まざるの注意肝要なり、然るに近來都下の風俗益々奢侈華美に流れ女學生の平服の如きも派出やかに飾り過ぐるの嫌ひあり、斯ては彼の式日に競うて美服を纏ふの風を改めたる當事者の苦心も何の甲斐なきのみならず、餘りに人目立ちたる風を爲すものは、自然墮落書生などの目につき易く、所謂誘惑に近づく基となりて、婦人の珠寶とする德行の上に終生拭ふべからざる汚點を殘すに至るものなれば、是等は學校に於ける教師の監督に打任せんよりは、寧ろ家庭の母親たるもの自から愛女が身邊の裝飾等に注意を拂ひ、身分相當を計りて過ちなき樣戒めざるべからず、近頃の流行なるかは知られど、左なきだに人目に立ち易き妙齡の女子が、厚化粧に引眉毛を爲し、或は束髮の前後左右に櫛を簪し、前髮を庇の如く突出し、肩掛の端を膝頭まで垂らし、靴の音高く肩で風切るが如き、殊更めきたる粧は美しと言はんよりは、寧ろ滑稽の感を爲すものにして、萬一一校に一人たりとも斯かる生徒あらんには世人は直に某學校の生徒はと全校に對する批評を下し、啻に其本人があらぬ名を着せらるゝのみならず、遂には其校の眞價をも疑はしむるに至り、延いて女子教育の進步發達をも妨ぐるものなれば生徒は能く迄も生徒らしく穩かにつゝましく無邪氣にして活潑に身を振舞ふこそよけれとは某教育家の談なりとて時事新報に見へたり。



家庭の養鷄

農學士　井上正賀

人間一日も衣食に離るゝことの出來ない以上は產業を貴ばねばなりません、養鷄もやはり產業の一端で我々の家で日々出るところの食物の遺棄物で鷄を養うて滋養のある卵を得るのでありますから中々に利益の多い業です。尤も養鷄を專門の業としては中々大規模な事で手もかゝりますが、私のいふのは專門業としての養鷄ではなくして家業の傍ら慰の爲め實益の爲めに五羽十羽の鷄を養ふことについての御話です、彼の五羽六羽の雛が母鷄と共に庭をあさり歩くのを見ては動物とても母子の情さこそと思はれて誠に可愛ゆいものであります。

▲孵化法　さて鷄を飼ふには先づ始めに專門の養鷄家について雛を買ひ來るか、或は母鷄を買うて雛を孵化するのかです、しかしどうしても雛から育てるのが樂しみでもあり且つ又卵を良く產むものです、孵化用の卵は必ず相當の大さを有した常形のものを撰み決して不正形のものを用ひてはなりませぬ卵を孵化さす時期は春期と秋期と兩方あり、いづれの時期でも差支へはないが普通には春期が多いやうです、一體春期は凡ての生物の發育が盛んなる時期ですから雛の發育も宜しい譯です。

孵化の方法には二種あつて一は母鷄の體溫に由つて孵

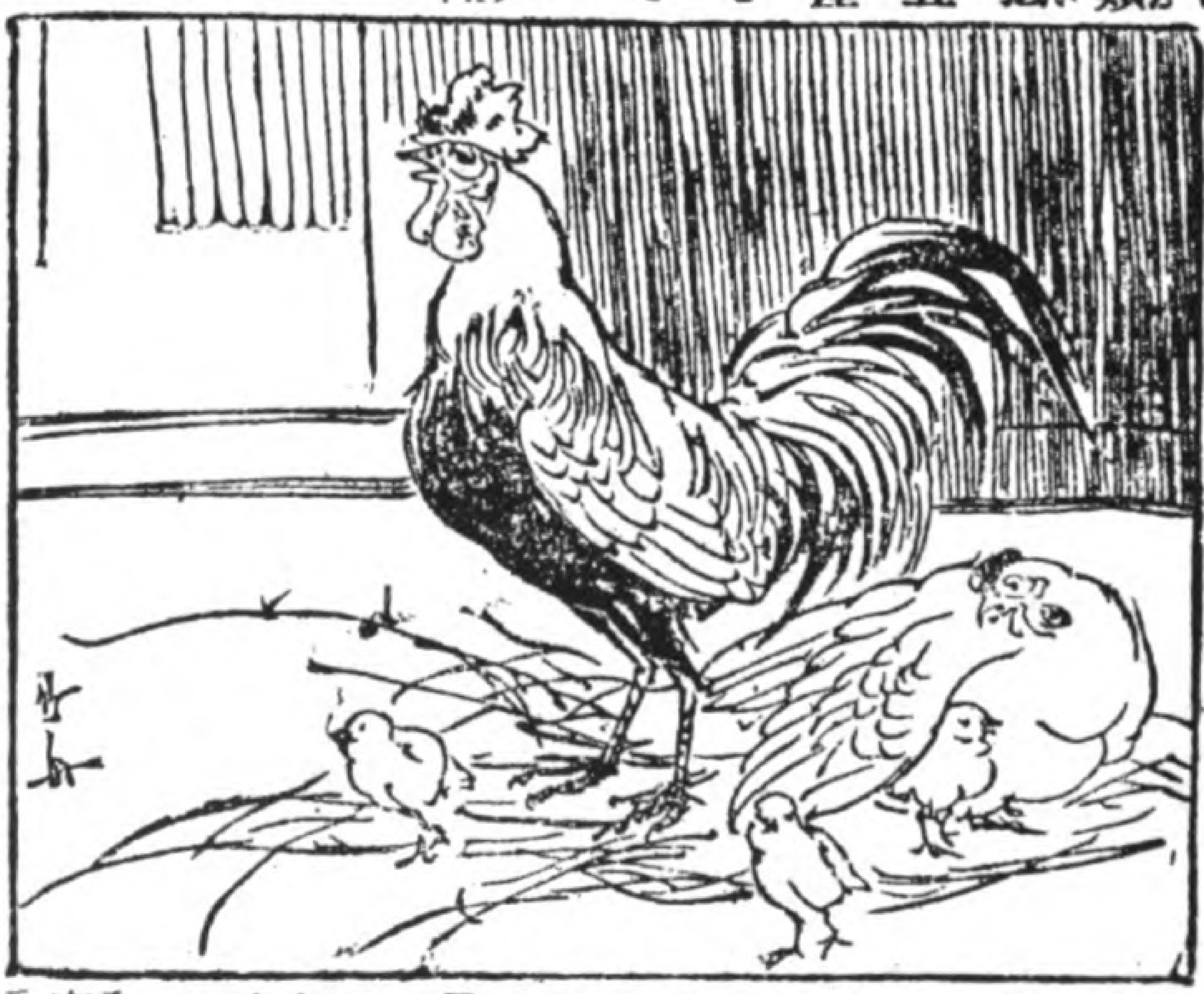
化させ他は人工孵化器を用ふ。吾々の家では普通に母鷄孵化法を用ふるのであります、その母鷄には性質の靜穩なものを撰ぶことが肝要で、孵化の場所はなるべく靜かな所を撰んで、そこに蜜柑箱位の箱に藁を敷いた巣を造つて、其内に能く撰んだ卵を一巣について十二三位入れて、其上に母鷄を入れて卵を抱かすのですかやうにすべての用意が出來てから後は毎日一回づゝ母鷄を出して水や食物を與へて世話をすると平均二十一日の後には可愛い雛が自分で殼を破つて出て來て、「ピヨ〱」と鳴き始めます。

▲雛の養ひ方　こうして雛が殼を破つて出ると大抵は直ぐに母鷄の翼の下に潜み入つて體を休ますもので元來雛は始めは其體質が極めて弱いものですから特に寒い時には能く注意して温かにしてやらねばなりません天氣がよくて暖かい時分には孵化してから二十四時間を經たなら雛を母鷄と共に日當りの良い乾いて居る塲所を撰んで屋外に放ち出すのがよい、次に雛の食物ですが雛が孵化してから二十四時間位は其まゝにして於ても差支へないが、さて始めて食はすものは煮た卵を細かにして之れに「パン」の粉と、細かに切つた青菜を少し與へ、二三日を經てから肉の細挫や昆蟲や裸蟲などの蟲類を與へ、だん〱に米や麥の粗く碎いたものを與へるのです、雛は誠に蟲類を好むもので之れを與へると甚だ發育がよい、それから青菜の類は絕えず少しづゝ與へるのがよい、水はあまり多く與へてはいけません。

かやうにして二週間、三週間と日を經ますと雛はだんだんと生育して大抵の穀類、野菜類、魚の臓腑、不良の獸肉など大槪のものを與へても能く食して其體質も漸々重大となります、元來鷄は雜食動物ですから、日常吾々の食物の殘り物を與へるのがよいです近頃專門の養鷄家などでは糠餌と稱えて「ヌカ」「フスマ」などを水又は魚骨の煮汁などで煉つて與へます、大抵の家では毎日多少の食物の遺棄物が出ませうから五羽や六羽の鷄を庭に放ち飼ひにするにはそれで澤山です、それから鷄は青菜を好むものですから成る可く青菜を與

へるのが肝要です、要するに營養さへよければ鷄はすん〳〵と育つて卵も早く産み始めます。

▲産卵　鷄が生れてから卵を産むやうになるまでの時日は鷄の種類に由つて多少の差があります大抵早いので百五十日遲いので二百五十日位です、それから一年間に産む卵の數も種類に由つて差のあるもので一般に肉用を主とする鷄では百五十位で卵用を主とする「レツグホーン」「ミノルカ」などの種類では二百位は確かに産みます、然かし卵を多く産むと産まないのとは其食物の善し惡し、氣候の關係、塲所の適否などによりますから能く注意せねばなりませぬ、今普通養鷄家が鷄一羽について一日に與へる食物を調べますに大抵一羽について日に三厘位の割で食物を與へ

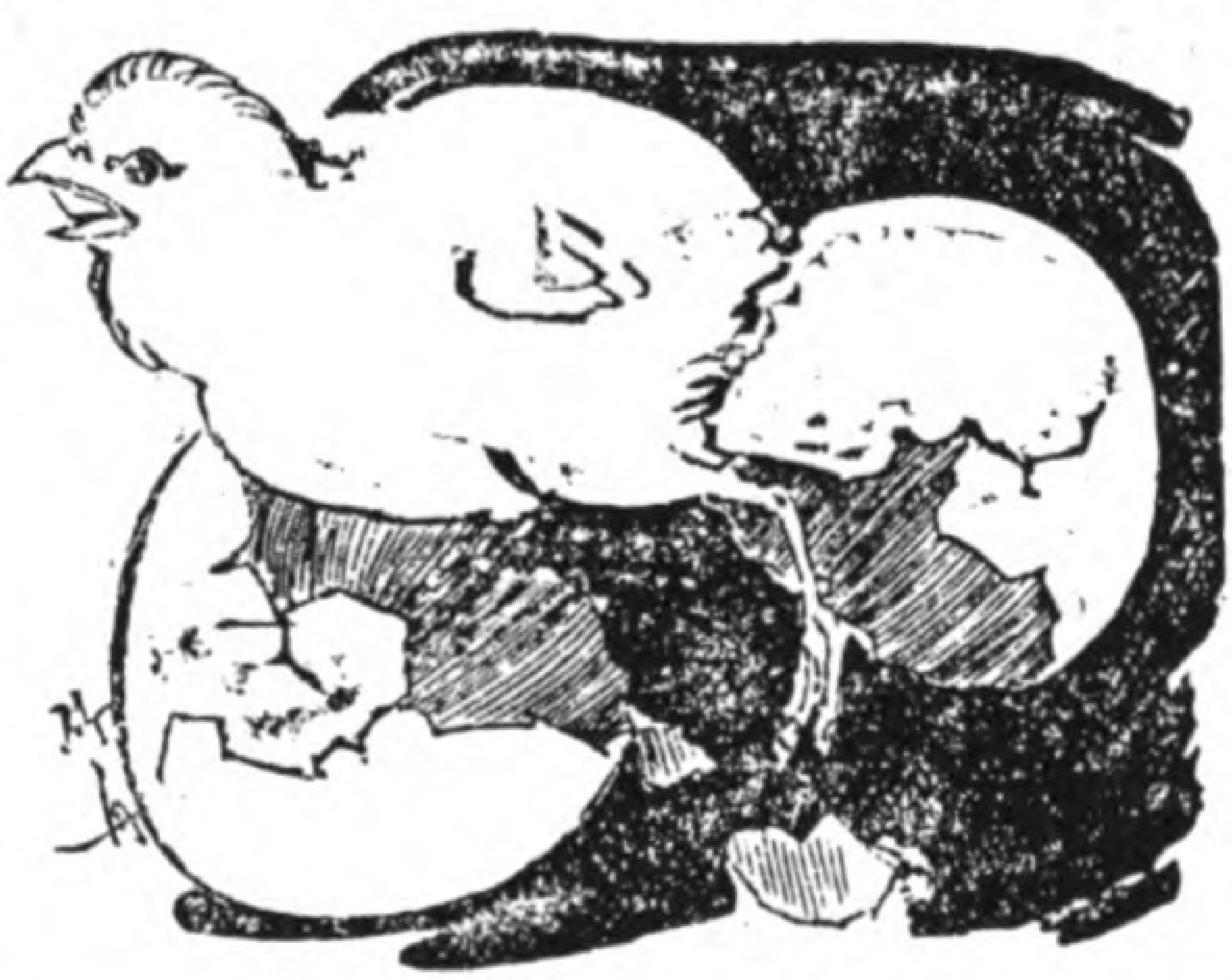


て居りますが、假りに一日に五厘の食物を與へると月に十五錢一年間に一圓八十錢ところで一羽の鷄が一年間に二百個の卵を産むと卵一個の價平均二錢としても四圓となります、さすれば一羽につき一年間に二圓二十錢の利がある樣になります。

▲休み塲　鷄は普通「トマリ木」に止まつて休むを好むものですから先づ小屋の内に地上から三尺位の高さに横に二三本位鷄の數に應じて、「トマリ木」を造り置き其隅の方に小さき箱に藁を入れたものを置いて產卵箱に供へるのがよいです、こうして置けば鷄は夕方になると獨りで一定の塲所に入つて休みます、此鷄の巣について最も注意すべきことは常に巣を清潔に保つことで特に夏期の温暖な時分には注意して掃除をよくし石灰などを振り撒いて清潔に保つ

ことが肝要です、もし不潔にして置くと鷄に取つて甚だ有害な害虫が發生し鷄は之れが爲めに斃るゝことさへあります、近頃は除虫菊粉を用ひて此等の害虫を驅除豫防することがはやります、兎に角鷄を管理するについて肝要なことは巣を清潔にすることと、温度の激變を避くることで、冬季には鷄舍の温暖な工夫をし、夏季には清涼な工夫をするのが必要て、鷄舍の空氣の温度は華氏の六七十度位を最も良いとします。

かやうに飼養法に注意が届きませんと産卵が不充分です、元來鷄の産卵數の最も多い年限は孵化の年から滿四年の間で其後は漸々少くなつて來ます又鷄は十、十一月頃の換羽期から嚴冬に跨つて産卵數が甚だ減ずるもので、一年中で卵を最も能く産むのは四、五、六月の三ヶ月で、此時分には健全の良き鷄では毎日隔日位にはきつと産みます、また或



る人の計算に由りますと鷄の一代を十年と定めて一代の産卵數を平均凡八百個位と積りますと最初の四ヶ年に大凡五百個を産み殘る三百個を六ヶ年間に産み出すと云ひます、此故に鷄は孵化後四ヶ年迄は甚だ利益が多いもので若い鷄を賣るのは甚だ不利であります。

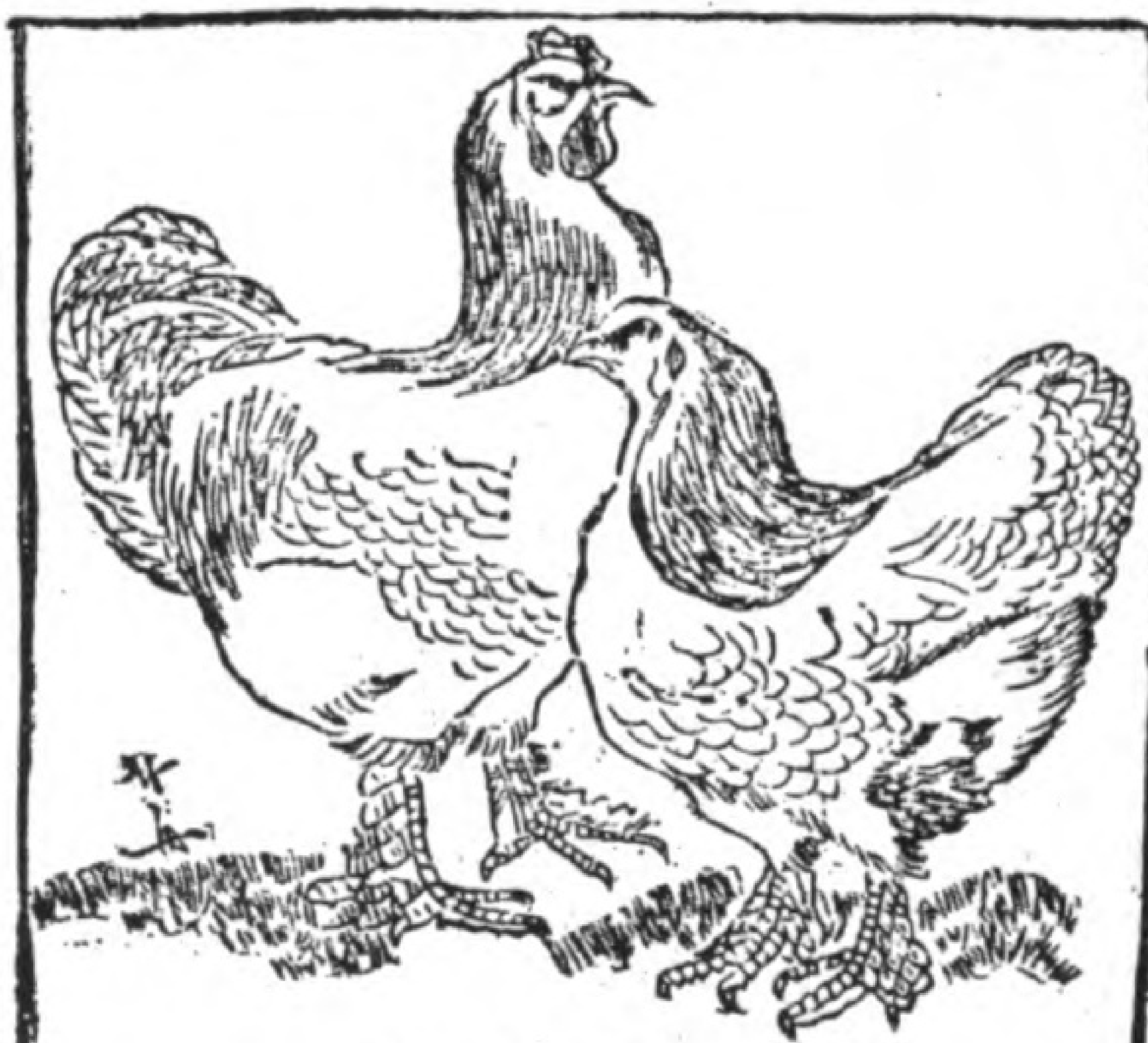
△鷄の種類　鷄を飼ふことは我邦でも隨分古くから行はれたものですが從來我邦で飼うて居つた鷄は概して其種類が甚だ劣等で、體格も小さく産卵數も少なく、肉味も惡いですから近頃では多くの外國種が入込んで來ました、外國種の中には肉用鷄、産卵鷄、肉卵兼用などの各種類が多くて、何れも我邦在來の鷄に優つてをります、よつて茲に數種の主なる種類を擧げます。

一、「コーチン」種、此種は我國で「クキン」と稱へるもので此種の特能は體格が重大で强健で且つ肥滿するこ

とが容易であるから需肉用として甚だよろしい其産卵數も亦割合に多く一ヶ年の産卵數大約百二、三十個で卵の一個の重さは十五匁から十六匁位あります、且つ性質が温順ですから飼養するのに最も適當です、此「コーチン」種の中にはまた色々種類があつて中にも「ナゴヤコーチン」と云ふのは名古屋地方で大層流行してをる鷄で飼養が頗る容易です

二、「ブラマ」種、此種も性が強健で氣候の變化に能く堪えまして發育が速かで卵を産むことが多く、一ヶ年の産卵數が二百個以上に上ります、そして其肉の味は甚だよろしく體の重さは雄で一貫二百匁に達するものがある。

三、「ミノルカ」、此種も性強健で飼育が容易で性質も温順で且つ産卵力に富んだ良き種類で近頃は各所で貴ばれて居ります、加ふるに孵化後卵を産み始めることが早くて孵化してから五ヶ月位で卵を産みます、其産卵數は一ヶ年に二百個以上に達します。



淡色ブラマ

四、「アンダルシャン」、此種は近頃大分各地方で飼養さるゝ種類で外觀が美で産卵の數も甚だ多く且つ孵化後五ヶ月乃至六ヶ月で産卵を始めます此種は關東地方で産卵鷄として貴ばれて居ります、其産卵數はやはり一ヶ年二百個内外です、そして此種の目方は雄で五百目から九百目位です。

五、「レッグホーン」、此種も性が強健で活潑で能く寒氣に堪えて普通の家で飼養するに適すると云ふので、「アンダルシャン」のやうに廣く飼養せられてをります、卵も能く産むし其雛の生育も頗る早くて孵化後四ヶ月から五ヶ月位で能く産卵します。

六、「プリモース、ロック」、此種は米國で盛んに飼養

せらるゝ種類で彼の國では甚だ貴ばれてをります、我邦では、まだあまり多く見受けませぬが、漸々多く飼養せらるゝ傾があります、此種は外觀が美で體軀は強健で活潑で成育も甚だ速かで孵化後六ヶ月で產卵を始めて一ヶ年平均百八十個程の卵を產みます、且つ肉は柔かで多汁で味が頗る美であります。

それから一寸鷄の病のことを述べましやう、此病には色々あつて中には「バクテリア」に基づく恐ろしい傳染病さへございます、乃ち「コレラ」「ヂフテリー」結核病、「ルーブ」病などは、その主なもので尚消化器病だの呼吸器病だの生殖器病などがあります、そして之れが治療法なども色々ありますが要するに治療のことを講ずるよりは豫め豫防法をなすことが肝要で、常に鷄の管理に注意せねばなりません。

（完）

春色歌遊び

蓬のや

卯月の中旬なりき。散りし櫻は雨に打たれて潔かりし最期の跡を止め、梢の若葉漸く繁からんとす。氣候も未だ暑からねば、汗になる樣のこともなく。正式の歌合會催さばやと、日頃まめやかに語らふ友達三四人白髮翁の許に到りて、判者になりて賜はれと請ふ。翁例の長き髯を撫していと笑ましげに、其は寔に興趣ある遊樂なるべし。元來歌は自己が思想をのぶるに止まるものなれば、娛樂の具に供すべきにあらず。彼の披講式といひ當坐式といふもの、理窟は何とも付けらるべし、歌の實價よりいへば畢竟逸樂の具たるに過ぎずされど、披講式の莊嚴なる、當坐式の才を誘發する、必ずしも實益なしといふべからず、只歌合に至りては要するに判者の裁決を受くれば足るものにして、式を踏むは全く消閑の遊樂と見るの外なからん。但し難陳の間、創作以外批評の識を養ふ効力はあり、思ふに野遊の式、扇合の式よりは優なるべし。遣り玉へ／＼、僕の如き到底判者の任に膺らざるべけれど、俊成定家以來、二條冷泉の特有物の如くなりて、昔は廣く漏らさゞりし古式の父祖の代より、我等同族間に傳ふる

ところもあれば、見聞の廣かれと務むる君等を補ふこともあらん。但し四人にては餘りに少からずや、幸日頃我が許に來れる四五の婦人の、彼冷泉の式をば習ひ得たしといふものあり厭ひ玉はずんば其仲間に入り玉へといふ。余等内心に、婦人と來てはいよ〳〵迷惑なりと思へど、否むべきにあらず、且つ聚樂邸行幸記、其他いろ〳〵の書中より集め得たる、余等我流の冷泉式が、果して誤りなきや否やを、此翁に依つて慥めざるべからざるが故に、何事も唯々諾々、日曜日を期して行ふことゝなし其日に至るまで、爲べき準備は充分にせん、その姬御前達に初見參したる上、協議すべしとて歸る。

二日目、翁の許に集まる。余等の到る頃ひ已に婦人連は來り待てり。不粹なるものゝ眼には何とも分らねど透明るもの、黄金色のものを、島田、夜會に髷して、重ねたる衣、坐りたる姿、名は體を顯はす梅の君、櫻の君、藤子、百合子、海棠姬、菫姬の六人なり。翁まづ別題にすべきか通題にすべきかを問はる。別題とは左右題の異なるもの、通題は左右共に同じきものなりよつて他の各員及び女君達とも交涉數回の後「時鳥」と定め、其意を廣うして、時鳥に關する歌ならんには待――未聞――雨中――又は月前――等、何にても可なりとすることに決して、其意を翁に通ず。斯は題を選む方法の異例なるものにて、普通は先達即ち判者となるべき人の專意を以つて決せらるべきものなれども、平日より謙遜なる翁は余等に對して多少讓るところありたるなり。題已に決定したれば、相談の上、探題香を焚き、其の春秋に依つて左右を分つ、女君達の中、梅の君と菫姬とは講師の役を務むる筈なれば、女子を右、男子を左と四人宛分たんと、最初余等の間に議せられしが、女子の側より異議起りて、京都の山本にて製する探題香を、春秋二個宛混交したるを二組作り、男女各別に一個宛採つて、春は左、秋は右と定めて焚きたる結果、左は甲氏、余、櫻子、百合子、右は乙氏、丙氏と殘る二人の女君に決定したり。

三日目、昨日定めたる題にて詠みたる歌を、左右各別

に持集りて、互に研磨し添削して完全無欠と信ぜらるるまでにし、對手より間然するところの毫も無き樣にせざるべからず、歌合に於ては各自は其の所屬の組に對して聯帶の責任あり。假令自分のみは當の敵手に勝つことあるとも、所屬の組にして負の多き時には、遺憾ながら負組の一人とならざるべからざること、恰かも先年常陸山が向ふところ敵なき强勢を持ちながら、恨を呑んで東方より西方に廻りたる時の如し。故に此の下調の時には寸毫も假借するところなく、思ふ儘の意見を述べて、若し對手より攻擊のある時、充分辯駁の覺悟を定め置くものとす。此日、右方が如何なる研究方法を採りたるか知らず、余等の組は、櫻子の兄君が甲氏と熟懇の間柄なるに依り、其家に各集ることゝ爲たり。偖て各數首十數首宛詠みたる中、甲氏は

　山里の人だに未だ聞かなくに
　　おろかにも待つほとゝぎすかな

斯は「待時鳥」とも題を設くべきか。櫻子

　時鳥月のゆくへや尋ぬらん
　　あまぐもつたひ聲の聞ゆる

雨後の子規ともいふべきにや。百合子

　山彥かそれかあらぬか白雲の
　　をちこちに鳴くほとゝぎすかな



歌の品少し下りたる樣なれど、「時鳥」なる題に能く當れり。尙ほ五の句の哉止も面白からず「山ほとゝぎす」とありたけれど、山彥と重るところ別異の名詞なれども餘り珍重しからずとて、其儘に爲したり。余のは

　山彥のこたへも
　待ず時鳥

たゞ一聲に鳴き
渡りけり

が、諸君の採用するところとなりて、尚ほ足らざるところは明日午後三時よりの開會なれば、正午より翁の許にて再び打合せすることゝして別る。

いよ／＼當日となりたり。各相當の禮服を着し、撰みし昨日の歌を本懷紙に認め

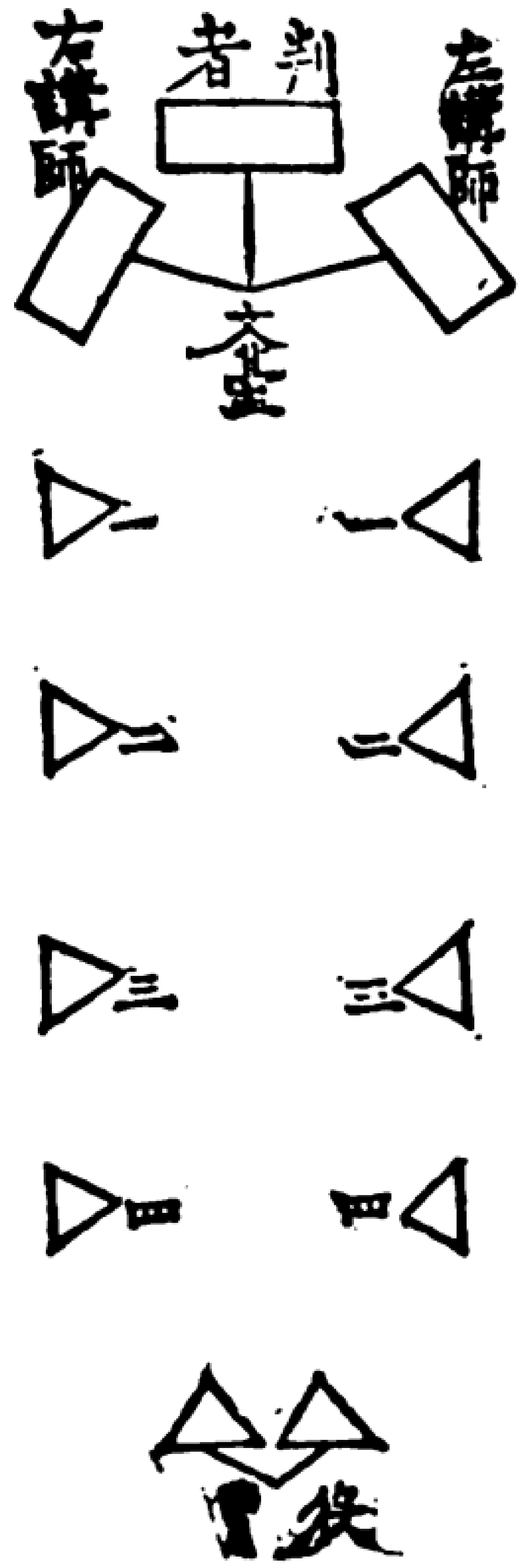
男の本懷紙は
やまさとのひと
だに
いまだ聞なくにおろ



かにもまつほ
とゝき
寸閑那

の如く九字十字九字三字宛に認め終の三字は必ず眞名とし、女のは散し書とす

出席は左右共言ひ合したる如く正午過ぎ、定刻よりは二時間半も早かりしが、諸種の打合せも濟みて、三時式場の席に就く、席次は年順として左の如くなりたり。



判者は白髯翁、左講師は梅の君、右同菫姫、左一番甲氏、二番余、三番百合子、四番櫻子、右一番乙氏、二番丙氏、三番海棠姫、四番藤子、勿論女は男の次席になる譯にて、役曹は白髯翁の孫姫を以つて宛てたり。

愛らしき二人の孫姫稍々斂、硯と料紙（美濃紙を縦ぎたる）とを捧げ持ちて判者の文臺に供へ、更に組硯を出席員に供し、倘ほ料紙(半紙)を左右の一番に渡す。一番は内より二枚宛取つて次席に渡して順次四番に及ぶ。但し男女は手渡しせず、下に置きたるを取るものとす。此日各員の懐紙を、一人宛立つて文臺に置く面倒を避け、豫じめ席順（上席程上）に重ねて講師に渡し置きたり。講師は懐紙の表を中に二ツ折にして座の左側に置き、以つて判者の指揮を待つ。

判者墨を採つて磨る、各員も續いて磨り、磨了つて墨を硯箱の向椽に立かけ、筆に墨を含ませて、墨の如く架し置く。此時判者、默したる儘左の講師に目配せす梅君徐に左側の懐紙を膝に取り、中より一枚拔いて殘れるを以前の左側に置き、拔きたる懐紙を文臺に披げて、双手を疊に下して默讀したるに、字體の不分明なるところやありけん、沈着拂つて

「甲の君と呼びぬ甲氏膝を少し向け直し、僅ばかり進む樣にして双手を突く、梅の君、

「四ノ句は」と問ふ甲氏只、

「おろかにも待つ」とのみ答へて本席に復す。此と同事に梅君双手を膝に上て、鶯の谷の戸出づる聲消く、題と名とを讀み、更に氣を靜めて、

山里の――二呼吸――人だに未だ――二呼吸――聞かなくに――二呼吸――愚にも待つ（此間呼吸を継がず）時鳥かな（以上各句共語尾に力を入れて長く引くものとす）

と讀上ぐる間に、判者は筆を採つて料紙に書取り、各員も、其組に在る者は豫て知るところの歌なれば必ずしも筆記するに及ばざれども、反對の組の者は筆記して、何か難ずべき疵はなきかと仔細に檢するなり。意地の惡き乙氏は頻りに眼を働かせたる後、徐ろに扇を上げて膝に立つ。(各員の前には扇子を横へ置きて、或は難じ或は陳ずる際は膝の上に立てゝ持ち、其の立てたる間は幾時間の長きに亘るも其人の發言權内にある代り、一度扇子を下に置けば、如何なる事情あるも發言することを得ず。又用便等には、扇子を少し差し出し置きて、默つて立つものとす)すわ何をいふかと見てあれば、

「御歌いと愛でたくは承り侍れど、「愚にも」の句殊更下びたり。結句の敢止も少し手づゝなる上、上の句山里の人を想像したる意としては、三の句が餘りに打任せたるいひ樣に侍らずや。」

難陳には情の激して、惡罵を加ふるに至ることある時下品に陷らんことを恐れて、可及的雅語を使用するものとせり。歌の主は何をも言はぬ筈なれば、(最後に言添ふることあれども)余まづ之を駁し、丙氏又難せしが、余より次席は女君達にて、陳する語はあるも口にするを得ず、規則の樣に、

「申す旨侍らず」と、扇を上げて恥かしげにいふのみなりし其の中、藤子の君一人活潑に、激しく突つかゝつて論ぜられたれば、左方の不利益殊に甚しかりき。

左一番の批難濟みたれば、判者は右の講師に目加せす

菫姫卽ち乙氏の懷紙を讀む。

空高く鳴渡りけり時鳥
　渚も濱も一聲にして

間島冬道の「一聲にこそ鳴渡りけれ」から飜案したり抔、左方より難じ、術番數も取り進んで、右方の歌は

丙氏、

聞かで止むものならなくに時鳥
　たれゆゑをしむ初音なるらん

海棠姬、

白川は卯の花月夜影もよし

初音も高しやまほとゝぎす

藤子

山彦のこたへなければ子規
いかで聞きえんいまの一こゑ

是等に對する難論陳辯ありて後判者傍より判詞を書き、即て筆と墨とを收め、料紙を卷けば即ち各員も筆墨を收めて料紙を懷中にす。此時役曹立つて硯を皆撤し、判者、いと徐に判詞を讀みて式は全く結了したり此會各結とも持となりたるは思ふに判者の心遣なりけんかし。

日用 臺所科學

K M R

▲●●●●●一日の滋養分　人は毎日種々の勞役に從つて、此活世界に活動しなければならぬ役目がありますが、一體此活動の資本は何處から供給されるかと申すと、夫れは全く日常の食物にあるのです。

日本人は西洋人に比して、一體に早く老年になり、最早や五十六十になりますると、仕事を厭ひ、樂隱居を致します、西洋人は老いても腰も曲らず、壯い者と同じ樣に活動するのですが、勿論是には種々の原因も御座いませうが、一つは日本人が常に粗食をして、過度に腦細胞を使ふのと、西洋人が比較的營養分の豐富な食物に依りて、絕えず腦細胞の消失を補つて居ることは、確に其一因でありませう。

通常人が一日間の勞役に堪ゆる丈の、活動の資本を得やうとするには、先づ牛乳一合に味噌を五匁、野菜五十五匁に肉類を六十匁、夫に白米四合程でよいので、之丈あれば完全に健康體を保つて、體質の損耗を防ぐことが出來ます、今之を分拆して、其營養分を調べて見ますと、蛋白質二十七匁、脂肪八匁、炭水化物百二十一匁となります。

亦牛乳の代りに卵を二個と、野菜五十匁と、魚肉を六十五匁に、白米四合を用ふるとすれば、其營養分は、蛋白質が二十七匁、脂肪が五匁、炭水化物が百十九匁

の割合になります、兎に角此程度を以て、食品を調理しなければなりません。殊に人間の胃と云ふ物は、眞に勝手なもので、毎日同じ物ばかりでは、決して承知しません從つて營養分を吸收する點にも、影響を及ぼします、料理法が大切なのも全く此爲です、或る人が新婚のお嫁さんに向つて、常に其夫の笑顔に接し、幸福の家庭を造らうとすれば、一週間の食物を、常に變つた方法で料理して獻立をしよと申された事が有りますが、之は實に一理ある事と思はれます。



さて蛋白質と脂肪と炭水化物の三者は、體内機關の消耗を補ひ、油の切れた齒車に油を注ぎ、糸の切れやうとする機關道具の、其糸の弱目を强くする樣、絶えず人の體内を循環して居るのであります。

▲牛乳と鷄卵　牛乳は滋養分に富み、消化がよいと云ふので、近來益々其用途が廣くなり、人乳を得ることの出來ない幼兒も、之に依りて生育しまするし、固形物を食ふことの出來ぬ病人も、之に依りて體の營養を補つて居り

ます。

その様に牛乳が効のあるのも、脂肪と蛋白質を多量に含んで居るからで、殊に其脂肪は牛肉などのに較べますと、脂肪球の形が至極小さいので、消化吸收のことが、容易に行はれ、從つて病人や小兒に適當なのであります。胃の弱い者が牛乳を用ひますと、時々消化せずして、却つて胃病を起すことがありますが、之は牛乳が胃液に逢つて固體となり、爲に胃液が一面に浸み亘らないからです、若し牛乳と同時に麪包を食べれば、牛乳の凝固を防ぎ、安全に速に消化されます。

牛乳が白い色をして居るのも、多量の脂肪小球が存在するからで、其三分三厘立方の內には、二百五十萬個の脂肪小球が有ると云ふことです。又牛乳を沸かして、コップに入れて置きますると、間もなく其表面に薄い膜が張りますが、之は空中の炭酸瓦斯の作用で、乾酪素の凝固したのです、夫れを毒だなどゝ思つて捨てるのは、藥を捨てるも同じことで、眞に氣の知れない話であります。

鷄卵は肉類を得ることの出來ぬ山間では、眞に重寶な食品の一で、其料理法に依つては、餘程種々の事に應用されます、夫れで今では都鄙一般に、此輕便な食品が廣く用ひられますので、日本へ支那から輸入する鷄卵の數量は、年々莫大な金額となるのであります。

普通鷄卵一個の重量を十五匁内外として、其滋養分は牛乳の八勺五才程に相當します、卵の中には、澱粉や砂糖は少しも含んで居りません、亦脂肪も甚だ少なくて、其全量の一割位なもので、其他は悉く蛋白質であります。

此の蛋白質は、胃液に會つて忽ち凝固する性質を有つて居ります、生卵を食ひ難い人は、之を煮沸して用ひますが、卵の黄味は煮れば非常に不消化な物になりますから、矢張なるべく生のまゝで用ひた方が宜敷い。

▲砂糖と醬油　お臺所で食品を調理するに就いて、何より先づ必要なのは、砂糖と醬油とであります。

人の肝臟の中には、グリコゲンと云ふ物質が貯へられてありますが、之は砂糖であります。グリコゲンは必

要の場合には、砂糖となりて肝臓を出で、そして血液に混入致します、人の血液の中には、常に多少の砂糖が入つて居りますが、砂糖が血と共に體内の諸機關に入れば、其酸化作用の結果、體温と活力とを増進せしめるので、砂糖が營養上大切な物であることは、之丈でも知れるではありませんか。砂糖は多くの植物体に、多少含まれて居りますから、其製造原料も種々あります、我國では專ら甘蔗を用ひ、歐洲では蕪菁に似た甜菜と云ふ蔬菜を用ひます。甘蔗は壓搾機に掛て糖汁を搾りますが、この糖汁の成分は、七割の水と二割の糖分と、そして一割の植物纖維其他の物質が含れて居るので、之を純白雪に似たものとする迄には隨分手がかかるものです。

雨後の花



砂糖と共に料理に必用なのは醤油であります、醤油は

大豆二割麥二割、食鹽二割、水四割の割合で製造するので、下等の物は食鹽と水とが多く使用されますから、其味は強く辛味を帶んで來ます、醬油樽を永く厨に置きますと、夏になつて、小さな蛆が浮山生じ、從つて醬油の味が變ります、この蛆はサスと云ふもので、化して小さな蠅になります、物事をわきまえぬ人は、蛆が自然に生いた樣に思ひますが、決してさうでなく、之は醬油の貯藏法が行屆かない所から、蠅が來て樽の透間に卵を、產み付けて置いたのに過ぎません、醬油には又よく黴菌が付き易いもので、其釀造元では大きな釜に移して、凡そ百度位の火熱を掛け此黴菌を撲滅させます、之を火入れと申しますが、此樣な手段を採る事の出來ない上は、一度に多量の醬油を買置くよりも、時々新鮮の物を少しづゝ求める方が、衛生上大に得策と思はれます。

▲**異物嚥下と中毒**　人の慾は先食物から起るもので、頑是なき小兒の泣くも、之に母の乳を與ふれば、大抵其泣を止むるものであります、五六歲の兒童が、何心なく玩具其他の器具を手にして遊んで居る內、思はず之を口の中に入れて、其儘嚥下し、爲に大騷ぎをする事は、家庭で有勝の事であります、かう云ふ塲合に、母親は只怖れ惑ひ、その兒の死亡せん事を憂ひ、無理に手指を口中に入れて見たり、嚥下せし物を吐瀉せしめやうと焦慮れど、一旦嚥下せし物は、決して再び吐き出す物でないのみか、小兒は却つて之が爲に疾病を起す事が有りますから、餘程注意しなければなりません、今之を最も安全に排出せしめる法は、里芋若しくは甘藷の樣な不消化物を、一度に多食せしめるのが一番よろしい、之等の不消化物は多量の排泄物となり、嚥下せし異物を包み、消化機關を損傷することなく、安全に一日若しくは二日を經て、体外に排出さるゝのであります。

中毒とは腐敗の爲めに、一種の有毒なるアルカロイドを生ずるの結果で、而も此毒分は往々臭氣なく從つて味に變化なく、加ふるに煮沸すればとて、其毒分を除去することが出來ませんから、體內に入りて中毒する

のであります、食品の中毒は、食後二十四時間以内に起るもので、此際劇烈なる腸胃カタルを來たし、咽喉喝き音涸れ、眼の調節器關痲痺し、忽ち死亡するので、往々宴會の後に、一度に多數の死人を生ずるのは、皆此爲であります。

解毒劑としては單寧酸か、栗の木の皮の煎汁を用ふるをよしとすれど、指頭を咽頭部に入るゝか、若しくは筆の毛を以て咽頭に觸れ、速に吐瀉を催さして、其毒物を排出せしむるのが、第一の急務であります。



▲茶と珈琲　日本人が茶を常飲料とする如くに、西洋人は食後に必ず珈琲を飲用します、茶及び珈琲の成分たる茶素は、一種有毒のアルカロイドですが、其飲用の量少なければ、血液の循環をよくし、呼吸を增進して、興奮作用を起させますから、眠たい時に其一杯を用ふるのは、非常に心持のよいもので、之れに反して、寢る前に茶や珈琲を用ふれば、安眠を害し、神經徒に奮興するに過ぎないのです、今茶と珈琲との成分を記しますと。

	水分	蛋白質	茶素	タンニン	纖維	灰分	可溶解質
茶	六、六	三七、四	二、一	一九、〇	一〇、一	五、九	三七、八
珈琲	五、〇	一五、〇	〇、六	四、〇	三八、四	四、六	三四、三

となります。

近頃珈琲と同じく、紅茶を飲用する者が多くありますが、此紅茶は支那が其本場で、製造法は、生葉を先づ日光に曝して萎びさせ、夫れを程よく揉んで固め、之を日光に曝して醱酵させ、褐色に變ずるを待ち、焙爐で乾燥させたものであります。

茶が西洋諸國に傳はつたのは、十七世紀の始め頃に、和蘭人が支那人と貿易を始めた時分に、其商人の手から擴められたものですが、支那では餘程古くから、之を飲用して居たものゝ様です。

珈琲はアフリカの原産で、回々教徒が夫れをアラビヤに傳へ、アラビヤ人が更に亦歐洲へ傳へたので、日本へ傳來したのは、明治の初年頃の事であります、由來熱國産の植物ですから、內地には適しません故、小笠原島で栽培した事がありましたが、其結果は失敗に歸して仕舞ひました。

▲酒と煙草●●●● どちらも人体には有害なものでありますが、共に麻醉劑を劇しく有つて居りますから、幽欝を拂うて快感を求むる爲に、文明人も野蠻人も、之を好まぬものは有りません。

酒を飲みますると、顔面其他皮膚が一体に紅色を呈します、之は酒精の作用で、酒精が人體內に入りますと、體內の諸機關は、急に興奮して遂に痲痺します、先づ初めには皮膚下の動脉神經が侵されまして、非常に膨脹し多くの血液は、一時に動脈內に流入して來ますから、皮膚は紅色を帶ぶと同時に、高熱を覺ゆるのです、尤も此熱は眞の體溫には毫も關係がないので、若し此際檢溫器で熱量を計るに、平時よりも却つて降下して居るのであります。

酒と犯罪とは、恰も車の兩輪の様な物で、和洋共に種種の犯罪には、必ず酒が伴ふのです、既に之を飲用すれば、人體が奮興痲痺しますから、平生氣の小さい者も、非常に大膽になり、罪惡を犯して却つて大に愉快に感ずるのであります、獨逸の一統計の調ぶる處に依

れば、三萬人の犯罪者中で、其百分の四十二は、酒の上だと云ふ事です。

日本酒の成分に就いて見ますと、水分が八二、四八でアルコールが一四、三二四と、夫れに醋酸だの糖分だの糊精だの、グリセリン及び灰分、固定酸含窒素物等の小量よりなるので、日本製のビールには九〇、〇三五に、アルコールが四、四〇五と、炭酸瓦斯が〇、四〇六と其他の物が含まれて居ます。

日本酒は之に依つて見ましても、アルコール分の量が多いので、過飲すれば恐るべき悪結果を來たすのであります、尤もビールはアルコール分が比較的少ないのと、夫れに炭酸瓦斯を含んで居りますから、其量を適度に用ふれば、胸が清々して、衛生の上にもよろしい。



煙草も亦酒と同じく、人が慰安を得る爲に用ふる一種の贅品で、其喫用の法にも種々の差があります、即ち嚙む事嗅ぐ事、喫ふことゝなつて居ります。

アイスランドの土人は、嗅煙草を罎の中に入れて置いて、夫れを少しづゝ鼻の中へ振り込んで居ります。嗅煙草を造るには、煙草の葉を食鹽水に浸し、澤山積み重ね醱酵させたものに諸種の香料を交へたもので、亦嚙煙草は船の中などで、

火氣を禁せられ、餘義なく其葉を噛みながら喫慾を制したものですが、我國では、吸煙草の外餘り流行しません。

此樣に迄して各國人が、皆一樣に好愛する煙草も、其小量を用ふれば、一時だけながら、渇を醫し、唾液の分泌を增し、精神に慰安を與えるけれども、之を過度に用ふるか、或は常に喫用しない者が、突然之を喫ふ時は、種々の惡結果を示し、往々中毒して死に至ることもあります。

亞米利加の學校で喫煙者と非喫煙者とに就いて、身體檢査さして見た處が、身長から體量肺量に至るまで、非喫煙者の方が遙に喫煙者に優る事實を擧げ得たと云ふ事でありますが、今や我國も丁年未滿の者には、法令で喫煙を禁じてあります、返す〳〵も家庭の主婦たる人は、兒童に喫煙の趣味を知らせてはなりますまい、一度用ふれば最早や再び禁止することは到底意志の弱い人間には、出來ない事であります。（完）

露西亞の小兒

鐵[illegible]生

敵國の事情を知るは軍國の民に取つて趣味ある事ですから、彼の露西亞の兒童の教育や、其の日々の行跡などに就て少し御話し致しませう。

露西亞でも少し金があつたり、また立派な人の所でか子供が產まれすと、先づ直ぐに乳母を附けて、乳を飲ませて日本と殆ど同じ仕方で育てます、これはまづ當り前の乳母ですが、その子供が五つ六つになりますと乳を哺ませた乳母は用がなくなりますので、乳母を廢して、今度は本を敎へたり、行義を敎へたりする保母を附けます。之を露西亞の言葉で『グエルナンツカ』と讀んで居ます。それは乳を飲ませる乳母よりは、本も讀める字も書ける。そればかりでなく外國語の素養がありますから之を七つ、八つの子供に敎へます。子供は男でも女でも斯樣に幼い時分から外國語を、グエルナンツカから敎はりますから、十四五位になると、も

う外國の言葉に通じて、獨逸人や、英吉利人とすらすら話が出來る、また女の子などは、日本と同じで、行儀を此グエルナンツカが敎へ、お父樣の前へ出ては膝をこゞめて、お辭義をしてからお話をなさいましとか。阿母樣の前で御飯を召上る時には、お行儀よく、默つてお上りなさいとか。それから戸外へ出る時やお座敷へ入つて來る時には、靜に戸を開けて、右の足から出してお歩きなさいとか、いふ樣な事を敎へます。かやうに子供には保母が始終附いて居て外國語を敎へ、又た行儀を躾けてくれますから、大變大人しい、好い子が出來さうですが、實際は中々うまくいかないで、却つて生意氣になつて仕樣がない、夫が日本などでは第一に母親が子供を敎へるから宜いのですが、露西亞の母親と來たら他に用があるし又種々の人と交際がある故でもあらうが中々自分の子供達に搆つては居ない全く打棄り放しで、始終このグエルナンツカに任せつきりになつて居るのだから、餘程弊害があるやうです。けれどもこのグエルナンツカは、考へたよりは好人でその預つて居る子供を育てるのに中々骨を折ります。

それにまた、露西亞は御存知の如くキリストを大層尊んで居る國柄ですから、小さい内より乳母や保母が「キリストといふ方はえらい方です。キリストは神樣です」と言つて信仰を幼い頭に打ち込むものですから、どんなに小さな子供でもキリストの像の前に立つたり、或は神樣の話が出れば、直ぐにお辭義をするのです。是だけは、一寸日本の子供には無い事です。

而して此グエルナンツカは一層、宗敎思想を養ふ爲に子供に讃美歌を敎へまして、之とピアノやヴアイオリンに合せて歌はせます、其故少し大きくなれば敎會へ出て、唱ふやうになれるのです。

それからまた、露西亞の家庭では、晩餐の前後に家族打寄り、時には來客も交りてピアノなどを彈いて一同合唱をする事があります。勿論この塲合には、宗敎には關係しない唱歌で、日本ならば桃太郎の歌とか、曾我の歌とか鶯の歌とかいふ短いものを歌ひます、なほ一層解りよく例を取つて寫し出せば、

「さあ太郎さんも、次郎さんも入らつしやいよ。また花子さんも御飯ですから入らつしやい。」と阿母様が食堂へ呼び寄せまして、「まあ、皆さんはお客様に御挨拶をなさい。」と言ふと、これで子供は其日招かれたお客様に皆挨拶を致します。さていよ／＼食事が濟んだ所で、今度は阿父様から「太郎、次郎、まだいつもの歌を唱はないか。」「えゝ、唱ひませう。」

「花子ちやんもお唱ひなさい。」と阿母様が申しますと「ねえ、阿母様、甲野さんも唱はなくつちや。」「あゝ可し／＼。それぢや甲野さん、皆さんもお唱ひ下さい」と阿母様はお客様に頼む。そこで客の甲野は、快く承知して、「ねえ、乙田君も丙君も合唱したまへ。」と皆も誘ひ、遂に太郎の音頭取家族も來客も一緒に成て「鶯の歌」を唱ひ始めます。すると、大人の太い聲の中に細い可愛らしい聲が挾まつて聞こえるので其の調和がいかにも面白く家庭の團欒したところが見えます。

グエルナンツカの勤めは以上申したやうなものですが、やがて學齡になれば小學校へ入れ女の子はまた女學校へ通はせます。而してその家庭になほ教師を抱へて置く所もありますけれど、見渡す所露國の家庭教育は概して嚴肅といふよりは、無暗に詰め込むといふ主義であります。

それから家庭の遊戯ですが、是は歐米各國と大差ありませぬ。然し中でシヂルキと唱へる遊戯は、日本のお茶坊主に似たものです一寸變つて居て面白うございます。まづ座敷の眞中へ二列に椅子を幾つも並べ而して其は必らず背中合せにして置くのでして、こゝに皆腰を卸すのです。そこで鬼は半巾で目を蔽ひ、周圍を廻りながら名を當てるのです。椅子に居る者はその度々に座を變へますから、中々當りませぬ。

戸外の遊戯も例のテニスや、ベースボールや、クリツケツトなどは盛に行はれます。それに一寸珍しく思はれるのは日本でいふ根つ木の遊びです。露西亞語ではゴロトキと言つて居ます。ゴロトキは元 城郭といふ意味で、兵器を以て城郭を突くといふやうな所から轉じたものでもありませうか、隨分廣い庭などで此のあ

そびをやつて居るのを見かけます。其の法はまづ眞中に丸く線を引いて置いて、之へいくらも棒が挿さつて居るのを、此方から同じやうな棒を投げ付けて、この中に在る棒を外へ出し合ふのです。棒は樺や松などの木で拵へてありますが、中にはコストッキといつて、牛の骨で出來たものがあります。其から冬になると氷滑りが盛に行はれます。何に致せ、冬の間は川も海も湖も、一面氷が張り詰め、その上は電車鐵道や、馬車が通ふ位な所です。から、氷滑りは本場と言つても好いのです、氷滑りに使ふ靴は、一種特別の物で、コンキと申します。形は通例の靴の下に、鋼鐵で製へた先の尖つた齒を、一本縱に付けてあります。子供等はこれを穿いて、氷の上を縱横に馳廻つて居りますけれどしかしこれは餘程の熟練を要するもので、他國人が飛入に行つて見た所が仲々うまくゆきませぬ。此の氷滑は特に盛なもので氷滑りの團體倶樂部のやうなものが出來て居て時々競走會を開きます、水の凍るのは、不規則で中々註文通りに平坦には凍つてくれませんが、其を倶樂部員などが行つては凸凹を削つたり、水を一層かけて凍らしたり、色々の工風を致しますから全く平坦なものになつて仕舞ひます。而して露西亞ではこの氷滑りを單に競走ばかりでなく、交際の上にも用ひます。且又この遊戲は何方かと言へば、少年少女の遊びといふよりは、寧ろ成年以上の男女の遊戲ですから、是を以て大に交際の上に欠くべからざるものとしまして、氷の上で舞踏會をする樣なこともあります。で、この舞踏會には必らず音樂隊が從つて、盛に奏樂を致しますから、夫は〳〵賑かで面白う御在ます。その他に雪ぶつけも隨分致しますが併しこれは重に少年のやる遊戲に成つて居ります。

お話が寒氣の方の事になつたから、一寸露西亞の酷寒に對する家屋の搆造をお話ししませう。何にしても露西亞の都聖彼得堡などでは、毎年厳寒には寒暖計は列氏零度以下二三十度に下る事が往々ある位ですから、彼等露西亞人は衣食住の内では何よりも住居に重きを置き從つてその搆造も寒氣を防ぐことを專一に心

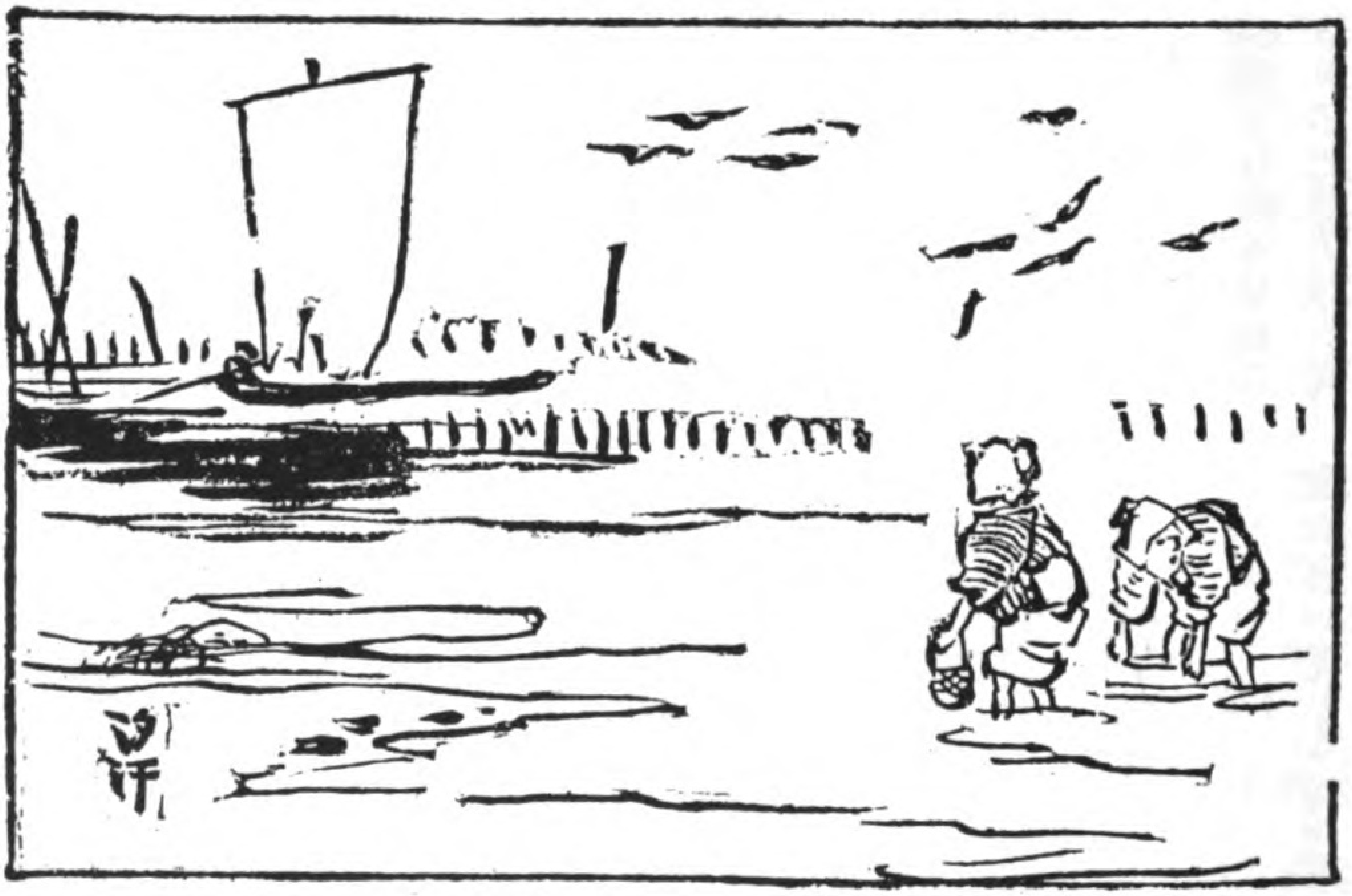
懸てをります、露西亞の家の防寒的設備を見るに暖爐と二重窓の二つで大抵の家に之を備へぬはありませぬまづ二重窓のお話から致しませう。是は内外二重の嚴重な窓でその外窓には目塗を施し、之を副防禦として風雪の來襲を避け、同じく内の窓にも固く目塗を施し之を本防禦と致してありますそれでも激烈な寒氣には窓の間の水氣は凍つて、恰も雪の積つたやうになります。それから戸なども二重になつて居り、而かもその隙間には羅紗その他の毛屑が詰めてあるから、少しも風の入る事はないやうになつて居るのです。

それから室内を暖むべき暖爐ですが、是が又露西亞は特種のものでして、まづ壁に塗込んで一つの竈が切つてあり。烟は壁の中の通りて天井裏へ脱ける仕掛ですが、その途中に一寸蓋が取付てあつて、自由に開閉さるゝ樣に出來て居ります、さてその下爐は樺や松の薪――是をペチイカといひます――を入れて焚くのです。するとペチイカといふ薪は燃えて、烟は天井越に烟突を通つて出て行く内に、かの瓦斯が全く去つて、丁度薪が眞赤に起つて仕舞つた時烟突の上の蓋をぱつたり蓋せると、其の火氣は壁を暖め、溫度を密閉したる室内へ送りますから、始終五六十度位な溫さを保ち、睡くなる程氣持が快う御在ます。その代一寸戸外へ出やうものなら忽ち、例の零度以下の嚴寒に壓せられて、凍へ和になります。ペチイカ！露西亞人ばかりではないかの露領亞細亞へ移住して居る者は、日本人でも同じ感があるのです、世に幸福を與へるものはペチイカである。ペチイカは實に我等の生命であると申して、珍重するのです、然しながらこのペチイカを焚くのが、中々むづかしいのでして、運惡く性の惡いのにぶつからうものなら、五本の所を七本焚いても、十本焚いても燻るばかりで燃えやうともしない、其許でなくうつかり過つて、まだ全く燃え切らない内に、上の烟突の蓋をすると、かの烟が室内に浸入して瓦斯を漲らし爲に頭痛を起し、目を膨らし、甚しきに到つては窒息死に到らしむるほどであるから、餘程注意を要するのです。

ある日本人が初めて西比利亞へ行つた時に、寒さが餘りに甚いので、日本の懷爐をして寐たさうです。所が翌日になると、頭痛がして目が膨れて仕舞ひました。大方疲勞の故であらうと思つて居つたが實際はさうでなく懷爐から出る瓦斯が密閉したる室内に充ちた爲め其を吸つて頭痛を覺えたのだと初めて分つたといふ事です。家庭をあたゝめる暖爐にして、此害毒ありといふのは妙な譯ではありませんか

汐干狩

雲か霞かと擬ふばかり　櫻も早



や咲き盛りて是より汐干狩の季節とはなりぬ、汐干は舊暦三月三日、雛の節句前後とあれば本月七日頃が丁度よからん、まづ東京にていへば、羽田浦の地先より大森、品川の沖合、臺場附近、芝浦、深川洲崎、扨は南葛飾の沖合（陸より四五丁乃至十二三丁の間）は一面の干潟となりて海上は忽ち、源平船いくさの如く女臈達のあらけなき遊び場となりて、賑ひを催ほすなりけり。

汐干のさかり場は品川臺場の附近なれど其所にてはあまり數多き貝類は獲られず、女子供にても採り得らるべき貝類

は、まづ文蛤、淺蜊、しほふきなどにて稀れに香螺、蓼螺、鳥貝、馬鹿貝なども手に入るなり、文蛤の大さは三寸位にて小なるも六七分はあり、其色は灰色にて紫の斑あり、潮吹は文蛤よりも脆柔かにて不味なり、大さは二寸ばかり、色は灰色にて常に潮を吹き出す故其名あり、海中より堀り立てしを熱灰の中へ投げ入れ燒きて食へば其味牡蠣の如し。

そも之れを採るにはまづ竹籠を腰につけて把手のやうなるものにて土砂を搔きて拾ふなり、又淺蜊は大森邊の沖合尤も繁殖し、それを採りて船に積み芝邊の魚商人買ひ取り毎朝市中に賣りあるく。香螺といふは青色せる小さき拳のごとき貝にて肉は白く少しく苦味あり發育の塲所は大井村、海岸にて海苔の篊朶などに附着せり。又蓼螺といふは形ち榮螺に似て重に藥に用ゆ、又鳥貝といふは其形ち蛤に似て大さ三寸許り、其肉は薄藤色の斑ありて形ち鳥に似たり、專ら鮓の種に使ふ。扨て潮干に出で、女子供の最も喜び樂しむは寄居蟲なり、頭は蝦に似て足に爪あり腹は長くして蜘蛛の如く、殼を負うて汐の引けし時水溜や石の間などを走りゐるを小兒等是を見つけて捉へんとすれば敏こく其の殼の中へ還入るなり、それが女子供の遊びとして如何ばかり愉快ならん。

汐干狩には上手もあれば下手もあり、皆それ〱呼吸のあることとなり、貝類は總じて砂のある處に生ずるもの故泥のある處に終日狩り廻るもつまりは疲勞もうけにて僅かに猿棒、鳥貝位を得るに過ぎず、されどこの砂地は漁師の占領する處なれば素人がそこへ行きても駄目なり、それ故まづ海苔篊朶のある附近をよしとす、此所は流石に漁夫も器具を携へて行かざれば自然に貝類の繁殖する譯なり、されば汐干狩に獲物の多からん事を望むものは篊朶の周圍凡そ一尺許りの所に手を下すをよしとす、穴賢。

活花十二ヶ月拾遺

梅月園主人

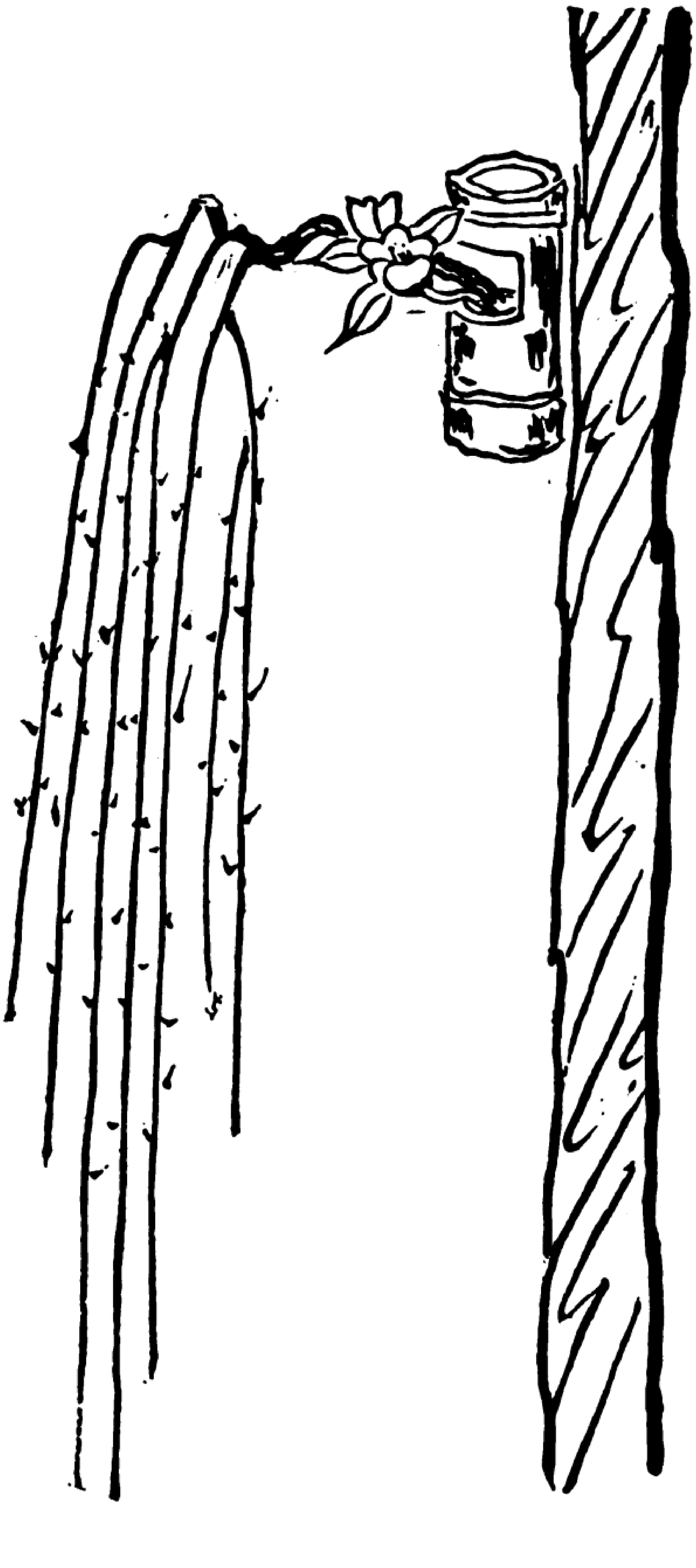
本誌第一號より述べ來れる活花十二ケ月は第十六號を

以て其の結びを付くるものなれども其の内容は第二號第四號に述ぶる所によりて其の大體は推し測らるゝならん、即ち各花の性質の異同を述べ其れより活方を説くものなり、然れども又各姫方の後日然るべき師の門に入り更らに深く學ばるゝの時あらんかし、今其の道しるべとして入門の手續きより各傳物の許しを受くるの手續きを述べんとす、



此の池坊流の活花を學ぶには即ち池坊門弟とならざるべからず、故に何れの地にて如何なる師に就くも其の師は只池坊の代理として各ゝ花の活方より傳物等を敎ふるものなりと知るべしされば許しの書等は皆都六角堂なる池坊の家元より出づる事なる故、其の師は如何なる人なりと雖も入門料とか傳授料とかは一樣ならざるべからず、左るに多くの先生方の中には己が利益を計らん爲め色々の名義を以

て不當の金を貪る向も少しとせず殊に田舎の師匠には斯様なる事數多ある由聞き及びぬ。



池坊流の生花を修めんとて相當なる師に就かば先づ何人にても入門料を納めざる可からず、此れ學校等に入學するに當り束修を要するが如し、而して入門料は何れの地何人にても二百匹(五拾錢)と云ふが定めなり、又別に席札料と手數料とを要す席札料とは會席等にて各自の生花の前に席名なるものを置くを例とす、席名札は即ち席札なり此の席札も家元より受くるものにして先づ席札の代金とも考ふべきか、即ち入門の始め合計六拾五錢を納むれば其れにて池坊門弟となり得るなり。此の上は種々の傳物ありて各自の心次第にて順次如何なる傳をも受くる事を得るなり今其の傳物及び傳授料を併記せば左の如し、

三個船傳
松竹梅傳
紅葉傳
櫻傳
實物葉物蔓物傳　各二百匹づゝ

右五個條、

芭蕉。蘆。牡丹。
水仙。朝顔。蓮。
椿一輪。

右七種傳。各金六百匹

草木集。金七百匹
定式卷。金八百匹
廻生卷。金八百匹
生花卷。金千四百匹

右花定式

傳物は以上にして此の傳を受くるには矢張り師の手より傳授料及び手數料を家元に納むるなり。

因に會席等に於ける席順の定め方は入門の新古相傳の多少によりて定むるものとす。

季節料理

治庭會本部教授主事　安西こま子

へぎ魁蛤
花みるくひ
糸作り針魚
筏うど
二葉紫蘇
櫻わさび

▲刺肉

小皿　わり醤油

一、へぎ魁蛤　は、魁蛤の殻をはがし、竪に二つに割り、膓紐等を除き、水にて洗ひ、中肉の方を上になして俎板の上におき、庖刀をねかし、大きく薄くへぎ、之を目笊にとり、食鹽をふりかけ、目笊を俎板の上におき、貝より泡沫が生ずるまで笊を振り動かし、水を澤山注ぎかけて能く洗ひ、水を切りおくべし

一、花みるくひ　は、西施舌の殻を剝し、呼鹽管の黑

き表皮に食鹽をまぶし暫らくおきて表皮を剝し、竪に二つに割り、水にて能く洗ひ、竪に薄く打ち、淡鹽をあて暫らくおき、ザット水にて洗ひ、之を沸騰湯の中へ投じ霜降りとなし（腥きにほひを除くために、一寸と沸騰湯の中へ投じ、恰も地上に霜のふりし如く貝の肉色が白く變るを度とし、直ちに湯より引きあげる事なり）直ちに冷水にとり、數回水を取りかへ、能く冷やし、水を切りおくべし

一、糸作り針魚　は、針魚の鱗を除き、頭を切り落し腹をあけ、腸を取出し、水にて能く洗ひ、三枚におろし、薄肉をへぎ、小骨をぬき、おろし肉の長さが六七寸なれば三つに切り、竪に細く作るべし

一、筏うど　は、土當歸を二寸程の長さに切り、皮をむき、短冊形に庖丁をなして水に取りおくべし

一、二葉紫蘇　は、紫蘇を淡鹽水にて洗ひ、水を切りおくべし

一、櫻山葵　は、蘿蔔、佛掌薯、長薯、自然薯、里芋の中其一つを撰び以て本年二月發行本誌第五卷第三號季節料理欄内に揭る圖の如く庖丁をなし、而して之を木口より薄く切りとり、水に放ちおきて取出し、左の掌へ布巾を展べたる上におき、右手の紅さし指にて花の心の處をおさへ以て凹くなし、又之を紅水の中へ浸し、水にて能く洗ひおろし、山葵を盛るべし（山葵のおろしかたは本年三月發行本誌第五卷第四號季節料理欄内にあり）

一、盛り方　は、先づ魁蛤と西施舌とを向へ盛り、次に其前へ水の形狀に針魚を盛り次に此針魚の上へ數片のうどを以て筏の形狀に盛り、又櫻山葵と二葉しそとは、見計ひ適當の位置に盛るべし

一、割醬油　は、二番煮出汁六杯と生醬油四杯とを合せ一回煮立て之を冷して用ゆべし

△口取

慈姑紫金とん
茶蕎麥海苔卷
たひ　櫻むし

一、慈姑紫金團　は、大なる慈姑を撰び、皮をむき、

木口より厚さ二分程の輪切と爲して其面をとり、水にて洗ひ、沸騰湯の中へ投じて茹で、別に鍋へ味淋（慈姑を入れて被る程の量）を入れ、一回煑立て、之に三盆砂糖少しく加へ、砂糖が溶けしとき、前の慈姑を入れ、毀損れぬ樣に注意をなして暫らく煮、之に生醤油を加へ、淡味をつけ、而して之に甘藷の衣を加へ、汁が詰るまで煑込み、大皿に移し、直に扇ぎ冷すべし。

又衣の製法は甘藷の皮を、毛穴の殘らぬやうに叮嚀にむき、厚さ一寸程の木口切となして暫らく水に放ち二三回水を取りかへおきて後ち、水を切り、之を沸騰湯の中へ投じ、甘藷に龜裂が生ずるを度とし、湯を切り、裏漉をなせしものなり（但し大なる慈姑二十個につき、甘藷凡そ三十匁を用ゆ）。

一、茶そば海苔卷　は、海苔の卷きのはじめとなる處へ、おろし山葵を塗りおき、此海苔を以て、並の海苔卷ずしを作ると同じ方法にて椎茸を心となし、茶そばを卷き、之を一寸五分程の長さに庖丁をなせしものなり、但し海苔は炙りたるものを用ひ、茶蕎麥は蕎麥屋より求めて用ゆ又椎茸は、木乾椎茸を暫らく水に放ちおきて之を沸騰湯の中へ投じ、柔らかにゆで、直ちに冷水に取りて能く洗ひ、堅く搾りて水を切り、之を一回煑たる味淋二杯と生醤油一杯との割りに合せたる汁を以て煑て味をつけ、纖に打ちしものなり。

一、鯛櫻むし　は、先づ鯛を三枚におろし、之を幅二寸程の節に庖丁をなし、又之を厚さ一分、長さ三寸程のへぎ肉を作り、食鹽をあて暫らくおき、ザット水にて洗ひ、水を切りおくべし、次に鹽漬の櫻葉を沸騰湯の中へ投じ、直ちに引きあげ、水にて冷し、水を切りおくべし、次に木の芽味噌をつくりおくべし（木の芽味噌の製方は本欄内豆腐木の芽田樂の條を見るべし）而して鯛のへぎ肉を横に二つに折り、其中へ、木芽味噌を少しくはさみ、而して之を櫻の葉に包み、蒸籠にてむせしものなり、但し櫻の生葉を用ひんとするときは、其葉を淡鹽水にて洗ひ、へぎ肉を包み、蒸せし後ち、新らしき葉と取換へ以て皿に盛るべし。

鳥貝

▲酢びたし

枝海蘿
酢どり防風
山葵
三杯酢

一、烏貝は、其肉を竪に三四個に庖丁をなし、之を沸騰湯の中へ投じ、菜箸を以て二三回攪拌せ、直ちに目笊にあげ、湯を切り、次に鹽酢（生酢に少しく食鹽を加へし酢なり）に洗ひ皿に盛るべし

一、枝もづくは、海蘿に灰をまぶし、兩手にて能くもみ、數回水を取換て能く洗ひ、布巾に包み、水を搾り、少しづゝ皿に盛るべし

一、酢どり防風は、防風を沸騰湯の中へ投じ、ザットゆで、冷水にとりて能く冷し、水を切り、其莖の方のみを生酢の中へ浸しおきて後ち之を五分程の長さに庖丁をなして皿に盛るべし

一、三杯酢は、煮切り（味淋を煮詰めたるもの）と生酢とを等分に合せ、之に少しく生醤油を加へしものなり而して酢びたしを客に出すときに際し、皿に盛りおきし品に此三杯酢をかけ、おろし山葵を添へて侑むべし。

▲丼

絹烏賊
木口うど
せん筍
木芽あへ

一、きぬ烏賊は、かふ烏賊の墨をつぶさぬやうに注意して甲をぬきとり、足をぬき、水に洗ひ體即ち袋の表皮を除き、其大小によりて竪に二つ又は三つに割り、庖刀をねかして薄くへぎて目笊に入れ、柄杓に二三杯の熱湯を注ぎかけ、直ちに笊と共に冷水の中へさし込み能くひやし、水を切りおき、別に濃き煮出汁に生醤油を少しく加へたるものを煮立て、此中へ前の烏賊を少しづゝ入れ、ザット火を通し、直ちに引きあげ煮汁を切りおくべし

一、木口うどは、土當歸の根元のかたき處を切り捨て、枝を除き、水にて洗ひ、皮をむき、木口より三分程の厚さに切り、暫らく水に放ちおきてアクをぬき、

目笊にあげ、水を切りおき、別に味淋の煮切り(五勺)と濃き煮出汁(二合)と生醤油(一勺)とを合せたる汁を煮立て、此汁の中へ前の土當歸を入れて煮上げ、能く汁を切りおくべし(但し括弧内數量は割合を示す)

一、繊筍は、皮をむき、根元のかたき處と穂先とを切り捨て、之を竪に二つに割りて鍋に入れ、澤山の水と一摑の糠とを入れ、火に掛け、柔らかに茹でゝ水にとり、兩三回水を取換へ其まゝおきて後ち、二寸程の長さに切り、之を一分程の厚さにむきて幾枚をも重ね一分程の厚さの繊に打ち、土當歸と同じ汁にて煮付け煮汁を切り、而して木口うど、絹いかと共に木の芽味噌にあへるべし、但し木芽味噌の製方は、本欄内豆腐の木芽田樂の條にあり

▲椀盛

鯛のあら
うしほ
木の芽

一、鯛のあら　は、鯛のあらを適宜の大さに庖丁をなして、強く食鹽をあて、暫らくおきて、ザット水をかけ、鍋に入れ、之に魚を浸す程の水を加へ、火に掛け半熟となるを待ちて鍋の湯を切り、更に一人一合の割合にて人數に應じて水を加へ、火にかけ、一回煮立てて鹽味を試み、其不足する處の鹽氣を補ひ、極めて少量の生醤油を加へ、直ちに火よりおろし、椀に盛り、笹打めうがを少しく加へ、木芽を吸口として侑むべし

一、笹打めうが　は、茗荷の柔らかき處を撰び、之を斜に薄く打ち、暫らく水に放ちおきて水を切り、煮出汁にて洗ひ以て用ゆべし

一、木の芽　は、山椒の芽を淡鹽水にて洗ひ以て用ゆべし

備考　右に述べたる汐煮の製方は早仕立の方法と知るべし

▲甘煮

巻いか
筍
孫いも
木の芽

一、巻いか　は、かふいかを本欄内丼の條に於ける

と同じ手續をなして烏賊の體の皮をむき、內の方を下になして爼板の上におき、二分程の幅にて縱に深く庖刀目を入れ、之を縱のまゝに卷き、竹の皮にて三ヶ所を括り、目笊にとり、之に熱湯を注ぎかけ、直ちに笊に入れしまゝ、冷水の中へさし入れて能く冷し、別に味淋と煮出汁少々と生醤油（控めに入れる）とを鍋に入れ、火にかけ、煮立つを待ちて、鍋の中へ敷笊をしき（敷笊とは薄く剝ぎたる竹を以て蛇目に編みがけになせしものを云ふ而して煮物が鍋底に焦げつくを防ぐために用ゆ）前のいかを入れて煮上りに生醤油を注し一寸と煮て取出し、之を厚さ三分程の木口切に庖丁をなすべし

一、筍　は、本欄內井の條に於けると同じ手續をなして茹で暫らく水に放ちおきし後ち取出し、適宜に庖丁をなし、別に鍋へ濃き煮出汁と少量の味淋（又は三盆砂糖）とを入れ火に掛け、煮立つを待ちて前の筍を入れ、落蓋をなして煮上りに生醤油を注し、一寸と煮て火よりおろし皿に移すべし

一、孫芋　は、土付の孫芋を撰び、水にて能く土を洗ひおとし、別に鍋へ澤山の水を入れ、火に掛け、ぬる湯となるを待ちて前の芋を入れ、落蓋をなして能く煮て、糸針を以て芋にさし試み、未だ少しくかたき時分をはかり、鍋を火よりおろし、二重の蓋をなして凡そ二十分間ほど蒸しおきて取出し、皮をむき、兩端を少しく切り落し、小なるものは其まゝになしおき、大なるものは適宜に庖丁をなし、更に鍋へ敷笊をしき、前の芋を入れ之に芋が被る程の煮出汁と味淋（又は三盆砂糖）とを加へ、火に掛け、粗ぼ煮へしとき、生醤油（控めに）を注し、猶は一回煮て、前に控へし丈けの醤油を注し、一寸と煮て火よりおろすべし

一、木の芽　は、淡鹽水にて洗ひ以て用ゆべし

▲箱豆腐　木の芽田樂

一、豆腐　は、先づ水の中へ入れおき、板を水中にさし入れ、此板に受けて豆腐を取出し、水に濡らせし薄刃庖刀を以て豆腐の耳即ち布はだの處を薄く切りおと

し、小半丁の豆腐を横になして凡そ一寸程の幅に庖丁を爲し、別に板の上へ乾きたる布巾を敷きし處へ前に庖丁をなせる豆腐をならべおき、又此豆腐の上へ乾きたる布巾を被せ、猶ほ此布巾の上へ輕き板をおしとして暫らくおき、水を切り、二片づゝ竪に青竹串にさし之を落着きたる強き火にて兩面をホンノリと焦がし、其片面に木のめ味噌を塗り、一寸と炙り、串を新らしきものと取換へ、箱又は皿に盛り、冷めざる中に侑むべし

一、木芽味噌　は、先づ山椒の葉五勺程を淡鹽水にて洗ひおき、別に胡桃五粒を微温湯の中へ浸し、澁皮を除き、擂鉢に入れ、能くすり、之に前の山椒の葉を加へ能く擂り混せ又之に辛味噌百匁と味淋の煮切り壹合五勺と三盆砂糖少々とを加へ能く擂り混せて裏漉なせしものなり若し此擂り味噌が、かたきときは煮出汁を加へ以てゆるめ用ゆべし

「[illegible]とかけて[illegible]」と解く
心は[illegible]の取締がきびしい

衛生顧問

（インフルエンザの豫防法及び療法等）（問）インフルエンザとは如何なる病でせうか、併せて其の豫防法を敎へて頂きたし。（東京の弱蟲女）

（答）次間の傳腦女の容體書、傳染の狀態及び其答を讀まれたし。

（問）過日友達の許を訪ねましたに、圖らずも、インフルエンザであるとの事、それはと早速病室に入つて、一時間計色々慰めて歸りました、すると傳染したものか、其日は左程でも無つたですが、明日の午後に至ると、卒かに惡寒を覺え、頭痛劇しく、呼吸苦しく、咳嗽は出る、咽は痛んで堪りませぬから、直にお醫者に診て頂きましたれば、熱は四十度五分、これはインフルエンザであるとの仰せ、それより服藥をなし、二三日四五日と日を經るに從ひ、私の病は追々輕くなりましたれど、母兄、妹、父と遂に下婢にまで傳はり、

現今は皆々快方に赴きましたが、私と兄とは腦病のやうになり、僅かの時間書見すれば、早、頭痛を訴へてなりませぬ、されど、お醫者は「自然に治るから」と申されます、眞に其通で御座いませうか、心配になりますから、その心得ほど御敎示を乞ふ。（淺草區の傷腦女）

（答）本病は左程恐るべき重病でも無れど、油斷をすれば、肺炎、氣管支加答兒、肋膜炎或は腦充血等を合併或は續發し易いものであるから、十分に治るまでは十分に治療を加へねばなりませぬ、發熱が止んだからとて外出したり、或は直に平生と同じき食物を取つたり、或は書見をしたりしては、これが、所謂「病は癒るに怠る」ではありませぬか、「自然に治るから」とは服藥をするには及ばぬとの換言であらうと思ひます。

（問）インフルエンザの療法を問ふ。（下總の因不留）

（答）温かく身體を纏うて安かに臥し、高熱には頭部を冷し、温脚浴を取り、淡泊とした食物を撰び、或は身體按摩を施し、心をも安靜ならしむるやう注意せねばならぬ、内服藥としては、

規尼涅　〇、五　を丸藥とし、朝夕二回用ふべし、併し規尼涅は〇、五以上の分量になると耳鳴を來す等の事があるから、劇藥なれど

フエナセチン　〇、七　を一日二回乃至三回用ふれば甚だ効がある。

（盲腸炎の治療法）（問）盲腸炎の原因治療法に就いて、去年の暮御尋ね申しましたれど、未だ御掲げ下さいませぬ、何卒早く御敎を願候。（森川町の辰子）

（答）原因は大便の蓄積、異物の嵌入（盲腸部に）盲腸部近傍の炎症（熱をもつといふやうなこと也）などである、攝生法としては常に便通を整ふるやうにし、過勞大酒を愼まねばなりませぬ、療法は石鹸水の灌腸或は

チリ子油　一五、〇

の内服などを以て下痢を導き、盲腸部即ち右の下腹の場所を冷すか、或は反對に温むるも宜い。併し本病は其の重さに至つては、切開せねばならぬのである、辰子孃よ同じ森川町ではありませぬか、日曜日ならば御出になつた所で、私も貴女も左程勉學の妨にもなりま

すまい。

（黄疸の治療法）（問）私は當年二十七歳でありますが、生れてから今で三度黄疸に罹り何時も當村なる醫者様の煎藥をのみます、何れ此病のために「人生僅五十年」さへも保たれまいかと思ひます、されど何か治療法のあるものならば御教授を願ふ。（村長の女學世界借用婦）

（答）胃腸病等の原因にも依るけれど、概して素人方の恐れらるゝ程重い病氣では無い、さうして其療法も其の原



軍用品製造圖繪（福神漬の罐詰）

因に依つて異るが、兎に角ソップ、牛乳、牛肉などに、菓實或は蔬菜類を副へて食ふが宜い、牛肉は可成瘦手を用ふべし、内服藥は

大黄末　一、〇　重曹
二、〇　白糖　適宜
右三包に分ち一日
三回、一回一包宛

を用ゐ玉はゞ昔の煎藥よりも宜いでせう。

（頭虱を除く法）（問）妾の妹、本年十一歳になりますが、何處で傳染りましたか、頭中は虱と其卵で充ちてゐます、これを取除く療法

を甚だ失禮ながら敎へ賜はりたし。（周防の不注意娘）
（答）頭髮を剃つて了へば最も宜しいが、さう出來ぬ塲合は曾達水を以て屢々洗ひ、然る後左の藥を塗布するが可い。
石油　二〇、〇　阿列布油　八、〇　百露拔兒撒謨一〇、〇　右三品よく混せて一日數回塗布し、塗布したる後は、又石鹼を以て洗ふがよし。

「齒を白くする法」（問）每朝磨きますれど、矢張齒垢が附き、赤みを帶びて困ります、白くする法無きものに候や。（奥州の笑すぎ女）
（答）石鹼を齒に磨擦し、楊子の柄を以て十分に齒垢を落したる後、微温湯にて含嗽し、更に食鹽をつけて磨くべし、斯くすること二三度行へば大抵白くなるものである、さうして朝は勿論、食後には必ず木楊子にて食物の殘片を除き、左の藥をつけて磨くが宜い。
沈降性炭酸ガルシユム四匁　炭酸マグネシユム五匁
食鹽　一匁　右よく混せて用ふべし

「美貌法に就いて」（問）兩の頰は傲慢に、鼻は謙遜に、肩は怒つて首を沒し、筋骨肥え太りたる身體を以て、嬋妍たる美人に接せば、いかでか氣後れのせざらんや、糸先生よ、美人とまでゆかざるも、人並になる御傳授もなんおはさば、一筆の勞をな惜ませ給ひぞ。
（大砲の孫女）
（答）それが即ち美人ではありませぬか、「一抱へあるも柳は柳かな」の意を御悟り無きか。朝は太陽の地平線上に出るや眼は爽かに覺め、三度の膳に向つては香物の副食物でも鯛鶴の如くに旨く、夜寢床に入れば鼾聲雷の如くに朝まで夢一つ見ぬ、從つて心身は何時も快く、それで家政の餘暇には音樂でも詩歌でも樂しまうといふやうな美しい心があつたら、吾黨の人は美人として歡迎するのである、大砲女よ御良人あらば吾答を御目にかけ玉へ。
（問）筋骨逞しく、身體健かにて、それで色黑ければ先生の御持論通りなれど、私は印度の幽靈的で、筋肉瘦せてゐる上に皮膚銅色、それで結核の遺傳あるといふ不幸者、何卒筋肉肥え太つて皮膚雪の如くに白く、そ

の上澤々艶のあるやうになる方法ありますまいか、之を教へ賜はらば千金の恵みよりも嬉しくなん侍る。（筑前の痩びんづる女）

（答）言ふまでも無く滋養の食物を取り、新鮮なる空氣を呼吸し、適度なる運動法を講じ、御地の醫士と御相談の上左の藥を服用して御覧なさい。

還元鐵　〇、三
亜砒酸　〇、〇〇五
甘草末　適宜

右丸藥となし一日三回食後に分服す。

注意＝亜砒酸は二日目毎に（〇、〇〇一）を増量せねばならぬ、又右丸藥服用中は他の藥を飲むべからず



軍用品製造圖繪（堅パンの整理方）

（問）筋肉肥えてゐても、堅く締つてをれば、實に喜ばしいのですけれど、妾はさうで無くて、ヌプ〳〵と角力取の樣に太り、道の一里も歩行すれば股擦がいたします、今少し痩せたらば、丁度平均を得て、我ながら立派ならんと、未來を自惚てゐます、何卒この望をかなへさせ玉へ。（韓國に住める日本女）

(答)「デブ太り」は一種の病的であつて、原因は脂肪食物或は滋養食物の過るためか、又は運動不足等である、されば脂肪食物肉類を當分の中は嚴禁し、同時に酒類も斷ち、可成野菜物を食し、過る程運動して御覽なさい、必ず効ありませう、効ありたる後は普通人と同じき生活法に復られよ。

(問)生來の醜婦が、生理衛生の道に適ふやうに守れば美人となられませうか、換言すれば生理衛生に適ふたる美貌法てふものが果してあるものに候や、又美貌法といふ書物や、これに類似したる名の藥は昔世を欺く不德義物で御座いますか、詳しく御教示を乞ふ。

(四國三郎の妻)

(答)幾分かは天性を矯められます、されど出額が平らになつたり、反齒が一枚齒の樣に變つたり、或は獅子鼻が菩薩鼻と化し、銅色人種が白人種と變り、一寸法師が五尺以上に延びんなどの望みは到底不可能の事であります、されば美貌法云々の書物或は藥は俯仰天地に愧ぢぬといふ良心を以て著はし且つ賣るもので無いと信せられます、何となれば美貌と言へば普通よりも勝つてゐることであるのに醜婦が幾分生來を矯められたとて、何ぞ其域に達せられんや、決して達せらるゝ道理が無いからである、故に余は斯う思ふ、「生理衛生の道を守つて身體を健康にし、精神を氣高く且つ優美にして居れば、內に在るもの自然と外に表はれて、自然と品格の備はるものである、これ最上の美貌法である。」と。

(藥品に就いて)(問)石炭酸水を少し温めて用ふれば効無きものに候や、伺度候。(田家女)

(答)差支ありませぬ。

(問)實芰多里斯葉を浸劑にして服まうといふのでありますが、其の用量を問ふ。(心臟衰弱女)

(答)一日の用量は大抵(〇、五)でありますが、該藥は蓄積作用とて、連服すると恐るべき中毒を來す所の劇藥でありますから、決して素人療治に用ゐてはなりませぬ。或る老漢法醫が、某患者に「澤瀉三錢と實芰多里斯葉五錢とを買つて水一合半入一合に煎じ用ゐよ」と

命じたれば、患者藥舖より歸りて、醫師の買請書を求む、漢法先生之を諾す、然るに該藥は價の安いものであるから、五錢で山の如くある、患者は喜んで命のままに從つたが最期、七顚八倒苦んで二時間程の中に到頭死んで了つた實談がある、嗚呼恐るべきは劇藥否竹庵先生である。



軍用品製造圖繪（重燒パンの製包）

（問）毛生藥は何れの部に附けても効あるものでせうか、又場所に依つては害あるものでせうか、四月發行の女學世界紙上に教へ下さい。（牛込の紅式部）

（答）毛の生ずべき場所ならば効あるけれど、手掌や足の裏に塗たとて何等の効ありませぬ、併し害はない。

（問）麻黃と半夏との功用を問ふ。（志　醫　女）

(答)漢藥であるから、確かに知りませぬが、麻黄は發汗劑、半夏は鎮嘔劑でせう、半夏に生姜を加へて妊婦の嘔吐に用ふれば功あることだけは、實驗したことがあります。

(問)薔薇油を顏面に塗れば「ニキビ」「ソバカス」を治し、且つ色が白くなるとの事で、藥舗へ買求に行きましたれば、甚高價なもので止めました、併し果して功あるものならば、如何に高くとも用ゐたくあります、先生の御高説を承はりたし。(ニキソバ黑顏女)

(答)香料即ちえならぬ香をさせて、美人を追想せしむる材料となるかも知らぬけれど、其他には問はるゝが如き功あるものでは無い。

(問)法列兒水、林檎鐵丁幾の効用を問ふ。(北海道の右近)

(答)前者は毒藥で變質强壯劑、後者は通常藥で單なる强壯劑なり。

(問)草澄茄の効用、用量を問ふ。(薩摩の閑度孃)

(答)淋疾及び實布的利亞には一日三回、一回(一、〇)乃至(三、〇)を用ゐるのでありますが現今は實布的里亞に用ゐる人は殆んど無し。

(問)安息香丁幾の功用を伺ひたし。(好美婦)

(答)赤鼻及びニキビに塗れば多少の効あり。

(問)顏に「デキモノ」などの出來ぬやうにする豫防藥を敎へ賜はりたし。(山城の宇治女)

(答)右、安息香丁幾十瓦と倔里設林五瓦と薔薇水百瓦とを混じ化粧用に供へてゐ玉はゞ幾分の豫防となりませう。

(色を黑くする法)(問)妾の夫は生來色白く、如何にも婦人めきて凛々しからず候、今少し黑くする御工夫ありますまいか。(越後の好兵婦)

(答)面白半分の問の樣なれど、珍らしい問なれば聊か答へませう、可成日光に觸れて、皮膚の色素を變化せしむるが宜い、殊に海水浴は最も効あらんと信じます。

(雜問一束)(問)我家は母と兄と私と三人暮で、豊かといふ程でもありませぬが、何時も笑聲の絶ゆること無く、實に平和な日を送つてゐましたに、兄は豫備兵役中の事とて、出征の途に上りました、其の當時、母

は勇ましくも、伜が御國の御用に立つたとはと、申して、涙の中にも喜んでゐました、所が一朝名誉の討死をしたとの報せに接したれば、母は之を聞くや否や、「我は今日より狐である、唐土の虎を見事噛殺して見せるぞツ」と立上り、それより或はコン〳〵と叫び、或は四這になるなど、すべて狐の真似ばかりしてゐます、それこそ蝶よ花よと愛せられし我身をも娘とも思召さず、時には寝てゐる我身に馬乘して、食ひ殺さんなど、悲しと言はんか、恐ろしと申さんか、近郷近邊の御醫者様達は、何れも容易に治るまいと申さるゝし、私は尋常小學の准教員を奉職しながら、細き烟を立てゐる身、唯朝暮に泣くばかり、それさへ不幸の極みと思へるに、過日圖らずも痰を吐きたれば、鮮かなる血汐を交へました、嗚呼々々天は何故に罪無き一小婦人を苦め玉ふやら、何を隠しませう、私は許嫁の良人あつて、それも今は滿洲の野に、零點以下の嚴寒を敵として居らるゝ身、若や我が吐きし血汐は、夫の身にもあるまいかとも案じられ、或は肺結核とやらの前徴かとも氣遣はれ、何につけても涙の種、さりとて誰に縋らんよしも無し、義俠の先生よ、情ある先生よ、何卒御同情を垂れ玉ふて、一人しか無き母と、よるべ無き我身とを救ひ玉は



軍用品製造圖繪（[illegible]の口繪）

らんことを、拙き筆もて切に願ひ奉ることになん。

（山陽の愚痴女）

（答）讀來つて美しい小說を見るが如く、孝道の情貞節の心表はれて、我の如き、むくつけな者でさへ、所謂脉にも露とやらで、覺えず淚を溢しました、されば知れる限りを盡して答へませう。

母上の病氣は言ふまでも無く、我が愛子の戰死に接し、大いに腦を刺戟したる結果、精神に異常を呈したるもの、故に診察せねば了らぬげれど、遺傳の無い限りは、適當なる療法に依つて治るものと思はる、偖その療法は、眞の高僧と誠ある醫者と相待つて、一つの方便を行はねばなりませぬ、例へば其の高僧なり其の醫者なりが、我も狐であるとか、向ふにゐる虎を打殺すとかいふやうな仕方を以て、內服藥と同時に順次宗敎道德を說くといふ工合にするのである、斯樣にして治つた例は澤山あることである。次に貴女の血痰は左程憂ふるに足らぬかと考ふ、何となれば、結核のために咯血したものならば、其の以前に咳嗽咯痰或は盜汗或は熱發など種々の徵候を來すものであるからである、然るに僅か一度の咯痰に血を交へたのであれば、或は咽頭の粘膜から出たものか、或は齒齦から來たものかも知れず、殊に月經時などに往々ある例である、されば精神を大きくもつて益々攝生を加へ、今の悲みを後日の茶飲話に致されよ、又母上も御身も共に精神を安靜にするやう、夜は安眠するやう左の藥など內服せらるゝことは必要であらう、兎に角御地の醫士とも今一度御相談あれよ、

臭剝　三、〇　含糖百弗聖　三、〇　白糖適宜　水
百瓦　右一日三回に分服

（問）一〇、〇或は〇、〇五などは何匁の事で御座いますか、又何を單位としたものでせうか、御敎示を乞ふ。

（南海の愛讀女）

（答）一、〇を單位としたるもので、一、〇は我國の二分六厘六毛六六……で、即ち「グラム」に「十五分の四」を乘ずれば、精密に我國の分量になるのである、例へば一五、〇を我國のに換算せんとするには、

$15 \times \frac{4}{15} = 4/\alpha$

となるが如し、この事は屢々誌上に掲げたれど、肝要なることとなれば、更に答へるのである。

(問)私は女學世界第五卷第三號衛生顧問欄の赤顔嬢と悲しみを同じくするものにて、早速蘆薈葯剌巴丸を調劑して貰ひ、服用したれば大いに下痢しました、これでは腸を害ふこともやと案じられ候が、如何なるわけでせうか、序に申上ます、私は非常にのぼせ性にて、其上月經も少き方で御座います。

李子のなげきを又もくり返す、
我をあはれとおぼしてよ君。（あんせい女外二三人）

(答)この問は貴女の外にもあるが、察するに日本藥局法の蘆薈葯剌巴丸で無いでせう、何となれば文中に「調劑をして貰ひ」とあるを以てゝあります、日本藥局法のならば調劑する必要は無くて、既に調劑してあつて、内務省の檢印をしてあるものである、最も該藥は下痢を促すには相違無いが、二丸位服んで大いになどゝいふことは余の經驗上決してありませぬ、能々藥品の御注意を乞ふ。

(問)私の母は寒さになりますと、關節或は筋肉に痛みを覺え、治療もうけますが治りませぬ、リヨーマチスでせうか、何卒その治療法を問ふ、又温泉療法は如何でありますか。

たらちねの母のいたつきいやしてよ
みめぐみ深きわが師の君は。（宮城野の十五女）

(答)温泉療法至極結構なり、藥としては御地の醫士とも御相談の上、左の處方を試みられよ。

撒曹　三、〇　沃度那篤儸謨　〇、六　單舍　八、〇
薄荷油　一滴　水百瓦　右一日三回分服

この頃は和歌をつけて質問せらるゝ方續々あるが、美しい心よりと思へば樂しけれど、尙年齢を書添らるゝことあらまほし。

(問)前號に御示になつた「クキーン」といふ藥は月經不順に用ゐて効ありますか、且つ幾日間程服まねばなりませぬか。（東京の有無女）

(答)毎月十日分程づゝ用ゐ玉はゞそれにて治し、重きは五六ケ月試みねばなりませぬ。

(問)弟の所持せる「中學世界」を讀みましたら、先生の御述になつた「學問病」といふのがありました、あれは女子にも適用されませうか。(石川縣の志學女)

(答)然り、適用されます。

(問)直接に先生の御宅を訪うて、色々御尋致したいのでありますが御聽下さいませうか。(東京近在のSK女)

(答)日曜日ならば差支ありませぬ、併し前以て申し上おきたいのは、失望なされますなといふことである、何となれば立派な醫者だらうと豫想して御出るのに、イヤハヤ憐れな家に甚だ粗末な身裝をしたる老書生がゐるからであります、されど赤心こめて答ふるはまた豫想外でありませう。

(讀者の希望)(問)質問書を差上てから、必ず二ケ月の中に御答下さいますわけにはゆきませんものでせうか。(待遠女)

(答)この問をうける毎に、我身を切らるゝ如く、氣毒に感じます、されど一ケ月に少くも三千餘通の手紙、それゆゑ可成異種類を撰んで載せるのであります、前後三四ケ月の分を讀まるゝ中に、大抵ありはせぬかと信ずるのであります。

(問)まだ一度も毛を除く方法について御示しなきは如何、何卒三月の誌上に御述べ下さい。(多毛女)

(答)これは今實驗中でありますから、來月の誌上には眞先に答へませう。

(讀者の喜び)(讀者)私の病氣を某醫は肺結核と診斷せられましたから、何時ぞやの顧問欄で見たる神田區駿河臺顯微鏡院長遠山博士に、咯痰の檢査を請ひたれば結核黴菌を認めずとの御證明、それより大いに安心して、唯攝生を加へてゐましたら、今は甚だ健康に赴きました、これも女學世界愛讀の結果と偏に奉多謝候。(男の女學世界愛讀者)

(答者)君の實行が効を奏したのであります。



川柳　（家庭文藝）

題「人形」「蝶」

井上剣花坊撰

○

天

人形を負んぶした子が負んぶで來　　大阪北區東野田町　大木たか

評云、蝶は俳句の題で、川柳には面倒だと思つたが、果して作家いづれも苦しまれたやうだ、人位の「天國」は別として莊子の蝶と、夢を喰を利かせた「獏の來ぬ」新しい題を捉らへて奇警にやつゝけた「標本の蝶」等がチヨイと感吟である、けれど前句は未だ熟せないところがあり、後句も婦人の句としてはすこしく慘酷だ、之に引き替へ人形には流石に豫定の如く隨分面白いのが集つた、中にも此句の如きは、實に渾然として瑕の無い、云ふに云はれぬ面白味がある、可愛らしくて可笑しくて、而かも寫實で句法も調なつて居る、新しい想でもなく、他に類句もあるが、此句ほど完全に出來て居るのは少ない、「來」の一字によりて全句活動す、秀逸中の「人形のお守」の句、奇拔なところはあるが、到底此句の穩健なのには及ばない。

地

雛形教授百點のを人形が着　　牛込早稻田鶴卷町二九　行田はる子

評云、これはまた新しい、女流特得の句である、百點のを人形が着、といふところに滑稽がある、あながち寫實一點張の句ではない、詩人的に評讃すれば、着想非凡、活殺自在とでも云つてよからう、併し此句は今少しの事で秀逸中の京子孃の「生きた人形」くら子孃の「いやな目附」きぬ子孃の「泣かせて見せて」たつ子孃の「ともすれば」に株を取られる所で有つた、

人

天國に昇ると毛蟲蝶に成り　　日本橋田所町一五、小林方　矢田榮子

評云、理想句は甘いやうで面倒な事があり、むづかしいやうで案外に易いこともある、化物とか、別世界とか、當初から理想に出來て居る者は案外に出來る、この句のやうに日常人目に觸れて居る動物を捕へ、之を理想化するのは作者の腕に覺へが無くては出來ぬことだ、蝶といふと近頃は、星などゝ共にハイカラ詩人の島へ持つて行かれることが多い、そこで天國と當て込んでスコシ冷やかし氣味があるとすると作者もなかゝゝ人が惡るいと云はざるを得ずだ、

秀逸之部

人形に嫌やは何か說諭をし　　岩代　横田くら子
活人形いやな目付キで動き出し　　同　同
獏の來ぬうちと蝶々は舞ひ上がり　　芝　森きぬ子
人形を泣かせて見せて笑はせる　　同　同
ともすれば人形の母ア樣が乳を呑み　　番町　杉生たつ

人形屋生きた人形がお客なり　市ヶ谷　下山　京子
人形の末路は威し道具なり　同　同
假りに妾が蝶なのよはきつい事　同　同
大きな人形若い夫婦が買ッて行き　岩代　横田よう子
人形を娘が炬燵にあたらせる　同　同
人形に坊やがふと〳〵髭を付け　同　同
既往は爺がめず蝶となれば歌はれる　京都　中川あい子
小さい看護婦人形に繃帯し　函館　佐瀬　美佐
造花と知らず蝶がたづねて來　前橋　田部井香久
人形のお守を守はおんぶする　信濃　田村ひろし
ショール被た美人の胸倉蝶が取り　同　同
お轉婆な蝶丁髷にとまつて居　津　楠　みき子
腰辨當課長の事を偶と呼び　名古屋　網野たけ子
抱いて寢て起れば腕が折れて居り　同　松下つゆ子
大詩人蝶にひかれてけつまづき　横濱　小峰　園子
標本の蝶簪玉に上げたやう　同　同
人形天皇につかへまつりて二代なり　上田　山浦たか子
叱られた子は人形に物を云ひ　同　同
綿入で保名は蝶に狂つて居　同　同
蝶々を取ておくれに姉困まり　小石川　淺井　琴
露助だと太郎人形の首を拔き　京都　濱部　愛子

人形のやうな子が人形を持て居る　大阪　若名　すみ

佳句之部

良人人形の着物まで裁れますワ　芝　森　きぬ子
天神に角帽などをかぶせて見　靜岡　林　とせ子
蝶々のピンでショールをチョイと止め　岩代　横田くら子
文明の人形改良服を着たのなり　同　同
文樂の樂屋姫君も裸で居　麹町　野田みつ子
しく〳〵と泣いて人形の毛をむしり　横須賀　岩岡　達子
朝顏の人形蔓が咽喉をしめ　横濱　小峰　園子
腰卷の儘で人形は買取られ　同　同
人形の頸糊付でチト曲がり　同　同
お嫁に行くはいやと人形をいぢつて居　京都　中西みち子
曾我五郎蝶々が居るでぢきに知れ　信濃　田村ひろし
昆虫のお化ケは蝶になつて來る　同　同
飛びさうに蝶々をかく上手な繪　岩代　横田よう子
蝶々が硝子の窓にもがいて居　同　同
採虫家先づ蝶々から取りはじめ　同　同
わんぱくが蝶ふみにじるむごい事　同　同
人形の母ア樣ばアやに抱ッこされ　早稻田　行田はる子

弟が印度の人形だと墨を塗り　上野　佐藤春江
ピイ〳〵の人形いつも裸なり　仙臺　佐藤日吉子
箱入の人形虫がつきたがり　同　同
パッとした山吹色蝶が戸惑ひし　甲府　瀧澤たね
おかアちやんなぜ蝶々は歌はない　美作　太田加女乃
人形をおぶつて乳母に負はれたり　大阪　落合はな
人形の母ア樣いつも赤リボン　同　同
人形に話しして居るあどけなさ　伯州　松本多嘉子
蝶々の唱歌かアちやんに教授する　岩代　良田雅代
不機嫌の時には人形を虐待し　同　同
銅像をでかい人形と百思ひ　日本橋　若野むめ
人形に體操させて手がもげた　磐城　かすみ子
人形につめたからうと足袋はかせ　大阪　大木たか
人形を寢かすつもりの子守うた　同　同
親は毛虫子は美しい蝶々也　函館　佐世美佐
捕つて來た蝶々本へはさむなり　新潟　竹田きみ子
花ちやんのあんよをネチがくはへて來　四谷　熊谷繁子
生きた人形のあまりで人形のべゝが出來　靜岡　林とせ子
蝶舞ひ笑笑ひ人浮かれ　茨城　本多澄子
買手があるたび人形腹で泣き　京都　西澤まつ子
あなた花あたい蝶よでデレリなり　芝　山田みすゞ

泣くな〳〵とさかさに抱いてだまして居　宮古　おとめ
人形の髪坊主にしてしまい　同　同
蝶が飯を喰ふを詩人讃めて居り　芝　池内スミ
人形でも鼻の無いのは見苦しい　長野　太田きぬゑ
夢の繪のしるしに毎度引出され　深川　小宮ふみ子
人形の顔にキッスの痕がつき　同　同
人形の死屍累々たる玩具箱　神田　増田富美
人形負んぶ舌のまはらぬ子守歌　大和田　奥村房子
人間も蝶のやうだと呑氣だな　牛込　牛込いく子
人形に物を云ひさうな態あり　山口　山田みよ子
繪日傘と人形京から嫁入し　越後　吉田種子
標本にはしたし罪だしどうしよう　横須賀　中里萬壽子
ねえあなたほしいわねえと人形抱き　神田　ふみ子
手の折れた人形足の折れた人形と夫婦なり　越後　伊藤しづ
人形のかはりに座蒲團おんぶする　岡山　横山田呂江
祖母樣はかぢられたのを大事がり　沼津　石本みどり
アラいやと人形抱いて娘にげ　和歌山　釘貫
人形を看護する子のいぢらしさ　須磨　南もよ子
玉に瑕とは人形の鼻の傷　信州　齋藤ひこ
誰やらにソックリなのを大事にし　麹町　野田せん子
人形はいぢめられても默つて居　芝　水田榮子

人形は笑顔のまゝで賣られ行く　大阪　りよう子
蝶々の唄で浮氣を敎へて居　麹町　野田みつ子
トテ／＼と坊や人形歩ませる　堺　河合一枝
娘さんの疳癪玉は雛に飛び　神井　山田まつ江
其人形机に置いて見とれて居　佐原　長田夏子
菜の花をそれからそれと飛び廻り　同　夏月たけ
人形のやうだといはれツンとする　同　同
箱入の人形は虫がつきやすい　群馬　田島いく
標本の生きたのが舞ふ春の野邊　上田　山浦たか子
ほら蝶だ／＼と坊や有頂天　小石川　淺井琴
叱かられて坊は泣く／＼蝶をもち　同　同
人形は裸で人の手に渡る　越後　齋藤周子
人形は足を出しても叱かられず　羽後　菊地幸
令孃の赤いリボンに蝶がつき　神戸　藤井濤子
稻が人形並べ御客にし　京都　稻荷增枝
妙なもの菜種の花黃イな蝶　大阪　森琴
蝶だつて慾德づくで花に來る　本郷　山來雨水
武ちやんの人形眼鏡掛け髯が生へ　同　逸見みき子
すや／＼と眠つて居る子蝶なぶり　下野　花廼家
人形を抱くと離さぬ女の子　名古屋　寺山こう
時節柄海陸軍人の人形出來　同　那賀多女史

デク人形箱の御殿にすまして居　麹町　内田いく子

撰者吟

けちな伯母ろく／＼な人形はくれぬなり
十軒店子にせがまれる年に成り
雌蝶雄蝶折ッてる娘なぶられる
蝶々髷ビヨイ／＼飛ぶは機嫌なり

次回の川柳課題

『鮨』
『猫』
〆切四月十五日

謎々

『露國の擾亂』とかけて
『晩餐』とかけて

第一等

▲露　芝區東町三八　伊東家内　大久保粂女

寺の大掃除」と解く
心は「坊主が采配(さいはい)をふる

評云、謎々はまだ詩藻に不explicitなところが多い、謎ていづれも極々古い式で、言葉の上の駄洒落が主になつて居る、固より謎と云ふものが洒落に相違ないから、おながち洒落を排斥するではないが、すこしどうとか新しく洒落て貰いたい、駄洒落になつては甚だ面白くない、この解方の如きは至極アツサリした側で、毫もイヤミが無い、かボン簡正な滑稽化して、しかも働かしてあるのは難有い、

第二等

▲晩　埼玉縣兒玉郡神保原村金井碩太郎方　新井みね子

修身德育の結果」と解く
心は「一同善(膳)に向ふ

評云、粋な膳と洒落たのはアマリに働きでもないが、現にも角にも謎々には難題中の難題ともいふべき新謎々をかう心地よく軽くしかも悪謔ならず解き來つたところ、且つ修身道徳としかつめらしく出たところにチヨイト可笑味がある、解者の苦心は買はればなるまい、

第三等

▲露　日本橋區龜島町一ノ五山田方　斉野林子

深川の有菌鼠」と解く
心は「續々現はれる

評云、別に何でも無い答で、拙くいへばアテコミになるが、謎々は川柳などゝは違つて居る、其アテコミも時に取つては頗る妙で、此解方の如き、時節柄深川の有菌鼠を引張り出すなどは面白いではないか、其心の續々現はれるも新聞を讀む時の心持などから考へて、何となく嬉しいところがある、

以下秀逸

▲晩　日本橋區龜島町一ノ十五　石田友子

農事の贈答」と解く
心は「鮭(酒)が附き物

▲露　麻布市兵衛町一ノ一六　近藤定

日本の軍艦」と解く
心は「どうしてもしづめ(沈)られない

▲露　千葉縣佐原町岩崎　長田夏子

捕へたばかりの鳥」と解く
心は「自由を得んと狂ひもがく

▲露　上毛富岡七日市町五五　高森とし

大地主の家計」と解く
心は「小作(哥薩克)でさゝへる

▲晩　同

上手な仕立屋」と解く
心は「褄(妻)の手際が甘い

▲露　福島縣白河町天神町　宮下琴子

夏時に於ける食物の腐敗」と解く
心は「原因は敗軍(蠅群)

▲晩　滋賀縣甲賀郡三雲　萩　ふち
不自由なる田舍」と解く
心は「待ちどうい(町遠い)

▲露　駿河國沼津上土町　石本みどり
ナポレオンの最後」と解く
心はモスコー市(もう少し)で目茶々々

▲露　京都葛野郡第一小學校　龜井懇子
九人の博士」と解く
心は「大家九名(大革命)

▲露　仙臺市米ヶ袋上町　荒　つる子
落第生の愚痴」と解く
心は「先生(專制)を惜む

次回の『謎々』課題
『捕虜』とかけて
『卒業式』とかけて
『國庫債券』とかけて

俳句

春季雜題　高濱虚子選

天

岩代伊達郡小國第一小學校　本多せつ子

藪入の三味線つらき話かな

卑近なる事ながらあはれありて俗ならず、且つ中七字男子の想像し難き處。

地

奈良市東笹鉾町　伊東元子

天平の建物聳え春の雲

作者奈良の人故自然に出でたるものなるべけれど「天平」の二字は働きあり。

人

名古屋市榎町十一長井醫院內　永田加須尾

菜の花や野末下りに國分寺

廣々としたる景色にて感じよく中七字も働きあれど稍々陳腐なるを惜む。

菜の花の盛り過ぎけり汽車の旅　岩代　紺野はる子
まちわびし卒業嬉し彌生壺　岐阜　和田波流子
乙鳥にあさねもならぬ住居哉　能登　福田みよ子
行春や朝寢してきく草の雨　函館　錦　子
み車をまつ道筋や春の雨　沼津　松井たづ子
春雨や御幸過ぎたる橋の人　名古屋　山田いく代
山吹のこぼれて池のあひる哉　長崎　熊部　さい

森越に兵營の灯や朧月　長崎　熊部さい

可愛子に寢られて淋し春の雨　神奈川　野澤美枝子

春風の晝の月吹く都かな　信州　五面女史

永き日や慰問袋に文添へつ　上毛　鈴木とく子

座敷から舟呼ぶ川岸の柳哉　同　同

燕や瓔珞の瀧にむれてとぶ　盛岡　工藤とめ

暖かや無沙汰を詫ぶる宮詣で　奈良　福井愛子

うちつゞき女子生む家や桃の花　神戸　竹馬利子

掃除して山吹生けぬ病の間　東京　隼田はな子

春雨や搔餅焙ぶる母の留守　姫路　內藤順子

手巾の隅に繡する餘寒哉　同　同

醉漢を櫻に避けし櫻哉　和歌山　釘貫

水田十里靜かに春のくれてゆく　越後　萩野露

立越せば梅林多き小村哉　岩代　紺野はる子

橋百間あなたの岸に梅の花　同　同

散るや椿山寺の春閑にして　名古屋　篠田浪子

春雨や京の紅屋の片戶ざし　伯耆　松本多嘉子

橋上や何に集る春の人　岡山　橫山かめ子

黃昏や櫻にかけし鞠袴　名古屋　那賀多女史

うらゝかの漁歌に答ふる樵歌哉　上野　新井まさ

春の夜を二十四樓の鼓かな　岩代　本多せつ子

春風やよき稚兒遊ぶ蛙畷の道　岩代　本多せつ子

氷解け諏訪吹きはるゝ日和かな　仙臺　佐藤日吉子

夜の窓に湯婆あけるや梅寒し　同　同

猩々の妻の病や梅曇る　同　同

病める鳩抱いて此春惜みけり　京都　那々とり

植木屋のぬれて歸りぬ春の雨　小樽　梶水仙女

分捕の旗を見に行く日永かな　牛込　田上小金

我が妹にゃらまほしさやひなの顏　兵庫　鹽谷秀子

雲慶の仁王恐ろし梅の門　伊勢　牧田しげ

春風や仁王の臍の埃たつ　仙臺　藤田よし

人聲のはなれて暮るゝ櫻かな　新潟　兒玉勢子

初春や沖に發へし日和雲　東京　むらさき

奧の院庇の雲は名殘かな　尾道　中尾立子

春風に筏士しろし花の川　千葉　松山房子

雨晴れし野路や燕の十文字　岐阜　山住芳子

捨草鞋埋め兼ねるや春の雪　甲斐　米山秀枝

日本の家庭

大村仁太郎氏の「我子の惡德」を發行して家庭教育に一新面を出したる同文館に於ては今回「日本の家庭」なる月刊雜誌を發刊するに至れりその內容記事は未だ整はずと雖も編輯上の用意巧妙にして寫眞版の挿入おもしろく、材料また豐富ならず、口繪の家庭圖案は就中見物なり。

日用心得草

△　△　△

毛髪の攝生法

毛髪の發育を盛んならしめんには、新鮮なる空氣、温和なる太陽の光線膏腴なる血液、及び健全なる皮膚を必要とす、特に毛髪發生部の皮膚を清潔に保つに在るなり、然るに世人の多くは之れを怠り、汚垢を堆積せしめて、生理上の機能を妨害し、終には美麗なる綠髪も、變じて、茶色の棕櫚箒の如き髪とならしむることあり、又種々の習慣に出りて、毛髪



に非常の損害を與ふることあり、例へば、嚴密に結髪し、或は纏絡し、或は編束するが如し、毛髪は此の殘酷なる虐待の爲めに、毛根を弛緩せしめ、或は強く牽るゝが爲めに、拔き取られ、忽ち毛根部をして疾病に陥らしむべし、斯くて其治療を怠るときは、吾人の頭部は、終に禿頭となるに至るべきなり。

此毛髪の洗滌及び塗布用に使用する物品は、『グリスリン』製石鹸及び椿油『アルニカ』油を用ゆるを最も適當と爲す、如何となれば常に之れを用ゆるときは、毛髪を美麗ならしむるのみならず、能く彼の恐るべき鱗癬及び其脱落等を豫防し

得べきものなればなり。

又頭部を洗滌するに用ゐる水は、決して甚だしき冷水を用ゆべからず、又冬季に於ては、冷水雨浴を避けざるべからず、是れ頭皮の神經痛等を招くの恐れあればなり、且つ洗滌したる後は、直ちに乾燥したる暖き布片を以て、丁寧に拭除し、悉く其水分を去りて濕潤せしむべからず、若し濕潤したる頭髮のまゝにて、風に吹かるゝときは、忽ち感冒に罹るべし。



總て他人の使用したる所の刷子及び櫛は、決して使用すべからず、此器の媒介に由りて、種々なる毛髮の疾病に感染することあればなり。

彼の恐るべき鱗屑癬とて、毛髮發生部の皮膚に、鱗屑の如きもの一面に密附し、之れが爲め毛髮の漸く脱落するが如き病も、又俗に『剃刀かぶれ』と呼べる苔癬も總べて他人の櫛或は理髮床の櫛又は剃刀より傳染するものなり。

理髮床にて鬚髯を剃りたる後、若し瘙痒を感じなば、直ちに消毒性軟膏を塗擦すべし、然らざるも此消毒を爲すときは、決して斯る害に會ふことなし。

又毛髮鬚髯に、分裂或は挫折等を發することあり、其原因は、多くは皮脂の欠乏よりして毛髮の濕潤を失ひ

漸々脆弱となりて、分裂又は挫折するものなれば、皮脂腺の營養を高め其分泌を盛んならしむべきは勿論、油類を以て之れに塗るべし。其油は、八丈島の特產なる椿油又は「アルニカ油」を第一とす。
又彼の鱗屑癬を治療せんとするには「グリスリン」製の石鹼を以て始終之を洗滌し、よく拭うて、其全く乾燥したる後に、椿油又は「アルニカ」油を塗布するなり、斯くすること每日怠らざれば、終にに治療の功を奏するものなり。

毛髮用藥品

▲グリスリン石鹼　毛髮の被るところは、精神の宿れる頭部なれば、其頭部を淸潔になすことは、啻身體美觀の爲めのみならず、養生の爲めにも決して怠るべからざる事なり。偖て此毛髮を洗滌する爲めに用ゆるものは、男女共に「グリスリン」石鹼を宜しとす。
この石鹼を用ゐて、よく毛髮を洗滌するときは、彼の頭部に發生するところの恐るべき鱗屑癬の發生を豫防することを得べく、又皮脂腺の分泌過度より生ずるところの脂肪浸潤、及び之れが爲めに塵埃等の附着して髮の毛を汚穢ならしむる憂ひを避くべし。
而のみならず又此「グリスリン」石鹼は、脂肪浸潤を防ぐの効能あるが故に、手或は足に、此石鹼を代用して洗滌を怠らざるときは其の非常に多くの脂肪を發生して、俗に所謂油手又は油足と稱するものを治するの効能あり。
又鬚髯及び毛髮等を剃る前に、豫じめ此石鹼を塗布して、然る後剃髮するときは、決して疼痛を感ずることなく、且つ剃りたる後に於て、俗に所謂「剃刀かぶれ」と稱する炎性症を發するの憂ひあることなし。
我邦の習俗にては、男女ともに、其毛髮を洗ふは、湯屋にて行ふか、或は時を定めず便宜に爲すか、素より一定のきまりといふものあらざれど、成るべくは、夜間睡眠前に行ふを宜しとす、如何となれば、此洗滌よりして、往々寒氣に觸れ、遂に感冒に襲はるゝの憂ひあればなり。
又洗滌を行ふには、豫じめ石鹼を溶解し、流動液とな

したる後これを洗滌すべき部分へ塗擦し、然る後海綿又は頭刷子又は鬚髯刷子を用ひ、力を加へて摩擦し、皮膚の表面へ押ならして、充分平等に附着したるを認むるときは、微温湯を以て、能く洗滌するを宜しとす決して熱湯又は冷水などを用ゆべからず、世間には往往頭を冷す功ありとか言ひて冷水を用ゆるものあるもこは大いなる誤りなり、害こそあれ益は少しもなきものと知るべし。

偕てよく／＼毛髪を洗滌したる後は、温暖なる布片を用ひて、よく拭ひ、充分乾燥せしめ、然る後櫛を用ひて梳るべし、而して其紛亂を正したる後は、直に眠りに就くべし、されば感冒に襲はるゝ憂ひなし。



斯くて翌朝に至り、褥を離れたる後、善良なる香油又は「アルニカ」油、又は椿油を塗布し、婦人などは、之れを束ぬるを宜しとす、然る時は、毛髪は柔軟滑澤となり、其色澤は艶美となりて、俗に所謂鴉の濡れ羽色と稱するところの光澤を發するに至るべきなり。

▲アルニカ香油

右は専ら歐洲に於て用ゆるところのものなり、これは「アルニカ」樹より精製したるものにして、其成分は、清淨なる油質及び絶好なる芳香を有するところの香料より成り、極めてよろしき毛髪化粧の要品なり、さればこの香料を頭部

に塗布するときは、頭皮及び毛球に勢力を與へ、其機能を亢進せしめ、且つ彼の鱗屑癬(皮膚剝脫)、毛髮を衰弱せしむるところの黴菌(毛髮枯燥)、及び毛髮脫落等を豫防する良藥たるべし。

▲椿油　これは右のアルニカ香油の代りに代用品として、古來使用し來りしところのものなり、併し今日坊間に販賣するところの椿油は、眞に椿樹の果實より精製したる油質のみにあらずして、多くは他の粗惡なる油質を混合したるものなりと云ふ、使用者はよく〳〵吟味して、其精良なるものを撰みて購求すべし。



▲精製したる植物性の油類　右の椿油のみに限らず、總て植物より取り、而して精製したるものは、其何品に論無く皆使用して害なかるべし。

▲ポットゲル氏脫毛藥　右は歐洲に於て用ゆるところのものなるが、其效能は、專ら無用の毛を脫にあり。これを使用するには、先づ其濃厚なるもの一小刀尖をとりて、之れに一二滴の水を灌ぎ、少しく柔軟とならしめ之れを脫落せしめんと欲するところの毛髮發生部へ、小刀背の厚さだけ塗布すべし、然して一二分時間の後に於て、手指或は濕ひたる海綿を以て摩擦するときは、疼痛を感せしめずして、容易に脫落せしむることを得べし他種々の藥品あるべしと雖も、多くは射利的賣藥の無効有害なるものに過

ぎざるべし。

毛髪の生理

右は毛髪の攝生法なるがこゝに少しく其の生理を説かん元來吾人の毛髪は、上端尖りて針狀をなし、下端は圓大にして乳棒狀をなしたるものなり、且つ其乳棒狀の下端は、深く皮膚巾に箝入密着して以て其根部を鞏固ならしむ、而して其上部即ち尖端に至るに從ひ、漸漸細小となるものなり。而して此毛髪の皮膚上に突出したる部分を毛幹と云ひ、其皮膚中に潜在する部分を毛根といふ、毛根は毛嚢中に入りて血管に通じ且つ密



に毛根を抱擁周匝するを以て、毛髪は之れが爲めに固定せられて根蒂を強くし、且つ其血管より營養を受けて發育生長し、善く其光澤を保ちて、濡れたる鴉の羽毛の如き美觀を成すに至る。

更に又毛髪を詳細に區別するときは髓質、皮質、及び表皮の三部分に分つことを得可し、而して其皮質部は獸角の如き硬固なる圓管にして、其中に髓質部を充すものなり、又表皮部は、透明非薄なる層にして、魚鱗の如く相疊積連合して、密に皮質部を包蔽す、故に毛髪は、頗る彈力に富みて、或は展伸し、或は屈曲す此を以て其營養盛ん

なるときは、非常なる抵抗力を有するものなり。此の如く毛髮をして彈力に富み、且つ其光澤を保たしめんと欲せば、務めて皮脂腺の營養を高めて、皮脂の分泌を盛んならしむべし、如何となれば、毛髮の柔靭にして撓屈し易く、且つ艶美にして瑠璃の如き光澤を有するものは、皮脂の普ねく毛髮を濕潤するに因るものなればなり。故に若し一朝皮脂の分泌を欠くときは、毛髮は忽ち枯燥して彈力を失し、之れを撓屈せしめんとするときは、直ちに破折し易き脆弱質に變ずべし、されば毛髮の秀美にして滑澤柔靭ならんことを欲するものは、皮脂腺の營養を高めて其分泌を盛んならしむるに若かず。

又毛髮は、一定の生活時期ありて、此期を過るときは枯死して脫落するものなり、斯く脫落するときは、預じめ毛母より新毛髮を發生せしめて、以て其脫落したるや否や直ちに之れに代るの準備をなす、若し此準備の未だ整はざるときは、多くは脫落せざるものとす。又吾人の毛髮は、時として俄かに灰白色に變ずることあり、殊に妙齡青春の人の毛髮の一部或は全部に灰白色を生ずるが如きは、眞に情けなき次第なり、是れ一の疾病より發し來れるなりと雖も、多くは精神の過勞より生ずるものなり、彼の唐人李白の詩に、白髮三千丈、愁へに依て個の如く長しと云へるが如き、以て一證となすべし。

花見衣

年若の婦人には先づ紋織お召といふ所なるが形は菊の豎枠、櫻と紅葉なんどにて色は蝦葡萄、蝦小豆の類をよろこび又時に二枚重ねだけに織り例へば上を櫻、下を紅葉として吉野、龍田を利かせたるも面白く地も縮緬にて小豆色、路考茶最も然るべきか十三四歲の令孃方には矢張り友禪もの、光琳模樣最もよろしく意匠益々華美に入るの傾きありて既に地色も小豆、栗梅、路考茶鶸色などの好み多く又廿四五歲より卅五六歲迄の婦人には清綾織、山科お召、敷島お召などの種々なるが花見頃には大方羽織を用ゐざればば先づ服類よりもよきを擇ぶ人多く隨つて丸帶なとの好み十に八九迄なるが物質は厚板織、紬錦、唐織など普通にて少しく意氣好みの方々は有職風のもの、古代更紗また廢束縞、魚子地なとの注文あるべく地色は臙脂、錆利久、鐵色など淺くてよろしからん又中には金紗山繭を用ゆる向もあり羽織は前にもいへる如く花見時の婦人には餘り用ゆるは少なけれどまづその色は葡萄、蝦栗梅、木枯茶なんどにて地は山繭縮緬、縞お召、山繭入絹縮、錦紗縮緬といふ所なり裏は紋羽二重又は友禪ものにて瀟洒せし大味のたとへば白に西田畷を路考茶に出せるか草花を白抜にせしか然らずば八ッ橋の紋り出しなどなるべし

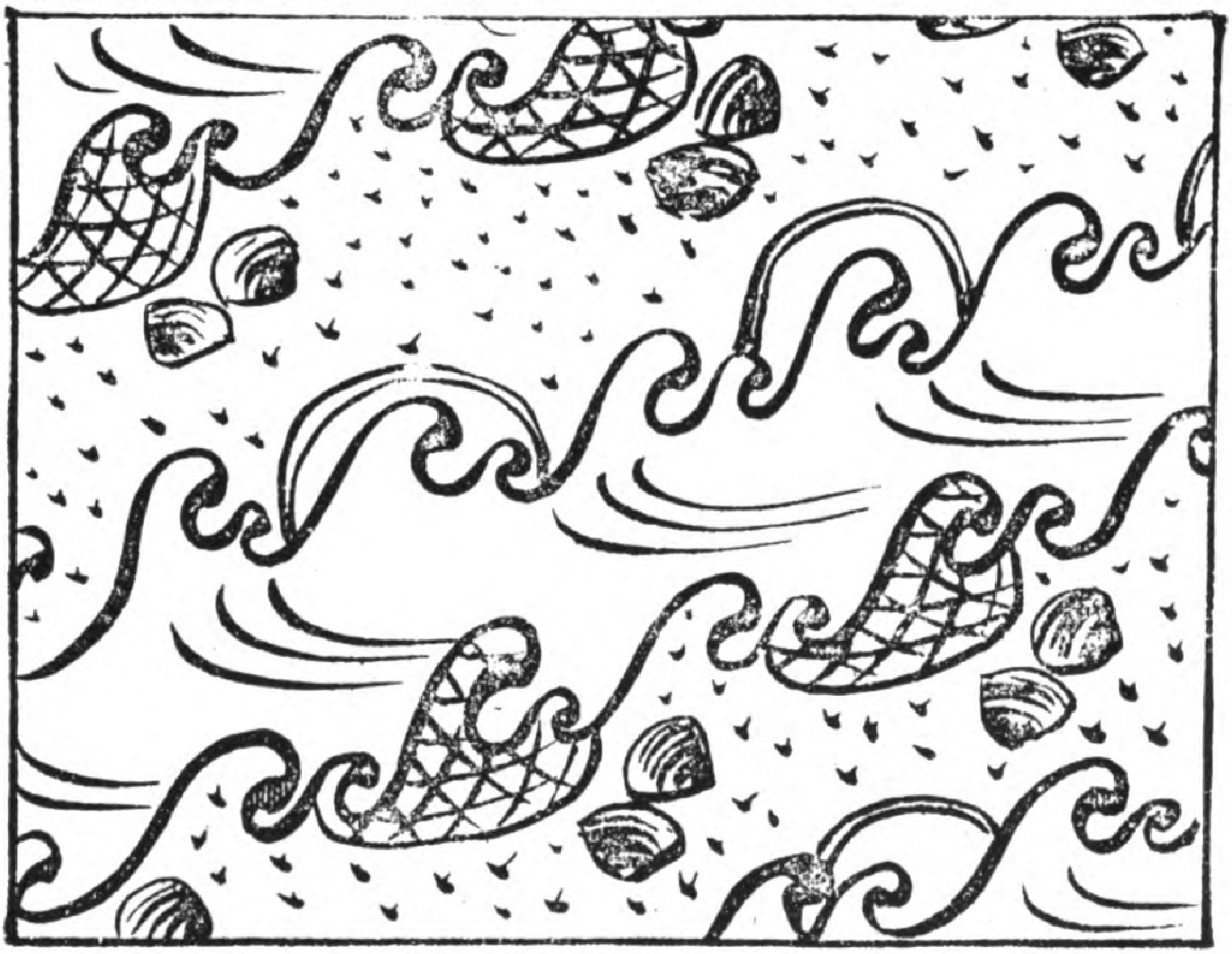
陣中の雛あそび

満洲軍の某方面に在る歩兵中尉松本恒吉氏が、三月三日附を以て府下の某新聞に送りたる通信は、陣中雛祭の光景を叙して頗る趣味深ければ、左に録す。今日は恰も三月三日陣中では雛祭も別に面白い趣向はなかつたが實は昨日當番が來て明日は節句であるから何とか餅を搗いて祝ひたいと話して居つたので夫から急に氣が變つて今日は仕事を少し早く切上て晩には雛祭をして見様と考へたのである先づ餅は出來るとして本尊のお雛様はどうしたものかと思ふたが忽ち我ながら名趣向が浮んだ何であるかと云ふと即ち繪葉書……美人繪葉書を集めに蒐めた何でも持つて居るものは一枚も隱さずに出す事殊に膚身につけて離さない妻君やらラブやらの寫眞は必ず出さなければならぬ事を令したが其理由としては是等の寫眞は遠く寒い陣中迄も供をして朝夕慰安して呉れる勞苦は決して少々のものでないから今日は充分馳走して禮を云ふのであると附言した所で誰も彼も喜んで出す事になり都合六十餘枚の多きに達したから之を紙に張て二段三段に並たのが誠に美事であつたサア是でお雛様は出來たからお茶でも兼て馳走せにやならぬと此程遼陽から貰ふた一包の茶を五分一程煎じて源氏豆ビスケツト氷砂糖おこし飴など將酒保から求めて來て供へた其内に當番が菱餅の丸いのを持つて來た巧なものでどうして拵へたのかと聞くと米を洗つて干してチヤンの臼で搗つて粉餅にしたと云ふどうして搗いたかと聞くと擂鉢でこれたのであるまうな餘りに旨さうなのでマー俺が一つ毒見をしやうと丸めた餅をアングリやつて見ると之は又念の入つたもので其餡が澱粉である思はず好々的を叫んで是れはどうして拵へたかと云ふとチヤンの味噌漉で漉して米利堅粉の空袋で絞つたといふ譯続いて當番は壽司を持つて來たデ彼等が云ふには是が奉天卷……福神漬を眞にしたもの布袋(奉天)は福神であるとの事次に清國鮨……豚肉を載せたもの次が沙河の大勝利壽司……諸飯に罐詰の鮭を盛つたもので只々感服の外はない扨斯うなると白酒と挿花が欲しくなつたが花……と言つた所が桃も櫻もないから是は又繪葉書を代用する事にした所で白酒は如何して作るべきか之には大に頭を苦しめたがどうも旨い考へが出ないヤツと苦し紛れに薄い葛湯を拵へてチヤン酒を少し入れた何でも是は勿体ぶつて散々に見せびらかしてそれから飲ませて笑はせなければ興がないと之を麥酒の空瓶に入れて飾つて置いた彼是する内に張て招待して置いた各所の將校連は來初めて此趣向には何れも驚いたらしい自分は得意に説明するのであつたが今晩は先づ天狗俳諧を一回並べ立てゝ夫から繪葉書や寫眞の美人投票をして大多數の投票を得たものゝ持主が只一瓶の白酒を飲むと云ふ約束をした此美人投票が又頗る面白かつた運動せねば白酒は飲めぬし……ト云つて多くを仲間に入れゝば飲む料が少なくなるといふので最う此時は三十四十のお父様が全で小供の様に騒ぎ廻るのであつた

季節もよう

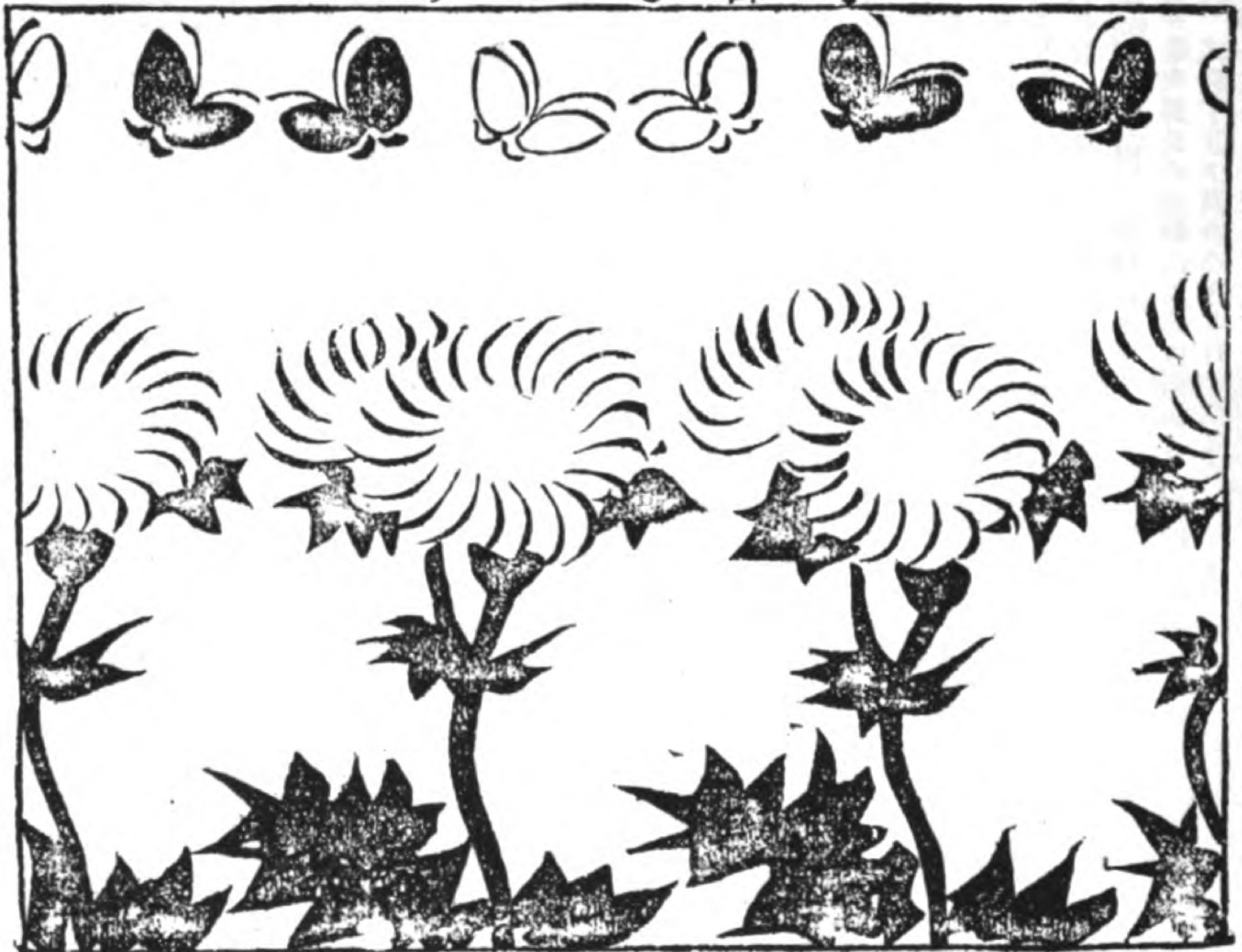


むさし野の春の景色も知られけり垣根にめぐむ草のゆかりに



汐ひけは子供もつかむ蜆かな

季節もよう



折らぬ氣で見ればあさみに針もなし



おひ出る夏の垣根のたけのこはさこそみぢかきよを重ぬらめ

くさぐ〵

▲女子美術學校　本鄕弓町の同校にては去月廿五日卒業証書授與式を擧行し廿六、七の兩日恤兵獻金の爲め生徒の製作せる造花、編物刺繡、日本畫、西洋畫、裁縫等の展覽會を開きたり。

▲東洋女藝學校　神田區仲猿樂町なる仝校にては去月十九日より同二十一日までの三日間同校生徒の製作にかゝる裁縫、摘綿工、刺繡西洋畫及び日本畫の展覽會を開きて公衆の縱覽を許し盛會を極めたり。

▲女子中等教員科の講習　神田橋外東京府教育會に於て開始したる同會は文部省裁縫受驗者の爲め設置したるものにして講習學科は國語、教育、習字、家事、應用化學、裁縫、裁縫教授法等何れも裁縫受驗者の必要に應じ講習は來る七月に終はるべく、講習日は每週土曜日曜の兩日、何時にても入會を許す。

▲實用的技藝學堂　神田雉子町なる東亞女學校内に設けられたるが是は他の技術學校の如き實用的ならざる物は悉く廢して香水、香油石鹸、謄寫印の製法及び印刷術、鍍金術、寫眞術より學校用工藝課にては鉛筆、白墨、石筆、紙石盤、墨汁などの製法を授くる由。

▲割烹學會　京橋鈴木町十一番地の同會は石井泰次郎氏の主幹にて此度茶懷石、服紗、儀式、式庖丁及び網物の日本料理の外西洋料理、支那料理をも教授する由。

▲輕便西洋料理講習所　神田三崎町三の一和洋割烹教授所主任秋穗益實氏は最も簡易なる西洋料理を最も解り易く教授する爲め短期の講習を開始したり。

▲看護婦學校と產婆學校　麴町區半藏門外の同校は鍋嶋夫人、千家、榊外數氏の贊助の下に創められたるものなるが此度特に軍人の家族若くは遺族たる婦女等に對して自活の業を得せしむるの目的にて右兩科目修業志願の少女(十五年以上)にして高等小學を卒業せしものには無料入學を許す。

▲體操學校　女子部は本月より牛ヶ淵新築校舍に移轉し高等科普通科各三十名撰科若干名を募集する由。

▲外國招聘女教師と報酬　近來女教師として外人に招聘せらるゝ婦女漸く多くなり來りたるが今其重なる人々の報酬を尋ぬるに在暹羅クヰンスクールの安井女史は年俸一千八百圓にして在上海美術學校出身の某女史は七百二十圓職業學校出身の中島女史は二千四百圓で年限は三ヶ年乃至五ヶ年なり。

▲淸國女學界の結婚　近時淸國各省とも大いに女學界の發展を見るに到りたるより此に管學大臣は嫁娶章程なるものを設け男學生にして新たに結婚せんとするものは必ず二十五歲以上たる可く女學生は二十歲以上たらざるべからず而して男女に關せず老幼を問はず未だ獨身なるは必ずまづ學校に入るべしと定めたり。

▲愛國婦人會の總會及會員數　愛國婦人會にては去四月二日總會を開き婦人界稀有の盛會を極めたるが今同會の現在會員數を聞くに客月二十八日調のもの左の如し

特別會員　三萬五千七百七十七人
通常會員　二十五萬六百九十二人
合計　二十八萬六千四百六十九人

外に贊助員二萬七千九百十三人

因に同會員の最も多數なるは兵庫縣の二萬二千人にして最少數なるは和歌山縣の五百五十人なりと。

▲授產婦人會　過般赤阪檜町に移轉し出征下士卒の家族にして生活困難なる婦人に職業を與へつゝある由なるが之に附隨せる携帶兒保育、寄宿舍の設備も漸次整頓し多數の幼兒を收容し會員は代々保姆を助けて保育に從事し居る昨年創立以來出入せし女工の數洗濯部裁縫合計一千八百二十二名現在七十名携帶兒四十一名にして工女の賃銀洗濯部最高廿五錢最低十錢裁縫最高四十錢最低なりと。

▲母の會　每月第二月曜日に小石川上富坂なる米人コーツ夫人方に集り西洋料理と同菓子の製法(コーツ夫人教授)と子供の洋服仕立方及び裁方(松江みさ子教授)など練習會あり此程其春期總會を本鄕中央會堂に開き夫れ〴〵有益なる談話ありたるが同會員たらんとするものは前記のコーツ夫人へ申込む可く會費は一ヶ月十五錢。



生理衛生　消食の妙機（上）

糸左近

これより消食器の解剖生理から、病理乃至は食物の衛生等に至るまで、事詳しく述ぶる積りであります。元來、これに關する著書は、昔から甚だ多くあるその上に、近頃は又料理の書物と共に、續々流行して、果は斯學に智識無き人までが、やれ蛋白質は何うの、含水炭素は斯うのと、喋々述立るやうになつた。されば、私が今更何も喙を容るゝ餘地の無いやうなものである。されど、其れはさうとしておいて、又私一己の料理按排を、一つ差上げようといふのである。素人の方は言ふに及ばず、醫學生達も、一口味つて頂きたいのである。

曩て「顔の話」の中に、口の事を少し述べたれば、今回のと、二重になる節もあれど、こは止むを得ぬ次第なれば、御許し下さい。

吾等が身體には、病氣で無い限りは、今日も明日も、朝に晩に、必ず外界から色々な飲食物を取り、之を體内に容れ。或は嚙み、或は碎き、或は揉み、さうして筋肉や骨などに同化せしむる巧みな器がある、之を消食器と云ふ、この消食器は口腔に始まり、咽頭、食道、胃及び腸を經て、肛門に終る長い管と、肝臓、膵臓の腺とから成る。口腔は顔の下方に開いた腔洞で、齒牙より前方を前庭と云ひ、齒牙より後方を固有口腔と云ふ、そこで其の前庭を開いたり閉ぢたりする筋肉の關門がある、之を口唇といふ、我れ注意して往來人の顔を眺めて見るに、支那朝鮮の人は大抵この門戸を開いて歩くし、西洋人は大抵閉ぢてゐるし、我が國人は區區である、されば此の無意の開閉が或は其國の文野をトふ一つの方便とはなるまいか。固有口腔内の屋壁を

口蓋と名づけ、兩側の壁を頰と呼び、其の床の動くものを舌と云ひ、口蓋の前方の硬い所、即ち柘榴の實を除き取つた皮の內の樣な所を硬口蓋と呼び、其の後の軟かい部を軟口蓋と稱へ、奥の方に垂れてゐるものを懸雍垂と名づく、彼の鼾のグーガーと響くのは、呼吸氣がこれに觸れて震動する音である、然らば何の爲に、この懸雍垂が、ぶら下つてゐるかと言ふに、食物を嚥み下さうとする際、これが上方に擧つて鼻道を塞ぎ、食物の鼻腔に行くを防ぐのである實に上手な仕掛になつてゐる。舌は運動の自在な肉から出來てゐて、其の上面に數多の乳頭といふ小突起があり、甘いとか辛いとかの味を感ずるものである、この外舌の役目は言語及び食物咀嚼等の調節をもなす、されど之をベロリと口外に出して人を嘲弄する用に供ふるに至つては不埒千萬である。齒牙は口內の上顎骨の下面と下顎骨の上面とにある數多の腔胴中に嵌つてゐる物で其の骨の上にある肉を齒齦と云ふ、この齒齦の色鮮かに紅く、齒牙の玲瓏として白く所謂朱齦皓齒は大いに美人の要素となるものである、此の要素を得ま欲しく思はるゝ方は須らく後に說く衞生を守るべしである、それは偖置其の構造は如何と、一本の齒を縱斷して見るに後の圖の如く、中央には腔洞があつて、中に少し赤みを帶びた白い色の齒髓といふ柔かなものが充ち血管や神經も這入つてゐる、故に齒の疼くといふは此處に感ずるのである、齒の內部は主に象牙質といふ緻密な骨樣の物から成り、齒根は白堊質といふ骨の薄いやうな物質を以て蔽ひ、齒冠とて外に露はれてゐる部は、硬い白色の琺瑯質から成るを以て、其の儘琺瑯質と名づく、琺瑯質は鋼鐵と打ち合はすれば、火花を散らす程の物なれば、全身中最も堅い物質である、故に生涯數十年の間幾多の辛酸に遇うて、我に忠勇を盡せども容易に傷まぬのである。又、口內には唾液を分泌する所の左右三對六個の唾腺から、その排泄管が口を開いてゐる、即ち三對の唾腺とは、耳下腺、舌下腺及び顎下腺のことで、後圖に示すが如く耳下腺は耳の下にある最も大きな腺で、其の排泄管は上顎の粘膜に口を開いてゐる、

舌下腺は舌下に在る最も小さな腺で、其の排泄管は舌下に口を開いてゐる、顎下腺は舌下腺の後方の顎下にある腺で、其の管は舌下に口を開いてゐる。是等の三腺から出る液體即ち唾液は各其の性質は異つてゐるが、兎に角其の混和したる物は、二十四時間に一合から七合半まで位の量を出し、其の主成分は一種固有の唾液素といふもので、食物中の澱粉を變へて糖分となすものである。



唾腺の位置

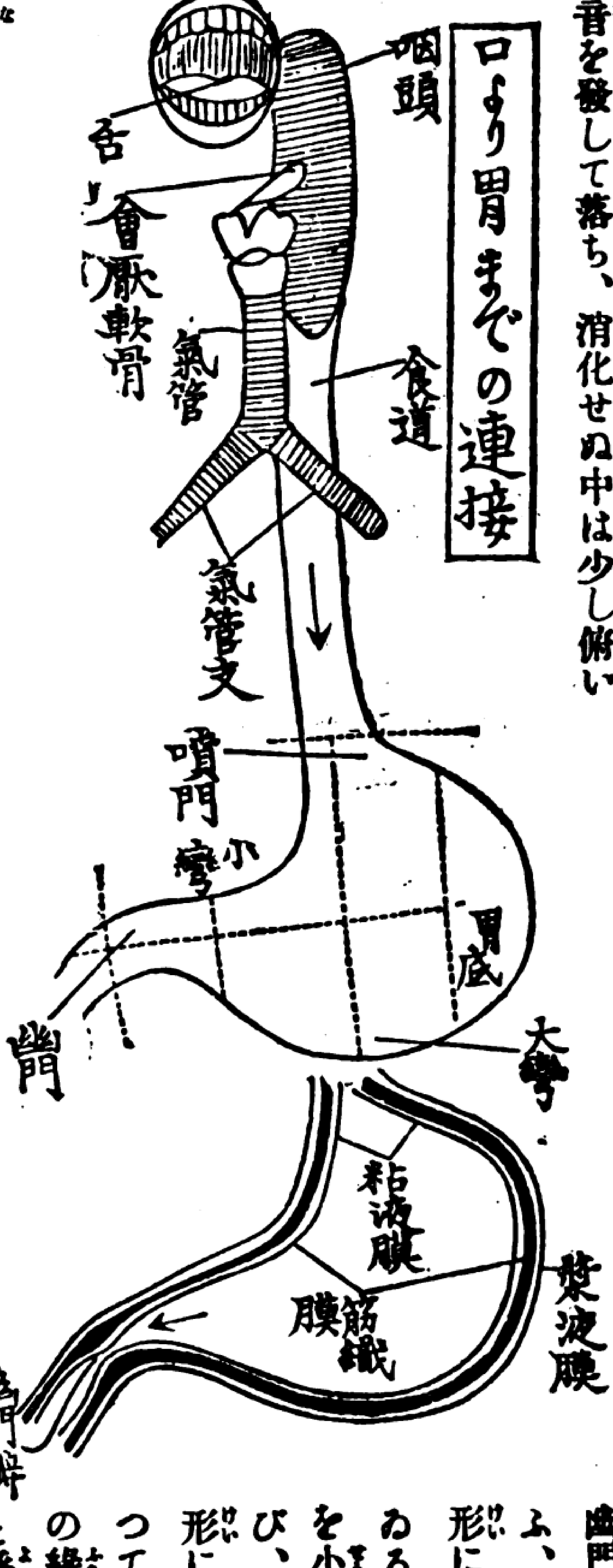
咽頭は口腔に連る漏斗形の狹い腔洞で、上は鼻腔に通じ、下の前方は喉頭空氣の出入する所の口に通じ、下の後方は食道に連る。

喉頭の前方に當り匙形の軟骨の突起がある、之を會厭軟骨と云ふ。これは食物咽頭に入れば、この軟骨が喉頭の口を閉ぢ飲食物を氣管に遣らぬやうにし、直ちに食道に入らしむる役目をなすものである、されど若し過つて飲食物が喉頭に入り込まうとすれば、變な感じが起つて、思はず咳嗽を發し、之を逐ひ出すものである、詳しく言へば會厭軟骨は常は上方に伸びて空氣自由に喉頭を出入してゐるけれど、食物の食道に入らうといふ一刹那は曲つて喉頭口を塞ぎ、食物の食道に入るや否や又伸びて空氣の供給を全からしむるのである、然るに急いで飲食物を追かけ〱下さうとすると、會厭軟骨が伸て又曲らぬ中に來るから、遂に咽んでコン〱プー、四邊近所は飯だらけ、噸でも無い不調法を致しましたと謝らねばならぬ失態を惹起すのである。

食道は咽頭に連る長い管で、その長さは六寸五分から七寸五分位までゝ、それより胃の腑に續く、この食道は編平なもので常はピタリと寄附て、甚だ僅かの空氣

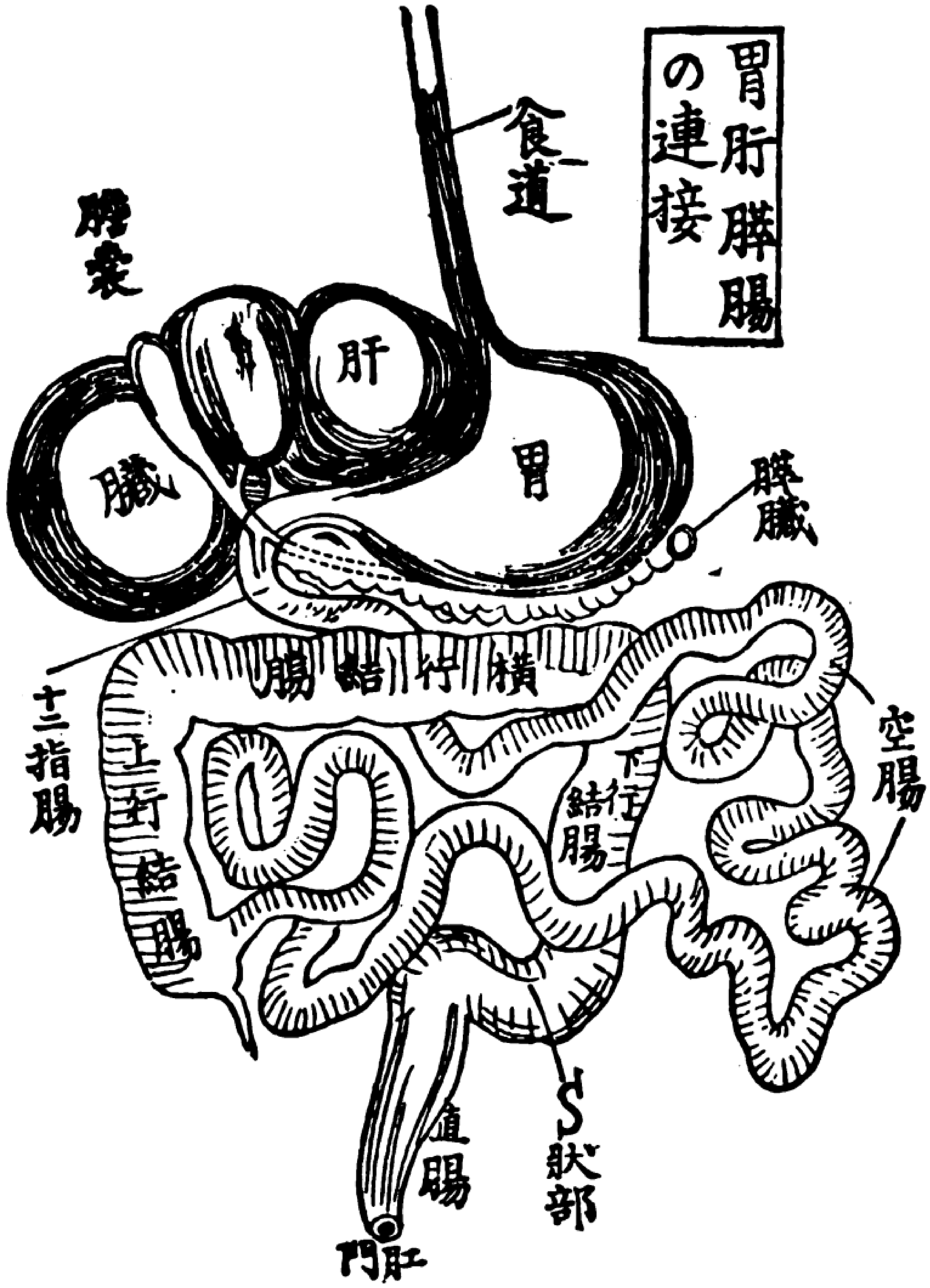
も入込む餘地は無いが、いざ飲食物の通行する場合になれば口を開き、飲食物の進むに從ひ上部を閉ぢ、段段波の様に縮んで之を胃に送るものである。若しこれが氣管の様に何時も口を開いてゐるものならば食物はストン〳〵と音を發して落ち、消化せぬ中は少し俯向いて飲食物を吐逆し、のみならず空氣が自由に入込むから、自然とそれが腸に行き、放屁の斷ゆる暇は無いであらう。

口より胃までの連接



胃は横隔膜（胸と腹との界をなす膜）の直下に於て左より右に横はる嚢のやうな器で長さ凡そ一尺、幅及び深さは各々三寸五分程もある、胃の左端から凡そ二寸許右に位せる上の口を噴門と呼び、食道に連る胃の右端にある下の口で、小腸に連る處を幽門と云ふ、其の周圍に括約筋とて口を圍んで之を開いたり閉ぢたりする筋肉が輪形の隆起をなす之を幽門辨と云ふ、胃の左端の膨れてゐる處を胃底又噴門端と云ふ、胃の右端僅かに張つてゐる處を幽門端と云ふ、胃の弓形に凹んでゐる上の緣を小彎と呼び、胃の弓形に隆くなつてゐる下の緣を大彎と呼ぶ、胃は外、中、内の三膜から成る、外層の膜は漿液膜と呼びて漿液と名づくる水様の物を分泌する膜である。中層の膜は最も強い膜で之を筋纖膜と云ふ。次に胃の内層の膜を粘膜と云ふ、最も軟らかな膜である。

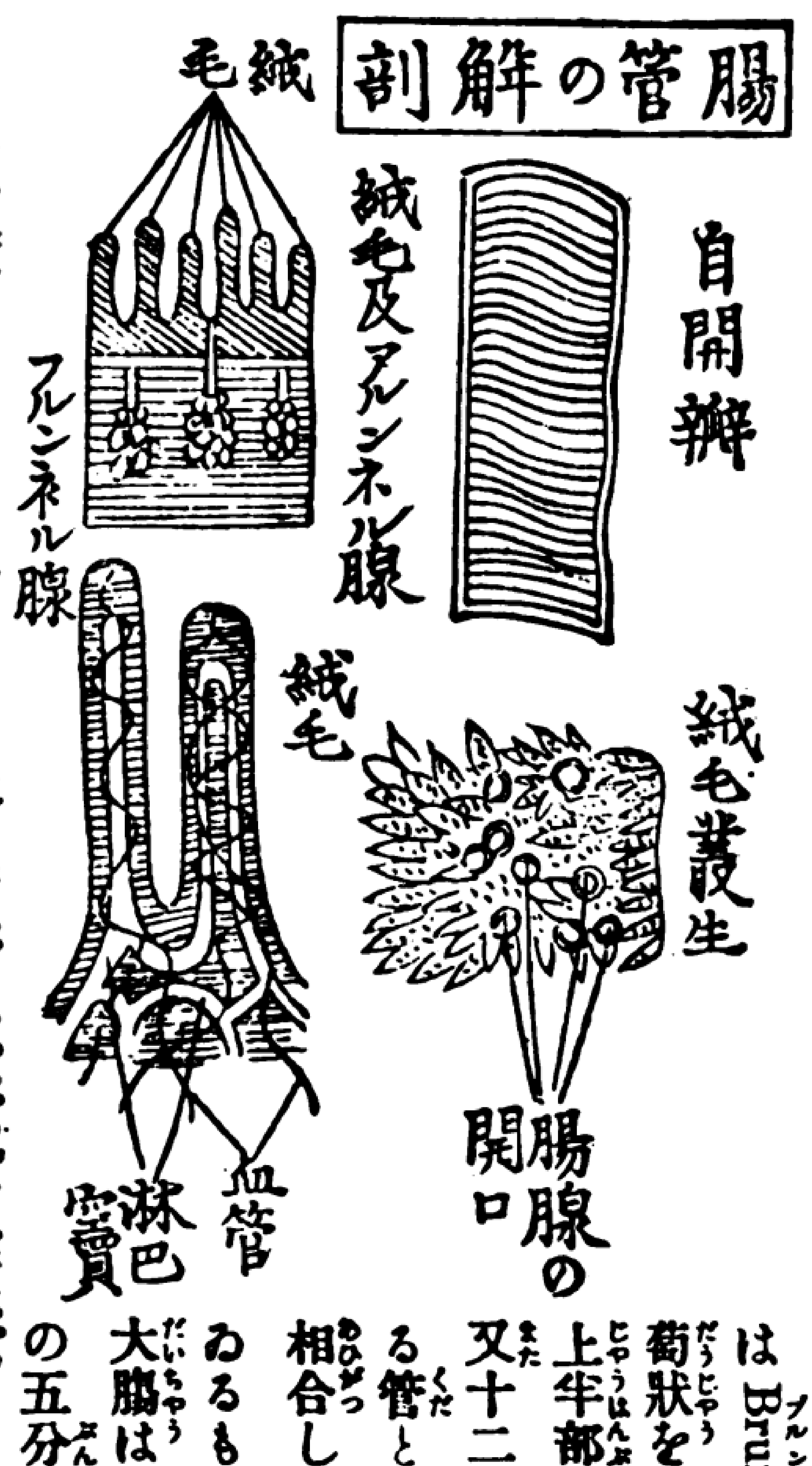
胃には胃液腺及び幽門腺といふ腺がある、胃液腺は胃底等にあつて管狀を呈はし胃液を分泌する腺である。幽門腺は幽門の端に在る葡萄狀腺である。胃の内面は常は蒼白いけれども食物胃中に來ると、忽ち血管が膨れてその面が赤くなり、胃液腺から無色酸性の透明な薄い液體を出す、之を胃液と云ふ。其の成分はペプシン及び遊離鹽酸と多量の水とから成る、この液は蛋白質を溶解すれども、脂肪及び糖を變化せしむること能はず。幽門腺から出る液體は胃の裏面を潤す用をなす。



腸は抑戻り曲つた長い管で、腹腔の大部を占め、その膜は胃と同じく、外、中、内の三層から成り、其の性質及び名稱も胃と異なることが無い。さうして腸の上方は細くて長く、下の方は太くて短かい、其の上方を小腸と呼び、下の方を大腸と呼ぶ、小腸は其の長さ全腸の殆んど五分の四を占め、十五尺乃至二十尺に亘る、之を又十二指腸、空腸及び回腸の三部に分つ、十二指腸とは、小腸の上方にあつて胃に

連り、稍々馬蹄鐵の形をなして膵臓の頭を圍み空腸に連る、其の長さ凡そ人の指を十二本横に並べた程あるから、この名が附いたのである、空腸は小腸の中部で十二指腸の延長物と見做して可い、人の死後この中を見るに、空しく何物も無きより、この名が附いたのである、此の空腸は此處と定まつた界が無くて、回腸に移る、即ち空腸、回腸を一管と見做せば、大凡五分の二を空腸とし、五分の三を回腸とするのである、回腸は小腸の下方で回り曲ることが甚しいからこの名が附いたのである、さうして其の末端が大腸に開き續いてゐる處に瓣膜がある、之を回腸盲腸瓣と云ふ。

小腸を切り開いて其の內部を見れば、粘膜肉皮の大部に横襞がある、之を自閉瓣と云ふ、又粘膜の全面には天鵞絨の様な小突起が生へてゐる、之を絨毛と云ふ、其の絨毛は中央に淋巴竇といふ空洞が有つて、其の淋巴竇の周圍には筋肉及び血管がある、又小腸には二種の腺がある、其の一はLieberkuhn氏腺とて、管狀をなし小腸並に大腸の粘膜に散布し腸液を分泌す、その二はBrunner氏腺とて、葡萄狀をなし、十二指腸の上半部に散布してゐる、又十二指腸には膵液を輸る管と膽汁を輸る管との相合した物が口を開いてゐるものである。



大腸は其の長さ凡そ全腸の五分の一即ち五尺餘で、之を盲腸、結腸及び直腸の三部に區別す、盲腸は大腸の初まりで小腸の回腸に連り嚢の形をなす、其の下方に在る細い突起を蟲様垂と云ふ、この蟲様垂は何の爲にあるものか古來生理學者の了解し能はぬの

である、大方太古の人間には何か必要あつて天が與へたもので、其の形も大いに違つてゐたであらうけれど、それが進化の理法と共に段々變化して今は何の必要も無く、唯其の痕跡だけを殘し、恰かも男子の乳嘴は其の哺乳動物であることの徵であるかの如くに附いてゐるやうなものではあるまいかと、余は思ふのである。

結腸は大腸の大部をなして、其の始まりは盲腸に續き上行して右の終りの肋骨に達す、之を上行結腸と云ふ、これより横に曲り胃の大彎を傳つて左の季肋骨に至る之を横行結腸と云ふ、此處にて再び曲つて下行す之を下行結腸と云ふ、其の下行結腸が其の下部に於いてS狀に曲る所をS狀部と云ふ、これより直腸に移る、直腸は結腸に連り、消化管の最も下方で其の長さ凡そ五寸程である、殆んど眞直に下行して肛門に終る、肛門の周りには強い括約筋を有つてゐる。次に大腸を切り開いて見れば、其の粘膜は唯リーベルキユーン氏腺を有つのみである。

膵臟は胃の直下に於て右より左に横はる長さ六寸餘の腺である、その右端即ち頭の方は大きくて十二指腸の彎曲する内に位し左端即ち尾の方は狹くて脾臟に達し、其の液を出す管は十二指腸の内に口を開く。これより出る膵液は澱粉を變化して糖類となし、且つ蛋白質をPeton即ち溶解性の蛋白質に變へ、及び脂肪を分解して或る一種の物となす。

肝臟は身體中で最も大きな腺である、其の横は八寸四分から一尺に至り、其の前後の徑は五寸から五寸八分に及び、其の位置は横隔膜の下で腹の右側の上方である、その上面は凸形をなし下面は凹形をなす、さうして其の下面の右方に綠色の嚢がある、之を膽嚢と云ふ、膽嚢は其の長さ凡そ四寸餘、その幅は八分程である、其の液を出す管は矢張十二指腸に口を開く、又肝臟の内に生じた膽汁を輸る管即ち肝管といふものが肝臟の下面から出て膽嚢の管と直角に合す。膽汁は肝臟から分泌し、其の機能は脂肪を細分し腸壁に吸收し易からしめ、或は腸壁を刺戟して其の筋纖膜を收縮せしめ、或は腸中に在る食物をして腐敗すること無からしむ、

此の液は斷間なく分泌するけれども腸中に於て膽汁を求むるは唯小腸內に消化すべき物質のある時のみなればそこで肝管に附するに膽囊を以てし此處に貯へ置いて其の需めを待つてゐるのである。これにて消食器の大要を解いたればこれより食物消化の有樣を次に說かう。

偖、食物一たび口內に入れば先づ舌は之を味ひ固形の食物は齒を以て嚼みつ碎きつして、其の間に唾液を混じ溶かされ能ふ物は能く之を溶かし、食物中の澱粉を幾らか糖類に變へ、舌及び頰の筋肉作用に由つて一塊りとなし、口蓋と舌との間に輸り脣を閉ぢ、舌を後方に壓し、懸雍垂は上方に擧つて鼻道を塞ぎ、食物の鼻腔に行くを防ぎつゝ咽頭に下す、咽頭に入れば會厭軟骨は喉頭を閉ぢ、食物をして食道に入らしむ、食道に入れば、その管の內方に在る輪狀筋といふ筋肉は段々波の樣に縮んで之を胃に輸る、斯樣な波狀の運動を名づけて蠕動と云ふ。食物愈々胃に行けば、胃液腺から盛んに胃液を分泌し、胃壁の筋肉は亦蠕動を起し之を食物に混ず、即ち胃液の百弗聖は蛋白質を百弗頓となし、遊離鹽酸は食物中の酸性の液に溶け能ふ物を溶かす、斯樣に食物が胃の中で消化を仕遂ぐるには二時間から四時間位の間である、この時間を經れば食物と消化液とは全く混り粘りの強い軟かな物になる之を糜粥と云ふ、糜粥は幽門括約筋の弛みに依て十二指腸に移る、この筋は殊に肥えて大きく以て胃中の食物能く消化せぬ以上は胃を過さしめぬ作用をなす。食物十二指腸に至れば膵臟から液體を注ぎ膽囊から膽汁來り前段述べた作用をなす。又、腸には腸中の腺から腸液を分泌して、其の中に注ぎ、腸壁も亦頻りに蠕動を起して消化液を食物に混じ、白い乳汁樣の物質となる、之を乳糜と呼び、處々の粘膜に吸ひ込まるゝものである、其の外消化せざる物及び消化し得べからざる物は腸壁の蠕動に依つて段々下に行き、小腸の全部を通り回腸盲腸瓣を經て、大腸に移り行くその間は三時間から十二時間位までゝある。この回腸盲腸瓣及び自閉瓣の効用は如何といふに、甲は食物が大腸から小腸に逆流

せんとするを防ぎ、乙は食物を吸收する面を多くし且つ食物の通過を遲くして消化を助くるためである。食物は大腸に於ても尙其の消化を續けその溶くる物は段々大腸の粘膜に吸ひ込まれ殘りの物は次第に水分を失ひ漸々固まつて、遂に肛門から糞便となつて再び外界に出るのである。斯うして大腸に止る間は十二時間から長きは三十六時間に亘る。又腸内には多少の瓦斯を含んでゐる、これは食物と共に空氣から來り、又、分解作用に依つても出來るのである、この瓦斯を肛門より洩すを俗に放屁と言ひ甚だ厭ふべき臭氣のあることは誰でも能く知つて居らるゝであらう。

偖我等は何故に飮食物を取らねばならぬか、又飮食物を更に取らねば遂に何うなるかと云ふに、一日二日と日が經つに從ひ順々に飢ゑ、瘦せ、衰へ其の極端即ち二十日餘にして死んで了ふものであるからである、詳しく言へば我等は一分時間に十七八回の呼吸をして其の度每に空氣中の酸素を吸ひ、其の酸素は身體中に入り、身體中を燃燒し、さうして活力を出すものである、故に我等の體質は時々刻々に燃え且つ耗り、平均一時間に十匁程は灰即ち老廢物となつて體外に洩るゝものである、斯ういふ譯であるから、これが薪炭となる所の食物を供給せねば耗る丈耗つて遂に消えて了ふ、消ゆれば冷たくなつて活力を失ひ、所謂野邊一片の烟となるのである、故に每日三度相當の食物を取り、幼い時は其の體質の耗るを償ふの外、更に體質を增し大きくする所の食物を供給するのである。然らば其の目的を達して我等日本人の健康を維持する飮食物は如何と云ふに、

含水炭素百四十匁弱。脂肪四匁弱。蛋白質十八匁强。鹽類一匁三分强。水一升五合餘。

である。

含水炭素とは酸素、水素、炭素の化合物で、例へば米、葛、糖類或は野菜類の如きをいふ、其の効用は體中に入つて能く燃燒し體溫を發し、且つ蛋白質の耗るを制限せしむる所の命の親である。脂肪は其の成分糖類に能く似てゐるけれども、これは酸素の量甚だ少く、

其の燃ゆるに當り、多くの酸素を取つて温を生ずることの多いものである、この外身體の諸處にあつて大切なる器官や神經を保護し、或は保温の用をなすものである。蛋白質は炭素、水素、窒素、酸素及び硫黄の化合物で例へば鷄卵、牛乳、牛肉或は魚肉などの主成分の如きものをいふ、我等の身體を組織する主成分は蛋白質であるから仲々大切の物である。鹽類は加僂謨、那篤僂謨、石灰麻倔涅叟謨或は硫酸、鹽酸、燐酸、鐵などの化合物である、これ等は骨の構造上に、筋肉の組織に、血液の貴要成分に、或は腦髓の組織中に含まるゝなどこれ亦無くてならぬ物である、されど病氣の外は單食すること無くて唯水や普通食物の中に自然と含まれてゐるのを取るのである。水は酸、水二素の化合物であるが唯單にこれ丈なのは蒸餾水より外に無い、通常の水は幾分の礦物を含んでゐる、この水は身體に入りて或は滋養品を循環させ、或は老廢物を流し出し、或は諸食物を溶解するなど其の効用甚だ莫大なものでなる。

次に如何なる種類の食物を取れば右に述べたる成分を多く含んでゐるか、且つ其の消化の程度は如何等は、これ最も講窮せねばならぬことではなるが、更に十數頁を費さねばならぬから翌月に於いて衞生法と共に之を述べ、翌々月は消食器の病理療法等を完結することに致しませう。

今回のは、器官の構造や、生理の講釋で、何の興味もありませぬが、次回よりは愈出で〻愈有益に、且つ面白くなりますから、これが順序として是非今回のも讀んで頂きたいのである。

孔雀の話

TO生

孔雀は雉、山鷄などゝ同じく雞類に屬するもので毛色甚だ美しく動物園内では一番先に目に着く鳥であります、其の原產地は印度の平原で、鬱蒼たる森林の内に巢をつくて居ります、孔雀の雌は一回に二十個の卵を產み其の卵は二十五日乃至三十日目で孵化して雛となります、而して其の雛の羽毛が親鳥の如く美しくなる

には二ヶ年の日子を要します。

△孔雀の形　孔雀の雄は大層長い毛羽を持つて居るので、嘴の先から尾の末端までは殆んど五尺許もありませう、嘴は鈎の如く曲つて、雉、山雉などの嘴に似て居り、眼の周圍や耳の穴の邊には羽毛がなく、全く裸で、黄色を帶びて居ります、頭の頂には羽毛の冠があり、普通の孔雀でも其の毛冠の羽毛の數は二十四本あります、それから頸胸などは濃い青色で背部の方は青銅色を帶びた色です、而して全身の羽毛は悉く金屬の樣な美しい光澤を放ち又人の見る方向によつて多少色が變るといふ性質があります、翼の羽色も濃青色で黄金の如き光澤があります。

雄の尾羽は大層長くつて、其の先端には眼紋の樣に五彩の美しい環紋があります、是が虹の樣に輝き、黄金の樣に光る有樣は實に立派で、他の鳥類には無い圖であります、其に引代へ雌の尾羽は短くつて、美しい環紋もなく、全身の羽も雄の樣には美しくない實に孔雀の雌雄は不釣合の甚しいもので、似た者夫婦の諺には外れて居ります、孔雀は雄雌共に脚には雉などの樣に鱗があり、且つ太くつて中々丈夫に出來て居ります、其れは土を堀り又は巣を作ることに役立てるのです、而して猶ほ雄の脚には雞にある樣な距がありますが、雌は之を具へて居りませぬ。

△孔雀の食物と飛行　孔雀は稗に類した草の實を好んで食しますが、又皮の硬い木實も餌としてあてがはれます、胃の腑の消化力が強い鳥であるから、どんな硬い實や種子でも容易く喰べ消化して了ひます。

孔雀の羽毛は奇麗ではあるけれど翼の力は弱いもので飛ぶ爲には餘り役に立ちませぬ、故に鷹や鳶の樣に高く虚空に飛び上つたり、燕の樣に長く遠く飛ぶことは出來ませぬ、只ゆる〳〵と近い處を飛び翔ける丈けです、しかし脚が強いから地を走ることは至て達者で獵師などに追はれても飛ばすに走ることが往々あります。

△孔雀の塒と舞踏　鳥の内には鴨や鷗の樣に水邊に眠るもあり、又た鶉や水雞の樣に叢の中に眠るもあり、

夫々安息の場所を異にして居りますが、孔雀も塒には一定の場所を撰びます、其は必ず高い樹の枝であるから動物園では、高い場所に渡り木を附けてあります。

孔雀は雉、山雉などと同じく原産地の山林に棲んで居る時は、一疋の雄鳥に數疋の雌鳥が附き纏つて居ます、而して雄鳥の飛び行く所には是等の雌が跟いてゆきます、斯樣な物を動物學上一雄多雌の鳥と名づけてあります、雄は雌に比べると其羽毛の色は甚美しいので其れを得意に思つて居ると見へ、時々雌の居る所に向て美麗な尾羽を擴げて見せる性質があります、何と自惚の鳥ではありませぬか。



又たアルガス孔雀といふ種類になると、殊更に舞をまつて雌鳥に見せます、此の孔雀は印度の東ボルネヲに棲むで居まして、其の雄鳥が舞はふとする時は、先づ森の中で此處ならばと自分の氣に入つた所を撰び直徑一丈位に、地面を圓く掃除し、枯枝や草木の葉を取り除き宛で土俵みたいに奇麗に場所をこしらへるのです、すると雌鳥等は其の新に出來た圓庭の周圍に留つて之を見物して居ります、そこで用意が整ふと雄鳥は地面に降りて尾羽を立て、眩いほど美しい翼を一面に擴げ之を動かして舞ふのであります、其の翼には

羽一本毎に二十箇位の美しい斑紋があつて、其の美しさは何共言ひ樣がない相です、又一層奇妙なのは雄鳥が時々其の頭の羽の間から上下に動かして雌鳥の樣子をチョイ〳〵見る事であります、何と面白いではありませぬか、是は雌鳥が此の舞を見て樂しみ居るや否やを見る爲だらうといふことです。

△孔雀の効用　孔雀は羽毛の美しい爲に人に愛育されますが其の性質の優しくして人に馴れ易い事と長命することなどは飼育するのに都合の良い點であります、其の叫び聲は粗く高く少しも整つた調子がなく、羽毛の美しいのと反對に實に聽き苦しい聲であります。昔、印度や暹羅では孔雀が澤山居つた爲に耕作した畑を荒されたことがあるそうです、又昔羅馬國では其の時の諸侯達が孔雀を飼つて之を繁殖せしめ、祝日の饗宴の節に孔雀の肉を料理して大に珍味として賞美したといふことです、英吉利でも昔は孔雀の肉と林檎とで調理した食物を賞美したといふことであります、しかし孔雀の肉は只珍しいといふので貴ぶ丈けで、餘り美味ではない、現今では孔雀をば只其の生きて居る間愛玩するばかりでなく、死後も其の美しい羽毛を裝飾用として珍重致します、歐羅巴では孔雀の羽毛を黑く染めて葬式の飾りにしたり、又は種々な色に染めて帽子の飾などに之を用ゐるさうです。

絹織物の由來

里の人

▲八丈絹　八丈絹は、伊豆の八丈島で織つたものであるが、恐らく此絹位、需用の多いものはない、黑八丈は重に着物の袖口に用ゐられ、其他の縞物は衣服として老若男女の何れにも廣く用ゐられて居る。

▲加賀絹　絹の產地としては古來から加賀、丹後、尾張の數國が有名なもので、殊に加賀では德川の中世以後盛んに好いものを織出したから此の名があるので、京都、堺で織るものを羽二重といひ、加賀其他二國のものを撰糸といふ、產地の最も好いのは小松、大聖寺邊である。

▲郡内絹　甲州の郡内から産るので此名がある、同地から織出す「改機」と稍同質で其縞柄は縦横縞で粗い。甲斐國誌に、「郡内絹、郡内とは都留郡の自稱なり、絹綿の事は舊波多八代宿禰の事跡に據る、八代は、山背の義にて、富士山の北をいふ、波多は、絹綿の皮膚歟かなる義なり」とあり。

郡内絹の需用は重に中流以上の夜具か、或は座蒲團など、やゝ下つては藝人など褞袍として着る。

▲改機　改機は多く羽織の裏地に用ふその美しい光澤と滑りのよいのとは羽織の裏として極めて適當なものである、是れを織るには、蠶糸を以て織目を極めて緻密にするから光澤がある、すべ〳〵した美しい絹布となるので、多く甲斐の郡内から出る、織糸の染色は紺緋、淺黄、紅、紫などで、紺糸を經とし白糸を緯にすれば灰色となり、緋絲を經とし、淺黄糸を緯とすれば玉虫色となり、また赤色を經とし、白糸を緯とすれば紅梅色となる。總べて經緯に別色を用ゐるから色の配合せが自然と調和されて艶美なる色彩を放つのである。

▲羽二重　羽二重の三字は綾と同じくその織物の美を稱へた詞で、一説には、呉羽、穴羽の二つを重ねて羽二重と名付と申す由、古書に見えてゐる。

徳川四代の將軍が諸國に令を下して、絹絁の長さを定め、二丈六尺を以て一反とさせた、此時、京都、堺美濃、加賀、丹後などの職工が盛んに好い絹を織出したが、就中京都と堺とで織出す所の絹が最良品であつたから、時人それを稱して羽二重と申し、美濃や加賀、丹後などで製した者を撰糸と云つた、それから又續いて上野、下野、越前、越中、但馬などでも絹を作り出して其後、京都で更に紋羽二重、綾羽二重を織出したが頗る精巧を極めたもので、明治になつては羽二重の中でも鹽瀬羽二重のみが獨り勢力を擅にし、一時は男子の着物、羽織一切みなこの鹽瀬羽二重に限る樣になつて居た。

▲縮緬　是れは恰是男子着物の羽二重に於ると同樣、婦人には是非なくてはならぬ織物で若き人は華やか美

しい色氣、年を取りし人は品のいゝ小紋などに染められて、羽織あり、着物あり、禮服は是れと極つて居る。其始めは何年時代であるか天正年間、支那の織工が堺へ參りし時、他の織物の術と一緒に此縮緬の織法を傳へたのが、始めであらう。是れより先、上古に志々良妓といつて羅の縮文があつたが、其製は全く今の縮緬とは異つて居つた。

それから元文三年、京都の織工が上州の桐生へ行き縮緬を製する術を傳へたが、これが東國で縮緬を織る始めであつた、此時、近江の長濱で縮緬を織出したが、其出來榮えが如何にも美事で、且緻密で好評を博し京都を凌ぐ様になつた次で野州足利の織工が風織縮緬を工夫したが、是れは京都の柳條縮緬から出たもので又一種の異つた趣味を有つて居る、是れと同時に下總銚子の織工が木綿糸を以て縮緬を織ることを試み、成功したので是れを木綿知々美(木綿縮緬)とも又銚子知々美とも申して、今も同地の名產となつて居る。

▲紬　紬は綿を紡いで糸として織つたもので此名がある下總(結城紬)、武藏(横山紬)、飛彈(高山紬)、甲斐(郡内紬)、伊勢(松坂紬)、丹後(單物紬)、近江(長濱紬、又奉書紬)等の織工が其地特有の紬を盛んに織出したが、殊に結城、中山、伊豆の八丈島、伊勢の松坂信濃の上田などの織工は柳條紬を製作して、何れも昔日の紬から見ると其色合に於て、其地質に於て、數等の上になつた、かく諸國競うて此品を織出したのを見ると其當時の人々は如何に紬を好みたるか、従つて又如何に需用が多かつたかを窺ひ知ることが出來る。

享保の頃になると、武藏の八王子、青梅邊の織工がまた柳條紬を織出して、上田紬といつた、一體上田柳條は其初め信州上田の織工が織出したのであるからこの名があるけれど、中頃、上田の織工がこれを織ることが尠くなつたので、八王子や青梅の織工がその織法を模ねて盛んにこれを織出し、便宜上一時上田柳條といふて居つた。

(川柳)辟帝は魂飛び大公は肉が飛び



革命歌人の歌

佐々木信綱

野村望東尼は有名な女丈夫である。しかもまた歌人として近世に最も勝れたもの丶一人である。かの大田垣蓮月と比較して、それは優美なる點に於て、これは男壯なる氣槪ある點に於て、よき對照をなして近世の歌學史を飾つてゐる。今まづその略歷をのべて、さてその歌に就て述べやうと思ふ。

望東尼は黑田家の世臣浦野氏の女で、文化三年九月福岡に生れた。資性淑雅容貌また麗しく、殊に手蹟が見事で、裁縫の業にも巧であつた。思ふ所あつて始めは諸處よりの婚儀の申込をも拒んで聞入れなかつたが、同藩士に野村貞貫とて食祿四百石を領し家柄正しくその人物また勝れて居つた人があつた。望東はその尋常人でないのを聞知つて、彼が妻を失ひて、三人の男子ありしにも拘はらずその後妻にと嫁いだ。夫妻の間は頗ぶる睦まじく、望東は彼三子を愛育する事わが產の子の如く、三子もまた望東を慕ふこと產みの親のやうで、一家和合琴瑟を鼓すといふべき樣であつた。然るに夫貞貫はうき世の煩はしきを厭ひ、弘化二年長男に其家を讓つて、福岡の町を去ること近き平尾山に山莊を造り營み、そこに望東とともに住んで、靜に月花を樂み、老を養うて、安政四年、貞貫は六十六でみまかつた。時に望東は五十四であつたが、其菩提寺明光寺に參禪定戒し、薙髮入道して望東禪尼と稱した。それは俗名もとの名をしか書いたのであつた。

望東尼は平尾村の山莊にあつて夫の菩提を弔ひがてら、靜に月花に對して吟詠を事として居たが、當時幕末の大紛擾の波はこの福岡にも押寄せ來つて、義俠心厚く同情の念深き望東尼は、天下の事日に非なるを傍觀するに忍びず、さりとて男子の身ならねば、世に出で丶奔走こそはせざれ、わが山莊の靜なるに同志を集めて語はせる場所にした。かの月照の如き、平野國臣の如き、また高杉晋作の如き、いづれもこの山莊に會して同志とともに時事を談じたのである。後高杉をかくした事があらはれて、六十歲の老齡をもつて、姬島の牢獄におくられた。この孤島に呻吟すること二年。つひに高杉の爲に救ひ出されたが、まもなく此世を辭したのであつた。かくの如き勤王家である故に。その功績をもつて明治廿四年正五位の贈位があつた。

望東尼は尼になるまへから、福岡の歌人大隈言道について歌を學び、その薀奧に達したのである。ことに觀察の微密奇警なること、着想の新奇等をその師より學びえて居つた。この才情をもつて、彼が如き千趣萬端の波瀾あり變化ある境遇に處したのであるから、その思のもろ丶所、いづれも金玉の聲ならぬはなかつた。次に最もその特色のあらはれた歌を拔萃して紹介しやう。

しばしだに物は思はじ其間にも
柳はもえて梅はちりけり

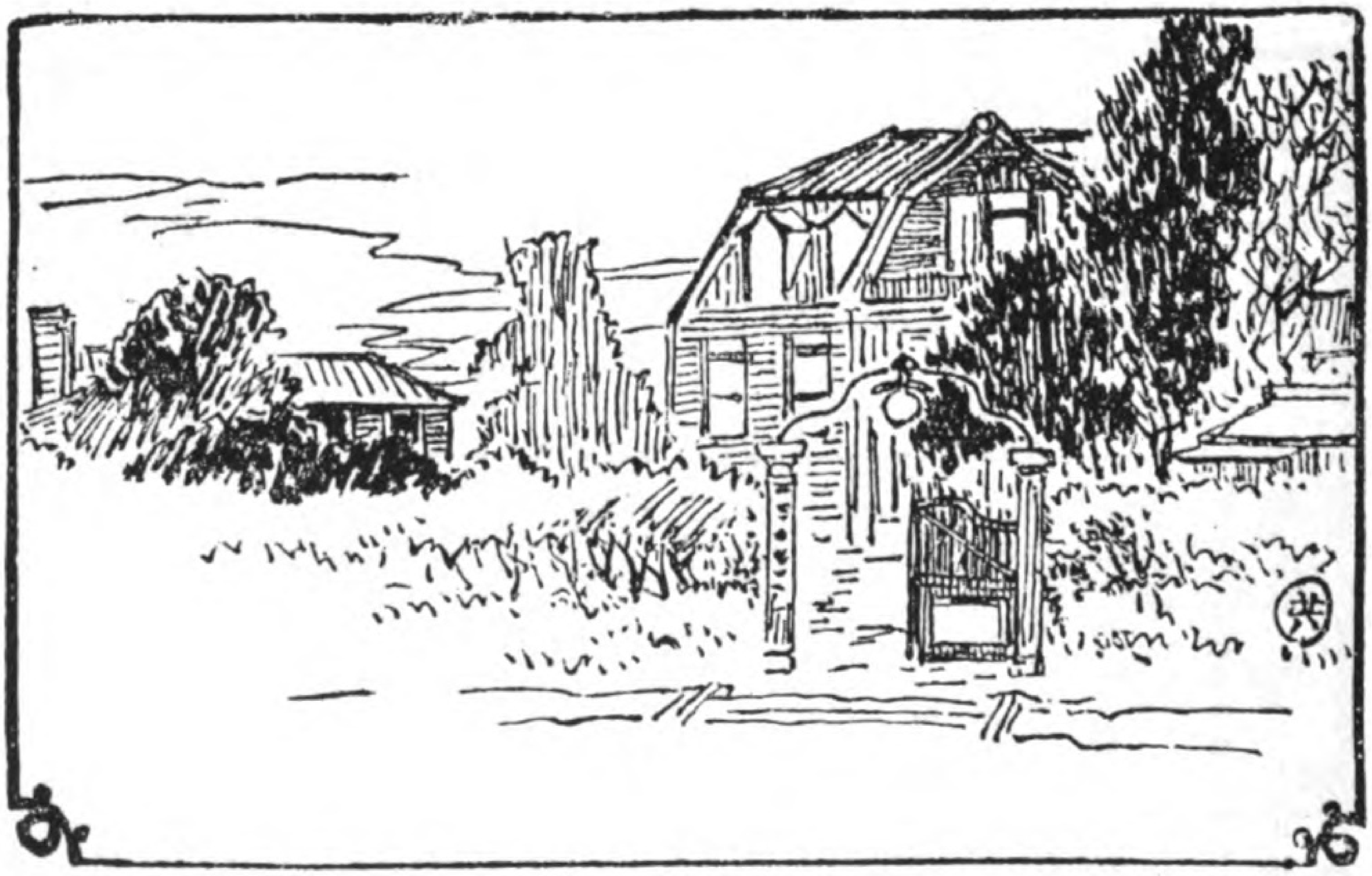
くよ〳〵とつまらぬ事を思ひゐるひまに、月日の只過ぎに過ぎゆくを面白く歌うてある。

窓近きまがきの椿
　花ごとに
あなたむきても
　咲出づる哉

かの無名抄に、賴政はすぐれたる歌仙である、それは木葉が一葉ちり、鳥が一聲なくにも朝夕心をつけて居つたからといふ話が出てゐるが、歌をよみ文を書く人は、常に朝夕の事にも深く心を注がればならぬ。題によつてのみ歌をよみ、粉本によつてのみ繪を書いて居つては、何時迄も古人の羈絆を脫する事は出來ぬ。觀察力を深くし、また想像力を養うて、さて自ら新しき境を開かればならぬのである。この歌の如き、その觀察の微細にして新しき點に價値がある。

なか〳〵に正しき人ぞ
　夏虫の
火に入るうき目
　みる世なりける

こは時事に感じての作である。また夫の病



橫濱共立女學校

おもりてやう〳〵心細げになりゆくに、夢うつゝともわかで明しくらしける頃、

はつ秋の風にふかるゝ
　ともし火の
影も心もほそるよはかな

安政二年十月、江戸に大地震ありける由傳へきゝて、

平らけき道うしなへる
　世の中を
ゆりあらためむ
　天地のわざ

慷慨の詠、婦人の作とは思へぬやうである。

類なき聲になくなる鶯も
　こにすむ憂目
　みる世なりけり

こは平野國臣が馬關で捉へられて獄囚の身となつた時、望東尼が深く歎いて歌におくつたのである。

うきながら今年も巣に
　成にけり
又こむ春は
　いかゞならまし

あら玉の年立返るしるしありて
　のどけき御代となるよしもがな

ともに時事に感じての作、熱血の字句の底に、ほとばしるが如きを覺える。

時雨ふる軒の雫のおとにゝて
　舟の底うつさゞなみのこゑ

文久元年上京せしをりの紀行のうたの一つである。海邊の舟泊の作でめづらしきいひ方である。すべてこの紀行中には觀察の面白き叙景の巧みなるのがおほい。

神垣の梅の初花ひとひらは
　めづる心に許させたまへ

いかにも優しき歌である。これは一月三日加茂の社に詣で、宮居近き早梅のまばらにさいて水に映つてゐるのを見て、あはれ此一花を故郷の友に送つて遣りたいものをと思つて詠んだのである。

數ならぬ此身は苔に埋れても
　大和心のたねは朽ちせじ

呉竹のうき節しげき世の中に
　此君と思ふ人なかりけり

折にふれての作である。女丈夫の面目みゆるが如くである。

ながらへて見るかひもなき世の中は
　くれはてぬまになき身ともがな

調書に「憂には神のみ國昔に立返らせ給ふ時もましますめど、暮れか、る日はまづ入りてこそ出づる朝もあれ、末短かき老らくの明日を待ちうべくもあられば、世にありて甲斐あらむ人々にかはりてなど常に思ひぬ」とある。悲憤の作一讀感にたへぬ。

我爲を祈るにはあらず神佛
　み國のみ爲人のためなり

女丈夫の赤心が思ひやられる。またその國事に奔走する爲に、福岡藩の譴責を蒙りて蟄居してをつた比、また孫等も罪を蒙りて家の内に蟄居せしを、一つ家に二人あらむことさへ叶はずなりて、望東尼は浦野家へ預け替を命ぜられて、愈々立出でやうとし、扇に書きて孫たちに示したうたに、

歸らでも正しき道の末なれば
　誰もなげくな我も歎かじ

折から八月十八夜の月のさし上る程であつた。網乘物の簾の隙より月の光を仰ぎ見て、

のり物の思もかけぬをすごしに
　居待の月を見るぞ悲しき

さて座敷牢の中に籠められながら、彼の有志の諸士を助けて隱匿せしめた平尾山の山莊を思ひやつて居つた。恰も山莊の留守番は、かの庭の紅葉を折つて一枝もつて來て、竊に望東尼に見せた。その折、

すみはてむ庵とおもひて花紅葉
　こゝらうゑにし昔はかなし

こゝらは數多の意である。又座敷牢を警護し居る人たちの熟睡し居るを眺め入りて、その心の中に物思もなく安眠しをる事の羨しく覺えて、

中々に我守る人は夢のよの
　はかなさ知らで寢たる安けさ

種々の訊問をうけたのに、「國家の御爲人を助くとて捨果し命なれば、如何なる方に罪し給ふも厭ひ侍らず。有志たちの罪は皆我に負はし給へ。彼の者どもはまたかの御用にも立つべければ、御助けありたし」と申して歸る折に、

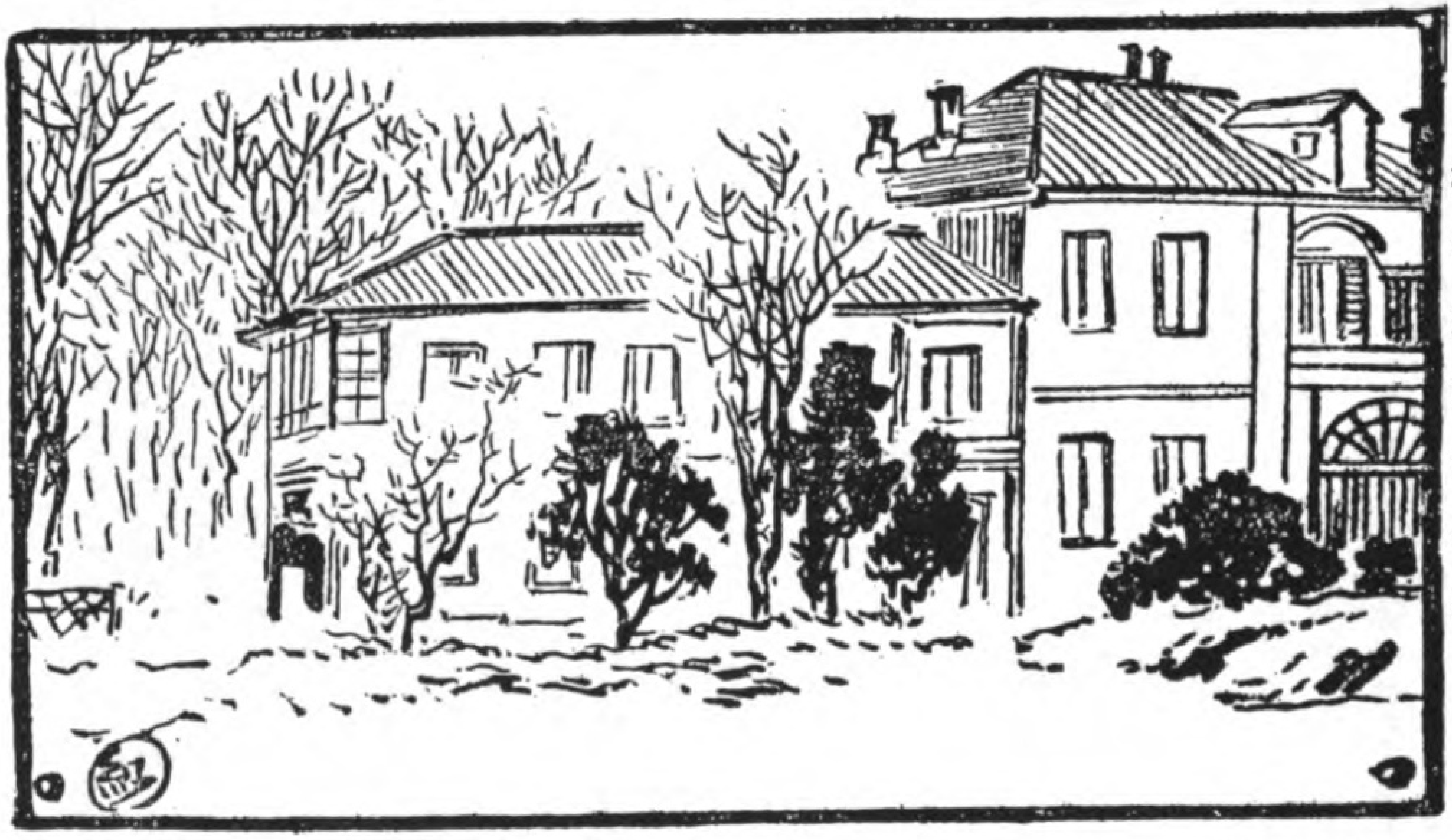
もの〻ふの重荷の罪を
　身一つに
　おひて輕くもなる
　　いのちかな

夜寒の空に殘雁の只一つおくれて鳴きゆくを聞きて、

冬の夜の曉寒き雨にぬれて
　友なき雁のひとり
　　行くらむ

我身の一人座敷牢の中に押込められたるに比して、一層雁の孳の身にしみ〴〵と覺えたであらう。孫なる者も同じ罪で鳥海島の牢に流された由傳へ聞て、悲歎の餘りに、

ある甲斐もなげなる我は
　とめおきて
わかきの紅葉ちるぞ
　かなしき



横濱紅蘭女學校

その上、月形洗藏をはじめ十四人の有志家の斬罪に處せられた事を聞いた。「頹れ〴〵の夢の夢、あまりの事に泪も出ず、人にかはりて我命を上にも願ひ、神佛にも祈りし驗だに無く、淺ましき情なさいふ方なくて、

暫しだにおくる〻こそは
　苦しけれ
　か〻るうき世の
　　ありさまをみて

またある時、

一たびは限といでし家人の
　また戀しくも
　　なりまさるかな

實に句々皆血、章々皆涙というてよい。望東尼は國家の將來を愍ふの情と、志士の困苦を憐む同情の念とにかられ、我身我家を忘れて奔走し、遂にかく籠居の身とはなつたけれど、何處までも女は女である。其優しい心根には、一度最期の別と思ひて來たれど、猶家なる家族を思はずにゐられなかつたのである。さて藩廳よりの命はさがつた。他の志士と均しく斬罪に處せらるべく豫想し覺悟しゐたるに、姬島に流され、その牢獄にこめらるべしとの命であつた。

いさぎよく散りにし四方の花紅葉
　殘る朽葉をいかゞおもはむ

「生きとゞまりても甲斐なしと、物もたうべず藥ものまでなるに、人々も醫師もいたく思ひ煩ひて、やがて島の中の牢獄にこもらば、冬深き寒さに老の身從束なし。魚鳥の肉などを粥にたうぶべしといふ。物の命をむさぼりて一日だに長らふべき心つゆばかりもなけれど、人々の切なるすゝめもだしがたく、さすが心弱りて、さちばすゝめのまゝに」といひつゝも、

天地のなるにまかする世中は
　我身のあたもわが身なりけり

これら謫居中の歎を總稱して、生の別れといひ、愈々姫島に流さるゝ時からの作を流れ木と題してある。次にこの流れ木について紹介しやう。

（次號完結）

俳人捨女（はいじんすてぢょ）

小川煙村

西鶴未だ生れず芭蕉未だ生れざる寛永十六年、丹波部里に於て六歲の少女は「雪の朝二の字二の字の下駄の跡」と詠みたり、田捨女たる者又た俳才ありと謂ふべし、彼女は遂に如何なる女流俳家となりたりしか。

獺祭書屋俳話に曰はく、

元祿前後の俳諧に遊ぶ婦女子の中、まづ捨女、智月、園女、秋色を以て四傑とも稱すべし、すて女は撫子花の如し、うつくしき中にも多小勢ありて、りんと力を入れたる處あり、智月尼は蓮花の如し、清浄潔白にして泥に染まぬ其色浮世の花とも思はれず、秋色は撫子の如し、ゆら〳〵と風に立ちのびてやさしうさきいでたる中々にくれりならはぬあどけなさに、其人柄まで思ひやられてなつかし、園女は紫陽花の如し、形強くして心おとなしきは俳諧の虚實にかなひ日々夜々花の色は風情の變化を示して終に閑雅の趣を失はずともいはん。

獺祭書屋主人は近世俳家中最も學識ある人なり、又た明治の蕪村を以て見做されし俳人なれば、常に他人の句を見て品隲を誤らず、前記四俳女の評の如きも亦た其肯綮を得たりといふを憚からざるもの也、されど此批評をなせし折に獺祭書屋主人の捨女觀察の材料は、世上に流布する五六の句にて斷定せし如し、蓋り捨女句集なるもの、未だ版行になりしな聞かず、且つ傳唱するもの少なければ又た詮方なかりしならん、されど我れは幸にして捨女の後裔なる丹波田氏が家に珍藏せる、すて女句集なば何某が編せし一册を見たりし事あり、玆に未だ曾つて誰もがなさゞりしより、豁かなる材料を以て、捨女を批評せんと思ふ。

最初二三の術に憑りて捨女が生涯を知らん、捨女は丹波柏原の人、田氏といふ、六歲の折句あり、都部に聞ゆ、國守之れがために句を賜ひ「柏原に惜しや捨て置く露の玉」、後北村季吟に就き歌道を學ぶ、季吟は十年の長なり、捨女二十歲の芳齡にして宗族に嫁しお嫁さんとなる、由來俳道に遊ぶ女子は皆夫婦の緣薄きてふ運命に定められたるにや、捨女亦た多くの俳女の如く未だ二十歲に滿たずして良夫を喪ひ孀となる、はなれ鴛鴦の悲しみの餘り剃髮して盤桂和尚の門に入り淸寂世歷と離る、始め淨土律を修めし事ありともいふ、尼號妙融、「秋風の吹き來るからに糸柳心細くも散る夕べ哉」、の一首あり、播州網干龍門寺の傍に庵を設け不徹庵と名付け生涯を此處に送る、元祿十一年八月六十五歲を以て沒

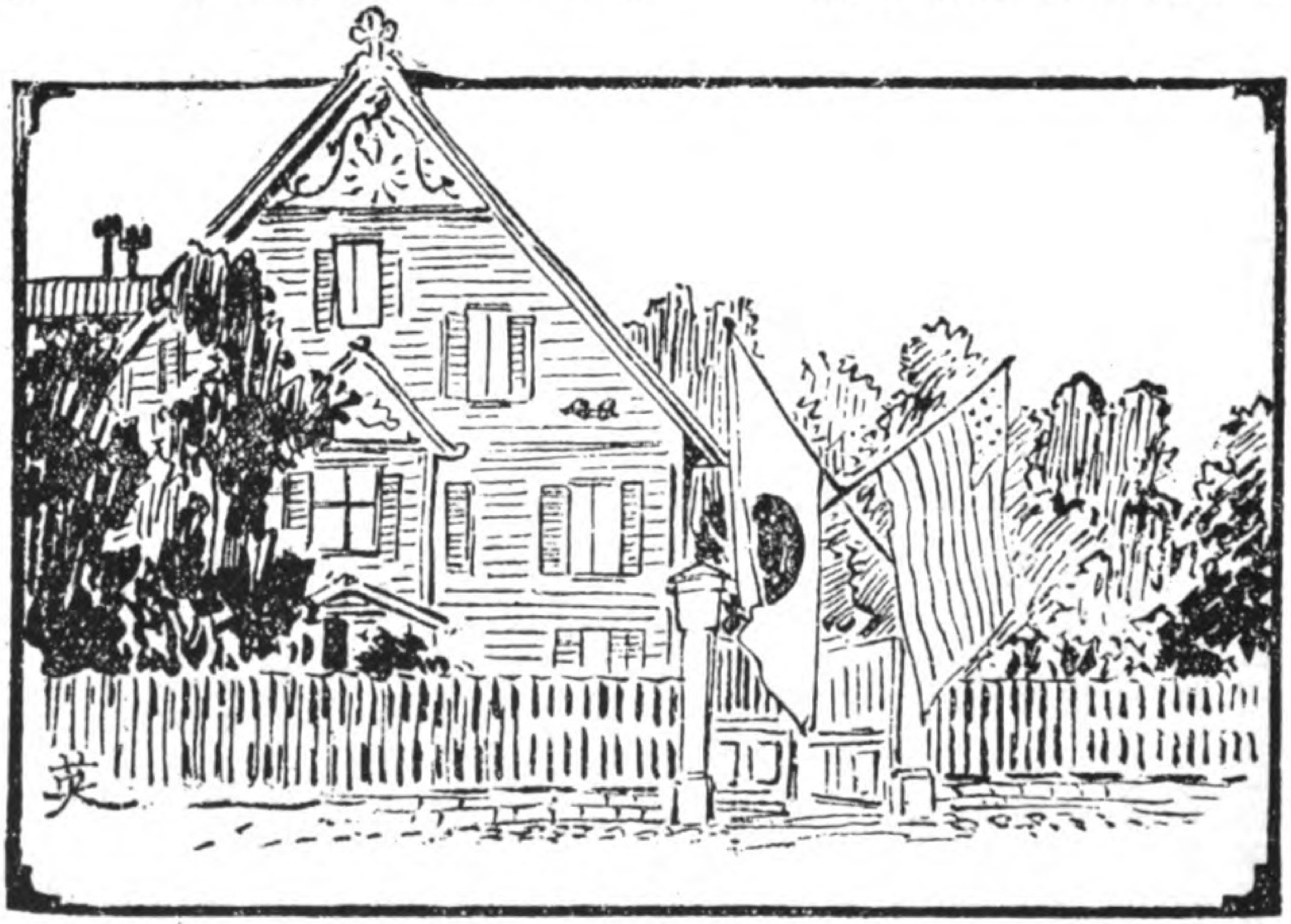
す、諡して讃譽貞閑禪尼と稱す。

捨女の傳記として世に傳はるもの大概右の如し、是に就きて注意すべきは俳女の夫婦緣薄き事なり、園女然り千代女然り、思ふに連添ふ良夫に別れて世のあじきなさを感したる時、凡ての俳女は其階段を一進するに似たり、捨女園女千代女か群少女流俳家を抜きて特に勝れたるは、一は其才藻によるべけれども、其閲歴の如何にも幾許の注意を拂はざるべからざる也。

△捨女の俳句

捨女句集を通讀して公平なる批評をすれば、捨女は決して大なる俳人にあらざりし也、稍揚ぐるに足る所以のものは世に女流俳家たるもの〻少なければ也、且つ流石市幗閫にあらざれば捕へ難き句あれば也、されば女流俳家中に限りて論ぜば捨女も亦た確に一市の頭領たるの資格ありと稱せらるべし、今女子にしては企て難き偉大の句を彼女が句集より撰べば、

　もろこしも
和國となるや春の風



横濱英和女學校

逢阪の關咲き戻せ花の風

後句の如きは未だ十分に承諾出來ぬ句なり、此他には偉大の情景あるもの一もなし、されば、りんとしたるといふは内質の謂にあらずして、句體を指して謂ふなるべし、捨女の句は歌の言葉に似たり、されば流暢なり、而してかけ言葉多し、其弊や細工に過ぎたるもあり、併も句體としてはしまりたるが多し、今かけ言葉の例を示せば。

若菜つむ夜明や奪ふ紫野

涅槃會もかけはなれけり　今日の雪

岩くらの戸を開きてや　米さくら

待ちわびて身にやせの山　ほとゝきす

なきすてに聲おしほ山　ほとゝきす

其外數へ難し、此が悪所に走りしは、

歸る雁男ではなし北の市

短冊は紙つけあひか　はなのさき

櫻色に顏も染めけり花見酒

かゝる句は記すも胸悪き心地すれば故に酔は除く、さればとて捨女の句全體を蔑るにあらず。

卯の花の雪に紅さす苔かな

などの如きは女ならではと默頭る。纖麗佳麗は矢張彼女が領分なり。

朝市に賣る初聲やうぐひす菜
芽だつ時さなへといはん米柳

彌生の節句

蓬手の君が雛に草の餅
輿謝の海霧の袖や能衣裳
濡色やあめの下てる姫つゝじ
床夏に有明ともす螢哉
とまる蟬の歌や西行柳かげ

極めて女らしきは。

氣力なき柳の瘤ややさぢから
水鏡見てや眉かく川柳

並に又た正月十五日の題にて。

かゆのあつきいろや紅梅大納言

などの面白きあれど、同じ種類の出來損れたる、

梅の香や聞て盲目も垣のぞき
ぬす人に垣か夜の間の風の花

はなくて、よきものなり。

紫の上こすはなし貌よ花
色にさへにせ紫のいね茄子

は取るべし。以上の句を見ても彼女が頻りに擬人法を慣用せしを知る事を得ん。其盛んに用ひられしは「月の顔」「雲の袖」などあり、然して句數多きは、若菜、梅、柳、花、つくし、蕨、杜鵑、夏の月、七夕、親祭、月、紅葉、砧、草花、雪、彼女は閨怨の句少なく戀も際立ちたるがなきは注意し置くべし。

以上を總括して考察するに、捨女の句は内容より形式を苦心せし如く、即ち句體に骨折りて着眼點捕捉點などは陳かなりし、主題も尋常にて特色なく唯普通の女流俳人がするものなど、句體は和歌より出たればにや調子を尊びかけ言葉多し、別に燃へる如き情勢を認めず、かけ離れたる見識もなし、此を以て俳としては左程立派ならざるといひし我評言の當を得たるを確かむ。

最終に彼女が人生觀を窺はんには左の句有り。

花は世のためしに咲くや一盛り
花をやるや櫻も夢の浮世もの
とこも鳴く三界無安ほとゝぎす
松茸は唯一あきを千とせ哉

人世は「一盛り」なり、「夢の浮世」なり、「三界無安」なり、「唯一秋を千歳」なり、要は無常といふに歸着す。此によりて知る捨女の人生觀は普通佛教の無常にして別に深き識見あるでなく、高き悟所あるでなし、彼年修めしといふ彼禪宗の面影の如きは絶へてなし。

吹風になしと答へよ花の口

維摩の默か、趙州の無か、捨女はなしと答へよ花の口を以て處世の法を説ける如し、其似たるもの他にもあり。

我思ひゆづりあはせよ衣更

即ち謙虛なり謙讓なり、蓋し此等の敎訓は亦た女らしき處世法なりといふべし。

捨女の句大槪以上に盡く。

捨女句集は世に少なきものなれば前記のを除き他の百餘りの句より更に過半を拔き取つて此處に示す。

（春）

萬歳のかめにさゝばや花の春
春はそのかたたがへせぬことし哉
花もみも一時に來たり今日の春
家々の千とせやあまたかどの松
とらの年くるさほ姫やおとさせん
東より越しくる春や二所の關
春をうるは賣めでたいよ若えびす
飾り置くたるや釣との若夷
伊勢海老は宮に出けり內いわ井
雜煮ぞや千代のかずかく花かつを
かまどにももえづる春の若菜哉
いざつまむ若菜のこすな籠の內
ちからをも入れず今日引くなづな哉
うき事になれて雪間の嫁菜かな
つれ合ひてつな引するや猫のまね
梅や實に匂ひやかなるわらひ顔
加茂山の梅は暦のはかせ哉
外にしるき香こそ百步の紅梅花
春雨は藍が染め出ず柳いろ
鶯の歌の柳や琴の糸
妻戀ふやねう〳〵となく猫の聲
もろ花の散るは涙か御入寂
おがみたし涙くもらで涅槃像
蝶々は花にはなれぬあひる哉
初花やふたつみつよつちござくら
目もあやし錦のやうな木々の花
散行やあとも結ばぬ糸櫻
花よりも木にあたりける嵐哉
いけて見る花の命を釣小舟
みやひやかに咲やいち早き花の貌
花や散らむ耳も驚く今朝の音
みちのくの花を忍ぶやえとの花
遠めには雪のやうなり花の貌
花の後の鶯笛は靑葉哉
ちるな〳〵常磐の名ある松の花
咲まじるだんだら淺き躑躅哉

〔夏〕

夏衣かる〳〵となる氣力かな
春を夏へ引のばしてやさがり藤
散らでとまるはこねうつ木に卯の木哉
つれないぞよしそれとても戀し鳥
なかぬ夜は枕をふくむかほとゝぎす
なけや〳〵いまはいつなん時の鳥
郭公外山にあくる聲もがな
卯の花に杜鵑かきたる袷
箱根うつき聲は關所かほとゝぎす
龍田姫色染かへし新樹かな
姫瓜のまがきや深き窓のうめ
松風やつれ引涼し瀧の音
峯路にも近路あるや夏の月
短夜の月や山より坂おとし
夕立に洗ひて出るや月の貌
秋はさそ楓林に見る夏の月
見あけても心つきなし五月闇
せみ〳〵と鳴くや類句の歌の吟
山はにげて月鉾見せよ祇園の會
きり聲の桶や暑さを忘れ水
薫じぬる蓮や淨土の九品

〔秋〕

七夕のわたせる橋やこひ紅葉
待くれや雲のはたての女七夕
ほれしよは氣つくしや露の玉かつら
ひぐらしや捨て置いても暮るゝ日を
來る秋の桐きは見する一葉哉
なく涙雨と降てや魂祭
なき魂のより所なり蓮の露
雲や几帳はたかくれたる月の貌
月の貌見ぬ戀にまよふ闇路哉
心細に秋を見せけり三日の月
月や空にゐよげに見ゆる簾越し
月を入るゝ露やまことの玉手函
十五夜の月の妹か十三夜
楓林の月は夜なき錦かな
目に見へて手にひかれぬや月の異
紅葉見やこゝを瀬にせむ龍田川
染川と紅葉にいはん龍田川
秋の道水にもしるし紅葉船
嵐には山の錦もつゞれかな

槌なうて白きぬ打つや瀧つなみ
月や見る砧の音のぬけ調子
さして見て長柄といはん桔梗笠
朝貌やしのゝめ待つて御見もじ
夕霧や落葉衣をかさねづま
粟の穂や身の數ならぬ女郎花
思ふ事なき貌しても秋の暮
さらば行け秋の心もけふの暮

（冬）

ひいくと草のとざしか霜柱
風に身の入りても降るか玉霰
姫松のかたびら雪や伊達うすぎ
今朝見れば花やさくやの木々の雪
岩角もむつくりとなるや雪の綿
打てば響くきわたの弓や雪おこし
鴛鴦の衾雪まる軒の妻
空は春か嵐に散らす雪の花
千金に替へるものかは雪のぎん
初物や七十五日雪の餅
水鷄にもまさらむ夜半の鉢たゝき
暮れて行く歳暮に積んだ雪の綿

法眼一信の妻

芳宜園主人

五百聖衆の大作を完成したる狩野一信は、よのつれならざる精力あつたに相違ない。この事は、河鍋暁齋翁もつれぐ感心して、その畵に至つては、恐く感服することが出來ないが、その精力のみは、到底吾儕の及ぶ所でないと云はれたさうな。此の如き大作の成つたのは、無論一信の精力が人に勝れてあつたに由ることなれど、その妻なる者の助にも由ることゝ思ふ。

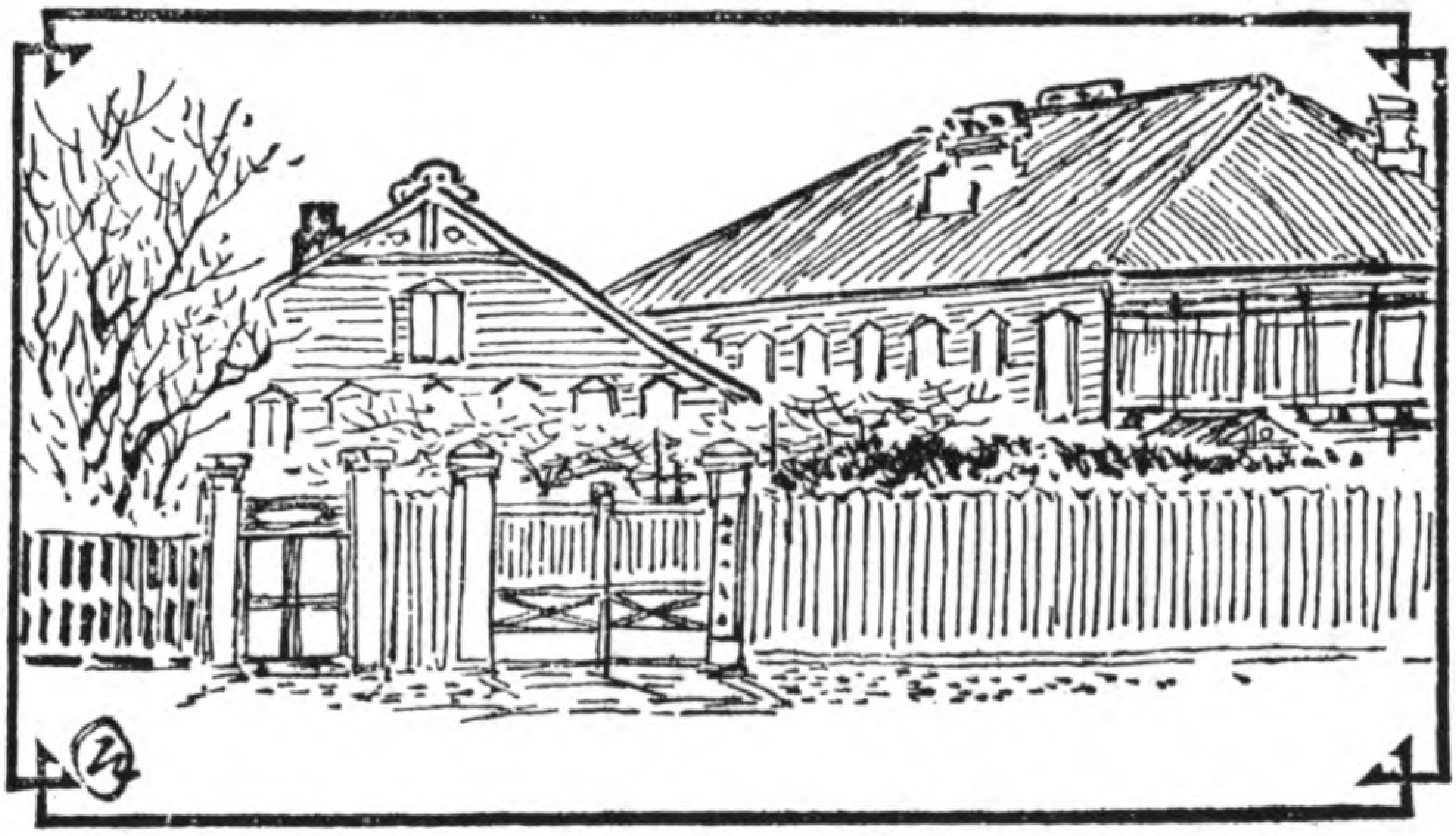
一信の妻は、俗名は何子と申したか知らぬが、一信に別れてからは、髮をおろして妙安尼といひました。余は山田寒山と共にたびく妙安尼を芝山内の羅漢堂に訪ひ、いろくの話をも聞き、またその平生の事を知ることを得ました。

妙安尼が一信と夫婦になるには、太だおもしろい因緣がある。その頃一信は未だ二十五六歳で、狩野素川の家の學僕となつて苦學をし、自分では餘ほど技も上達したやうに思ひ、これならば名を揚ることが出來るといふので、突然、素川の家を脫し出でました。然し別に行先もないから、腕を組みながら兩國橋の上をぶらくと歩いて居ると、一人の老人が袖をひきとめて、つらくお前の顏を見るに異相がある、屹度大望を抱いて居らるゝに相違ない。私は悪い樣にはせぬによつて、とにかく私の家へ御出でなさいと申して、强ゐて一信を伴れて歸りました。この老人は逸見某と申して、幕府に由緖ある家筋の士であるが、その性高潔で利祿の爲めに身を絆がるゝを避け、自分は易學に通じて居るから、世人の需に依て吉凶を占ひ、一人娘と共に淸貧を甘んじて世を送つて居るのであつた。さていろく話をして見ると、太だおもしろい。某も一信の行末

名を成すに足るものであることを知つたものか、遂にその愛女を以て一信に配しました。この女が即ち妙安尼である。

妙安尼が一信と妹背の語らひをなした當座は、淺草の福井町に小さい家を借り、始めて畫をもて業とすることにしたが、一信の名が未だ世間に知られないから、畫を需めに來る者もないによつて、非常に艱苦して、看板などを畫いて百二百の青錢に代へましたが、これとても朝夕の煙を上げがたき有さまであつた。世の浮薄なる婦女であつたならば、かゝる時は直に離縁を請求するか、或ひは逃げて行くものであるが、妙安尼は決してさういふ風の女でない。つゆほども貧苦を厭ふ心なく、所天を勵ましてその業を努めしめ、おのれは他家の爲めに絲をつむぎ、または衣を縫ひて家計の足らざるを補ひました。されば一信が修養時代を過すことの出來たのは、必竟この賢妻の賜といはねばならぬ。

やはりこの頃の事で、妙安尼は竊かに淺草の觀音へ參り、何卒〳〵、所天が業を成して名を揚げしめたまへと祈願をこめて、一信が眠につくを待ちて、夜ごと〳〵に觀音へ參詣し、およそ三年ばかりの間は、雪の寒さも風の吹すさふ時でも、未だ曾て一晩も怠つたことが



横濱捜眞女學校

なかつたといひます。これは一信の門人一純の話である。その所天を懐ふは洵に人の妻たる者の龜鑑として好い。

一信が畢世の大願たる五百聖衆の圖も、三縁山源眞院了堂上人の助力を得て筆を起すことになつたので、妙安尼の喜は喩へがたきほどにて、家事鉅細となくみな一信に代つて之に當り、一信をして繪事以外の事にかゝづらはしめずその業を專にすることを得せしめました。文久の三年九月二十三日、一信が病の爲めに六幅の稿本と四幅の腹稿とを殘して身まかりましたから、妙安尼は、門人一純、信友の二人と共に遺稿に着色を加へ、丁度百幅に完成し、一切の家財を捨てゝ羅漢堂を建て、おのれは尼となつて之を守り、朝夕の供養を怠らなかつた。この妙安尼あつてこそ、始めて一信の宿願も成就したのである。

この五百聖衆の圖の標装が出來た時の事であるが。この百幅を三縁山の本堂に掛けて、稲田行誠上人を賴んで開眼供養いたした。恰かも此の時三縁山火を出して本堂に燃え移つたので、妙安尼は狂氣の如く驅付け、猛火の中から百幅を救ひ出し、松林の中へ置いて、自ら守護して居ると、星の如くに火が飛で來て、妙安尼の身も危いから、他へ避けたが好いとすゝめると、妙

安尼なか〳〵承知せぬ、この百幅の畫は、實に我が所天が畢世の心力を注いだもので、その遺體とも精神とも申すべきものである。我が身は火焔の中へ捲き去られても差支ない、唯だこの畫だけは助けたいといふので、自分の身を以て百幅の上を蔽ふて居りました。當時傍に居合した人達も大に感心なしたといふことである。

羅漢堂の中には一信の木像がある、之は妙安尼が成田の彫刻師不動金兵衛といふ者に頼んで作つたものである。妙安尼がこの像に對しては、恰かも生ける人に仕ふるがごとくであつた。朝起ると先づ身心を清めて木像の前に額き、「旦那さまお早うござります」。夜になると「お休みあそばせ」と一禮してから床につくのが例である。また日ごとに一信が平生嗜き好みたる食物を調へて木像に供へ、なりくは木像を相手にして、一信が世にあつた時のおもしろかつた事やさてはかなしかつた事など自ら語り自ら答へ、さながら面前にその人あるがごとくである。知らぬ人は、氣が違うて居るのでないかと怪みましたさうだ。

三十年の夏の初になつて、妙安尼自らその死期の近きにあるを知つたものか、一信の位牌の法雲院法眼德譽一信居士の文字に列べて自分の法號雲院雲譽妙安大姉と彫りつけ、これから後は危坐正念して、決して他の事を語ることがない。かくて六月三十日に至りて、忽ち微痰に罹り、一純を呼びよせて羅漢堂の事を囑み、一純が點頭したのを見ると、いとうれしげに笑を含みて眠るがごとく歿しました。年は八十一と聞きました。

世の中には賢婦と稱すべき者は少なくないであらうが、この妙安尼の如くに、終始よく婦女の道を盡し、所天と共に爵事を營みたるの一事においては、殆んどその類ないといふても好い。されば美術史上に一信の繪事を傳ふると共に、また妙安尼の事を遺れてはならぬ。

四號　繪捜し當選披露

（一）歌留多會……十一人（未だ始めぬ所一人十枚宛の配布割なれば取る人十人と讀む人一人）▲餅搗……三人（搗手と手返しと伸手）▲犬引……一人▲おでん賣の附近……八人（少女の手拳をなす所　陰に一人あり）▲荷馬……一人、▲理髪店……七人（帽子三ッ掛りある故陰に刈る人と客が二人ヅヽ）＝計三十一人。

（二）煙草のむ人の附近……四人（陰に人なし）、▲首引……四人（障子の陰より出でたる手は見物人の頭と違ふ故別に一人あり）▲姿見……三人（姿見に映りし人の髷は向つた人）▲砲兵……十人（普通野砲は一門に五人の砲手が在る故二門にて十人）▲材木運搬……八人（前に四人後に四人）▲幕の內……十一人（杭より右女の首の下に男の足同左に鳥打帽の下に少女の足）＝計四十人。通計七十一人

△解答を試みたる者……千二百五十六人
●まるで當らぬ者……千二百二十三人
◐半當りたる者（（一）（二）の內（一）丈當て得たる者）二十八人
○全く當りたる者（（一）（二）の兩方を當て得たる者）五人

東京市芝區葺手町二十一　平井美須
橫濱市本町四丁目六十七　たかのくめ
埼玉縣兒玉郡賀美村勝場　佐藤ふさ
東京府北豐島郡王子村一三二六遠藤方　美濃部祿
京都府葛野郡第一高等小學校　鈿井愸子

獨逸の皇室

TH生



▲聯邦國の首領

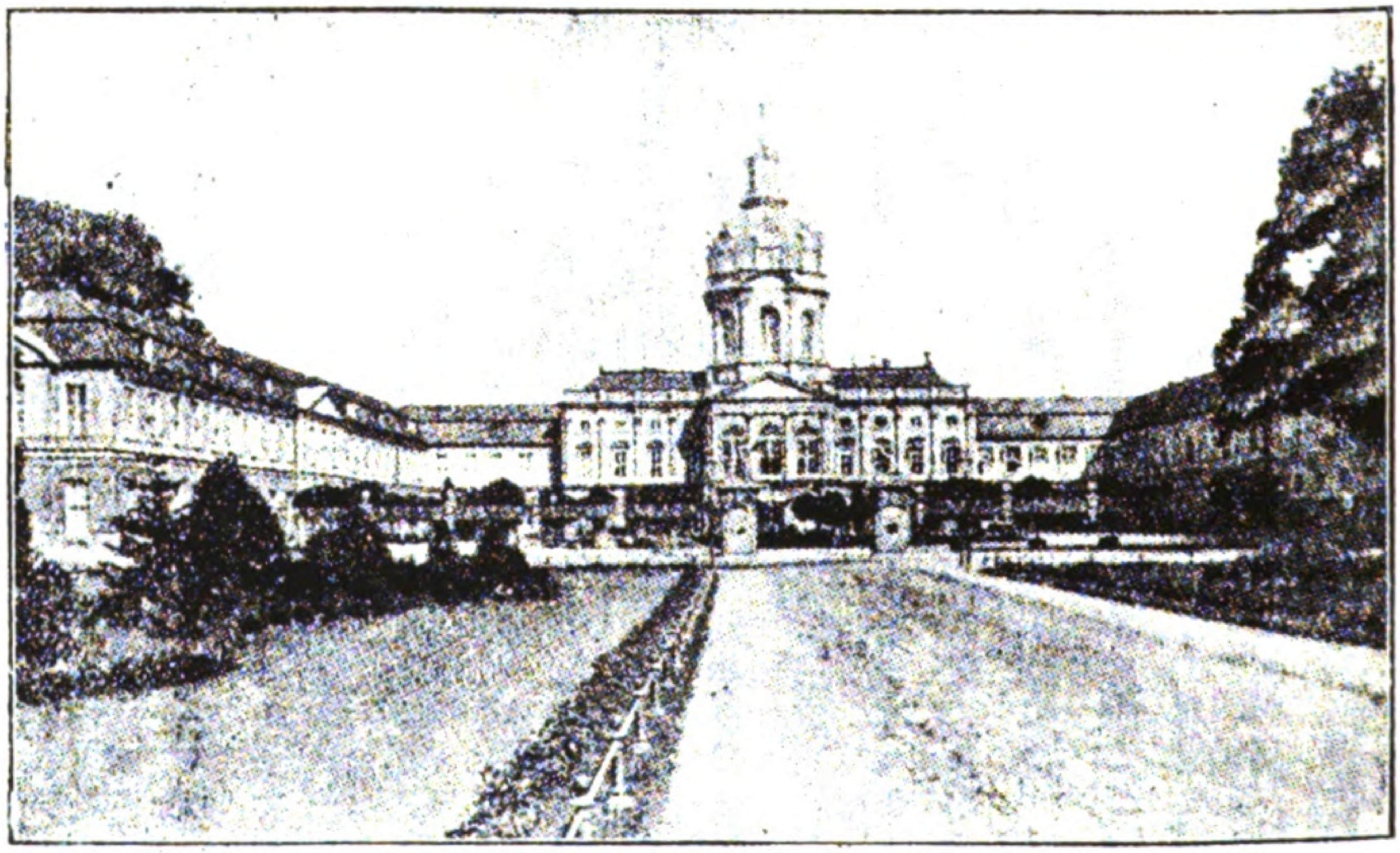
獨逸皇帝といふても、他の國で稱する帝とは、其の意味が異つて居る。此の國は、ナポレオンの爲めに蹂躪せられて、慘憺たる有樣となつた時に、プロシヤが非常の苦心を以つて、國力の恢復を計つた。その後次第に發達し、ナポレオンの勢力を退け、千八百七十年には、佛蘭西と戰つて勝利を得た。此の時、獨逸の諸邦は、國家を安全にするには、是非とも同盟して、その盟主を立てねばならぬと決議し、其れには戰勝國である普魯西王を盟主としたらばよからうと言ふ事で時のウイルヘルム一世を推擧した。これが今日の獨逸皇帝の始である。されば皇帝といふても、實は盟主と言ふ程の意味である。それで聯邦國は、普魯西を加へて二十六邦ある。

普魯西が獨逸人の保護を其の任とし、全國の軍事上及び政治上の權利を握つたのは、千八百七十一年で、それから現帝に至るまで三代である。因にいふ、獨逸皇帝はカイゼルと稱するので、此の語は、露西亞のツアーと等しく、此の國に限つた字である。ツアーも此のカイゼルも共に、羅馬のシーザルから出た語であつて、意味は皇帝といふに外ならぬ。

▲皇帝は英女皇の孫

今の皇帝ウイルヘルム第二世は、千八百五十九年正月二十七日に生れた。母は英吉利のヴイクトリア女皇の第一の皇女ヴイクトリア皇后である。ウイルヘルム第一世が崩せられて、フリードリヒ第三世が即位されたが僅かに三ヶ月にして崩せられたから、現カイゼルは二十九歳で獨逸帝位に上られたのである。即ち千八百八十八年三月九日であつた。

皇后は、聯那國のシユレスキヒ、ホルスタイン、ゾンデルブルグ、アウグステンブルグといふ長い名の公國の姫である。千八百五十八年十月二十二日に生れ、千八百八十一年六月十五日宮中に迎へられたのである。皇子には、皇太子フリードリヒ、ウキルヘルム（一八八二年生）皇子アイテル、フリードリヒ（一八八三年生）皇子アダルベルト（一八八四年生）皇子アウグスト、ウイルヘルム（一八八七年生）皇子オスカー（一八八八年生）皇子ヨハキン（一八九〇年生）皇女ヴイクトリア、ルイゼ（一八九二年生）の七人ある。皇女は只一人であるために、兩陛下は殊にルイゼ内親王を愛せらるゝさうである。



獨逸の王宮

▲皇族

カイゼルの皇弟、又は皇妹で現存せらるゝのは五人ある。

（一）シャロッテ内親王、この方は千八百六十年に生れ千八百七十八年に、聯邦のザクスマイニンゲンのベルンハルト公に嫁せられた。（二）ハインリヒ親王、この方は千八百六十二年に生られた。曾つて我が國に來遊せられた方は此の親王である。（三）ヴイクトリア内親王、千八百六十六年に生れ、聯邦シャウムブルグ、リッペ公に嫁がれた。（四）ソフヒーア内親王、千八百七十年に生れ、希臘の皇太子コンスタンチン公に嫁がれた。（五）マルガレテ内親王、千八百七十二年に生れ聯邦ヘッセ公に嫁せられた。又バーデモン太公國の妃は、皇帝の叔母に當られせらる。

▲多藝の皇帝

歐洲の列國中で、先づ目につく皇帝といへば、カイゼルである。年齡も若く、而も最とも活動する皇帝であるから、世界が注目するのは無理のないことである。カイゼルの學問せられた所は、ボン大學で、今の皇太子も、此の大學で勉強されたのである。

カイゼル位多能の人はあるまい。何事でも、必ず研究して、人なみ以上に達せられる。文學のことでも、哲學のことでも、敎育、倫理、政治、社會等、あらゆる學問に通じらるゝ許でなく、繪も書かれる。歐洲の帝王中、カイゼルほど學問技藝に達した人はあるまい。又カイゼル程、突飛のことをする人も稀であらう。皇帝の考では、帝冠や、服裝で、カイゼルの威嚴を保たうといふのではなく、實力で一國の長たる權威を輝やかさうとするのである。されば或る場合などには、自身の位地を忘れられたのではあるまいかと思はれるほどの行がある。單獨で市中へ出られたり、役者に向つて芝居の演説されるとか、隨分世人を驚かすことがある

斯くの如く多方面に注意される方であるから、その忙しいことは、非常のものである。朝は大抵五時に起きられ、沐浴の後、直に事務をとられ、それから皇后と一所に朝食事をすまされるのである。食事は甚だ簡單で、茶に、パンに、バタに、冷肉に、鷄卵位であるさうだ。食事の後、政事を聽かれ、晝食事は皇子と共にすまされ、午後は樣々の研究を試みられてから、皇后と

共に、チェールカルテン公園に遊ばれるのが例である晩の食事は大抵七時頃であつて、陪食を仰付られた大臣とか、外國人とかの居らぬとは、甚だ稀であるさうだ。皇帝は實に話好の性であらせられるから、外人などで、謁見を許される者は甚だ多い。

皇后は實に家庭を整理すべき婦人の職を、完全に盡される方である。獨逸の婦人は、皆な皇后を模範として婦人の天職を圓滿に盡さむと願ふのである。されば皇后は交際社會の大立物であるとか、或は何々の藝に通じて居られるとか言ふ評判は無いが、七人の皇子を敎育しながら、皇后として宮廷を治めらるゝ技倆は、通常人の及ばぬ所がある。

皇子ヨハキンは、下々でいふ、だゝつ子で、朝起きて顔を洗ふのが大嫌で、毎朝泣いたり、暴れたりして皇后はじめ宮女等は、大骨折て、漸く顔を洗つてあげる始末であるから、皇后も持て餘されて、或る日、宮中の庭園を番守する兵卒に、一事を依賴された。ヨハキン殿下は例の如く、さん〴〵に暴れて、とう〳〵顔を洗はずに、庭園に飛び出して、お氣に入りの場所で遊ばふとされたが、番兵は敬禮をしなかつたから、殿下は、これを咎められた。時に番兵は冷然として『顔をお洗にならぬ殿下には敬禮が出來ませぬ』と應へた殿下は暫らく考へて居られたが、軈て宮殿にかけ入られて顔を洗れ、それから後は温順しく毎朝顔を洗はれるさうだ。これを見ても、皇后が微細の點にまで亘つて、敎育に注意せられるとが知れるであらう。

▲皇太子と妃

皇太子は、皇后の柔和なる敎育を受けられ、長じてボン大學で、政治學を研究された。皇帝に似て、賢明であるが、皇帝ほど多方趣味はなく、また突飛な行に出でられるとはないやうである。曾つて米國少女を愛されたと傳へられたとがあつたが、恐らくは根據の無い噂であらうと思ふ。

妃として昨年九月定められたのは、聯邦メクレンブルヒ、シユウエリンの大公フリードリヒ、フランツ四世の公女セシーレ姫である(一八八六年生)結婚式は本

年六月擧行せらるゝ筈で、我が帝室からは、有栖川宮殿下が祝賀のため伯林にお出になる事になつた。

塵影

田口掬汀

▼雪の朝

暮も二十七日といふ一年の瀬戸際に、苟めの病に犯されて高輪の僑居に臥つた、剩すところ僅に四日、雙手の指にも折り足らぬ短時日の中に、過去一年に擔ひ來つた重荷を下さねばならぬ仕誼、血が沸き胸が跳るけれど此大敵に勝たれはせぬ、已むなく觀念の眼を瞑り身をば、重い蓐に壓へつけた或日の朝

戸を繰る音に愕き覺むれば室内異樣に明るく、隙漏る風の領に入るのが、例時に變る寒さである、硝子障子越しに見上ぐる前庭の梢、庭木の梢を透して見える御殿山の木立、左右に建並ぶ家々の家根など、一樣に白いものを被つて、素鼠色の雲低う都の空を壓へて居た、昨宵の雨の音を絶つたのは、さてこそ今朝の雪であつたか……吹雪の中に育てる身ながら長く都に住慣れては、流石に見惚るゝ眺めである。

双肱に身を支えて靜に頭を擡ぐる途端、喩へば數多の人の調子を揃へて、疊など叩くやうな物の音、怪しみて眼を向ける左手の坂より、雪崩の落ちる勢も、斯くやとばかり、ドッと落し來る物こそあれ、自分は愕然として夜具を撥ね、急しく起直つて眼を瞠る。

見よ！ 一樣に外套の前を摘んで控銃に挾み、肱を左右の脇肋に、拳を乳の横に支えたる黄帽隊の健兒團一隊の數凡そ三十五六人、四五間ばかり間を隔きて驀然に坂を下る、彼等は此雪の朝を機會に驅足演習に出たのである。

いづれも泥濘の飛沫を早く背に浴びて、腰より下は褐色に染められて居る、低い雲はチラ〲と白いものを零した、自分の眼は次第に霞んで熱い雫が頬を流れる。

あゝ此一團の健兒をして、江東堤上の雪を踏ましめ

ぬかは、時に取つての遺憾であると自分は思ふた、羹を吹き暖酒を呷つて、似而非風流の觀雪に耽る輩は更なり、厚き衾に朝寢の夢を裹むものゝ、此凄壯の光景に接するならば如何な感じを起すであらう、よく其手にせる盃を保ち、平然として衾を被ぐを得るだらうか

思へ！　軍旅の前には貴賤貧富の隔てがない、彼等の中には病める父母妻子を有てるものもあらう錦の褥に坐つて居らるゝ者もあらう、さま〴〵の身分階級も皆一樣の軍隊生活、たゞ皇軍の花と散らん覺悟の外何の思ひがあらうや。



卒業式（二）ドギマギしてはいけませんよ

之しきの病氣で臥ては居られぬ、……自分は涙を拂つて夜具を撥た、外は彌か上に降り頻る雪の巷、泥濘路を驅行く兵士の足音は、遠く夢のやうに消えて行く。

▼趣味增進の一法

智識を草木の幹に喩ふるならば、趣味は其根と見るべきもの、人は幹によつて立ち根によつて活くる、自分は智識に活きて趣味に終るべく希望する。

蜜蜂の蜜を蓄へるやうに、徒らに智識を吸ふものは愚かである、蟻の大野を彷徨が如く限りなく學の博からん事を要むるも亦愚の極である、智識に彩あり學問

に光あらしむるものは、たゞ之を用ゆる力の如何に存するではないか、而して此力を最も光りある方面に發揮せしむるものは、實に趣味現顯の深淺厚薄に依るでないか、更めて言ふ、自分は智識に活きて趣味に死すべく望むのである。

自分が茲に述やうとするのは、其多くの趣味の中で一般家庭の趣味と云ふに就いてゞある、花を活けるもよし茶を點ずるもよし、音曲の技、割烹の嗜み、いづれの家庭にもなくて叶はぬものであるが、其は裕かなる生活をする人にこそ望まるべけれ、一般家庭の趣味增進法（若くは保全法）としては稍狹きに失する憾みがある、自分は如何なる階級、如何なる社會にも共通して、平等に味はひ得べき趣味增進の一法として、夜間讀書の風習を盛んにすを望むのである。

維新以前の社會には能く此風習が行はれた者であるいや現に地方の農家などには未だ此美風が殘つて居る家族一同其日の働きを終へて、燈火を圍んで團欒の席に就けば、父老は美しき物語の書を披いて、節面白く讀み聞かせる、太閤記もあらう三國誌もあらう、とり〴〵に傳はる稗史小說の類が、斯くして盡日の勞を慰むる便となり、何時とはなしに智識と趣味とを增さしむる力となるのである。

しかし新たなる智識を要めて已まぬ今の世には、太閤記や三國誌や、甲越軍記漢楚軍談などは固より恰好の讀物とならぬ、ので、時代に接觸したる美術品でなければならぬのは言ふまでもない、人の精氣を亢奮せしめ、意志を堅實ならしむる力があつて、而して十分に娛樂の用に供し得る讀物を執つて、一家の徒然を慰むるの料としたならば、何れ程趣味が增して行くであらう、智識の拓け行くに伴れて、次第に趣味の減じ行く今の家庭には、必ず此風習を盛んにすべき必要がある、夜間讀書の風習は、沙漠の如き日本の家庭にオーシスを造り出す至大の力である、而して自分は、此重大な役目……一家の趣味を保ち行く役目……を主婦に勤めて貰ひ度いと思ふのである。

茲に一つ注意せねばならぬのは、汚穢なる戀愛の描

寫をなせる小說、反道德主義を現はせる小說等を、過つても手にせぬやうに用心すべきことである若し此種の物に手を觸れるが最後、激甚たる毒分は、直ちに一家の趣味を腐らせて仕舞ふであらう。

▼一家を保つ資格なき者

劇場、寄席、宴會は勿論、凡そ稠人廣座の場で。

盛んに洋語を振り廻す女。

卷煙草を燻らす女。

悲しき音樂、悲しき芝居を見て、涙一滴眼に有たぬ女。

自分は斯種の婦人を以て一家の主婦たる資格なきものと信じて居る。



卒業式（二） 早くリンが鳴ればいゝのね

徒らに意志の堅實を誇ることなかれ、快活を以て萬事を律するなかれ、泣く可き時に泣かぬ者は、心の機關に不備の箇處があるからである。

美しき感情は婦人の生命なるを知らざるか。

▼感謝の淚

十月下旬のある日の夕暮、自分は上り最終の汽車に乘つて水戸を出發した。大洗の濱に晩れ行く秋の面影を探れる、其歸途のこと。

發車五分前の鈴の音が、消魂ましく入口に響き始め

た時、急がはしく扉を排して入り來る一人の兵士があつた、後に續いた若き女は妻であらう、當才と見える嬰兒を背負つて居た。

軍服を纏ふた男の身分は、何と讀むべく術もないが瓦斯縞の綿入に同じ絣の羽織を引被けた女の扮裝から推測れば、裕かな人とは受取りにくいので。

攜へたる小革鞄蝙蝠傘など網棚に乘せて、自分の前面に腰を下す途端、後方に高々と呼子笛の音、續いて複線の軌道を隔つた彼方のプラットホームに萬歲連呼の聲が起つた、兵士は頭を窓に出して帽を振つた、後備召集に應ずる身の上とは、其年輩に知らるゝのである。

汽車は徐ろに闇を裂いて動き出す。

速力次第に加はつて、建物の影、家々の燈火する〳〵と後方に逃げ、信號燈もやがて闇に隱れる、兵士は崩るゝやうに腰を下して、妻の面を一瞥したが、腕を拱んで眼を閉ぢた、妻も頭を俛れて溜息吐く。

斯る事態は敢て珍らしいことではないが、今親しく之を目にしては、流石に物のあはれを感せずに居られはせぬ。自分は心の中にさま〴〵の物影を描いて居た幾多の燈火人影後に飛んで、初更を過ぐる比ひ、汽車は土浦の停車場に着した。

夜更の事とて乘降の客も多くない、兵士は立上りざま妻の手を執つた。

「ぢや此處で別れる、伯母さんに宜しく言つて呉よ。」

「もう少し……東京まで送つて行たいけれど……」と妻は兵士の顏を視詰めて、「しばらく逢はれないんだから、切めて東京まで行つて而して……。」

「いや」と兵士は遮つた、「然うしちや却つて別れ惡くなる、今夜は伯母さんの許に泊つて、明朝早く歸つて行け。」

妻は面を落した。

「それから何度も言ふやうだが、不在中の事は宜しく賴むぜ。」

「あゝ！　私も戰爭に行つた心で、精々と働いて居ますからね、お前さんも身を大切にして達者で歸つて下

さいよ。』

あゝ戰爭に行つた心で働く〳〵！　何たる健氣な心であらう、之でこそ出て行くものも心通りの働きが出來るといふものだ、自分は心の中に掌を合して未知の婦人に感謝した。

折しも發車報知の鈴の音、急き立てられて女は悄然として車室を出た、兵士は扉口に立つてジッと視送る車掌は遠慮もなく扉を締める。

「お前さん！」と妻は又窓の下に寄つた、「どうか熱く此子の顔を見て行つて下さい。」

兵士は手を伸べて眠れる子の頭を撫で。



卒業式（三）　何だか胸がドキ〳〵する

「坊主達者で育てよ。」

横さまに火光を浴びる夫妻の頬に、光ものキラ〳〵と流れて落ちた、後の方には早や發車の圖合の笛が鳴る。

汽車は靜に動き始めた、兵士は車窓に靠れてプラットホームを振顧る。

自分の眼には涙が一ぱいになつた。

戰爭に勝てるのは慥に女が強い爲だ、兵士ばかりが強くとも、後に殘る者が弱かつたら如何して勝利が得られやうぞ、自分は其後、戰勝の報に接する毎に、此未知の一婦人の身の上を思はぬことはない。

戰爭の跡

生田葵山

乾坤只一様に白皚々、見渡す限りの平野の間に、所々彈丸の飛び行く響が、實に物凄まじい響を立てゝ居る殊更に凍り付いた一路を選んだ歩兵隊の一軍は、砲兵隊を後に從へて、緩漫い歩調で以て進んで行くが、何となく其の様子が陰氣で、不景氣で、一體に恐怖の心を抱いて居るげに見えるのであつた。

戰は瞬時の内に初まるであらう。

兵士は二度、三度、石に躓き、丸木の切株に足を痛める、彼等は頭を低く垂れ、眼を足の爪先に向けて歩を運ぶ、無論寒氣は恐ろしい程強いので、間斷なしに一同は胴震ひして居るのである。其れが爲めに銃は總て肩に懸けられ、兩手は丁度あの婦人の用ゆるマッフのやうに、用意の毛布の中へ差入れた儘に動かさぬ。恁うした中にも時々兵士の口から洩れる言葉は、

『休みたいなあ。』

と、云ふ叫ばかりびであつた。

馬の一隊は矢張恐怖を感じてゞあらう。かはる〳〵に嘶くのである。彈藥其の他の軍器兵糧を滿載した幾十輛の車は、本隊とは少許離れて、其の轍を雪中に軋らせて居る、砲兵等は、皆其の身體を砲車の上へ乘せて了つて、ブルケットの方へと徐々として進行して行くのである。

『そら、あの建築物――あれだらう。君には見えるかい、奈何だい。』

歩兵の先鋒隊から俄に這麼聲が上つたが、其れは小隊附きの一少尉であつた。彼は凍えて骨迄も痛みを覺え指の尖が千切れさうに思はるゝ兩足をば、力に任して地面を幾度も踏み付けるのである。恁る雪中を進軍する兵が、足部の温味を取回さうとするには、是非共恁うした手段に依らねばならないからで。

『見えたか、遙に見えるだらう。さあ今一息だ勇を鼓して進む可しだ。』

かく云ひ〳〵彼は其の喇叭手に吹奏を命じた。すると

喇叭手は凍えた手を毛布の間から拔出し、息も切れんばかりの勢で以て吹き初めた。何たる凄絶な光景であらう。彼等はもと人の子、人の親、そして御國の爲めと云ふ美しい感情に動いて此の雪中にあらん限りの難苦を甞めつゝある。家にある若い妻、幼き愛兒、老いたる父母、此の時、此の瞬時、互に其の心は何處に飛んで居るであらう。

喇叭は瀏喨となり初めた。其れと同時に、今の今迄疲勞し、失心して居た軍隊は、忽ち一種の靈感に觸れたもの〻樣に、全軍の隅から隅迄――先鋒隊の兵士の擔いだ銃の筒先から、



卒業式（四）今日こそ威張れるわ

後軍に並んだ砲車を曳く馬の蹄の其れに到る迄も、見違へる程の活氣が生じて來て、前進の步調も自ら亂れず、雪を蹴つて行く靴音がいと心地よく聞えるのである。喇叭は撓まず吹き續けられた。軍隊の足のはかどりと云ふものは、其れは非常であつた。もの〻三拾分も經つたかと思ふ頃には、早やオーバアビリヤー城塞がありありと眼眸に這入つて來た。

あ〻もう夜は明け放れた。薄く白んだ寒空の裾の方に當つて、重々しい太陽の姿が少しづ〻顯はれて來たのである。不圖見あげると、かの城塞の横手に小さき人

の群が、ありく＼と見えた。其れは誰あらう。此の地方の知事と、其れから其の幕僚との群であつた。彼等は夜雪を冒して、此處迄も出張つて、我が軍隊の至るのを待ちつゝあつたので、事實此の寒さに冱え、勇氣と離れた兵士を、温き手で以て慰勞はんとする篤志の人々であつたのである。

段々と近寄つて行くと、枯木に烏が佇まつて居る樣に黑くなつて、雪中に目立つたのは、黑衣を着けた婦人達で、芳ばしき愛の使命者！他の群同樣に、地位も高く、身分もありながら、下婢の如く自ら自身を使役して、炊事、衞生、看護の任にあたる可く本隊を迎へて居たのである。

一度は凍死せんかとも思はれた此の軍、漸く喇叭の吹奏に依つて辛くも其の勇氣を復活せしめたと云ふ哀れな兵士は、こゝに思ひも懸けぬ慈惠の光りに接して、甚麼に喜んだであらう。彼等一同の眼底には、嬉れし涙がきらく＼と輝いた。其れと同時に黑衣の婦人達の眼にも、美くしい白露が宿つて居た。彼等の夫、彼等の愛兒も、矢張りまだ御國の爲めに出陣して、斯かる憂目に逢つて居るのであらう。婦人達が兵士の傷ましき姿を見て、直に自分の夫の上、愛兒の上を想つたにしても、敢て咎む可き樣はない。人心の其れは是非共然ある可き事である。

全軍はこゝに不足ながらも手厚き歡迎を得て、復活の元氣を得たのであつた。段々樣子を聞いて見ると、婦人等の目の淚に就いて、更に一つの理由を得た。と云ふのは、彼等の家の大部分＝知事の官邸を初めとして、主なる建物は、既にもう敵軍の爲めに荒らされて居たので、彼等は歸るに家庭が無い。彼等一同は家庭を戶外に置かねばならない樣な仕儀となつて居たのである。

『それはもう御覽の通り、慘憺な有樣であるです。田舍の事で、急速に武裝を施す餘地もなくて……。』

知事は指揮官に恁う話し爲て居た。自分は荒廢後の村の光景に耳目を貸して居たが、實に慘狀を極めたものであつた。棟を並べた人家、戶は悉く破壞され、屋根

迄がめくられてある。窓の硝子は云ふ迄も無く、雨除けの戸迄も打壞されて、屋内がすつかり見え透いて居る。自分には何となく其の態度が、恨みを帶びた死骸の眼の樣に見えたのであつた。時々打崩された人家が不思議な響を猶も傳へて居る樣で、其の度毎に地響がするらしい。

丁度正午の頃であつた。自分は恁うした恐ろしい破れ家の一つに、何心なく這入つて見た。家財家具は一體奈何したのであらう。只の一つも見當らぬ。屋内はまるで荒野の樣で、一見して凄慘の氣に打たれて了つた。窓の無い、戸の

卒業式（五）ドレお見せ



ない大きな料理部屋の板敷の床が、暗中に見えて居たが、食に饑えた敵兵が、甚麽に食物を荒して往つたか樣子で知れる。其れから庭へ出て見ると、格好の捨石があるので、自分は其れに腰を懸け、さうして四邊の光景を見廻したが一種の感に打たれて、嘆せられた。

何も知らぬ氣な太陽は、矢張愉快げな光を此の廢屋の內に垂れて居るのである。不圖見ると、其處に泥塗れになつた五六本の國旗が捨てられて居た。柄は折れ、布は千切れて如何にも哀れな風情を止めて居る。あゝ此の三色旗。この

三色旗が再びあの伯林城外の風に飄る時があるなればゞ、其れは一體何時の事であらう……などゝ思ひつゝ傍の切爐へと目を配ると、あゝ驚く可し、見るも身の毛が戰慄つ程の鮮血が一面—これは正しく昨夜の悲慘な出來事を物語つて居るのである。　（ドーデ）

陣中の生活

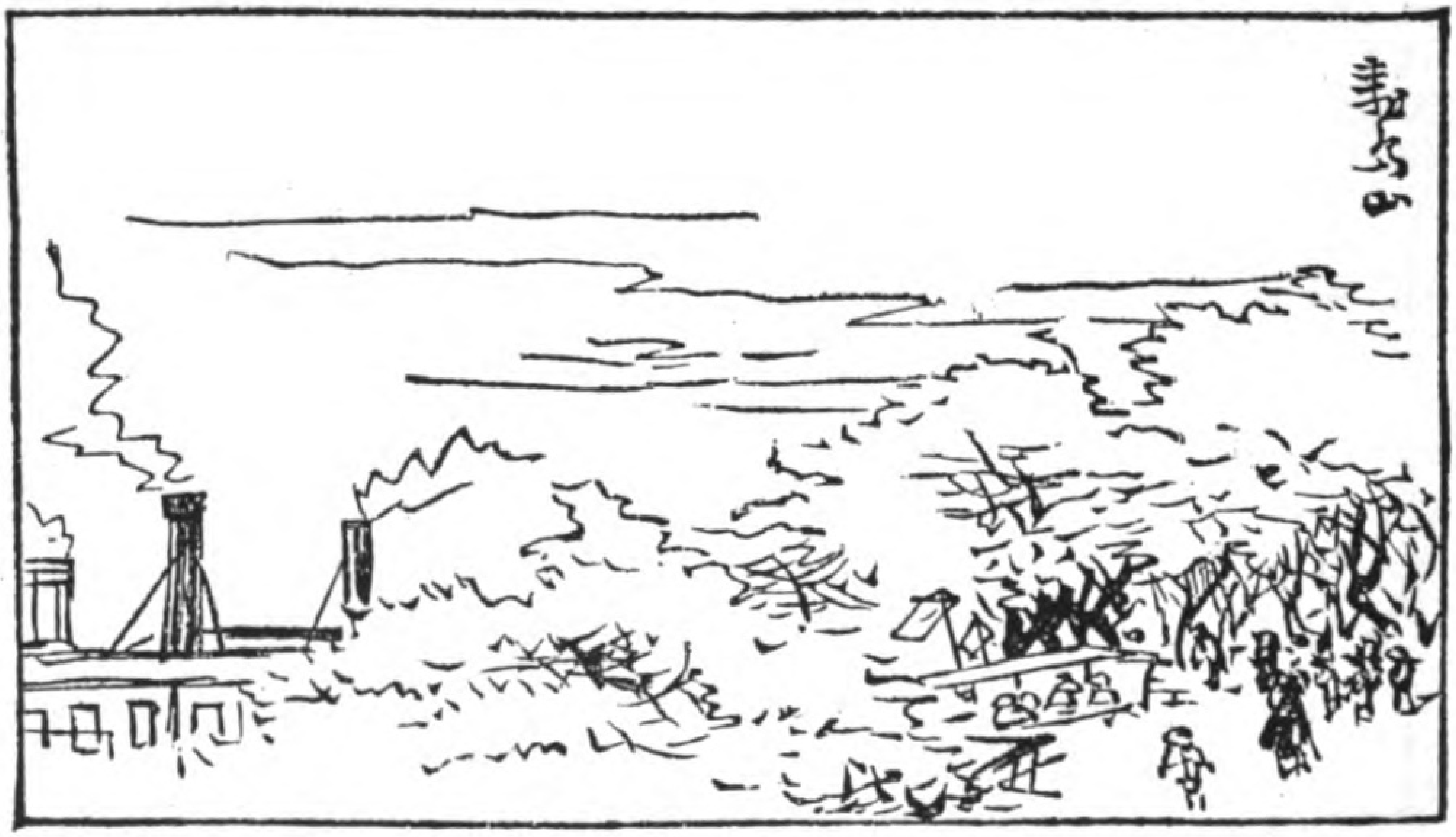
在滿洲　友金豊之助

出征軍人の生活中衣食に關する項は前號に於て粗ぼ申して置きましたが、これから住の方を少しく申上ます家は最上等が、支那家、最下等が土窟でそして其土窟は高粱がらにて天井を蔽ひ、土をかぶせて作つたもので中々温かです、疊は支那製のアンペラを上敷として下に藁かますを敷き火鉢はチャンの瓶を割り上部を土にいけ、コン爐の如く下に口を付けて作ります、一寸よろしいものです、夜寢る時は無論ふとんは有りませぬ、各自携帶の毛布と外に寄贈毛布を重ねて敷き其上に各自の防寒外套、又は携帶天幕などを乘せかけ、毛布一枚下に殘る樣にして其内にもぐり込み、寢る事として居ります、寒い時には其毛布や外套に口の當る所は日々、氷が付きます、其れは人々の口の湯氣の爲で有ります、然しいくら寒い時にも體は寒くは有りません、なにしろ七疊敷位の間に十五六人も押し詰りまする故、中に挾まつた者はびり〱動きも出來ず、まるで人間の押しずしの樣で有ります、それゆゑ體の温かさなか〱大したものです、中には汗を出して居るものも有ります、風呂も水の不自由なる所では毎日入る譯にもまゐりませぬが、十二三日目か半月位に入れます、其れは支那の瓶を持ち來り、其れをすゑて、其傍にて鍋に湯を沸し、かめに入り浴槽即ち其甕です、小隊交番にてたき、浴する事にして居りますが、水の無い時は河に行き、氷を碎き、其れを釜で溶して用ひます、其苦勢は一通で有りませぬ、然し其風呂も大勢の者が浴る事故緩くりとは浴れません。

手のよごれるのは誠に困ります、物が不自由勝ち故、

何によらず手にて物をさわるから手の汚れる事は非常で其を洗ふも水が冷い故洗はずその上寒氣の爲めに手が荒れると來るからまるで熊の樣で有ります、僅かに戰友より石鹸を借り込み洗うてやつとの事で落すと又すぐよごれる、困たもので有ります、薪はきびがら。きびがらが無くなるとそろ〳〵各小隊毎で薪採りが始まります、何處此處と各々斧關節鋸などを携へ河邊に來り木（柳の類）を伐り採り、持ち歸り、割りて用ひますが寒氣の爲め木もことごとく、凍てなか〳〵、乾く時はありませぬ。

さて又かゝる陣中生活の世たい道具は何にかと申せば鐵瓶は粉味噌の空鑵、茶鍋は支那人の洗面器、箸は手



製の柳の木、又は、きびがら、茶碗は牛肉の空鑵、洋燈も同じ空鑵に穴を開け紙捻を通したもの、揃ひも揃つた鑵詰しです。

こう云ふ有樣の中で、平氣の平座で、爐りをとりまき歌廻し、柳けん、じやんけん、とう八など云ひさわぎ暮して居ります、其愉快さ全く世の中を忘れて實に無邪氣なもので有ります、然し第一線に居るものはさう云ふ譯にはまゐりませぬ、毎日前哨勤務に餘念ありませぬ。衣食住の事は此れ位として第一番の樂しみを申し上げませう、先づ郷里よりの手紙、寄贈品、恤兵品などで、郷里より來る手紙を待つことはなか〳〵鶴の首どころで有りませぬ、中隊本部より書簡

の分配有る時は皆総立ちとなり、我れへの手紙はなかつたかと鵜の目、鷹の目、無き時の落膽、一通りで有りませぬ。寄贈品は毛布、靴下、手袋などで、ことに靴下手袋などは嬉しく有ります、恤兵品は菓子、繪はがき、巻煙草などにて、繪はがき最も結構であります、又郷里より手袋、靴下、はがきなど送られし時の嬉しさ格別で。先づ是位として私は歩兵のこと故乗れる者などは知りませぬが、皆大同小異で有ります乗れる人は馬の世話が御苦勞です。

將校方は追々送品を送る事が出來ますが、下士卒には其許が有りませぬ故、もし送りたき品が有りますならば狀袋の内に手袋ならば片手づゝ入れ、二個と成し送るとか又は綿などならば細かく折り、狀袋に入れ、一見書簡の樣になし、郵税は第一種郵便物の税にならひ切手を用ひて送られたらば屆きます、すべて戰地へは第一種郵便物で無ければなりませぬ、然し近頃防寒品に限り出征者に送るに郵税は不要とか、云ふ事を聞きましたが、其實否は知りませぬ、それは郵便局で聞かれたならば明ります。

寒いに就けて先づ梨子、みかん、卵子など給はりました時のはなし。

梨は全體に凍り、なか／＼齒には嚙ぢる事は出來ませぬ、嚙だならば齒がうづえ、丸でアイスクリムの樣な味が致ます、火にあぶり食ひますと皮を爪にてむく事が出き、汁が多くて、美味で有ります。

卵も煮てあるものかと皮を採りましたならば黄々堅まりすき通て居ります、よく／＼見れば生で有ります、滿州では生卵子をつきあて又は落しても、汁が出ることが有りませぬ。

蜜柑も凍つて木で作つたものゝごとく、打てばカチン／＼と音を發します、火にあぶり食べますが、にがく有ります。

田中宮相夫人

交際社會の大達物たる田中宮内大臣夫人伊與子の方の

社交的慈善的兩方面に盡されし働の多大なりしは說かずもがな、實に其の淑德は上流婦人の模範と仰がれ、其の活動は貴婦人社會の先達とするに足り、功勞男子を凌ぐものあるに至りては、轉た敬慕の念に堪へず、斯かる婦人の上流に在るは、皓々たる明月を中天に仰ぎたらん心地して、我が婦人社會の爲めに、竊かに心を强うする次第なりき。

然るに哀しい哉、天は傑才に壽を假さず、夫人には豫て腎臟炎を患ひ玉ひ、療養中と聞及びしに、藥石も効なく、看護も力及ばずして遂に去ぬる三月三日の午後七時と云ふに、歿り玉ひにけり、御年五十二歲、なほ夫人の力に待つべき



もの多々ありしに、忽として此世を去られし事、言ふ許もなく哀し。夫人を知と知らぬとに拘はらず、孰れも其の永逝を傷み、殊にそが慈愛の手に觸れし族らは、痛く悼み惜みて、宛ら天使を失ひたらん如かりしと。

されば畏き邊にても夫人の逝去を聞召すや、生前慈善事業に盡されし功勞を思召されて、勳四等に叙せられ六日祭粢料金五百圓の御下賜あり、尙ほ勅使を差遣はされて幣帛を賜る、誠に有難き事共なり。

今夫人生前の英姿を偲ぶの餘り、うるはしき生涯に於ける逸事の二三を記さんに、夫人は土佐國佐川の領主深尾鼎氏の三女にして、嘉永四年十月十九日を以て生れ、明

治九年今の宮內大臣子爵田中光顯氏に嫁がれしが、其頃田中子は深尾家の家臣にて良人とは正に主從の間柄なりき、斯れど夫人は人と爲り淑德溫厚の方とて身分を誇るの風なく、加之も慈惠の心に富み、その言行も趣味も平民的の質素を旨とし、世の常に貴婦人者流の如くに萬づに華奢を好むの風とては更にあらず是によりて子爵とは意氣相投合して琴瑟相和し、良人榮達の後も、ありし昔の質素の家風を壞さずして、淡泊に振舞ひ玉ひし由。

家庭に於ける夫人は實に斯の如し、なほ其の社會に於ける夫人を見るに及んでは、愈々夫人の美德に感服せざるを得ず、乃ち深く公共事業に心を寄せられ、日清戰役の時の如きは、眞先に赤十字社篤志看護婦として傷病者の慰撫に努め、而もその愛は敵の捕虜患者にまで及びて等しく劬はり玉ひしには、見る人感せぬはなかりしと、夫人は又た社交の才に長け玉ひ、貴族社會の交際場裡には夫人を大達物と推重するの觀ありき夫人は佛陀を信ずるの人なりき、されば大慈大悲的の慈善は自ら養はれて、麗しき行ひ少からず、夫人が親しく慈善の目を掛けられたる中には、隨分人の知らざるもの多く、且つ尋常婦人の能く進み得ざる境に迄進み入るを敢てし玉ひき、彼の原胤昭氏の設立に係る出獄人保護會に對する同情の如き、金品の施與は勿論、並大抵の婦人の近くをさへ厭ふ是等刑餘の惡漢の面前に親しく臨みて、懇々と訓戒する所あり、又た目黑の慰廢院は人の嫌がる癩病患者を收容せる所なるが、これにも多大の同情を寄せて、屢々同院を訪問し、具に患者の病苦を慰め玉ひしとぞ、故に是等兩所の者の如きは、夫人を佛陀の化神とも崇めて、その仁德に感謝を表せし程なれば、今回圖らずも夫人の訃を聞きては哀悼時を久したりと云ふ、さもありぬべき事なり。

嗚呼三月七日！此日は夫人の柩が人の涙によつて送らるゝの日なりき、同日午後一時麴町區一番町の官邸を出棺し、音羽護國寺に於て葬儀執行の由聞えければ記者は生前夫人の愛顧を蒙りたる「女學世界」を代表して會葬すべく、護國寺に走せ參じぬ。

音羽の通りは、此時既に先供の會葬者の俥を驅るあり馬車を走らすあり其の後よりは白帳着たる人足の眞榊抱へて行くに、沿道の人々葬儀今や來ると店前に立つも多かりき、山門前の廣場には數百の車輛、轍を連ねて控へ門の入口には葬儀係の人の机を据えて、會葬者の氏名を一々記し止むるあり、之に名刺を呈して門を入れば、左は眞言宗眞義派豐山中學校の通用門、右は寺寮こゝは當日會葬者の休憩所に宛てあり、進むこと十數歩にして石段を登れば仁王尊の像嚴然と立たせ玉ひ、敷石の道を挾んで各皇族方、桂首相、山縣伯、岩崎家、愛國婦人會、歌道獎勵會等より寄贈の眞榊の左右に置かれたるを見る、正面の大伽藍は是ぞ本堂にし



て、常なれば内陣に金佛燦然として飾られあるべきに、今日の葬儀の神道式を以て營まるゝ事とて鼠色の幕を以て之を覆ひ、其の前に齋壇をしつらひあり。

境内を見巡るに、シルク帽子の人、袴の人、黑の洋服着たる婦人、黑紋付の婦人、毛皮の襟のマンテル着たる西洋人、黑の覆面掛たる西洋婦人など、そこかしこに群を成して着棺を待ち搆へたるが、何れも禮裝正しく着こなして、威儀堂々、しかつめらしくぞ見えたりける。

待つこと久時、二時を過ぐる頃、山門のあなたより喨々たる雅樂の響先づ聞ゆる間もなく、白旗を眞先に、眞榊來り、唐櫃來り、銘旗來り、伶人來り、根越榊來り、次に清國、獨

乙、白耳義、葡萄牙の各國公使より贈りたる生花、各宮殿下より御贈供の榊、赤十字社有功章、勳四等寶冠章を捧持したる者、續いて白衣の輿丁に舁がれたる正木の柩、あゝ敬愛すべき其人はしも其の箱にこそいませと思へば、自ら頭の俯向くを覺えき、其の後よりは喪主、家從、親族の方々及び會葬の人々徐歩にて肅々と進み來れるが、石段を一つ一つ登る其の歩調の自然に揃ふも有繫は高貴の人の會葬なれや。

かくて棺の堂内に着するや、奏樂の聲靜かに起ると共に柩を壇上に安置し、齋員の神饌捧供あり、折しも神祠たる境内の松杉空に聳えて、あたり淋しき豐島ヶ岡の、風も音なく、鳥も聲なく、默々として靜りし所、齋主が莊重の音調を以て讀上る祝詞の聲の朗々と響きぬ堂内堂外に溢れたる會葬者は、皆な聲を吞んで心に最後の別辭を陳ぶるものゝ如し、終つて各皇族方の御代拜あり、喪主始め親族、知人、其他一般會葬者は順次に靈前に進みて玉串を捧げ、午後四時、全く式を畢りたり。

葬儀は實に莊重のものなりき、會葬者は内外の貴紳無慮千餘名を算する程の盛葬は、有繫に夫人の德の高ければなるべし、生前、愛國婦人會、特志看護夫會、其他の夫人會に盡力され女性の敬慕を集めたる人なれば定めし婦人の會葬者多かるべしと豫期せしに、其の案外少きには驚きぬ、是れ日本婦人が何事も男子に讓りて蟄居を善とする弊習によるべきか、何にしても最う少し婦人の供が有りて欲しかりしなど思ひて、雪崩れ出づる會葬者の後より記者は山門を出でぬ。

見返れば境内の鉾杉はとことはに綠の色を湛へて永遠に墓邊の友を誓ふものゝ如く、風に點頭いて我等を見送りつゝあり。（舟人）

▲はがき新誌　繪葉書に一旗幟を立てたる加野便利堂より發行する文學雜誌なり、文學技藝を詳的に紹介するを目的とし、美術的の趣味に富み體裁も仲々瀟洒なり、定價金拾錢。



詞藻

塚越停春撰

（天）春の歌の中に　　津市西新町横濱方　永田妙子

流れ行く小川に畫の月見えて
　堤のほとり櫻散るなり

評。何等の美はしき歌ぞ、何等の自然なる歌ぞ、瞬目の景を賦して、畫も且及ばず。

（地）春の歌の中に　　河内北河内郡山田村　竹内敬子

濡れ鳩の翼やすむる山門に
　雨脚細く櫻花散る

評。亦瞬目の景を賦して極めて自然なるもの、春雨寂々の狀、目睹るが如し。

（人）朧夜　　兵庫縣姫路病院内　藤本絹子

高樓の琴のしらべのかつたへて
　朧ながらの夜はふけにけり

評、此時此景、多恨の客を悵殺せしむる知らず幾許。「朧ながら」の一句殊に妙。

秀逸

、○○逸題　　駿河大宮　菊池武子

青柳の絲たれこめし丸窓に
　琴の音低し雨の夕暮

内に思婦あり春闌なんとするを悵むるや知るべし。

、○○梅　　山梨縣東山梨郡松里村　小林まつ子

には鳥の聲もきこえて水車
　めぐる川邊に梅の花咲く

宛として陶詩を讀むの心地す。

○○逸題　　伊勢宇治中ノ切　白汀女史

乙女ふみてあはれ破壊れし盤の棲
　成らず牛を汐みち來る

奇趣奇想、此くの如き景趣を詩にするの手腕、自ら凡ならざるを見る。

、○○沙河　　陸前遠田郡小牛田村七十八番地　山田はなを

一騎二騎二騎又三騎四騎五騎六騎
　十騎おくれて日は傾けり

「おくれて日は傾けり」の一語、自ら千萬無量の感慨を含む。

、○○春野夕暮　　群馬　すみれ

土筆つむ小女のむれもいそぐなり
　花ちる里の春の夕暮

春暮の意、十分に見えたり。
人生愁の何たるを知らざる少女の一群さへ猶且つ急ぐ。他は則ち知るべきのみ。

○○春雨　　香川　房子

すみれつむ乙女も見えず蝶飛ばず
　春雨降りて野は暮れんとす

春暮の淋しさ察するに餘りあり。

、○○水郷霞　　大和　安田ゑみ子

舟歌の聲はかすかに聞えつゝ
　霞に暮るゝ川添の里

亦得易からざる歌也。水郷の春の暮は、さもこそと思はる。

○○逸題　　芝　鈴木まき子

櫻さく木の下かげのうば車
　ねぶれる乳兒に花散りかゝる

畫にしたき歌也。

○○春浦　　橫濱市蓬萊町三ノ三七加藤だま方　三島洋子

春の日のあそびの浦のさくらたひ
　かゝれるあみやかすみなるらん

稍俳諧歌の趣あれど、面白き歌と謂ふべし。
山家集になどありさうな歌也。

○○逸題　　下野小山町　新井琴子

さりげなく涙かくして言はずきかず
　別れて三年思出多き

上の句最も妙。

○○軍人の心を思ひて　　兵庫縣川邊郡尼崎町正恩寺　粉川一枝子

お父さんぼくも大きくなつたらと
　見送る稚兒を今ふり捨てゝ

萬葉歌人の歌を讀む思あり。情至る所、語の便なるを厭はず。

、○○惜春　　青森市米町一三五　中西恭一郎

散りぬればまた此の春も暮るゝらし
　散りぬる花の惜しきのみかは

然り、散りぬる花の惜しきのみかは。

○○逸題　　姫路　船戸ゆき子

手折りなば訪ひ來る人や恨まゝし
　香をのみつとにせんよしもがな

想ひやり多き歌也。

○○春夕雨　　大阪西區京町堀上通三丁目長里内　柳原榮子

つれ〳〵のながめはいとぞ秋よりも
　淋しさまさる春の夕暮

着想人に同じからず、自ら一種の風骨を見る。

○○旅宿春雨　　赤阪榎坂町四金生堂内　葉山しげ子

音もせぬ春の雨夜のつれ〳〵に
　またくりかへす故郷の文

眷く旅愪を歌ひたるもの。

○○遠山霞　　明石町　粟飯原よね子

佐穂姫の筆のすさひかひとはけの
　霞たなびく春の遠山

遠山の霞を佐穂姫の筆一抹と見立てたる面白し。

ゝ○春のうた　　香川縣丸龜市南條町吉田方　横田つる

馬ひきてかへる太作がやれ笠に
　こぼれてあかき姫桃の花

大作！姫桃！好笑好笑。

○○逸題　　栃木縣下都賀郡瑞穂村下高島　桑野玉子

夫まさば夫だにまさば月の下
　花のうたけのなどうかるへき

眷愪何ぞ深き。

ゝ○逸題　　伊豆國田方郡上狩野村　古見彩子

家あとの一本小桃花さきて
　雛に手向けし昔しぬばゆ

ゝ○落花　　香川縣丸龜市　前田喜美子

武士か駒とむあたり風さへて
　たてかみ白う山櫻散る

ゝ○逸題　　信濃國長野市妻科一〇一　小岩井なみ子

巡禮の子のうた悲し夕風に
　梅の花散る柴垣のそと

ゝ○春月　　東京市赤阪丹後町四倉富方　木下はな

門付の町をまかりて流し行く
　絲の音かすむ春の夜の月

ゝ○梅　　芝白金臺町二ノ五二　松村路久子

川添の里のはやしの梅咲きて
　霞にこもる舟歌の聲

ゝ○江の島に遊ひける折よめる　　京都富小路二條下佐久間方　佐久間律

もゝとせも住まばやと思ふ江の島の
　岸をはなるゝ浪もありけり

ゝ○逸題　　神奈川縣鶴見　吉川みつ子

麥の穗の見えつかくれつ鈴菜つむ
　乙女や蝶の心なるらん

○逸題　攝津三島郡富田村　松井たづ子

春雨に柳色濃き四條橋
　蛇の目小傘の人うつくしき

○春望　京都小川一條上ル　濱部愛子

田子の浦浪路はるかに見渡せば
　かすみに浮ぶ三保の松原

○逸題　本郷眞砂町三七　逸見みき子

若菜もえ蝶低く舞ふ野を越へて
　騎兵一團霞に入りぬ

○逸題　越前三國町　梅香

うぶすなの赤き鳥井に夕日見えて
　神代ながらの花ちりかゝる

○落花　長野市栄町廿三　中原みつゑ

似たらずや噫似たらずや散る花に
　やがてかゝらん人の命も

○逸題　長崎　岩間文子

山々はみな春かすみ立ちこめて
　心しづかに花の散るらむ

以上十三首、歌ふ所同じからず、賦する所一ならずと雖、共に好歌たるを失はず

佳調

●春季雜題　金澤　春野いさ子

寒くとも窓の戸あけてよ月清くして梅白うさく

●　上野　新井まさ子

つはものゝ馬さらせし雪の野も若草もえて春の風吹く

●　近江　馬淵波子

桃櫻菫蒲公英はなさきて野は美しう春風の吹く

●　陸前　小山田みとり

春雨にけぶる河邊の柳原兵士達の旗ひるがへる

●　麹町　齋藤園子

先かけに咲て匂ふ梅の花ゆかしきふりを友とこそせめ

●　京都　奥平歌子

百千草花は咲きたり嵯峨の野邊駒の足音に蝶亂れ飛ぶ

●　名古屋　永田曉星女史

まゝ事の手ぶりかはゆき乙女子のちごわにかざす白桃の花

●　安藝　松阪梅子

朧月夜桃さく野路に聞ゆなり馬子には惜しき馬子歌のこゑ

●　大阪　清野美子

繪にかゝん歌によまんとあこかれてさまよふ花野月になりゆく

●　大阪　田中千枝子

草かすむ野路の里川花のせて水に聲なく暮れてゆくかな

●　伊豆　古見彩子

漁りに小舟せわしき海原の暮なんとして霞棚引く

●河内　竹内敬子

去年やけし我家の跡に少女子の今日もきてつむ春の若草

●名古屋　松下露子

道問へば少女かたらず手にさげし桃の花もてひんがしを指す

●能登　池野いさみ子

聖堂の鐘に暮れ行く古ローマや足とゞむれば花散りかゝる

●大和　眞田せゐ子

咲き匂ふ梅が圃生を我がものに春つげ渡る鶯の聲

●相州　横田禎藏

きらぬだに我身を思ふちゝはゝの病の床にありと聞きなむ

●水戸　初子

さよ更けてひとり文よむ窓の戸にもの思はするはる雨のおと

●越中　靜子

玉章に籠めておくらむ去年の春ともにめでにし軒の紅梅

●四谷　木村秀子

月落ちてからす鳴なり山の端にほの〴〵しらむ春のあけぼの

●名古屋　久田英子

花はみなとく散り果てゝ鶯のまれなる聲にのこる春哉

●麻布　大島玉江

美姫多き牡丹のやかたなつかしみ老蘇孫右衛門年期乞ひする

●伊勢　海野すみ子

春立ちしけふとはいへど我庭に去年のまゝなる雪ぞ殘れる

●前橋　厚木紫子

四の國にいますいとしの兄君を忍ぶさむよにかりの一むら

●名古屋　篠田汲子

駒とめて見やる夕の雲晴せぬ十年また立つありなれの岸

●佐賀　森永柴子

馬の背にしばしまどろむつばものゝたどる步路やいづこなるらん

●名古屋　すみれ子

讀經の聲もかすかに聞えつゝ御堂のあたり櫻ちるなり

●滋賀　田中とみ子

年ごとに花の色香はかはられどめでにし君のなきぞかなしき

●和歌山　とみ子

見渡せばをちの山もと打かすみしもの古葉も春めきにけり

●大阪　榎原英野

君が手をひきては君にひかれつゝ春の花野に胡蝶を追ひぬ

●鳥取　谷口清野

さくら時の美しくさきちる時はいさぎよくちる山櫻花

●本郷　關藤千代

鶯の音を告げ來しおしたよりそゞろ日かげのおしまるゝかな

●神奈川　岩橋しな子

中垣のへだてゝあれどへだてなく匂ふとなりの梅の花かな

●岡山　笹原貞子

のき近き森の梢を住家にて朝な〳〵に鶯の聲

●武藏　小島濱子

靜閑の響勇ましく夜は明けて運河の右岸霞こめたり

●新潟　高橋きみ

今日もまた吹雪に暮れぬ常盤岡梅咲く嵯峨の君なつかしき

●三河　村越みゆき

霧かすみ彌生の空に聳ゆるは我がなつかしき古郷の山

● 牛込　峯崎いと子

嵐山の花もおぼろに明けぬとや山の端かけて月しろく落つ

● 陸中　佐藤すみれ

美しき清き水面に身をなげて胸のほのほをとはに消やさん

● 秋田　藤川ひで子

竹の影を窓にうつして動こかすは月てる夜半の風にこそあれ

● 前橋　田部井香久

國のためほまれの痛手うけたれどやたけ心はくじけざりけり

● 松山市　山崎国子

たが君に心おかるゝ花ならむ庭の椿のうつむひて咲く

● 名古屋　原田こと

外國にあらぬさくらをうつしうゑいま盛りなる奉天府かな

● 大阪　岡釜子

梅がかにつばさきよめてうぐひすは神にはつねをたてまつるらん

● 名古屋　永田加須尾

池に集ふ緋鯉眞鯉の爭ひに岸邊の桃の影さだまらぬ

● 佐倉町　治子

高殿の琴のしらべもたゆたひて庭の紅梅ひとりちるなり

● 美濃　山田愛子

身まかりし母の年にもなりにけり別れし七歳夢の世にして

● 但馬　仲村道子

いかにせんわれに歌よむ才のなく此夜此月たゞうつくしとのみ

● 横濱　寺田光子

罪科なき子の上をいひいでゝ若き妻人物思ひする

● 下谷　下田輝子

青柳のゆらるゝ方に旗見へて學の窓に萬歳の聲

● 姫路　船戸ゆき子

折りかねつ手折らぬも惜し、筆の妙に歌ひし梅の一枝

● 仙臺　生駒かの子

山深み訪ふ人もなき谷かげに一本櫻咲きみだれけり

● 新潟　内藤すいむ

春風の春を讃ずる曲ひめて小草夕のみどりかすみぬ

● 栃木　椎名みい子

月は朧いづこはしらぬ花里の迷へる道につま音ひくう

● 麹町　小島仁子

雪解けの雨冷やかに鶏なきてわら打つ音に日は暮れ行きつ

● 大阪　櫻井寅子

朝鏡とるてたゆみてうぐひすの聲に心をうつすころかな

● 牛込　吉田歷子

渚こぐ小舟に夕日てりそひて鴎三つ四つ西に飛びゆく

● 上野　今泉きよし

戰勝の祝ひむしろに侍ひておきなうまごのてがらを誇る

● 新潟　小田原花子

調ぶるは誰が家の子ぞ笛の音の身にしむばかり香る月の瀬

● 岩手　加賀敏江子

花を守る翁は縁に眠りつゝ晝靜かなり紅梅の庭

● 陸前　齋藤とよの

釣の日はいさゝ小川の蘆そよぎ流れ藻の花歌のせてゆく

● 山口　古賀友雁

咲きみちてうれしと思ふほどもなくはやちりそむる山櫻ばな

母上の初旅すがたおもはれてそゞろなかしき紫小袖 ● 越後 荻野てる子

ひあたりの南の椽にけつつと敷き小猫と遊びむつぶけふかな ● 香川 大内まさ子

波風もおとせぬ海となりにけり入重の汐路の入重にかすみて ● 美濃 田中久代

ふきかへすたもとの風はさむけれどなびく柳のすゑかすむなり ● 岩代 遠藤房子

二つ三つ馬車すぎ行く畷道小風そよ〳〵梅の花ちる ● 名古屋 永田澄子

釣も垂れ水あびもなせし故里の小川の柳今か茂げらむ ● 岐阜 坪内清枝

文を得て想出おほき月の夜を忍び調ぶる笛こほりけり ● 越後 柳原雪子

詩人が花を吊ふ文机を靜かに吹けり軽度のかぜ ● 滋賀 馬淵すゞ子

さびしさをひとしほまして憐れなり闇にきらめく沖の漁火 ● 備前 松本もと子

くしき夢さめて淋しき闇の燈や春雨のふる温泉の宿 ● 名古屋 まゝすみ

簑笠法師念くとうけ路風寒く百舌なくあたり花みだれちる ● 下野 高橋ふじ

馬ひきてあぜ道かへる賤の女のひなうたかすむ春の夕暮 ● 芝 谷村武子

すみれつむ子らもかふりし春の野にかすみていづる夕月のかげ ● 越後 花子

雨にぬれて入りし騎兵の肩うちぬ異邦へ顔の紅梅の花 ● 伊勢 はな子

おちこちの里のかすみて見ゆるまでかほりゆかしく梅の花さく ● 伊勢 妹松雪子

のどかなる春の心を山櫻いつしりそめて咲き匂ふらむ ● 近江 馬淵とし子

そゞろにも亡き兒戀しき夕暮を又もさどして春雨のふる ● 近江 石王松枝

花吹雪中にきらめく軍刀の光まばゆし北支那の春 ● 宮城 高山要子

牛ひきて歸る山路に日の暮れて松原遠し朧夜の月 ● 神奈川 野澤美枝

風の音に夢さまされて終夜君やいかにと忍ばるゝ哉 ● 岡山 泣琴しげ子

つがひどりうた暫しなき正金下り谷のひとつ家落つばきする ● 芝 武子

駒ひきて行かふ賤のうるさげにはらふもをかしあぜの青柳 ● 東京 田中千賀子

君が髪にかざせしすみれ寫さんと繪筆取たり小春日よりな ● 攝津 松井たづ子

玉虫を秘めたる箱のふたとりてある夜ものしぬ君戀ふる歌 ● 佐倉 平田鈴子

消え殘る雪間たづれて里の子がむれつゝ野邊にわかな摘なり

● 伊勢　澤野澄子

なか〳〵に名さえかずさえわかぬまでとり〳〵植えし花の園かな

● 栃木　光子

朝日さす二荒の山の雪見れば春のいたらぬ心地こそすれ

● 仙臺　村田蝶子

梭の手をしばし止めて戰ひの野にます我背思ひやるかな

● 富山　木津ゆき

花園に花さきほこる櫻月夜今宵逢ふ人皆酒くさき

● 金澤　小泉千佐子

夕日影空にあかれの色そめて繪にも描けぬ山の端の雲

● 大阪　森千代

蝶追つ蝶に追はれつたそがれて今宵は花に蝶と宿らむ

● 大阪　若榮子

はなし聲しばしとゞめてまどちかくなく鶯をともに聞くかな

● 甲府　大島すみ

杣人のたき木にそへし一枝に奥なつかしき山櫻かな

● 靜岡　清水はつ子

ましばかりて歸る翁のかごの上に花うつくしき桃の一枝

● 伯耆　松本多嘉子

花の里の塒はなれて鳴く鳥の聲さへにほふ天の香具山

● 靜岡　中里美

山川のしらべのほかに音もなくあけぼののさむしにはとりの聲

● 豐多摩　川又鈴子

まどちかき一木の梅に宿しめてなくうぐひすのこゑぞゆかしき

● 津　水田加須尾

牛叱る童の聲の遠く消えて桃の花散る夕暮の道

● 長崎　嬉野益子

てりもせず曇りもはてぬ月の宵笛ふきすさぶみやびをやたれ

● 東京　瀬藤ちよ

遠山の木々の梢も春めきて見わたすかぎり霞初めつゝも

● 福岡　池永きよ子

培ひし人も無き野の薔薇の花床しき香りかぜのまにまに

● 神戸　木村俊子

いさぎよく大和島根に咲き出でゝとわにゝほへや敷島の花

● 兵庫　柳田のぶ子

あまかける荒わしあとな絶えはてゝシベリヤ千里春風のふく

● 山城　古川よね子

大井川ゐせきによどむ音はしてかすみに沈む春の夜の月

● 本郷　逸見みき子

風ぬるく月影朧ろ霞低し滿洲の野邊春立たんとす

● 岐阜　飯ひで子

花の上に胡蝶の夢のしばらくを醒ゆるがして春のかぜ吹く

● 香川　たみ子

背子は征き乳兒さへ病める國の内燈火暗く夢むすばれず

● 下谷　幹子

青柳の糸もてあそびそよ〳〵と長閑にわたる春の夕風

● 大阪　今木しげ子

板戸もるすきまの風もつらかにし闇のねざめに背子おふ身は

● 香川　横田つる

時ならぬ雪かとまふ散る花の一片ごとに春はゆくらむ

(一等) さゝやき

京都府愛宕郡白川村二三五内田方　内田靜子

曉の雲のくれなゐ、　わが夢ぞかしこにめぐる、
回りては光りに消えむ、　夢の跡誰かおひゆく。
斯ばかりの夢のさゝやき、　身にしむといつか覺えし、
ひと時のわが歡びぞ、　今は唯あへなく醒むる。
げにや斯く梅のみどりに、　懷かしき歌を知るきみ、
寂しさの味に覺えし、　わが思ひすぐせやあらぬ。
白ほとの路のまよひに、　潤まさる翼收めよ、
歡樂の森の葉がくれ、　美くしき虹ぞかゞやく。
さもあれやわれや再び、　かきくらし胸のさぎりに、
見えわかぬ郷をしたひつ、　逐はんにも便りなき身ぞ。
曉の雲のくれなゐ、　わが夢ぞかしこにめぐる、
回りては光りに消えむ、　夢の跡誰かおひゆく。

評、想も至れり、調も至れり。

(二等) 曙の海

東京小石川關口水道町四十一番地閣藤之進方　島村艶子

見よあけぼのの波の色　幽暗やゝにうすれゆく
聞いわだつみの海の音　微かに遠くわきよする
あゝ春海のほのぼのと　浪にあくるあさぼらけ
平和の小琴かきならす　浪のさゝやぎの淸きかな
やがて射出る銀の矢の　獵箭弓絃をたつがごと
百條千條八千すぢに　翅るみどりの浪に入る
銀線うみにしづみはて　紫雲の影の消えゆけば
なぎてしづけき沙の上に　浮かぶ眞帆片帆うたの聲
あゝあけぼのゝ淸光に　自然が巧をあほぎては
誰れ暗くらき運命とき　たれ人の世の戀を說く
渇仰あつき眼をあげて　あけぼのゝ海讃へずや
そこに平和の姿あり　そこに歡喜の響あり。

評、實景に對して實情を叙す、眞に是れ有聲の畫、無聲の詩。

(三等) 白薔薇いひぬ

大和五條二見　吉川かほる子

あゝ、
　みどりなす、君が黑髮に、　去歳のわれ、挿しかざられしを。
あゝ、
　あたゝかき、君がみ口にて、　去歳のわれ、あつく吻はれしに。
君逝けり天なるみ國に、　今のわれ、み墓の前にて、
泣きに泣き君を守る哉。　あゝ運命。そはもろきものよ。

評、調輕く想優さし、あはれ其の白薔薇よ、とこしへにみ墓守れな。

小兒

信州　高仲菊子

天より受けし清らなる
晨の風にうなだれて
面に宿る白露か。

赤き薔の唇を
我顔のぞく其形は
袖に薫るにことならず。

頬みそれみや疑ひや
夕べの空にまたゝきて
たまへる星に似たらずや。

あゝ血に飢えし寃の鬼も
はた世の憂きに泣く人も
此幼な兒を抱くらむ。

世のうさつらさ知らずして
眠る幼な兒夢いかに
とこしへさむる事勿れ。

心を何にたとふべき
匂ひを送る白薔薇の

堅く結びて笑ましげに
ほころび初めし紅梅の

恨みも持たぬまなざしは
罪有人に御教へを

鬼をあざむく、武士も
しばしゑまいを浮べ來て

愛暖かき懐に
罪に染まらぬ其夢の

▲御仁慈

我が皇上陸下の御側近く出仕する或る華族の子(十二三歳の少年)が先頃過つて御手焙りの火を取落し御疊を焦しければ御前の事にてはあり面色灰の如くに變じ恐懼措く能はざりしを陸下は莞爾やかに御覽せられて總て御手づから御手焙りを引寄せ御疊の焦けたる上に御載せありて何の御告めにも及ばざりき是れ少年失体が直ぐに侍從の目に留まらば嚴しく叱り懲らさるゝが定なればそれを氣の毒に思召し火鉢を以て少年の罪を蔽ひ給へるなり、御仁慈の程承りて涙潸る。

▲和歌　「牡丹」「菖蒲」「雨」

▲狂歌

▲俳句　「日傘」「金魚」「粽」

▲新體詩

▲謎々　「捕虜」「卒業式」

▲端書文　(はがき一枚四行限)

▲川柳　「鮨」「猫」

◎賞品　各種天、地、人に限り左の賞品を呈す
天賞壹圓、地賞七拾錢、人賞五拾錢

◎投稿締切　四月十八日限

◎新體詩を除くの外投稿はすべて端書に限る

端書文

（六）絶えて返しせぬ友へ　甲府　小川みを

此方への御消息を何の御願望の断ち物とは遊ばされし仕誼によりては御力添へも申上べきに打明けたまふそれだにも神罰恐ろしとや。

筆力勁健

（地）都　但馬　小西桂花

或人はいつはりの世、飾の世、血なく信なき亦の名が都といはれたが、妾は都は好で有ます。友だちも行て勉強してるし、かしこい人も多く有る、知識を得るも都都はよい所で有る。

眞卒なる處愛すべし

（人）物いふ時計　岡山　森かと

私の内に今年四つになる可愛い女の兒が同居してゐます、この兒毎朝六時になりますと岡山訛で「おーきんしやーし、ねーちやん」と繰返すのですものもう寢て居る事は出來ません。

事實の記事なるべし。架空の文章よりも力あり。

櫻滿開を病後の友に　山形　神谷長子

よー子様貴女御病中も能く御成り遊ばして此頃は外出を御許しなされたソーで御目度う又御病中中には度々御枕元を騒がしまして サゾ御迷惑でしたでせう御許下さいあの病室の前に雪が積りて ゐました池の邊の櫻が此頃は滿開ですから御運動かた〳〵御 氣に召しましたら御遊びに入らしつて下さい 偖手に新調した若物の御批評をも戴き度いと思ふて。

梅に添へて親しき友へ　東京　島瀧元子

早咲の梅一枝御覽に入れ申候鎌倉文學を嗜み給ふ君幸に 源太の昔を偲び給へ妾は此最季の古事を思ひ候ひて君の御心を酌み 侍り候際し給ふな優しき君の約婚は今滿洲の野に於て花々敷戰ひつゝあると承り申候。

福井　島ます子

姉様よろこんで下さい只今首尾よく卒業證書を戴きましたから。明朝新橋を立て歸らうと思ひます其の時は電 報をうちますからまつてゐて下さいまし。妾は今も御友達に何だかそわ〳〵していると笑はれたのですよ。

補充輪卒なる夫の許へ　熊本　河村むら子

輪卒の務も君の爲め御身御大切に任務恙なく留守宅の事な ど案じ給ふな兩親始め小供其外皆の者恙なく暮しをるになんかしこ

表題よし。

田舍なる祖母の許に　四谷　堀きよ

おばあさま昨日は結構なおさつを御送り下さいまして 誠にありがたう御座いました、笑ふ處が皆よろこんで戴きましたからどうぞ 御安神遊ばして下さいまし。

おさつが妙なり。

妹に送る　麹町　鈴木つや子

月桂冠の譽れを得給ひし御事、御兩親樣の御喜び如何許りなるらん。喜

花の泥に化するが多き世のならひ、夢な等閑に過し給ひぞ。君よ奉公の道は皆同じければ、御老躰御大切に仕へ給へよ。

筆つき老熟なる處あるを取る。

慈母を失ひてふるひたちし友の許に

赤坂　とく子

唯一人の慈愛深き御母君に先立れ給ひし君、御歎の程さこそと思へば胸もはりさけん許に候、承れば御許様には忌服もすみなば、兼て御望の看護婦に身を投じ滿洲の野に傷ける大丈夫のみとりせばやとや、あゝ扨も美しく男々しき御決心かな、なひるがへし給ひそ。

文章よしとには非れど勇ましく心地よし。

菫子様へ

大阪　仙田壽

今朝は切角お摘れ下され候をあやにく練兵場に参りて失禮　仕り候お笑種に寫生の繪葉書を以て御詫びまでかしこ。

心遣ひ要な得たり。

菫に添へて

名古屋　松下つゆ子

これは貴孃に戴いた種子から咲きました菫を妾が寫生したので、花が開いたらお送りする約束でしたが、斯様な優しい花を手折るは、かはいさうなので差しながら此畫をお目に懸けます、これにて何卒御免遊ばせ。

筍を贈る文

滋賀　馬淵なみ子

昨日の雨に斯麼可愛らしい筍が裏の藪に出ました、姉様はいつも御良人のお晩菜に御骨が折れる様聞いておりましたから、未だ味など如何ながら、只珍らしいのをとりえにお送り致します、お氣に召しますか、心配ですわ。

片瀨の姉のもとへ

東京　田中千賀子

姉上御病氣は如何です、實は此頃試驗中だつたもの　ですからつい忙がしくて御見舞いたさなかつたらわざ〳〵御褒許戴てすみません　來週の土曜には宿りがけで屹度參りますよ面白い　御噺どつさり御土産にれ春やにもよろしく。

春の日記

大阪　杉田敏子

四月一日晴。窓の障子に鳥の影うつる。庭の櫻、今が子開なり。ジヨン誤りてお池の中にはまる。

四月二日後晴。春雨の音いと靜なり。朝お庭に鶯の聲す。晝過ぎ頃。はつたり止む。夜星しば〳〵飛ぶ。

東都なる兄に入學を知らせる文

名古屋　原田こと

兄様喜んで頂戴あの心配でならなかつた女學校　の入學試驗に首尾よく及第致しましたもう高等女學校の生徒で御座います　ほんとにこんな嬉しい事はありませんお約束の御褒美何を下さいます　私東京の流行物で頂きたう御座います。

妹の許に

伯　壽代子

美ちやん機嫌いゝでしよう、私は五日程たてば試驗　休みで歸るですよ美ちやんも勉强するでしよう、今度は三年　になるのですれ一番く試驗をしてわたしのかへるのを待てゐて頂戴。

友の許へ

芝　影山やま

先日ははからず御目にかゝり此上なく嬉しう存候其折御約束　の事明後日は誠に都合宜しく候まゝ是非御はこび願度久しぶりにて海老茶　式部の昔にかへりおとがひなとき申さんあなかしこ。

國元の實母へ送る

姫路　井口さの

母様皆様も御達者でしようれ一こちらでも皆無事　ですそ一してあの小供が此頃では片言交りの御話や兵士のまれなどするやうに　なりました良人が居たなればと始終御姑様と申してゐますぜひ一度　御出掛け下さい御姑様よりも宜敷。

平凡なれど要領な得たり。

小說

鶏屋の娘

其一

遅塚麗水

日は正に午、

荘の中の鶏は皆な一齊に時を作つた、紅梅かつ散る鶏の小屋。

農と漁と相雑はつて居る此の海村の盡頭の茅屋、初めは妻の帆待に家禽を飼つたが、百姓甚兵衛旋て鶏屋と呼ばれたのであつた、娘二人、姉は十四、名はお若、妹はお里、年は十一、朝夕の鶏の世話は、姉妹が今では一切取り仕切つて居る。

姉妹は今學校から歸つて來た、篁竹垣の角を匝て吾が家の門に入らうとすると、其處に美くしい人力車があつて、紺法被の雅健な車夫が、天鵞絨織の膝掛に身體を裹んで、燃えたつやうな眞紅の蹴込の敷皮に腰を掛け、負暄りの慘然と新聞を披げて讀んで居た、鏡のやうに光る車、蠟色に塗られた扇骨の、母衣は萌葱の裏を返して、緋羅紗の倠緣を取つた豹の皮が、打ち被けられてあるのであつた。

姉妹は驚異の念に打れながら、歩みを停めて目戍るのであつた。

「里ちやん、お客様だわね。」

「爾うね、乾度立派な方よ、彼樣綺麗な車に乗つて入來つたのだから。」

『誰方か不知。』

『吾家なんかへは、彼樣立派な車に乘つて入來しやる方は無いから、乾度識らない方ですよ。』

『其れでは矢張、家禽でも召しに入來しやつたお方か不知。』

『爾うか不知、でも姉さん、家禽や卵を買ひに入來しやるに、ツヒぞ那麽立派な車に乘て入來しやる方はありません、あゝ解りましたよ姉さん、あの日外お嫁に往つた魚市場のお勝さんが、お里歸の序に入來つたのでせう、何でも立派な人の許へお嫁づきなすつたと言ひますから。』

『でも、里ちやん、お勝さんのお嫁に往らしつたのは横濱だと言ふぢやないか、汽車でお出でなさるわ、態態車なんぞへ乘つて入來しやることはないよ。』

分別顏に姉のお若は妹を見て、的皪として涼しい眼に笑を堆かめた、妹も嫣然白い歯を露はして。

『爾うねえ、乾度汽車で入來しやるわ。』

貝の殼、和らかな日に光つて、白き中に落紅の眞破した村の小路、其處に姉妹は長短參差の影法師を曳きながら、此の鮮麗かな車が載せて來た珍客に就いて、其の思ふところをあどけなく物語るのであつた。

姉のお若は、鄙に珍らしい標致好であつた、涼やかな眼睛、温和の鼻筋、殊に秀でた其の眉は、氣高い品を備へて居る、百姓甚兵衞の娘とは誰しも思はぬほどである、茜ぶきの色入飛白の綿入に、褪せたメレンス友染の短かい帶を貝の口に結んで、拇指の爪の微かに白く漏るゝ紺の足袋、藁草履を穿いて居るのは、同じ身裝の妹お里と袖ふりはへて立ち並んだのを較べて看ると鷄に伴ふ鶴のやう。

姉妹は旋て車の前を小走に、莊の門から駈け入つた。

其二

上り框の中を覗くと、南部表の朱珍の鼻緒の後丸が整然と揃へて置かれてある、覆せた臼の陰に傍ふて、立てかけてあるは翡翠玉の長い柄の、綾織の女傘。

姉妹はいよ〳〵驚異の念に打れながら、少時は其處に

佇づんだ、奥の方をさし覘くと寂然として、唯だ茶釜の松風が靜かに聞ゆる。

少時すると母の聲で、

『本統に奥樣、妾は夢のやうでございますよ。』

聲は平生の冴へた母の聲とは變つて、低くして且つ潤んで聞える。

『妾も亞母、夢のやうに思ひますよ、雨の夜も風の日も、あゝ今頃は什麼して居るだらうと思ひつめては胸を痛めて、もう片時も忘れる隙はなかつたの、本統に善くまア亞母も息災で居なすツたね、彼女も善く壯健に育て上げて下すツた、妾什麼に亞母にお禮をしたら好いだらうね、切望ね、亞母、今までの事は堪忍して下さいよ。』

澄んで優しい其の聲は、次第に顫えて聞えなくなつて仕舞つた、又た寂莫、茶釜の松風は蟬時雨に音を變へた。

『奥樣、切望那麼事を仰しやつて下さいますな、妾も奥樣が檀那樣と御一緒に、少しの間遠方へ往つて來るから宜しく賴むと仰しやつて、往らしつてからは今日か明日かと、御手紙の來るのを什麼にお待ち申したか知れません、ぷッつりとお消息がございません、堪り兼ねて故のお宅へ伺ひますと、識らぬ顏の人のお家、御近所の方に尋ねて見ましても、那邊へお往でになつたのか分らぬと申します、其の中に良人も羽根田の宅を他に讓つて、此の大森村へ引移つて參りましたが、お別れ申しましてから既う一と昔の上を三つ越しました、長いやうでも短かい年月、お預かり申上げたお孃樣は、種疱瘡も三度なすツて、灸の痕さへ一ッつけず大事に〳〵お育て申し上げて居ります。』

『本統に永い間の亞母の骨折は、まア什麼であつたらうね、亞母も知つての通り、妾の家も商賈の失策から銀座の店を鎖つた後、兩親は時疫で一と月と間も置かずに御他界遊ばし、親類も緣者もない廣い世界に殘された妾の心細さ、傳手を求めて築地の神學校へ入り、一生神の婢女となつて世を終らうと決心をしたものゝ羞かしながら若氣の至りで今の春雄と懇意になり、孤

子同志といふが縁で、到頭赤子まで擧けた交情とはなつたが、一生を此儘にして老朽るのは心外と、種々と苦心の末、赤子は妾の元の乳母のお前に賴み、夫婦共共外國へ往つて、一と旗擧げて還らうと、先づ米利堅へ志し、桑港に二年ばかり、其れから秘露、亞留善丁、伯士と渡り歩き、種々の營業をして見る中にも、忘れられぬは生れ故郷、お前に預けた彼の子の事は唯だの半時も忘れる隙なく、幾度も羽根田の家へ宛てゝ出した手紙に、唯だの一度の返事はない、萬一横文字の表書が、村の學校の先生に賴んでも書けぬか不知と自分の宛名を書いた封筒をまで入れて、出した手紙にも返事がない、今度は上封に自分の宿所を細かに書いて出したところ、三月も掛つて戻つて來たが附箋の鈴生、宛名の人の住所不明といふのだから、妾も春雄も落膽して、其れからは唯だ怏々と亞母や我が子の身の上を思ふばつかり、現か夢かのやうに十三年を、今日まで無沙汰で過しました、横濱へ着いたのが、丁度今から七日前、翌日東京へ歸つて來て、芝公園へ相應の家を求め、今日は羽根田、明日は羽根田と、言ひ暮しても毎日の客來、昨日の午後から漸と自分の身體になつたやう、春雄は直さま電車で羽根田へ飛んで行つて、索して見たが些しも知れない、夜更まで尋ね飽んで漸やう一人の老媼に、此の大森に引移つて今でも無事に暮して居ると敎えられ、直さま尋ねて來やうとしたが、終列車に間もない夜闇、突如に往つても迷惑だらうし、其れにもう無事で暮して居ると聞いて安心し一旦家へ歸つて來ての此の話し、今日は妾一人で尋ねて來たのだよ、是れも神樣のお冥護、這麼嬉れしいことはない、本統にお前の丹誠で、彼女も嘸ぞ立派な娘になつたらうね。』

人こそ見えね、喜悦の色は、其の若やいだ女客の顏に、燦くばかりに思はれたのであつた。

其三

『あれ姉さん、彼樣事をお客樣が言つて居らつしやいますよ。』

小聲に姉の袂を引いて、悲しいお里は私語くのであつた。

姉のお若は恍然と、掌を妹の優しい肩に載せた儘、眼を塞つて聴いて居る。

「誰樣でせう。」

「爾うね。」

と返辭も上の空。

「誰樣が誰樣の事を仰しやつて居るのでせう？」

「爾うねえ。」

と頷づいた其の豊かな二重頤を、淺黄メレンスの襟に埋めて、耳を欹たてるのであつた。

「本統にお客樣は誰樣でせう？」

「…………。」

「阿母さんがまだ妾を産まない前、銀座の立派なお家へ乳母に上つたことがあると、毎時姉さんや妾に話しなさいますが、其の阿母さんか乳を上げたお孃樣が、入來しつたのではありませんか不知。」

「…………。」

「ねえ、妾爾う思ひますわ、姉さんは。」

再び問はれて始めて我に返つたお若は、的爍と涼しい眼を見開いて。

「何？ 里ちやん。」

「あのね、阿母さんが毎時でも妾達に、まだ阿母さんが妾や姉さんを産ない前、銀座の或御大家へ乳母に上つたとお話なさいますが、其のお乳を上げたお孃樣が入來しつたのではありませんか不知。」

「爾うねえ、爾うか不知。」

と、お若の顏は稍や安からぬ色に陰つて。

「上つて見て來ませうか。」

草履を脱いで片走框へ踏み掛けた妹の袖をお若は控いて。

「まアお待ち、那麼穢ない足をして、お客樣の前へは出られませんよ。」

霜解路に汚れた襪を看めて、お里は逡巡ひながら點頭いた。

「阿母さんがお呼びになるまで、背戸へ往つて鷄に餌

でも遣つて居ませう。」

姉妹は徐歩に庭へ廻つて、孟宗林の陰を斜に、鷄小屋の方へ進んで行つた、其の跫音を聞きつけた群禽は、歡ばしげに呼び交して、姉妹の身邊に集まつた。茶の白の毛襃を被つて、烏金の色の袴を穿いた暗色ブラマ、朱の冠白の羽衣、白金の脛當した白色コーチン乙女椿の花の冠、黑き鬘を被つたウーダン、背は漆、胸は銀白、鬼百合のやうな冠高きアンダルシャン、金髮の鬘を振り亂し、同じ色の鱗を集めて綴つたやうな羽並鮮かな金色ポーランド、鷹羽碁石や霰碁石のハンバーグ、薔薇の冠、雪の衣のレグホーン、漣模様の衣を纏ふプリマウス、頸は青金、翅は翡翠、他は烏金に鎔たやうなパートリッヂ、金覆輪や銀覆輪の羽に鎧はれしワイアンドット、小兒の掌に載するに堪へたかつら矮鷄など、皆な一齊に聲を揃へて此の美くしい吾が友を歡迎するのであつた。

姉妹は此の異類の友達に向つて、依怙なく平等に其の手中の餌を撒き與うるのであつた、夫唱へ婦和して、啄み食らふ有様を妹のお里は笑しげに看めて居るが、姉のお若は、裳は繞つて皆な鷄の中に立ちて惚然と、心は母家の方に馳するのであつた。

孟宗林の陰を透して、人影ちら〳〵と此方をさして來るのが見えた、お若何かは知らず心怕れて、禽小屋の傍の紅梅の樹の幹に身を匿した。

其四

「奥様、路がお惡うございますよ。」

「梅も散るといふのに、まだ風が寒いねえ。」

と、白菊の花を綴り合せたやうな、玉スコッチの肩掛に深く頰を埋めた。

齡は三十路の上を二つ三つ、細面の皓然白く、眉の優しい眼の凉やかな、凜として氣高い奥様、獅子毛小紋の藍鼠の三枚着、金なしの有職模様、紬地オリーブ色の厚板帶を大鼓に結んで、古代紫柄絲打の帶止の、眞中に光るは眞珠をあしらつた純金の龍、勝色柳纐纈の帶上を帶の間から微し滾して、胸から垂げて帶に潜る

は金と白金極細の小豆鎖、束髪は流行の獨逸風、極少さい天鵞絨製の西洋花の簪を挿して、嫋婷と竹に傍ふて佇みながら、霜解けの路に逡巡らふ風精は、什麽なる人の夫人かと、竊み見る、お若は唯だ恍然となつて居る。

『善くまア家禽などを、丹誠してお居だね。』

『最初は人に勸めまれまして、農業の暇に少しばかり飼て見ましたが、今では大分殖えましたので、娘二人が朝夕は取り仕切つて世話をいたして居りますのでございます。』

『呀、亞母には娘があるの!』

『はい、いゝえ、おほゝほゝゝ。』と若やいだ聲で笑ひながら、手の甲を唇に中てゝ。

『什麽も奥様、申譯がございません、お孃様を眞身の娘のやうに思つて居りますのでッと奥様――眞個に妾は、眞身の娘としか思はれませんの、其れに奥様、貴女様のお消息もございませんし、お預かり申してから十三年にもなりますので、お里流れに戴だいて仕舞つたとばッかり、爾う極めて居りましたのでございますよ。』

『道理だよ、亞母。』と、夫人は淋しく微笑んで、紅梅散り布く路を、縹色の裳の笹ぶきちらほらと、陰に滾るゝ雪の絹足袋、屐の痕は八文字に落紅を踏むのであつた。

少時して回顧いて、『其れで姉妹二人とは?』

『あら、まだ申上げなかつたのでございますか、奥様にお別れ申してから三年目に、娘を一人擧けました。』

『呀、爾う、其れはお目出度う、丁度若江とは三歳違ひ、さぞ姉ぶつて遊んで居るだろうね。』

『勿體なうはございますが、お孃様を眞個の姉様と、爾う言つて聽かせて置きます。』

『其れでは若江も眞個の妹と思つて、睦ましくして居るだらうね。』

『勿體ないほど善くなすつて下さいます。』

『爾うかえ。』と夫人は應揚に點頭きながら、翡翠一枝斜めに出でゝ人を攔む竹の陰に、鬢を掩ふて佇づむ

のであつた。

母は、フト娘お里の姿を見て。

「あ、里や、お前は何時學校から還つて來たの？」

夫人は凝乎と前方を覗めた、其處に鷄群の眞中に立つて、笑ましげに點頭く可憐の少女があつた。

「阿母さん、今日は土曜日よ。」

「姉さんもお前と一緒に？」

「爾うよ。」と答へながら、美しい夫人の姿を凝乎と看めた。

「姉さんは那邊に居るえ。」

彼方と指さす梅の木陰、指されて物の怪に魘はれたやう、お若は身を竦めるのであつた。

「あゝ奥樣、彼處に居るのが、お孃樣でございますよ。」

「あれ、まア、彼女が?!」

刻み歩に五歩ばかり、夫人は何物をか捉へるやうに、手を揚げて進むのであつたが、忽ちはしたなしと自から責めて、悠揚と歩みを運ぶ、鷄の群、見慣ぬ人の來るのを怕れて、路を讓つた。

母はお若の手を執つて、夫人の前に誘ひ來り。

「此娘が奥樣、若江樣でございます。」

眼を瞑つて少時は物も言へなかつた、夫人は、其の手に穿めた玉蟲金に刺繡れた黑の手袋を其の儘に、お若の手を執て精一杯に握りしめて。

「なう、お前は若江であつたか。」

頽然と其の肩へ身を崩して倚るのであつた。

其五

鷄の團、落花の中、麗かな日影の下、其處に美粧の氣高い夫人の、田舍娘の手を執つて、懷しいやら嬉しいやら、無量の心の思ひを抑へて唯だ一と滴、ほろりと隕して無言に立つた其の樣は、心なき鷄も少時は寂然と啼く音を呑み、有意の春風梢頭の花を吹いて、花は私語くごとくに見えた。

身を屈めて差覗いて、李の頰に玉の顏、摩り寄せて聲顫せ。

「まア大きくなりました。」



お若は執られた手を振り解いて、つと母の脊後に走つて、瞬たきもせず夫人の顔を目戍つた。

『これ若江、お前は妾を知らなくッて？』

『お若や、お前何故御挨拶を申し上げないの。』

『阿母さん。』と悲しげに、『妾は若江といふ名ではなくッて。』

『爾う。』と亞母は淋しく笑つて、『あの奥樣、お孃樣のお名は百姓の娘には立派過ると申しまして、何時の間にやら唯だ若と呼び變へて居りますのでございます。』

亞母の言葉に『爾う。』と一と言頷づいて恍然と、若江の顔を視めて居たが、禁へ兼ねて進み寄つて、再び其手を執つたのであつた、お若は早や振りも解かず、指の痺るゝまで握らるゝに任せた。

『妾はお前の阿母さんだよ。』

憂然として身を顫はせたが、唇の色も變つた。

『お前は妾の娘だよ、これ若江、お前はまだ頑是ない時であつたから、阿母樣や阿父樣の事などは知るまいが、妾はお前を產んでから、阿父樣と御一緒に遠い處へ往かなければならなくなつて、お前を亞母に預けたのだよ、丁度十三年前の秋、お前が二歳の時であつた善くまア亞母の丹誠で、這麼に大きくなつてお呉れだ。』

手を執つて引寄せて、少女の額に温たかい接吻を與へるのであつた。

『切望、お前、阿母樣と一と言いつてお呉れなね。』

袂に滾るゝ薔薇の香、取り出して掌に丸めた一團の白雪は、顔に中ッて雲と流るゝ綾の手帕、少時はそつと涙を拭ふ、乳母も聲を潤ませて。

『これお若、善うく聽いて下さいよ、今までの阿母さんは嘘の阿母さん、此處に居らつしやる夫人がお前の眞個の阿母樣だよ、突如に斯ういはれては、喫驚するであらうがね、眞個の阿母樣は、此處に居らつしやる此の夫人、これお若、阿母樣と一言切望、申上げてお呉れでないか。』

掌を顔に潸々と、お若は聲を呑んで泣いた。

『あらまア、泣く兒があるものかね。』と乳母は其の肩に掌を載せたが、顔を背けて眼を瞑つた。

『お泣きでないよ。』と、吾が眼を拭いた手帕を軟々と吾が女の顔へ、薔薇の香りは眼に泌むばかり、お若は涙を母に拭はせながら、尚ほ聲を呑むのであつた。しけ〲と其の泣き顔を美しと打ち看めて。

『眞個に、是れまでにした亞母の丹誠は、仇やおろそかではありませんね。』

『情愛は實の娘と異ひません、唯だ可愛いが一心でございます。』

『亞母の恩は、什麼してお禮を爲やうねえ。』

夫人は既や涙を收めて、毅然とした故の氣高い姿に還つた。

『何のまア、御禮などゝ仰しやいますな。』

『亞母のお陰で妾は、佳い娘を擧けました。』

『妾は又二人娘の其の姉を、貴女に差し上げて仕舞ひました。』

『眞個に亞母、妾の喜びに引換へて、長の歳月手鹽にかけて育て上げた其の娘を、今日屋の棟へ白羽の箭が立つて、人身御供に上げられたやうに思ふであらう、まア那麼に嘆かずに、二人ある娘の一人を、嫁に遣つたと思つて、切望諦めて下さいよ。』

『何いたしまして奥樣、元々貴女のお孃樣でございますもの、御身分のあるお孃樣を、百姓風情の妾共が、吾が娘のやうにして、此の年まで呼捨てして育てましたは、冥護に餘つて勿體ないと存じます、』

夫人は乳母の一語〲に、頷づきながら聽いて居たが天庭に輝やく心の誠、

『爾う言つてお吳れなら、妾は眞個に安心しました、亞母、切望、若江を彼方へ遣つて、妹と一緒に遊ばせて置いて下さい、――まア可愛いお子さんだね、名は何とお言ひなさるえ、』

『はい、里と申します、』

『お里さん、善く今までは姉さんを大事にして下すツたのね、切望是れからも相變らずお交際をして下さいよ。』

含羞んで猶豫ふ少女、折からの日を脊に受けて、耳も頰も紅のやう、むつちりとした指を組んで、心を擽び

て居るのであつた。

『まア鳥渡此方へお出で、』

手を揚げて嫣然と麾ねけば、邪氣なく笑みかけながら二歩三歩前に進んで會釋をした、

『まア行儀の好いこと、亞母のお薫陶の好いのも是れで解る、幾歳になるの、』

『あの、十一、』

『爾』と點頭いて其の手を執つて、『妾、今度來る時には、屹度お土產を持つて來ますよ、さア姉さんと、彼方へ往つてお遊びなさい。』

袂翩々と驅け寄つて、其の泣き顏をさし覗き、剃つて靑い眉を顰め、

『姉さん、何を啼いて居るの、さア彼方へ行きませう。』

兩掌を顏に中てた儘、聲を呑みつゝ泣く少女、小さき銀杏返しの後毛さらりと散りかゝる領脚の、皓然と白い後姿、たど〳〵と歩みながら孟宗竹の陰を潛つて母屋の方へ行くのであつた。

乳母も夫人も無言になつて、凝乎と見送つて居たのであつた、乳母は言葉を更ためて

『奥樣、お願ひがございます。』

『妾に願ひとは？』

『奥樣は今日直ぐお孃樣を、お邸へお連れ歸りになりますか。』

『今日は支度をして來なかつたから、お世話序にモウ一日、お前に預けて參りませう、何れ明日は更ためて春雄が迎ひに來ると申しますから。』

『其れでは今日はお孃樣を、お連れ歸りあそばしませんの？』

『切望、亞母、爾うして下さいな。』

『ま、爾うなすつて下さいませば、妾夫婦の悅びは此の上もございません、お里流れに戴いた娘と思つて、一生、母よ娘よと、呼ばれもし呼びもしたい其の娘が是れからはもう他家樣のお孃樣、せめて今夜一宵だけでも傍に置いて、一生の親子の契も、明日に縮めて堪能するほど、母と呼ばれ、娘と呼びたう存じます。』

堪り兼て袂を顏へ肩を搖つて忍び泣く、夫人も淚を拭

ひながら、
『明日まではお前の娘、切望膽斗可愛がつて遣つて下さい、其れではモゥ妾は、お暇を致しますよ。』
『まア奥様、夫も追つけ戻りませう、切望御寛話あそばしませ。』
『もう妾は歸ります、春雄も什麼に待ち兼て居りませうから。』
折からの風一陣、紅梅の花は頽るゝごとく散りかゝれば、地上の花も活きて蝶のやう、夫人の裳を匝つて舞ふのであつた、
徐々と庭へ進んで、小腰を折つて送る乳母を背後に楚々、小招きすれば車夫心得て、轅を執つて走せ侯ふ、緋の敷皮に裾を埋めて、豐に乘れば胸せめて深く裹まるゝ瑠璃の膝掛、足の先まで掌を下げて叩頭く乳母に目禮して、颯と翳した傘の陰、春の日を斜に避けて、玉の顏、花の肩掛、頰より肩を淡紫に隈どつた、さらばの聲に萠葱の裏を返した母衣、鏡と光る車、宛がら霞の流るゝやう、一散に貝殼燦る村の路を、

其六

回顧り又た回顧り、吾が門に入る一老農、稍や屈む腰を展し、唐茄子冠の手拭を解き、半ば禿げた頭顱に春の明を閃然と射返して、
『豪氣に好い香ひのする女だなア、はて誰樣だな今の客人は?!』
『あ、今お歸りなすつたの、一と歩違ひて惜しいことを致しました、』
『はて誰樣だな、誰家の奥樣だ、俺や今其の岐路で出會つたが、磨れ違ひに車は通る、車の上には素晴しい夫人、それは〱俺の團子ッ鼻が、切斷れて飛ぶやうな、好い香ひがしたのなんのッて、矢張宅へ入來つたお客人かえ、』
亭主の甚兵衛は復た門邊まで疾歩に起ち回つて、遙かに霞む車を見送る、
『本統に珍らしいお客様、十三年振ですよ』
『はて、十三年振のお客様?、一體全體誰樣だえ、

ついぞ見識ねえ夫人だが。」
『喫驚しちやア不好ないよ。」
『誰様だ、早く聞かせて呉んな。」
『まア上つてから寛々と話しませう。」
『はて、誰家の夫人だらう。』と甚兵衛は足袋を掃つて圍爐裏の傍へ膝行り上り、肚の潰れた駄六張の煙管で一服、
『喫驚しちや不好せんよ』
『大丈夫だ、言つて呉れ。」
『あの、櫻町の夫人が、入來しつたのですよ。」
『な、な、何だつて？、櫻町の夫人とは誰様の事だ。」
眼をしばたゝく夫の顔を凝乎と視て、
『あの、それ、君の親御さんの！」
『えゝツ、何だと！」
啣へた煙管をもぎ取るやうに抛出して、甚兵衛驚異の眥を裂いた、
『突如に入來しつたので、眞個に喫驚しましたよ。」
『十三年もお消息なしで、忘れた時分に突如に來なくツても好いぢやないか、一體那邊へ往つて居らしつたのだ。」
『お聽きなさいよ、お別れ申してから櫻町御夫婦は亞米利加とやらへ往らしつたのだ相ですが、其れから種々な國々をお歩きになつて、御苦勞をなさつたといふお話しで、今ではペロリとか秘露とかいふ國に、大層な開墾地をお持なすつて、葡萄をお栽えになつて、五十人からの葡萄作を使つて居らつしやるほどの大福長者にお成り遊ばしたさうですよ」
『大福長者？、ヘツ、長者でもあるめえ、可愛い娘を他に預けて行つた限り、音沙汰もなく十三年とは餘まり酷い、親子の人情のねえ奴は、義理も知るめえ、何が大福長者だ、箆棒め。」
抛り出した煙管を取つて復た一服、啣へて唇をへの字に結んで、不興顔、
『ま、憤らずに先様の言ふ事もお聽きなさい、亞米利加へ往しつてから、幾度か手紙をお出しになつても、終ぞ返事が來ないので、一番最後に御自分の宿所を委

しく、手紙の表面に記いてお出しなすつたのが、御幣のやうに附箋が下つて、三月も歴つて戻つて來たと仰しやいました。』

『箆棒め、出した手紙の着かねえ筈は乾度無えや、子に人情が無え者ア、他人にも薄情なんだ、三間梯子と相乘りで來なかつたな、鴨居が高くつて入れめえが。』

『まア、爾う憤らずにお聽きなさいよ、其れがサお前さん、手紙の屆かなかつたのに無理はない、櫻町樣がお立ちになつてから、間もなく此村へ引越して來たぢやアないか。』

『何でも好いや、爾うして今度は何しに日本へ還つて來たんだ。』

『彼土の葡萄園は正直な番頭に預けて、久しぶりで故郷へ歸つて錦を飾つても見せたいし、第一、我が子の行方を是非とも索し當たいといふので、七日前に横濱へお着きになつたと仰しやいました。』

『笑かしやアがる、露探にでも成つたンぢやねえか。』

『まア、那麼事を！』

『露探め、俺の娘を攫いに來ンだな。』

『まア、何だえ、那麼事を！』

『彼の女は杜鵑なんだ、俺の家を鶯の巣だと思つて居やアがる、彼の牝鳥は。』

『まア、那麼に憤らずに、沈靜いて善く聽いてお呉れでないと妾が困るよ、お前さんは、お若を自分の娘のやうにお言ひだが、お前が承知で妾がお預かり申したお子だよ。』

『其れや爾うよ、だが既う俺の總領娘だ。』

『解らないねえ、總領娘と思ふのは此方の勝手、眞個の親子の因縁は、切つたツて切れやしない、妾だつて乳房を啣ませて育て上げたお孃樣、腹を痛めて彼のお里と可愛い情に紙一枚の違ひもない、今櫻町の夫人にお還し申すは、神隱しにされて仕舞つたやうな心地だが、又た夫人にもなつて見ると、遙々と四千里もある海を渡て、吾が一人子の行方を索しにお出でになつた其のお心地は什麼であらう、お前さん、夫人はお若の手を握つた儘、何にも仰しやらずに頽然と、其の肩

に寄り蒐つて總身の露を眼に絞つて、お泣き遊ばして
よ、其の時は妾もね、怨みつらみも一時に忘れて仕舞
つて、夫人と一緒に袖を絞りました。』
『えゝ既う若に會せたのか、會せて母子の名乘りをさ
せたのか、もう仕方がねえ！』
と、垂首れて眼を瞑る。襟袪かつて露はに胸毛、太息
に戰ぐ、少時して眼を睜つて四邊を回看し、
『那處へ往つて。』
『あの、若ですか。』
『知れた事よ。』
『可哀さうに先刻から、泣いてますよ。』
『早く此處へ連れて來い。』
女房起つて障子を開ければ、家禽小屋の陰にまだ泣き
止まず佇む姉を、慰めかねて悲しげに、妹は涙ぐんで
居るのであつた。

其七

海村の曉は、松魚の背の色をなして、碧鮮かに明け放
れた。
濱の市から一尾の鯛を買ひ獲て還り來つた甚兵衛は、
點破の落紅と共に井の華汲んで、颯と洗つて鱗をひく
昨宵眠らず明したお若は、例日よりは疾く起きて、家
禽屋の娘の生涯を、今朝に縮めた思出にと、妹と共に
餌を與へ、鷄の團欒の中に立つて、暫時は我を忘れて
看めて居る。
霜を吹く出刃に觸れて、散る鱗は滿地の落紅と相錯る
手を停めて回顧いて、
『若、一寸來い。』
徐かに鷄の圍を開いて、若江は無言に井の端に傍うて
立つた。
『十三年の永い月日を、俺は噓を吐き通したが、今日
は眞個に心の底から、お前に言つて聽かすのだ、心に
彫つて忘れるな。』
『あい』と若江は優しく答へて早や涙ぐむ。
『世間の諺に、一旦里に遣つた子は親子の情が薄いと
いふが、お前實家へ還つたら、決然と、此家の事を思

つちやア不好いよ、俺は僞の親爺だよ、阿母は僞の阿母、お里は僞の妹なンだ、好いか解つたか。」

と、出刃持つ拳に眼を拭ふ。

「……………」

「昨日入來しつた夫人は、彼が眞個のお前の阿母様だ今日お迎へにお出でなさる方が、お前の眞個の阿父様だぞ、僞の親爺や阿母の事は、此家の門から一歩出たら、決然と忘れて仕舞へ。」

「……………」

「僞の親は百姓だが、眞個の親御は立派な方だぞ、豪いお人だぞ、其のお孃様がお前だぞ、田舍育と他様に嗤はれるやうな、行儀作法をして呉れるな、好いか、解つたか。」

「……………」

「だがの、若、僞の親は忘れて呉れだが、お前切望僞の妹だけは、永久も覺えて居て呉れ、お前にばかり大虚言者の俺ぢやアない、實の娘のお里にまで、お前を骨肉の姉だと言つて昨日まで、虚言を吐き通して居たのだが、其の姉を僞の姉と甦つた彼女の悲しさ心細さは、年齒も行かねえから惨らしいや、切望若や、彼女だけは骨肉の妹と思つてな、末長く目を掛けて呉れ、好いか、俺の一期の賴みだぞ。」

若江は淋しく眞頭いて、

「あい、阿父さん、皆なの事は忘れません、」

「僞の親爺と阿母の事だけは、乾度忘れて仕舞つて呉れ、妹だけは切望忘れて呉れるなよ。」

「あい、阿父さん。」

「嬉しいぞ、まだ俺を阿父さんと言つて呉れるか、俺もお孃様と言ひたく無えや、お迎への來るまでは俺の娘だ、俺が百年活きて居たツて、明日からはお前は他家のお孃様、一生の呼捨てを、今朝の間に束めて呼んで親風を吹かせるぞ、」

* * * * * *

鯛の頭附、赤の飯、甚兵衛夫婦は誠心こめて若江の首途を祝ふのであつた、愛たい朝餐を寂しく濟せて、は

や支度にと取掛る時しも、籬の外に車の音、親爺の甚兵衛躍り上つて、

『百年活きる此の親爺が一生の思出だ、櫻町様のお孃様を、も一度娘と呼び捨てにして見たいぞ、これ、若や、』

『あい、阿父さん。』

『有難てえぞ』と甚兵衛は男泣、女房は泣き頽れた。

門に立つ人、白皙長身、鶯茶の外套の胸を披いて、陰に微閃く金鎖、左手を帽手の鍔にかけて右手には銀高彫の柄の洋杖、風采非凡の一紳士、背後に一人隨者の背廣、何かは知らず小堆く盛つた角臺を、恭うやしく捧げて立つのであつた。

京城婦人會園遊會

（口繪參照）

京城婦人會にて昨冬十一月廿六日園遊會を舊王城昌德宮庭園内にひらきぬ、當日集れる會員は三十有六名にして來賓には韓國駐箚司令長官長谷川大將林公使以下在京の官民十數名なりき。

そもこの京城婦人會といふは明治三十年七月を以て創設され當時は加藤公使夫人會長の下に會員僅に二十有餘名なりきさるを翌三十二年十一月に至り林公使夫人を會長に三増領事夫人を副會長に戴き、いまは會員の數も六十有餘名の多きに至りぬ、本會は年に數度の常集會を開き其都度名士を招待して演説講話を乞ひ又慈善市等を催して其收益金をば種々の慈善費に充て又產婆を招聘して居留民一般の便益を圖りなどし或は韓國子女教育の必要を認め現に一韓子女をして明治女學校に留學せしむるなど皆當婦人會の經營企圖にかゝるものなり殊に昨春開戰以來は會員一同勤儉の下に一致して或は赤十字社に或は軍資金等に奉公の擧少からず。

さて園遊會は十一月廿六日午前十時より開會せられぬ、此日は天澄み秋高し實に小春日の長閑なるにまして名にしおふ舊王城昌德宮内のことなれば、一層光榮あらしめぬ、昌德宮は李朝第二世定宗の朝における創建にかゝり第十一世中宗に依りて補修を加へられ第十九世肅宗に及びて全く大成せられたるものなれば結構の美を極むるにあたりの景色も幽邃なればそゞろに其かみの隆盛を偲ばれて何とはなしに神々しくぞ憶はれける、やがて正午といふに後庭内なる宙合樓にて晝餐の饗應あり、會員諸姉の熱心なる接待によりて一しほの盛宴を見るにいたりぬ、其より一同は後庭におりたちて庭内を散策しぬ、少しく其有樣を記さんに、所々に神さびたる蓮池ありおもむきある唐風の小亭あり小徑あり玉ちる瀧の瀬の流るゝあり又た鬱蒼たる松林の茂りたる中に木々の梢の紅葉して夕日の映ずるさまなど仲々の絶景にて、あたかも仙境にあそべる心地す、かくて主客十二分の歡をつくして散會せしは午後四時過ぐる頃なりき、

口繪に掲ぐる寫眞中階下前列中央に劍を横へらるゝは長谷川大將、其後に帽子を手にせらるは林公使、其左は韓國宮内協辨朴鏞和氏、其隣は加藤顧問、並んでは海軍少佐吉田氏、次は幣原博士、向つて右柱にもたれ居らるゝは大江卓氏、隣は岡部子爵、其前に帽子を被らるゝは三増領事、林公使の後に立たるゝは三増副會長なり、また其奥深く立たるゝは目賀田顧問にして長谷川大將の隣は增田信一氏、其隣は田中郵便局長なり、又階上の柱により居るは居留民長中井氏なり。

第五卷第七號記事豫言

五月五日發行

英國の帝室
英吉利の宮殿
宮殿内の裝飾
英皇帝の家庭
（艶紙寫眞版）

△米國婦人の活動力　塚本はま子
△女子教育　△△△
△家庭女子教育　棚橋絢子
△松平伯の家庭　婦人記者
△酒井伯の家庭　中村鈴子
△婦人と文學　高信峽水
△結婚政略　栗島狭衣
△精神病院の記　一記者
△一人世帶　藤葉女史
△小説　石橋思案

每月五日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）……金二十錢
四冊（三ヶ月分）……前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
内（定刊數……十二冊　增刊四回……一、四、七、十月價格同一）
郵税　一冊　二錢

廣告料

二十四字詰	一行	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	……	……	割引　四十圓
一等	五十四錢	十七圓二十八錢	割引　三十三圓
二等	四十四錢	十四圓〇八錢	割引　二十七圓
三等	三十七錢	十一圓八十四錢	割引　二十三圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

注文規畧

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵劵代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢劵相添申込あれ

不許複製

明治卅八年四月五日發行　第五卷第五號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　水谷景長
印刷所　東京市小石川區久堅町百〇八番地　合資會社博進社工場
發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局
三百三番　二千六百二十番
千十八番　三千二百二十九番

發兌元＝品切圖書重版出來廣告＝博文館

法學博士有賀長雄君著（第十八版）

帝國史略

▲全一冊大判脊皮上製　紙數千餘頁
▲正價壹圓三拾錢　小包送拾五錢

第一期　國民興起の代　第五期　藤氏攝關の代
第二期　國民隆盛の代　第六期　武家爭權の代
第三期　佛法傳來の代　第七期　德川幕府の代
第四期　唐制模倣の代　附錄　今代　三章

本書は著者が多年講究の餘に出でたるものにして肇を建國の肇より起して、全編を七期及今代に分ち、主として日本國民の變遷に於ける原因結果の次第を明にせるもの事實は一に正史に據りて尤も正確に、行文は流暢にして明晰なり、眞に帝國史の要領を得るに於て、物を嚢に探るが如し。

文學博士栗田寛君校閲
増田于信君著（第廿三版）

日本小歴史

▲全一冊洋裝大判二百餘頁
▲正價拾五錢　郵稅六錢

本書は我が國史に尤も精通せらるゝ所の増田于信君が上神代より今茲征清戰役の結末明治廿八年八月廿日諸將の叙勲授爵に至るまで網を擧げ目を立て最も簡易明瞭に記述せられたるものにして特に史學の大家栗田先生の校閲をば經たるものなれば史學上偏強なる參考書及び公私學校教科用書として特に無比の良書なり

- 文學博士萩野由之君著　●中等教育 日本歴史　正價五拾五錢　郵稅八錢
- 文學士木寺柳次郎君著　●日本歴史　上製五拾五錢 郵稅拾錢　並製四拾錢 郵稅八錢
- 足立栗園君著　●通俗日本歴史　正價貳拾五錢　郵稅八錢
- 坪谷善四郎君著　●通俗明治歴史　正價貳拾五錢　郵稅八錢
- 文學士阪本健一君著　●日本風俗史　上製五拾五錢 郵稅拾錢　並製四拾錢 郵稅八錢
- 女學世界主筆松原岩五郎君著　●新撰東洋歴史問答　正價貳拾錢　郵稅四錢
- 落合直文君・池邊義象君共著　●家庭教育歴史讀本 花の白雲　正價拾八錢　郵稅四錢
- 落合直文君・池邊義象君共著　●家庭教育歴史讀本 卯花月夜　正價拾八錢　郵稅四錢
- 巖谷小波君編　●少年日露戰史 九連城の卷　正價拾貳錢　郵稅四錢
- 巖谷小波君編　●少年日露戰史 南山の卷　正價拾貳錢　郵稅四錢
- 巖谷小波君編　●少年日露戰史 決死隊の卷　正價拾貳錢　郵稅四錢
- 大和田建樹君著　●日本歴史譚 楠公　正價八錢　郵稅貳錢
- 大和田建樹君著　●日本歴史譚 三韓征伐　正價八錢　郵稅貳錢

（後付の一）

發兌元——品切圖書重

大和田建樹先生著

作文寶典

全一冊中判總皮上製千七百餘頁
▲正價貳圓貳拾錢小包送拾五錢

本書の價値は作文の實習に便なるにあり、作文標準を明示するにあり、作文の摸範を與ふるにあり、文學の趣味を解せしむるにあり、詠歌の作法を教ふるにあり、其文は通俗、其説は懇篤、鼇頭加ふるに著者の文集、著者判定の歌合、著者翻譯の歐米詩林を初とし、文學上の參考となるべき諸種の事項を以てす、眞に文學者必讀の書、寶典の名其實に背かざるなり。

百東持中先生編纂

作文熟語字典

全一冊　小判洋布　上製壹千頁
▲正價金八拾錢　郵稅拾錢

幾萬の熟語を「いろは」分に集拾して訓解考證極めて明確なり、文章を綴り熟語を覓めんとするもの此一本を机上に置かば側より指導するが如く自在に雄篇傑作を得らるべし眞に是れ初學者の寶函にして又作文家の要典なり。

著者	書名	正價	郵稅
中川靜君新著	書翰文研究	六拾五錢	六錢
大和田建樹君著	書簡組立法	拾五錢	六錢
大和田建樹君著	作文組立法	拾五錢	六錢
堀江秀雄君著	作文資料	拾五錢	四錢
大和田建樹君著	新文林	廿四錢	六錢
石川鴻齋君著	文法詳論	四拾錢	六錢
落合直文君著	中等教育 文法教科書	四拾五錢	六錢
文學士 久保天隨君著	四書新釋 大學	拾五錢	四錢
內藤耻叟君講義	四書講義 上（大學、中庸、論語）	廿五錢	八錢
鹽見文準君編輯	日本外史獨學講義	五拾錢	八錢
文學博士萩野由之君、落合直文君、池邊義象君校註	水鏡大鏡	廿五錢	參錢
同	源氏物語	廿五錢	參錢
同	平家物語	廿五錢	參錢

發兌元——品切圖書重

農學博士橫井時敬君外七農學士合著

農學大全

全一冊 上製大判 千六百頁
▲正價金貳圓五拾錢小包送二十錢

本書が農學書用中の一大著述なる事は更めて言ふ迄もなし、而して本書の特色とする所は繁簡其宜しきを得て能く農學全般を網羅せしにあり、目次の大綱左の如し

- ●農學汎論……橫井農學博士
- ●植物營養論……澤村農學博士
- ●氣候論……本多農學士
- ●土壤及農具論……麻布農學士
- ●肥料論……澤村農學博士
- ●作物汎論……木下農學士
- ●作物各論……佐々木農學士
- ●畜産論……佐々木農學士
- ●養蠶論……石渡農學士
- ●農産製造論……武下農學士
- ●農業經濟論……澤村農學博士

農學博士橫井時敬君著(第廿九版)

農業讀本

上下二冊 和裝大判 二五〇頁
▲正價一冊拾四錢郵稅一冊四錢宛

横井博士が初等教育に資するの目的を以て編述せられたるものにして其用意の周到なる兒童の解し難く暗記

- 農學博士 稻垣乙丙君著 ●初等作物通論 正價五拾錢 郵稅八錢
- 農學士 伊藤悌藏君著 ●農學講習全書 正價四拾五錢 郵稅八錢
- 農學士 田中節三郎君著 ●訂正増補栽培各論 上製五拾五錢郵稅十錢 並製四拾錢郵稅八錢
- 福羽逸人君著 ●蔬菜栽培法 正價七拾錢 郵稅拾貳錢
- 福羽逸人君著 ●果樹栽培全書第二卷 正價貳拾五錢 郵稅六錢
- 東京農學園主 江原春夢君著 ●續園藝全書 正價六拾錢 郵稅八錢
- 池田榮太郎君著 ●栽桑新論 正價參拾錢 郵稅六錢
- 岩淵平介君著 ●蠶病論 正價參拾錢 郵稅六錢
- 農學士 西村榮十郎君著 ●農用器具學 上製五拾五錢郵稅十錢 並製四拾錢郵稅八錢
- 腹卷助太郎君著 ●學生必携鑛物採集鑑定 正價貳拾五錢 郵稅四錢
- 理學士 龜高德平君著 ●有機化學 上製五拾五錢郵稅十錢 並製四拾錢郵稅八錢
- 理學士 會田龍雄君著 ●新撰動物學下 上製五拾五錢郵稅十錢 並製四拾錢郵稅八錢
- 野崎左文君著 ●日本名勝地誌北陸道山陰道 正價參拾錢 郵稅六錢

(後付の四)

版出來廣告——博文館

し難き虞ある點あれば巧みに比喩を設け或は實物を提げ來り或は摸型圖書を供する等乾燥無味の事實も生徒をして津々たる興味を以て心解熟習せしむ、蓋し地方小學校農業補習科讀本として又は家庭の科外讀本として適切の良書なり（文部省檢定濟）

農學博士稻垣乙丙君著（第廿八版）

增補 農學入門

和製大判　紙數　三七二頁

▲合本正價參拾五錢郵稅八錢

分本
- 卷の一　正價拾壹錢　郵稅四錢
- 卷の二　正價拾貳錢　郵稅四錢
- 卷の三　正價拾五錢　郵稅四錢

主として農業補習學校、尋常小學補習科、高等小學農業科及農業專修科の教科用書に充つるが爲めに、稻垣博士執筆の勞を執られたるものにして各卷とも三拾三課に分ち又各課を前段後段となし、尋常小學補習科及高等小學農業科にては第一卷のみを用ひ農業補習學校及高等小學農業專修科にては第三卷迄用ゆるが如く、其程度の難易、地方の狀況に應じて斟酌教授するを得る樣編纂され、實に教科用書として最も適當の良書たるのみならず、一般農學子弟必讀の好著たり、其如何に好評を博せるやは其第廿八版を發行せるにても知らるべきなり。

- 理學博士 高木貞治君著　●新撰代數學　上製五拾五錢郵稅十錢　並製四拾錢郵稅八錢
- 理學博士 高木貞治君著　●新撰算術　上製五拾五錢郵稅十錢　並製四拾錢郵稅八錢
- 文學士 畔柳都太郎君著　●邦語英文典　上製五拾五錢郵稅十錢　並製四拾錢郵稅八錢
- 文學士 青木昌吉君著　●邦語獨逸文典　上製五拾五錢郵稅十錢　並製四拾錢郵稅八錢
- 博文館編輯局 校訂飜刻　●第一讀本（ナシヨナル）　特製拾八錢郵稅四錢　上製拾五錢郵稅四錢
- 高橋邦次郎君著　●通俗會社簿記　正價貳拾五錢　郵稅八錢
- 小野拓君編　●新撰文官普通及裁判所書記試驗問答　正價貳拾錢　郵稅四錢
- 飯島榮太郎君著　●米國渡航案內　正價四拾錢　郵稅六錢
- 大橋乙羽君著　●增補千山萬水　正價五拾錢　郵稅拾錢
- 文學士 大町桂月君著　●一蓑一笠　正價參拾錢　郵稅六錢
- 海軍大尉 長尾耕作君著　●海軍出身案內　正價四拾錢　郵稅六錢
- 竹貫登代多君著　●算術手引草　正價五拾錢　郵稅六錢
- 石井研堂君著　●少年工藝文庫鐵道の卷　正價拾五錢　郵稅四錢

發兌元——品切圖書重

紅葉全集

巖谷小波君 石橋思案君校訂

全部六册 洋裝大判 五千六百頁
▲正價一册壹圓八拾錢 小包送十五錢宛
▲全部正價拾圓 小包送料八十錢

●第壹卷（三版）
目次 ●色懺悔 ●風雅娘 ●新桃花扇 ●巴波川 ●南無阿彌陀佛 ●拈華微笑 ●戀の蜆 ●此ぬし ●夏瘦 ●關東五郎 ●新色懺悔 ●文ながし ●猿枕 ●わかれ蚊帳 ●二人むく助 ●二人女房 ●七十二文命の安賣

●第三卷（再版）
目次 ●三人妻 ●俠黑兒 ●男ごゝろ ●心の闇 ●袖時雨 ●むらさき

●第六卷（再版）
目次 ●金色夜叉前編 ●金色夜叉中編 ●金色夜叉後編 ●續金色夜叉 ●續續金色夜叉 ●煙霞療養 ●新續金色夜叉

日本女禮式大全

博文館編輯局長 坪谷善四郎君著

全一册大判 頗美本 六百頁
▲洋布上製正價九拾錢 小包送拾五錢
▲蒔繪函入正價壹圓廿錢 小包送拾五錢

本書が世の良妻賢母の友として、女學生の良師友として歡迎せられたるは、發刊後既に十五版を重ねたるにても知らるる可し、著者は斯の如き好評を博すると共に益々責任の重を知りて、更に全文を修訂增補したり、其內容は日本固有の女

書名	著者	正價	郵税
●大岡政談	博文館編輯局校訂	六拾錢	拾四錢
●源平盛衰記	博文館編輯局校訂	六拾錢	拾六錢
●梅暦春告鳥	博文館編輯局校訂	六拾錢	拾六錢
●近松時代浄瑠璃	饗庭篁村君校訂	六拾錢	拾四錢
●戀	江見水蔭君著	參拾錢	四錢
●小說女道樂	村井弦齋君著	八拾錢	拾貳錢
●和洋禮式	大橋乙羽君著	貳拾五錢	六錢
●婦女家庭訓	華族女學校學監 下田歌子女史著	參拾五錢	八錢
●女子書簡文	華族女學校學監 下田歌子女史著	參拾五錢	八錢
●母親の心得	華族女學校學監 下田歌子女史著	參拾五錢	八錢
●實用裁縫全書	飯田呉服店裁縫部主任著	五拾錢	八錢
●實用料理法	藤本藤蔭君著	貳拾五錢	六錢
●俳諧獨學	三宅青軒君著	貳拾五錢	六錢

版出來廣告──博文館

禮の美性と泰西普通の禮式の外に女子の知るべき技藝作文、作歌、其他一切の事を網羅し、記事の豐富と文章の流麗に加ふるに精巧の諸禮式の繪畫數十葉を以てし、其製本の美なる世に比類なし、世の良妻、賢母、及令孃を有せらるゝの父兄方は、必らず一本を備へ給ふの要あり。

大和田建樹君著

增補 謠曲通解

▲全一冊大判脊皮上製一七八六頁
▲正價壹圓八拾錢小包送貳拾錢

其文は自然、其意は幽玄にして神韵の掬すべきは謠曲にありとは大和田先生の持論なり。而して先生が謠曲文學の紹介者として、獨特の手腕を有せらるゝは世人皆之れを知れり。此書は現存の謠曲を悉皆網羅して註釋を附し妙處を示すこと丁寧反覆、而して專ら通俗を主とし一讀以て神道佛法を學ぶべく、以て歷史故實を暗づべく、以て詩歌文章を知るべく、以て名所舊跡を探るべし。

東京女學館長 西田敬止君編

益軒十訓

▲全一冊中判洋布上製千百餘頁
▲正價壹圓 小包送拾五錢

本書は我邦教育家の泰斗たる貝原益軒先生の通俗訓蒙書類十種を編次して丁寧に校訂を加へ詳密に標註を施したるものなり其大目を擧ぐれば㊀五常訓㊁大和俗訓㊂童子訓㊃初學訓㊄文訓㊅武訓㊆道家訓㊇樂訓㊈君子訓㊉養生訓の十訓にして忠孝彝倫の大義より應對進退起居動作の末節に至るまで凡そ人たるの道敎へて詳悉せざるは無し之に加ふるに道義的敎育に精細を盡す

著者	書名	價格
阪本隆哉君著	●衛生食物調理法	正價參拾錢 郵稅六錢
醫學博士 井上通泰君監修	●家庭衛生叢書第一編	正價貳拾錢 郵稅六錢
醫學士 守矢親國君譯述	●生殖器新書	正價九拾錢 郵稅拾錢
橘千蔭君著	●新百人一首	正價參拾錢 郵稅四錢
華族女學校學監 下田歌子女史著	●家政學 下	正價參拾錢 郵稅六錢
中村鈴子女史編	●家庭の模範	正價參拾八錢 郵稅六錢
村井弦齋君著	●繪入 小僧讀本	正價拾貳錢 郵稅四錢
堀江秀雄君著	●夜學讀本	正價貳拾五錢 郵稅六錢
文學博士 中村正直君譯述	●西國立志編	正價貳拾七錢 郵稅八錢
上村左川君著	●改訂 就學案內	正價貳拾五錢 郵稅六錢
文學士 高木敏雄君著	●比較神話學	上製五拾五錢郵稅十錢 並製四拾錢郵稅八錢
文學士 速見滉君著	●心理學	上製五拾五錢郵稅十錢 並製四拾錢郵稅八錢
文學博士 高山林次郎君著	●論理學	上製五拾五錢郵稅十錢 並製四拾錢郵稅八錢

發兌元＝品切圖書重版出來廣告＝博文館

石川鴻齋君校訂

鼇頭音釋 康熙字典

全部六冊　銅版和紙刷上製　紙數千五百枚
▲布製帙入　正價四圓五拾錢　小包貳拾錢
▲桐箱入　正價五圓五拾錢　小包參拾錢

本邦享和元文の際、始めて本書を傳ふ、當時の書肆翻刻する者、誤りを以て誤を傳へ、終に訂正する能はず、永く識者の歎ずる所なり、本館此に感あり、碩儒石川先生に請ひ多年校讐を經て悉く之を正せり。且つ日本書記、萬葉集、古言梯、倭名鈔等、許多の國書に參考して、音釋を詳かにす。志學の諸士斯編を坐傍に備へば、天下讀むべからざるの書なく、識るべからざるの字無かるべし。

石川鴻齋君校訂

篆文詳註 日本大玉篇

全部三冊　銅版和紙刷　上製紙數七百卅枚
▲布製帙入　正價貳圓六拾錢　小包拾五錢

顧氏玉編を撰みしより、本邦飜刻する者、家々原文を省略して、字義字音等誤る者少なしとせす。斯編は顧氏の原本を主として、字典、字彙、字貫、正字通等、凡そ天下の字書は盡く網羅し、且つ前濟國の大使庶昌の藏する所の明人手錄の音義を請求して、府下諸大儒の校讐を經、四聲を詳かにし、邦訓を明かにし、務めて先輩の誤謬を訂正し、上欄には、許氏の說文備覽を抄錄して、篆字數體を揭ぐ。凡そ我邦字書の完備する者、此編に若くものなし。

大隈重信伯述 武井宗十郎君記	大隈伯時局談	正價 參拾錢	郵稅 八錢
十五銀行頭取 園田孝吉君述	赤心一片	正價 四拾錢	郵稅 八錢
故中江兆民君著	續一年有半	正價 參拾八錢	郵稅 八錢
文學博士 高山林次郎君著	時代管見	正價 參拾錢	郵稅 六錢
文學博士 高山林次郎君著	文藝評論	正價 參拾錢	郵稅 六錢
毛筆畫研究會編	初心毛筆畫譜 山水之部	正價 拾貳錢	郵稅 四錢
毛筆畫研究會編	初心毛筆畫譜 花鳥之部	正價 拾貳錢	郵稅 四錢
内山正如君著	新撰日本節用	正價 壹圓	郵稅 拾錢
石川鴻齋君著	新撰日本字典	正價 壹圓	郵稅 八錢
棚橋廣君著	日本いろは字典	正價 參拾錢	郵稅 四錢
戸田翠香君著	文章字典	正價 七拾錢	郵稅 六錢
大田淳軒君著	新撰明治字典	正價 參拾八錢	郵稅 四錢
棚橋廣君著	新撰漢語字引	正價 廿五錢	郵稅 貳錢

女學世界

（明治卅三年十二月廿五日 第三種郵便物認可）　第五卷第五號　（明治卅八年三月五日發行 毎月一回五日發行）



（定價金貳拾錢）